
これがオレの人生だ

頭隠して尻も隠す

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これがオレの人生だ

【Nコード】

N0518V

【作者名】

頭隠して尻も隠す

【あらすじ】

自分の母親が倒れているの見て何もできなかった。だから、オレは決意した。大事な人を救えるように、大事な人を守るように。そんな主人公の人生が此処から始まった……。誤字等あると思います。気がしないという方だけご覧になってください。

第1話 決意（前書き）

いろいろと無理がありますがご容赦ください

第1話 決意

「母さん!!」

部屋で倒れ伏す母親を見る。周りには騎士甲冑をつけた人たちがいる。その中の一人が言葉を告げる

「済まない少年。お前の魔力も貰っていく。大丈夫、安静にすればすぐに戻る。」

その言葉を聞いた後自分の胸に女性の手が生えていた。それが、意識を失う前に見た最後の光景だった。

今、いるのはどこなんだろう？周りを見てみると病院の個室のような場所だ。あれからどうなったのか？一体やつらは何者なのか？母さんは大丈夫なのか？

そんな事を考えていると壮年の男性と二人の女性が部屋に入って来た。3人に気づき体を起こそうとしたがうまく力が入らない。それを見た、男性が無理はするなと止めに入った。この人たちには見覚えがある。確か母さんが局で働いていたころの同僚だったはず。な

んどか、うちに来たのを覚えている。

「こんな格好ですみません。お久しぶりですね。ゼストさん、クイ

ントさん、メガ・又さん。」

「ああ、そうだな。ジン。」

「久しぶりね。」「半年ぶりかしら？」

「そうですね。そのくらいのはずです。ルーは元気にしてますか？」

「ええ、元気よ。最近立てるようになったから動き回って大変なのよ」と苦笑いするメガ・又さん。

「それで、なぜ皆さんはここにいるのでしょうか？というより、此処はどこなんでしょうか？見たん感じ病院のようですが……」

ゼスト達の顔が暗くなる。その後、真剣な顔をしながらゼストが言葉を発する。

「ジン、おまえは、魔導師に襲撃されリンカ コアを吸収されて意識不明になった。その事件を聞きつけた俺達がお前の家に突入しお前とユーリが倒れているところを保護し病院に搬送した。」

「そ、そうだ！思い出した。ゼストさん、母さんは！母さんは無事ですか？」

その言葉に一層暗くなる。そこで、クイントが代わりに告げる。

「ジン君。落ち着いて聞いてちょうだい。先輩は魔力の急激な減少のため、今も意識不明の状態。そして、そのせいで、手術中よ。もうすぐ終わるわ。」

「だ、大丈夫なんですよね？」

「成功率は5分5分よ。」

「……」そんな衝撃の事実を告げられ、絶句する。嫌な沈黙が流れた時、部屋に看護師さんが入って来た。

「せ、成功です！！手術は成功し一命を取り留めました！」一気に部屋が歓喜に包まれる。その言葉を聞いた瞬間すべての不安が取り除かれ涙があふれる。そして、安心したのか、ドツと疲れを感じまた、意識を失うのだった。

あの後、2日も寝込んだらしい。ゼストさんが教えてくれた。そして、母さんの様態も。なんでも。命には別状はないらしいのだが、もう、魔導師としての生活はできないらしい。その点についてはもう母さんも引退しているので問題ないのだが、問題は下半身不髄ということだ。なんでも、リンカ コアが吸収された際、魔力減少に伴い、他の器官が正常に戻そうと無理をしたためらしい。人間の体は異常が起こった際にそれに反応して対処しようとするので、本来ならないリンカ コアという器官が急激に弱体化した事によって、他の器官に負荷がかかったようだ。母さんは車いす生活らしい。

それを聞いたオレはある決意をする。

「ゼストさんオレ魔導師になる。それも戦える医務官に！今回のように何もできないなんて嫌だし、それにただ医者になったとしても、大事な人を守れない。だから、傷ついた人をなくすために医者になるし、傷つかせないように魔導師になる！だから、オレに魔法を教えてくださいませんか！？」

ゼストは目を閉じ考える……そして、目を開ける。

「お前の目指す道はかなり険しいぞ。それこそ、執務官になるよりもはるかに。おまえにその茨の道を進む覚悟が有るか？」

真剣なまなざしで問う。それに、オレも答える。

「有ります。オレは必ずなってみせます。そして、母さんを治して見せます！！母さんを守って見せます！！」

その言葉にゼストも頷き

「オレは厳しいぞ。甘えは許さないからな。それと、後方系の魔法はメガ・ヌに教えてもらえ。あいつは、後方支援のプロだからな。回復系から転移系、結界、召喚となんでもこなす。あいつから得るものは多いだろう。」

「は、はい。よろしくおねがいします。」

そうして、魔導師の世界に踏み出すのだった。

第2話 設定

主人公 ジンニヤナギバ

年齢 なのは達より一つ下

性格 比較的に丁寧語で話すが怒った時はその限りではない。ある事件を契機に考え方がシビアになり性格が変わり始めた。事件後はやる気を見せる事はない。ただ失ってはいない。めんどくさがり屋でもある。戦闘の際は飄々とした感じで戦うが、本気になった時は割とカッコイイ。雰囲気さがらりと変わる。本気になると髪をかき上げるのは癖。

容姿 身長 177cm 赤みがかった黒髪は下ろしている。顔はイケメンな方。

資格 医務官（事件後は身内以外ではほとんどしていない） デバイスマスターA

魔力 AA+（リミッタ 時はBランク）

魔導師ランク 空戦 C

戦闘スタイル 近代ベルカ式

レアスキル 魔力変換資質 爆発 魔力を爆弾に変える事が出来る

紹介

闇の書事件の被害者の一人。ヴォルケンリッターに復讐しようとは思わないが快くは思っていない。発言にかなりの棘がある。はやてのことは気にしていない。例外としてリインフォース？とは仲が良い。シグナムやヴィータとは仲が悪い。ただ、弱くては何もできないと一つの真理をわからせてくれた事は唯一感謝している。

比較的頭はいいので医学書の類は子供のころに制覇する。得意分野はリンカ コアに関する物。そのせいで疑似リンカ コアの製作までしてしまう（発展途上）

戦闘スタイルはいろんな魔法を駆使し銃での戦いが主。事件前は正當な戦いをしてきたが事件後は、相手を罠に嵌めたりする戦法をとるようになった。相手の魔法を利用するカウンタータイプ。普段は自分でリミッタ をつけ、本気を出す時にははずす。

射撃に関しては威力よりも正確性と速さを重視する。誘導弾は弾速が遅くなるので嵌める時にしか使わない。集束魔法が使えないのであるののようなレーザービームは撃てないがそこは工夫する

魔力がAA+なのに、ランクがCなのはめんどくさくて昇格試験を受けていないからというのもあるが、戦闘スタイルをあまり見せないため（見せると何かしらの文句を言われるから）

魔力運用はメガ・ヌの指導のもとすごい事になっている。通常、魔法に必要な魔力を10とした場合、4〜5で使える。

純粋な戦闘ではなのはには勝てないが、あらかじめ戦い方がわかっている相手ならやり方によっては勝てる。

魔力ランクが高いのは闇の書のせいである。もともとはBくらいしかなかったのだが、超回復でもしたのか、もとの魔力値より多くなつてしまった。詳しい原因はわかっていない。

レアスキルというわけではないが後方支援魔法に抜群に相性がいい。幻術も得意。オリジナル魔法をいくつか持っている。基本的にはジンにしか使えない。その代わり攻撃魔法に相性が悪く集束魔法を撃てない。誘導弾もそこまで、多くは操作できない。

デバイス（ゼストから貰ったものを自分で改良）

ファントム・トリック 非人格型アームドデバイス

機能多数。詳細は……

ユーリィヤナギバ

ジンの母

昔は武装局員として働いていたらしい。ランク、階級は不明。

ジンの父

昔事故で死んだらしい。地球出身で実はジンは地球に行った事がある。本人は地球と認識してないが・

第3話 あんたらを許す気はねえ(前書き)

かなり独自設定がありますが、ご容赦ください

第3話 あんたらを許す気はねえ

病院で決意したあの日から、ゼストさん達に訓練をつけてもらっている。ゼストさん達も仕事があるので毎日というわけではないが、基礎を教わってそれをひたすら反復その繰り返しを続けた。基礎をないがしろにすると、その先必ず伸びなくなるとゼストさんが言うのできつちりとやっている。

メガ・又さんには、簡単な支援魔法を教わった。ただ、相性がいいのか、メガ・又さんも驚くほどの修得技術を見せ、基本的な魔法はあらかた覚えた。今はこの精度を高めている最中である。

そんな感じで1年ほど過ごした。母さんは遅く車いす生活でも以前とあまり変わらない。階段でも魔法が発達したミッドなら、簡単に登れるような設計がされているので、障害者やご老体にはありがたい。

母さんもオレの目標は応援してくれているので、問題は特に起こらない。一度ゼストさんのかわりにクイントさんが模擬戦の代わりをしてくれた時があった。

ゼストさんは加減をやってきていたのだが、クイントさんは加減が下手らしくかなりブツ飛ばしてしまった。非殺傷設定なので大事にはならなかったが、体はボロボロだった。その状態で家に帰ったらなにか言われるかなと思ったのだが、だらしないわねえと笑顔で言われてしまった。

クイントさんの旦那さんのゲンヤさん（この時初めて知りあった）も子供相手に申し訳ないと謝り来た際も、もっとやってという始末。オレに何か、恨みでもあるのだろうか？

.....

最近ようやく医学について学べるようになった。医学書の類は、無限書庫にあるものをひたすらに呼んだので、知識に関しては、そこらへんの医者よりもある。メガ・又さんにうちの子の家庭教師をしてくれないかしらと本気で頼まれた事が有る。

メガ・又さんの娘ルーテシア（愛称ルー）はまだ、一歳になったばかりなので、もっと大きくなったら良いですよとだけ言っておいた。その言葉で気を良くしたメガ・又さんは、知り合いの医務官に連絡を取ってくれた。

その医務官さん（ジャック先生）と話した後、いくつか試験をさせられた。これは、勉強してきた内容なので、全部できたと思う。その結果をジャック先生が見て、驚いた感じで言った

「このテストは去年行われた医務官試験の筆記試験の方だ。君はそれを満点。去年合格したどの合格者たちよりも上だ。」

その事実にはびっくりする。その後、驚いているおれにジャックさんは続ける。

「ただ、メガ・又の話では回復魔法にかなりの適性があるようだが、まだまだ、経験不足。それなら、私のもとで助手として働いてみないか？なに、心配はするな。此処ミッドは実力主義だ君のような子供でも実力さえ示せばまわりから、何も言われない。」

「……やります。やらせてください！」

「よろしい。私は魔法は使えないがそれ以外の事を全て君に伝えよう」

それからは、ひたすら経験を積んだ。患者の診察（これが一番大事だからしつかりやること）から、簡単なケガの治療はまかせてくれた。そうこうして一年ほどで医務官補佐の資格をとり手術の手伝いもできるようになった。

自分でも魔法の改良を重ねリンカ コアに関することなら、ジャック先生よりも上である。

仕事にも慣れてきた冬。今まで担当した中で一番の患者が運ばれてきた。若くして戦技教導官となった高町なのはである。

体は重症で、リンカ コアにひどいダメージを負ったようだ。当然ジャック先生から手術の要請がされた。だが、オレは悩んでいる。なぜなら、母さんを下半身不随に追いやった連中の一人がその少女のそばにいたからである。赤い少女は泣きながら、なのはを助けてくれと叫んでいる。

その少女を見た瞬間、オレの中の何かがサッと引いて行くのがわかった。闇の書の顛末はゼストさんから聞いて知っている。ヴォルケンリッタ がなぜ魔力を集めていたのかも。だが、理解はできても、納得はできない。そんな葛藤の中で、患者の治療をできるのだろうか？そんな、悩んでいるオレを見てジャック先生が真剣な顔をして言った。

「君が、何を悩んでいるのか知らないが、助けられる患者がいれば助けるのが医者というものだ。患者にどんな背景があつたとしても、命を救うのが医者の仕事だ。だから君は医務官を目指したのではなかったのか？」

その言葉に昔ゼストに決意した言葉を思い出す。

「（そうだ。オレは、傷ついた人をなくすために医者になると決めたんだ。だから、誰であろうと救って見せる！」

オレの表情を見たジャック先生はその顔なら大丈夫だといって手術室に向かった。

- - - - -

高町なのはの様態はひどいものだった。

全身に直撃した、殺傷設定の攻撃魔法。

そのうちバリアジャケットを貫通したのは大きいので胸付近と腹

腹部に直撃したのがデカイ。胸部に直撃したのは魔法弾が2発。これが、リンカ コアにダメージを与えている

腹部については、肝臓に当たって肝機能の一時低下に肋骨3本骨折。魔法弾が貫通したため脊髄も損傷、一時的にだが下半身不随状態。

ズタボロである。これで、生きていられるとは……

手術の手順をジャック先生が確認する。オレは回復魔法をかけながら止血をし機能不全を起こしている器官を一時的にだが機能させる。その間にジャック先生達が体の手術に入る。基本的にミッドは魔法で何でも治療してしまうのだが、ジャック先生は非魔導師、魔法は使えない。だが、ジャック先生には「神のメスさばき」と呼ばれるほどの腕前で、魔導師以上の成果を上げている。

ジャック先生を他の人たちがサポートしながら、手術は順調に進んでいく。メスの早さが尋常ではない。脊髄に入り込んだ骨をきれいに取り除き、脊髄を圧迫していた骨も治し、体の治療はとりあえずは成功した。残るはリンカ コアの治療なのだが、患者の体力が持たないので回復を待つてからという事になった。

当然その治療をするのはオレなので頑張らなければならない。見た感じだと、成功率も半分には満たないだろう。彼女は魔導師として再起できないかもしれない。だが、母さんの事もあるし、必ず成功させ母さんを治す決意を固めるのだった。

後日、高町さんの検診をする事になった。

コンコン

「検診の時間なので、検診に来ました。」

「ど、どうぞ」「何だか暗い感じの声。」

「失礼します。今回あなたの担当医の一人になった。ジンニヤナギバです。」

「こ、子供？」オレの容姿に疑問をもつたらしい

「ええ。それでも、此処で働かせてもらっています。」高町さんが不安のある顔をする。そこにジャック先生が入って来た。

「ハハハ、確かに彼は、君よりも一つ歳下だが、私よりも、リンカ
コアに関する事なら詳しい。君の体の方はこれからは、リハビリ
で頑張っていくしかないが、リンカ コアの方は彼に任せるほかな
い。」

そう言つて部屋を出る先生何しに来たんだ？

「そ、そうですか。よろしくお願いしますヤナギバ先生。」

「先生は結構ですよ。歳は私の方が下みたいですし。それと、ジンで結構です。」

「うん。よろしくねジン君。わたし、なのは。高町なのはだよ。」

「知っています。カルテ見ましたから。」

「そうだよ。にやはは。」笑っているようだがどこか表情が暗い。

「術後の経過ですが、先ほどジャック先生が言ったように体の方はリハビリをすれば何とかなるでしょう。後遺症もジャック先生のおかげでないようです。ですが、リンカ コアの方はそういわけにはいきません。難しい手術になる上成功率もそれほど高くない。安静にしてれば問題ありませんが、魔導師の復帰は無理でしょう。」

「……」さらに、暗くなるのは

「魔法を使えなくなるかもしれない事がそんなに辛いですか？」

「え？」なのはが、驚く

「貴方のリンカ コアを見ればわかります。あれは、魔法弾の傷だけでなく、かなり酷使されてきました。普段から相当魔法を使っていたのでしよう。それゆえに、貴方の魔法への思いもわかります。お辛いですか？」

「……」うん。辛いというより怖いかな。」

「怖い？」

「私は魔法を知っているんな人と知り合って友達になれた。でも、もし魔法がなかったら……。それになにより、もう、二度と空を飛べなくなったらと思うと……。怖い。だから、私はもう一度空を飛びたい！」

なのはの思いを聞いて考えるジン……。そして

「わかりました。なら貴方がもう一度空に羽ばたけるように協力しましょう。本当は治る確率が半分もなかったなので、このまま、安静に過ごしてもらいたかったんですが……。あなたの思いを無碍にすることはできません。」

「そ、それじゃー!!」顔が明るくなるなのは

「落ち着いてください。まだ、成功すると限ったわけではありません。この手術は外からリンカ コアを治療するのではなく、直接リンカ コアを治療しなければなりません。ここまでは、わかりますか？」

「う、うん」

「そうすると、手術中にリンカ コアを体内から出さなければなりません。ただ、私がそれをしてしまうと、リンカ コアを治療できません。この治療法は最近私が確立したので、他の人にはできません。だから、手術中にリンカ コアを摘出してくれる人を探さなければなりません。しかし、体内にあるリンカ コアを出せる技量をもった人はこの病院では私一人です。他の病院を当たってみますが

おそらくいないでしょう。それほどまでに難しい事なのです。」

「だから、それができる人が見つかるまで、待ってくれませんか？私の確立したこの方法なら、成功率は、かなり高くなりますが、外からの治療では成功率は30%にも満たないでしょう。それは、医者としては容認できません。」

ジンの真剣な表情に対して呆けるのは。ジンがわからなかったかと聞こうとした時

「あのね、ジン君。私、リンカ コアを抽出できる人知ってる。そう言う魔法が得意なんだって」

「え？」

「シャマルさんって言って私の友達の家族の人。」

「・・・・・・・・・・」

「あの〜ジン君？」

「ハア〜一番の難所だを持っていたんですけどね。こつも簡単に見つかるとは・・・・。それなら、その人に連絡とれますか？協力してくれるか頼んでみます。」

「う、うん。はやてちゃんに聞いてみるから、回線開いても良い？」

「（はやて？どこかで聞いたような・・・）構わないですよ。此処は個室ですし、他の器機に影響はないでしょうから。私はいったん戻

ります。ジャック先生にこの事を伝えてきます。」

部屋を出て行きジャック先生に先ほどの事を伝える。その話を聞いた先生も心配そうだったが、できるかというを質問にできますと答えたら、必ず成功させると言ってくれた。

その後部屋に戻ってみると連絡を終えたのか、なのはが待っていた。

「連絡はとれましたか？」

「うん。シャマルさんとはやてちゃん達急いで来てくれるって。」

「達？他の方も来るんですか？基本的に面会は控えてもらいたいんですが……。」

「にははは、ごめんね。私が怪我した事を知ってみんな来てくれるみたい。みんな仕事があるのに。」

「それは、仕方ないですね。折角来たくれたお友達を返すのは悪いですから。特別ですよ。」

「にははは、ありがとうジン君」

しばらくしてから、なのはの友達たちが来た。

コンコン

「は〜い。どうぞ」

ガラー 勢いよくドアが開けられる

「なのは！」 「なのはちゃん！」

金髪の少女と茶髪の少女が入ってくる

「フェイトちゃんに、はやてちゃん。ごめんね、こんな格好で。来てくれてありがとう。」

「そんなこと、どうでもいいよ。それで、なのは、ケガは大丈夫なの？」

「そやで、友達を心配するなんてあたりまえやんか。ケガは大丈夫なん？ ヴィータから聞いた時は心臓止まるかと思ったわ。」

「にやはは。ケガの治療は成功したの。でも。リハビリが必要なんだった。」

「何かあったら私に言ってすぐに飛んでくるから」

「うれしいけど、フェイトちゃんは執務官の試験で大変だから、頼めないよ〜」

「あの〜お話中の所申し訳ないんですが、協力してくれる方はどちらなんでしょうか。」ジンが話に入る

「ああ、先生ですか。なのはちゃんから聞いてたけどホンマうち

らと変わらんくらいやな。あ、それで、うちらではないんです。あ
つちにいる・・・シャル、先生に自己紹介してや」

ジンの後ろの方を指して言う。ジンが振り向いた時、一瞬時が止ま
った。

「はいはい、はやてちゃん。私なのはちゃんの手術につきあうこ
とになったシャルで・・・」シャルもこちらの顔を見て気付
いたらしい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」ジンからのなんとも言えないような、ま
るで殺気に近い何かが、放たれる。

「ど、どうしたん!?二人って知り合いなん?でも、それにしては
・・・・・・・・」

「ええ、知り合いと言えば知り合いですね。事件の加害者と被害者
の関係ですね」

「シャ、シャル、ま、まさか・・・・・・・・」

「そうよはやてちゃん。私達は彼から魔力を蒐集した事が有るわ。
そして、ごめんなさい。貴方達親子にはきちんと謝らなければいけ
なかつたのに・・・・・・・・」

「ああ、形だけの謝罪ならいらぬですよ。ム力つくだけなんで。
あれからもう3年。謝る気なんてなかつたんでしょ。そもそも、オ

レらのこと今まで忘れてたんでしょ。楽しそうだなによりです。」

「ち、違う。シャマル達はちゃんと罪の償いをしてる！保護観察中になってからだって、ちゃんと管理局の任務こなしてる。」はやてが否定する

「貴方が、八神はやてさんでしたか。道理で聞いたことある名だと思っただ。それで、闇の書の主が守護騎士を庇いますか？よかったですわ？良い主に恵まれて。それで、楽しくなって被害者はどうでも良くなつたと。」

「違うわ。そんな事を思ってもいない！ただ、みんな忙しくて・・・」
「シャマルが釈明する。」

「・・・。貴方達バカにしているんですか？何が忙しいだ！！そもそも、管理局で働いたからって、なんで、それが、罪滅ぼしになる！！お前ら、俺たちに謝る事が先じゃないのか！？ふざけてんじやねえ！！！」

普段の口調からずいぶんと変わって激怒する。怒りを抑えられなかったようだ。

「じ、ごめんなさい。」シャマルが泣きながら言う

「だから、さつきも言っただろうが。最初から謝る気なんてないから謝るな！！イラつく！！！」

はやてが割って入る。

「たしかに、シャマル達がした事は悪かったと思う。主として謝るでも、みんな私のために仕方なく……」

「事の顛末は聞いてますから言わなくても大丈夫ですよ。貴方を救うためにやったことだとも。それでも、そいつらのせいで、母さんが下半身不随になった事には変わりない！！それでも、許せと言うのか！！仕方なかったと……できるわけないだろ！！」

「そ、そんな！？シ、シャマル蒐集は魔力を奪うだけじゃないん？」

落ち込んだままシャマルが告げる

「過剰に奪うと人の器官に深刻なダメージを与える事が有るんです。」

「

「そ、そんな……」事の大きさにはやてが絶句する。

「だから、オレはお前たちを許さない。だけど、今、オレは医者だ。どんなにあんたらが気に食わなくても、患者治すのが仕事だ。だから、手を貸せ。謝罪は行動で示せ！もしこれが成功したら母さんの治療にも手伝ってもらおうからな。」

「は、はい。」10歳の少年に圧倒されるシャマル。

その後、嫌々ながらもシャマルと手術の手順を確認した。シャマル

が旅の鏡でリンカ コアを抽出、それをジンが治療するという事になる。ジンは治療に専念するためにサポートすべてをシャマルにまかせた。手術はこれから行われる。

.....

手術室

「それでは、高町さん準備はよろしいですか？」

「は、はい。お願いします。」

「そちらも準備はいいですか？失敗は許されませんよ。」

「大丈夫です。」シャマルが答える

「それでは始めます。麻酔魔法で痛みはないと思いますがじっとしててください。一応バインドで固定しますが・・・」

「は、はい」

「サポートお願いします。バインドをしてから麻酔魔法をかけて、リンカ コアを抽出してください。」

「わかりました。行きます」そういつと、準備が整う。なのはのリンカ コアが出てきた。

それに合わせてジンも魔法を展開。回復魔法というより移植魔法だ。

展開した魔法内で細胞をを活性化させ作り変える物。人間に使用すれば寿命を縮めてしまうものだが、リンカ コアは別だ。常人にはない器官なので、他の器官とは構成が違う。魔力を取り入れられるようになっていくからである。なら、もともとからちゃんとしてる状態の魔力素を取り込ませ治してしまおうというもの。

ただ、これには精密な魔力操作と再生させた魔力細胞を取り込ませるため、高度な技術が必要とする。そして時間との勝負でもある。再生した魔力細胞はその状態ではすぐに戻ってしまうため迅速に取り込ませなければならぬ。

でも、焦ってしまうと失敗してしまう。慎重にかつ素早くと言った相反する二つの事をなさなければならぬ。だが、ジンはやってのける。ジャック先生からそういう技術は学んだ。

ジンは必死になりながらも治療していく。シャマルも常に回復魔法をかけながら作業をしているので疲労困憊。そんな状態がしばらく続き手術は無事成功した。

成功したとたんジンは倒れ、シャマルも床に尻をついた。ジンは成功した事で母親の治療が漸くできる事に歓喜し意識を失うのだった。

.....

意識覚醒

「.....!」

「気づいたか？」

「先生・・・オレやりました。」

「ああ、見事だ。これで、お前の母親も治るだろう。」ジャック先生の言葉で改めて実感したのが、目から涙をこぼしていた。

「高町さんはどうしてますか？」

「今は病室だ。お前の治療でリンカ コアは治ったが体はまだ、言う事を聞かんからな。お休み中だ。」

「一応、執刀医として、術後の様子を確認してきます。」

「ああ」

.....

コンコン

「はい」

「ジンです。診察に来ました。」

「どうぞ。」

そう言われて中に入る。中にいたのは先ほどのメンバー。とりあえずは、仕事をする

「術後はどうですか？リンカ コアは大丈夫なはずですが」

「もう、バツチリです。さっき魔法も使えたから。ジン君ありがとうー！」満面の笑みでお礼を言うのは。少し涙も混じってる。

「仕事ですから。後はリハビリを頑張ってください。そこからは貴方の頑張り次第です。もう一度空へもどりたいたいなら。」

「う、うん！！」これにも元気よくうなづくなのは。その後はフェイトと話しこんでいる。

「それで、約束の件ですが。母の治療に協力してもらいます。」シヤマルに話を振る

「わかっていきます。喜んで手伝いましょう。あなたのお母さんにも謝らなければなりませんし」

「いえ、謝罪はもう結構です。治療さえきちんと手伝ってくれば問題ありません。」

「……………」

「手術の準備ができたならこちらから、連絡します。では」そう言っ
てその場を去るジン。なのはが何か言いたそうだったが出っ

った。

ジンが出て行った部屋は妙に暗い雰囲気だった。

第4話 ジン

なのはの治療を終えてから、数日後、母さんの治療が始まった。連絡を入れた際に、他の守護騎士たちが謝りに来るとか言い出したので、丁重にお断りした。ふざけるなど。

これ以上こちらを怒らすなら考えがあると言ったら、今回は諦めてくれた。それで、今は母さんの治療中である。

一度体験しているので、前回のような焦りはなく、落ち着いて作業する事が出来た。手術も無事成功し母さんのリンカ コアも治った。それにより、機能不全を起こしていた器官が正常に機能し始め下半身不随も治ったようだ。ただ、何年も使ってなかったので感覚を取り戻すまでに時間がかかるようだ。

母さんならすぐに取り戻しそうだが……

シヤマルには治療後有無を言わず追い払った。もう二度と会わない事を祈ろう。病院でやったのでこちらの連絡先はわからないだろう。

そして、オレは仕事場を変えることにした。仕事場に押し掛けられとも困るので。先日なのはは治療法が医師会で認められ、オレが出した論文も評価されたことから、試験免除で特例として医務官の資格を得る事が出来た。ジャック先生には感謝だ。あの人のおかげでここまで来れたようなものだ。

病院をやめると言った時も残念そうな顔をしていたが、最後は笑って見送ってくれた。それと、担当医でもあったのでなのにも病院を去る事を伝える。

「ええ、高町さんの治療も完了しましたし、リハビリは専門の方がいらっしやるので、ここでの私の医者の仕事は終わりましたので。仕事場を変えようと思います。」

なのはが悲しそうな顔をする

「やっぱり、わたしのせいだね。私が、シャマルさん達を紹介したから……」

「勘違いしないでください。今回の事にあなたは一切関係ありません。これは、わたくし事なので、干渉は不要です。貴方は自分の事だけを考えてリハビリに励んでください。また、空に戻るのです。う？」

「う、うん」「どこか、暗い

「別に今生の別れというわけでもないのです、そこまで気にしないでください。あなたは、無理をする傾向があるので、いずれまた会うでしょう。医者としてはそうあって欲しくはありませんが……」

「にやはは。そうだね、これが最後ってわけじゃないもんね。それ

「じゃージン君。また、何かあったらお願いね。」

「何もない事を願ってますよ。人間健康が一番ですから。それではまたどこかで。」

「うん。またね。」そう言って別れを告げ病院を後にした。

病院の次にやって来た仕事場はゼストさん達がいる首都防衛隊の医務官として働く事になった。はずなのだが、なぜか、ゼスト隊に込みこまれている。フルバックでメガ・又さんのサポートと遊撃ででるらしい。そのせいで、ゼストさん達にしごかれてる。最近、近接戦闘は無理だと判断し銃を使った遠距離攻撃を主体としている。

メガ・又さんの協力もあつて新しい魔法も覚え、ゼスト隊でも問題なく付いて行けるようになった。転移に関してはメガ・又さんより優れているらしい。

そんな日々を送っていた頃に一つの任務があつた。なんでも、ゼストさんが追っていた違法研究所の居場所が分かっただらいい。そこでは、戦闘機人の研究がおこなわれているようだ。クイントさんが怒っていた。なんでも、戦闘機人だった子供二人を保護したようだ。だから、そんな研究をしている事が許せないらしい。

今回のオレは役目は負傷者の治療と援護が主。

今、ゼスト隊は違法研究所に向かっている。

「ジン。今回がお前の初陣になるわけだが、気負わなくて良い。お前は怪我人が出たら、安全なところへ避難させ治療を行えば良い。」

「はい。」

「大丈夫よ。私もいるし。それに、転移なら貴方の方がうまいわ。自信を持ちなさい。」不安そうな顔をしたオレを見て、メガ・又さんが声をかけてくれる。少し気が楽になった。ま、本当に危なくなるまでオレの出番はないし、危なくなることなんてほとんどないだろう。

その甘い考えがすぐに崩れる事になった。

.....

「B班応答しろ。C班、D班は？」ゼストが問う

「ダメです。連絡付きません。」クイントが答える。

「残っているのは、ジンが避難させたやつらとオレ達だけか。アルピーノはどうだ？」

「急所は外れていますが、早く治療しないとまずいかもれません。ジン君もこの空間内じゃうまく転移できないようですし。」

「いや、この魔力結合を阻害する空間の中で、あいつはよくやっている。」

「そうですね……!!」クイントが何かに反応しゼストを押す。

「クツ」機械から放たれた光線がクイントの腹部を貫く。重症だ。

「ナカジマ！クツ、ハアアアア!!」槍を一閃し先ほど攻撃してきた機械を粉碎する。

ドオオン!!

「ナカジマ、無事か!?!」

「は、はい。なんとか……でも、このままでは……」そこに救援に来た、ジンがやってくる。

「ク、クイントさん!?メガ・ヌさんまで!!」予想外の事態に慌てるジン

「落ち着けジン！幸い二人ともまだ息はある。お前が二人を連れて脱出すればまだ間に合う。だから、二人を連れて先に行け!」

「そ、そんな、ゼストさんも一緒に・・・」

「この空間では、いくらお前でも二人までが限界だろう。それに、あいつをどうにかしないといけない。」そう言っつて、視線の先には小さな銀髪の女の子がいた。ただ、その雰囲気は、少女にあるものではない。

「その二人を回収してきた。その二人は、ドクターの研究に使えららしい。だから、置いてっつて欲しい。そうすれば、お前達は見逃そう」

「そう言っつわけにもいかない。こいつらは大事なオレの部下だ。実験道具にさせる気などさらさらない！！行けジン。二人を連れて」

「ゼストさん！此処はひきましよう。この空間では分が悪い。おそらく、あの子は戦闘機人、魔力がうまく使えないで、勝てる相手では・・・だから」逃げましようと続けようとした時

「お前は、何のために魔導師になった！！傷ついたものを助けるため、守るためではなかったのか！？今が、その時だ。二人を守り救っつて見せる！！」

「で、でも、オレは、みんなを守りたい！！だから、ここで、ゼストさんを見捨てるなんて・・・」

「うぬぼれるな！！オレは、お前に守ってもらうほど弱くはない！
！お前が師事した男はこの程度でやられる男だったか！？心配する
な、オレは負けん！！だから、お前もお前の役目を果たせ！！」

「・・・わかりました。必ず戻ってきてください。約束破ったら
皆に奢りですから。クイントさんは食べますよー」

「それは、遠慮したいからな・・・だから、勝つ！行けジン！」ゼ
ストが笑みを浮かべ喝を入れてくれた。そんな背中を見て脱出する
のだった。ゼストの姿を見るのはこれが最後だった。

.....

その後研究所を脱出して、すぐに医療班のもとに。オレも治療に加
わった。クイントさんもメガ・又さんもなんとか、一命は取り留め
た。ただ、傷ついた器官のせいで、現場復帰は難しそうだ。おそら
く、内勤になるだろう。

あれから、ゼストさんがいくら待っても帰ってこない。

「ゼストさん・・・」

「大丈夫よ」急に声をかけられ後ろを振りむくとメガ・又さんとク
イントさんがいた

「傷に触りますから寝てた方が良いですよ」

「そうなんだけどね。隊長が帰ってきたら奢ってもらわなきゃいけないし」クイントさんが答える

「聞いていたんですか？」

「ちょっとだけ意識があつたからね」

「あの時、オレがゼストさんを引きとめておけば……」

「ジン君。あまり思い詰めないで。あの時はあれが、最善だった。あなたは、良くやったわ。」メガ・ヌさんが慰めてくれる。

その時

「報告があります。よろしいでしょうか？」ゼスト隊で生き残っていた人が報告に来た

「どうぞ。」メガ・ヌが答える。

「ゼスト隊の約6割が死亡し部隊は解散だそうです。」

「そう。」悲しそうな顔をするメガ・ヌとクイント

「そ、それと、先ほど報告がありまして……ゼスト隊長が殉職したようです」

「え！？・・・う、嘘。嘘でしょ。あのゼストさんが。オレとの約束だっただのに！！」ジンがとり乱す。

「事実です。」

「うつつ・・・」自分の頭が真っ白になるのを感じた。

「ま、また、救えなかった・・・。あの時、こうならなかったために努力してきたのに。何も、何も変わっていないじゃないか！！！」拳を地面に突き刺し叫ぶ

「ジン君・・・貴方は変わったわ。貴方がいなかったら私達もゼスト隊の人たちも全員死んでいたかもしれない。あなたは、これだけの命を救ったのよ。誇りなさい。ゼスト隊長からの命令を守り抜いた事に」

クイントが告げる

「で、でも、オレは、本当に大事な人を見殺しにしてしまった。あそこでオレが頑張っていれば・・・」

「あの空間では仕方のなかった事よ。私だってあなたはどうまく、転移できなかった。そんな中で、貴方は最善を尽くしたわ。むしろ責任があるのは私達の方。すぐにやられてしまったわ。」

「それでも、オレは、守りたかったんです……守りたかったんですよ……」涙を流しながら吐き出す。

「オレは、父さんを知らない。オレが生まれる頃には事故で亡くなったって聞いた。だから、ゼストさんに鍛えてもらって強くしてもらって、そんなゼストさんが、初めて、父さんのようだと思えた。なのに、おれは、また、大事な人を救えなかった!!!」殴っていた手が血で滲んでいる。

「やめなさい。ジン君そんなことをしても隊長は喜ばないわ!!!」
メガ - 又が止める。

「……………」
「うつむいたまま返事がない。クイントとメガ - 又が心配するが」

「少し、一人にしてもらえますか?」

クイントは止めようとしたがメガ - 又が制す。ここは、一人にした方がいいと

そのやり取りを見ずジンは誰もいない岩場の方へ歩いて行った。

「ゼストさん……」目の焦点があってないジンがつぶやく。

「う、うううう」体を丸くし膝を抱えるようにして泣く。これ以上ないくらいに

そんな様子を影から隠れて追いかけてきたクイントとメガ・ヌが見ている。

「あの子には辛い思いをさせてしまったわね。私達の命の恩人なのに、私たちでは救ってあげる事が出来ない。」クイントが言う

「そうね。あんな風に隠れて泣くしかできないなんて。まだ子供なのに……声を出して泣かしてあげることもしないなんて、私達は無力ね」メガ・ヌがジンを見ながら言う。

「隊長を慕っていたぶん、感情を見せるのを隠そうとしてしまうんだわ。そんなとこまで、隊長に似なくても良いのに。」

「私達がしてあげられる事は本当に何も無い。あの子が立ち直るのを待ってあげることしかできない。」

「それでも、傍にいてあげることくらいはできるわ。あの子がくじけそうになったら支えてあげましょう。」

「そうね」ジンを見ながらクイントとメガ・ヌが決意する。あの小さな少年が立ち直れるように頑張ろうと。

空は泣き疲れて膝を抱えたまま眠るのだった。

――
起きたらベットの上だった。見たことある部屋だ。

「あら、起きた？」聞き覚えのある声が

「か、かあさん？」

「そうよ。あんたが倒れたっていつからお見舞いにきたのよ。全くだらしないわね」ちよっと困ったように言う

「お、オレは、ど、どうして、ここに？」かつて勤めていた病院の部屋である。

「あんたが、倒れたから、クイント達が運び込んだのよ。外傷がないから寝てれば大丈夫だろうって。」

「そ、そう。今はそんな事はどうでもいい。オレは……」

「聞いたわ。隊長の事。それで、いつまであんたはそうしているつもり？」

「え？」

「隊長は死んだ。その事実は変わらない。でも、隊長が生かした、生きて欲しいと思ったあんたがずっとそのままじゃ、隊長も報われない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「別に悲しむなと言っているわけじゃないわ。ただ、前を向きなさい。そして胸を張りなさい。あんたは隊長が下した最後の命令を守った。それにあんたがそんなんじゃ、助けられたクイント達の立場がないわ。」

「・・・・・・・・」

「あなたは、医務官として局員として任務を成し遂げた。そして、死ぬべきではない命を救うことができた。その事は誇っても良いの。確かに、隊長を救うことはできなかつた。でも、隊長が命をかけて守ろうとした部下は救うことはできた。それは、立派な事よ。」

「・・・」

「それに、戦場にたった局員は多かれ少なかれ覚悟は決めている。あなたが悩み続けるのは隊長に対する冒とくよ」

「こつ言う時、母親って息子にやさしくするもんじゃないの？」少

し顔が晴れたようだ。

「あら？そうして欲しいの？それなら、ほら母さんの胸で泣きなさい」「手を広げてふざけたように言う」

「遠慮しときます。とりあえず、出て行ってもらえますか？」

「そう？久しぶりの親子のスキンシップなのに・・・」

そう言っただけで部屋を出て行く母さん

「母さん、ありがとう」「恥ずかしそうに言うジン

「どういたしまして」にっこりと笑って出て行った。

「あの子はもう大丈夫よ。ただ、まだ、道を間違えるかもしれないから、その時はお願いね」

部屋を出て病院服のメガ・ヌとクイントに話しかける

「はい。でも、先輩にはかありませんね。私達は何もできなかったの・・・」

クイントが申し訳なさそうに言う。

「これでも、あの子の親ですからね。貴方達も子供を悲しませるような事しちゃダメよ。もう、立派なお母さんなんだから。」

「そうですね。どの道ゼスト隊は解散。私達も内勤に異動になりますから大丈夫でしょう。これからはルーテシアとの時間も増えます。」

「そうですね。クイントもお母さんなんだからね」

「スバルとギンガを悲しませるような事はもうないでしょう。母親としての仕事が増えるのは大変ですが。」嬉しそうに言う

「それが、親よ。その内二人の子供に会いに行くつもりだからよろしくね。」

「はい、ぜひ。かわいいですよ。」メガ・ヌが言う

「うちの子達も負けないわ」

「残念実はうちの子が一番。どう？今の内に仲良くしとく？」

「そうね、ジン君は確かに優良物件ですよ。今度スバルやギンガに会わせようかな」クイントの目は若干本気だ

「あら、ルーテシアに会うのが先よ。それに、ジン君はルーの先生になってくれるはずだし」

「あの子は頭は良いからね。」母親ズのほのぼのとした会話が終わって別れる事になった。退院後、ジンが大変になるのは……

第5話 退院

母さんが来てから次の日。本当は退院できるのだが、母さんが休みなさいと言ってまだ入院している。メガ・又さんやクイントさんも療養中だ。

部屋にいてもあまりやる事がないので中庭にでも散歩でもしようと思ひ、行ってみる事にした。中庭にはベンチが置いてあり何人かが座って話をしていた。誰も座ってない席に座りポ〜っと空を見上げる。ゼストの事は吹っ切れたとは言い難いが、前を向いて行こうと思う。少し思うところはあるが・・・

「となりいい？」急に話しかけられ、驚いたが、空を見たまま気にせず言った。

「別にオレの席ってわけじゃないんで、どうぞ勝手に。」

「も〜う、ジン君冷たいんだから。」

「??？」気になって声をかけてきた人を見る。高町なのはだった。

「あ、やっとこっち向いてくれたね。前に別れてからいつ会えるかと思ったけどわりと早かったね。」

「そ、そうですね。リハビリは順調そうですね」なのはが車いすではなく松葉杖でいるのを見てそう思った。

「うん。辛いけど、もう一度空に戻りたいから。ジン君も協力してくれまし」

「医者としての仕事をしたままでです。」

「にははは、あいかわらず、そっけないね。でも前よりももっと、そっけ無い感じがする。病院服だし何かあったの？」

「ただの疲労ですよ。こう見えても子供なんですよ。貴方より年下の。仕事のし過ぎで療養中です。」

「もうう、無茶しちゃだめだよ。」

「貴方に言われるとは……」

「にはははは。でも、ホント大丈夫？なんか辛そうだよ」

「実は結構つらいですよ。だから、こうして休んでいるわけですが。」

「休息はしっかりとらなきゃね」そんな感じで話していると遠くから声がかかった。

「なーのーは！ーもう！ーどこ行ってたの！ーいきなりいなくなっ
て心配したんだから」金髪の子が走って来た。

「にやはは、ごめんねフェイトちゃん。ちょっと気になる子を見
けたからつい。」笑って言うのは

「それなら、それで、言ってくれば・・・その隣の子誰？あつた
ことある気がするんだけど」

「ああ、この子はジン君って言って私の治療をしてくれたお医者様
なの」

「・・・あーそうだ。なのはの先生。わ、私はフェイト・T・ハラ
オウンです。なのはの事、ありがとうございます。」深々と頭を
下げるフェイト

「なんか、高町さんのお母さんみたいですね。それと、礼は結構で
す。仕事をしたまでです。あと敬語も」

「ジン君は私達より一つ年下なんだよ。」

「そ、そうなんだ。よろしくね。」

「そう言えば、執務官を目指しているんですけどっけ？前にそんな事

を高町さんが言っていたような……」

「わあー、ジン君ダメ。それは、今は禁句だつて！」なのはがあわてて口をふさごうとするが遅かった。発言したジンは何の事かと思つたがフェイトを見て原因が分かった。暗い雰囲気で地面に不合格の字を書いている。気まずい

「私なんか、私なんて、私……」なんかのスイッチを押してしまつたようだ。

「フェイトちゃんは今年の執務官試験落ちてるの。私のリハビリとか手伝ってくれているから……」申し訳なさそうな感じで言うのは

「それであんな状態に。もどす方法は？」

「時間が経つのを待つしかないの。フェイトちゃん一度落ち込むとなかなか自分の世界から抜け出せなくて」

「ハア〜厄介な人ですね。しかし、このままここにいられてもあれですし、少々心苦しいですが。」

「な、なににする気なの？」

「ああ！高町さんが苦しんで今にも倒れそうだ！！」その言葉を聞いてなのは首をかしげようとしたが、閃光に邪魔された。

「な、なのは大丈夫。早く医者の人に見せなきゃ。私がソニックホムを使えばすぐだから待ってて今すぐにでも。バルディ「ドコ」「い、痛い」本気でデバイスを展開しようとしたためチョップして黙らせた。

「そんなことしたら、病院が大騒ぎになるんでやめてもらえます？」

「ジ、ジン君それはひどい」なのはが苦言と呈す。

「それに高町さんは良くみたら大丈夫なので心配しないでください」話題のすり替え殴った事を気付かせない

「ホント！？良かったあ！なのはに何かあったらと思うと心配で心配で」フェイトがアホで良かった

「なんかお母さんというより奥さんて感じですね。」

「ふえ、私とフェイトちゃんはそんなじゃないよ！！」顔を赤くして言うのは

「冗談ですよ。慌てると本当に見えますよ。」

「もう！ジン君が変な事いうから！」その後なのはをからかっていたがフェイトが発した言葉で気分が悪くなった

「そう言えば、明日ははやて達も来るって。みんな仕事を調節したって言ってた。」

「フェイトちゃんそれは・・・」

「あ！」「フェイトもあの現場にいたのでシャマルとのやり取りは見ている。」

「オレの休暇もここまでか。高町さん。オレはきょう退院します。リハビリ頑張ってください。」

「ジン君。やっぱりシャマルさん達と仲直りすることはできない？」

「どうでしょうね？あの人たちを目の前にして冷静でいられる自信はないです。母さんは治りましたが一歩間違えれば死ぬ可能性があったんだ。それを許せるほどオレは人間ができていない。あなただって、家族やそのフェイトさんが襲われて死ぬような事があつたら許せないでしょう？話し合いとかそういうレベルではないはずです。例えばあいつらのせいで空が飛べなくなったらどうしますか？」

「そうだね、ごめんね。たぶん私もそんな事になったら冷静でいられないと思う。私も魔力を吸われたけど体は問題なかったから。被害者って感じじゃないけど。本当に被害を受けた人からすれば許せないものだよね」

「で、でも、なのは。はやて達は罪を償っているし。皆いい人だよ」

「それはそうなんだけどね。私たちがそれを知っていても他の人はそれを知らない。」

「そう言う事。あいつらはまず迷惑をかけたやつら全員に謝罪してから罪を償うべきなんだ。それが、管理局で働く事で罪滅ぼしになるなんて意味がわからない。確かに俺たちみたいな理不尽な被害者は減るかもしれないが、被害を受けた人はそれで終わりとはいかない。あいつらは順番を間違えた。被害者たちがあいつらを許す日はまず来ないだろう。あいつらと知り合いにでもならない限り。」

「……………」
「フェイトが沈黙する」

「そう言う事でオレは他の人に挨拶したら退院するから、また縁があったら会いましょう。それと、オレの事は秘密にしておいてくださいめんどくさい事になるのは嫌なんで」

「う、うん。またねジン君」なのはは困ったような顔をしていたが、了承してくれた。

とりあえず、メガ・又さん達に挨拶をしておこう。

コンコン

「どうぞ」メガ・又さんとクイントさんの病室に入る

「二人とも調子はどうですか？昨日はお世話になりました。」部屋の中にはゲンヤさんとその子供がいたが、会釈だけして二人にはなしかけた。

「もう大丈夫なの？」

「ええ。まだ、吹っ切れたわけではありませんが、あがいてみようと思います。」

「そう。」オレの表情を見てメガ・又さんが察してくれたのか、それ以上何もいわなかった。

「あ！そつだ。紹介するわね。私の娘達。スバル、ギンガ。挨拶なさい」

「ギンガです」 「す、すばる。」 ギンガはしっかりとあいさつしてくれたがスバルはギンガの後ろに隠れながらのあいさつだった。

「スバルにギンガね。よろしく。オレはジン・ヤナギバ。クイントさんにはいつもお世話になっているよ」 そんな感じであいさつしてゲンヤさんにも挨拶しようとしたが、ゲンヤさんが真剣な表情をして二人の前にたった

「……ジン。今回はお前に感謝してもきれない。お前がいなかったら、うちの妻は死んでいた。妻を、クイントを助けてくれてありがとう。」 深々と頭を下げる

「あなた……」 クイントはその様子を見ている。スバルとギンガは良く分からないと言った感じである

「頭をあげてくださいゲンヤさん。オレはオレのやるべき事をしたまでです。実際助けられなかった人もいました。たまたまです。」 助けられなかった人の部分で辛そうな顔をしたのを、クイントとメガ - 又は気づいた

「それでも、妻を救ってもらった事には変わりない。ほら、ギンガもスバルもお礼を言っとけ。母さんの命の恩人だ」

「恩人!?」ギンガが反応するがスバルは?な感じである。

「そうよ。ジン君は私達の命を助けてくれたの。私が貴方達にこうして、会えるのも彼のおかげよ。」

「ホントに?」

お兄ちゃん!お母さんを助けてくれてありがとう。
「スバルが元気な声でお礼を言う」

「私からも母さんを助けてくれてありがとうございました。」二人からお礼を言われなんともやるせない気持ちだった。確かに助けられた人はいたが、ゼストさんを救う事はできなかった。自分の無力さを改めて感じるのだった。それを顔に出すようなことはしないけど

「ここは、素直にお礼を受け取っておいた方がいいのかな。」

「そうね。でないと、私たちの立場がないもの。」クイントが苦笑して言う。

「まあ、無事でなによりです。としか言いようがないんですが・・・
・お礼は受け取っておきますよ」

それで、少しギンガやスバルと話していると（スバルには懐かれた）、メガ・又が口を開く

「それで、ジン君は何しに此処に来たの？私達の様子を見るためだけではないんでしょう？」

「おおと、忘れてました。オレ今日退院します。ちょっとめんどくさい事になりました」

「めんどくさい事？」

「明日、会いたくないやつらが来るんですよ。以前ここで治療した子がリハビリ中でお見舞いに来るそうです。オレはその人たちに会いたくないので。」

「そ、そう」メガ・又は察してくれたようだ。オレの中で会いたくない人なんて闇の書のやつらくらいしかない。

「でも、戻る場所なんてないわよ。」

「えー？ど、どういうことですか？」クイントに驚愕の事実を告げられて驚く。

「昨日先輩が来て、少し話をしたんだけど、ジン君ルーテシアちゃん先生やるんでしょう？それでどうせならスバルやギンガもつい

でに教えてもらおうと思つて先輩をお願いしたんだけど、それなら家が近くの方が便利よねとか言つて私たちの家の近くに引越すことになったの。私の家とメガ・ヌの家は近いから一石二鳥ね。」

「オレの意思が反映されていない事については？」

「先輩のせい」

「……ハア〜。じゃあ今日はホテルにでも泊まるか。」帰る家はもうないらしいので、ホテルに泊まるうとするが

「なら、うちに泊まれば良いよ！！」スバルが元気に答える

「そうだな、ジンには家内の事で世話になっているし、お礼もしたい。泊ってけ。」ゲンヤも続く。

「……」考え中

「それじゃ、私達も今日退院しようかしら。ジン君のおかげで体の傷は激しい運動をしなければ大丈夫らしいから、それに何かあってもジン君がいるし。」とクイント

「そうね。そうしましょう。私もルーテシアを合わせたいし。クイントの家に行つてもいいかしら？」

「構わないわ。今日にはぎやかになりそうね」と陽気に話すクイント。ジンが行く事は決定事項らしい。此処で断れるほどジンは勇者ではない

「わかりました。今日は御厄介になります。オレも、久しぶりにルに会いたいですし。」了承といた。

「それじゃ〜退院手続きをして家に向かいますよ。」そう言って準備を整え病院を後にするのだった

第6話 ナカジマ家（前書き）

ちよつと無理やりな感じがありますがご了承ください

第6話 ナカジマ家

病院の退院手続きを済ませ、ナカジマ家へ移動。一応母さんに今晚泊る事を伝えたが、まだ手を出しちゃダメよと言われた。

普通に考えてありえないんだろ。なに考えているのだろうか？

そんなしょうもない事を考えていると、どうやら着いたらしい。スバルが元気に紹介してくれる。最初のおどおどした感じはどこに行つたのだろうか？

ゲンヤさんとクイントさんは準備があると言って奥へ入って行った。その間スバルとギンガの相手をしていて欲しいだそうだ。

「で、なにしようか？オレあまり遊びとか詳しくないんだけど・・・やりたいことある？」

スバルは特にないらしい。そこでギンガが

「ちょっと組み手をしませんか？いつもは母さんとやるんですけど、たまには違う人とやってみたいんです。」目をキラキラさせながら聞いてくる。クイントさんにオレが鍛えている事を聞いたらしい。それにクイントさんがちょっと誇張したらしい。

「オレ、体術はそんなに強くないんだけど、それで良いならいいよ。スバルはどうする？」

「私は見てるよ。痛いのが嫌だもん。」

そう言っただけで座れる場所に移動して観戦モードに入る。

「ギンガはシューティングアーツをどれくらいやってるの？」

「まだ、始めて間もないです。1年ちょっとくらいです。」

「ふん。とりあえず、型を練習している感じが。オレはシューティングアーツできないから教えることはできないけど、そこはまあクイントさんにも聞いてくれ。今日は対人戦という事で何か学んでくれ。言っとくけどオレはあまり強くないから期待するなよ。」

「謙遜しなくても大丈夫です。母さんもジン君は強いって言ってましたし。だから全力で行きます。」

気合いが入っているギンガに間違いを訂正しようとしたが

「それはクイントさんの過大評「行きます!!!」価・・・話は聞こうよ・・・」ギンガが突っ込んできた。とりあえずま正面から来るギンガの攻撃を受け流す。避けると転んで危なそうだからだ。

「よっと」間の抜けた感じで左ストレートを弾いて腹に拳を入れる。当然寸止めだけ。さすがに始めたばかりのやつに負けるほど弱くはない

「は!・・・もう一度お願いします。てりやあああ!!!」自分の攻撃を弾かれカウンターを入れられた事を悔しそうにしながら、再

び挑戦してくる

「さっきと、同じようにやっても変わらないぞ。相手だって動くし考える。突っ込んでくるだけなら動物と変わらないぞ。」

ギンガの猛攻を全て弾きその度に寸止めのカウンターを入れる。

「ハアハアハア」息が上がるギンガ

「余計な動作が多いからそうなる。無駄振りには読まれやすく、カウンターの餌食だ。日ごろから型を練習しているならまずそれを意識しろ。本来型とはきちんと言えれば実戦で必ず生きてくる。そこを適当にやってしまうと先がないぞ。」

昔ゼストに言われた事を思い出す。

「ハアハア・・・はい・・・」

「それともう少し考えろ。最初の攻撃でオレとの力量差を感じたはずだ。その後同じように攻撃したところで意味はないぞ。どうやったら、攻撃が当たるのか、どうすれば相手に避けられないのか、それを今持てるすべてを使って考える。本能で動く天才型もいるが努力により得られた経験からの考察力は時に才能の差を埋める。要は努力しろってことだけだな」

「はい・・・」少し言われて落ち込むギンガ。昔の自分のようだ。まだ未熟ではあるけれどゼストさんから教えられた事はしっかりと

守っている。

「まあ、初めて1年にしては上出来だろ。力もある。後は基本をしつかりとやってクイントさんの教えを守ることだな。そうすればギンガはもつと強くなる。師匠がいるんだ頑張れよ。」

「は、はい！ありがとうございます。」元気になったギンガ。その後もう少し組み手をしをして反省会の繰り返し。だいぶ時間がたってスバルが話しかけてきた。

「ひくくま」飽きたようだ

「スバルもやればいいじゃない。」ギンガが苦笑いしながら言う
「嫌だよ。私は痛いのは苦手なの！」駄々をこねるスバル。そこで、ちよつとした遊びを提案する

「それなら痛くない遊びをしよう。それに勝負だ。スバルが勝つたらなんかおいしいものを食べさせてやる。」

「ホントに！！」目を輝かせるスバル。口からアイスつてもれてるんだけど・・・

「本当だ。これでも働いているから、お金の事は心配いらぬ。ギンガも参加するだろ」

「は、はい。それで、なにを……」ちよつと戸惑っていたがスバル同様ギンガも何か想像している。さすがは姉妹。

「ルールは簡単。要は鬼ごっこだ。今から範囲を決めるぞ」そう言つて魔法でちよつとした空間を作り出す。ちなみに転んでも大丈夫なように地面に細工を施し柔らかくしている。無駄に能力が高い

「この範囲内でオレが操作するこの魔法球を捕まえる事。そんなに高くは飛ばさないからジャンプすれば届くぞ。ギンガと同じくらいのスピードだから二人で協力すれば案外簡単に終わるかもな」

「ギン姉と一緒になら平気だね。頑張ろう！……アイスのために」
ダダもれの欲望

「もうスバルつたら。でもいいですか？その条件な私たちの方が有利ですよ」

「もちろん制限時間はある。だいたい10分くらいだな。そこまで捕まえられなかつたらオレの勝ち。ちなみにちゃんと捕まえないとダメだぞ。掠った程度じゃ認められないからな」

「もーなんでもいいよ！早くアイスのためにやろう！！」スバルが我慢できないらしい

「それじゃー用意・・・始め!!」そう言つて魔力球を飛ばす。一斉に飛びかかる二人。地面はクッション状になっているので構わずダイブ。ギンガの手が触れようとした瞬間ギンガに向かつて移動。とっさの事にギンガは反応できずに逃してしまふ。

それならばと、今度はスバルが追いかけるがまたも急な方向転換によりあえなく失敗。二人して追いかけてまわす鬼ごっこが始まつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・5分経過

「ハアハア、何で捕まえられないの。動きだつてそんなに速くないのに・・・」ギンガがつぶやく

「ギン姉、あつちの方に移動させて逃げられないようにしよう。」

「そうね。そのあと、二人でかかれば・・・」

ジリジリと歩み寄る二人。どんどん追いつめて行く。・・・!!

「スバル今!!」二人が飛びこむ。だが、ジンは、それをスバルに飛び込ませる事で回避する。

「そう何度も喰らわないよ!!」何度もやられて学んだのか、スバルが素早く反応し捕獲しようとするが、魔力球が急にスピードダウンし

「え!？」スバルが捕らえようとした時に消える

「どこ!?」ギンガとスバルが辺りを見回すが見つからない。

「ジン兄ズルイ!魔法を消すなんて反則だ!」スバルが不服そうに言う

「オレは反則なんてしてないぞ。ちゃんとお前達のそばにいる。」

「う、嘘!?」そう言われて探すが・・・いない

「やっぱり「スバル服!」いない・・・え!?」ギンガがスバルの服についている魔法球に気づき叫ぶ。自分の服についているとは思わなかったのか、慌てて捕まえようとするが

「残念!」またしても消える。今度はギンガの方に取りつく。ギンガは気づかず、辺りを見回すがスバルは気づき捕まえようとし・・・飛んだ

「キャ!!!」急にスバルが突っ込んできたので避けきれず倒れてしまう。二人が転がっている間に

「タイムアップ。残念ながらお前達の負けだな」

「く〜」悔しがるスバル。ギンガも悔しそう

「それで、何で捕まえられなかったかわかったか?」

「.....」スバルとギンガは考えているようだが答えが出ない

「正解は錯覚だ」

「さっかく??」スバルもギンガも良く分からないと言った感じだ

「ああ、わからないか？要は勘違いだ。」

「勘違いなんてしてないもん!!」スバルが反論する。ギンガも頷いている

「じゃーどうして、スピードがギンガと同じくらいのギンガ追いつけないと思う?ちなみに、速度は変えてないからな」

「わかんない」スバルにはむずいらしいが

「地面ですね。地面が柔らかくなった分私達のスピードが落ちました。それにそんな地面で動いたため普段よりも体力が削られました」

「正解だ。ついでにオレは動き回るのではなく極力動かないようにしてから最小限の動きで避けるようにしていた。そのせいで、想像していたより速く感じただろ?」

「う、うん。」

「どんなに速くても、やっていればそのうち慣れる。だから慣れさせないような工夫が必要なのさ」

「で、でもそれだけなら追い込んだ時に捕まえられたはずです。少なくともスバルは最初の時は反応していました」納得がいかないと言ったかんじのギンガ

「それも、錯覚だ。いや、盲点と言っても良い。人間は物事を考える際、絶対に起こらない事や確率が低いものは無意識に排除してしまう。だから、一度目の接近でスバルが反応した時、オレがスピードを落としたのは何も他に逃げるためじゃない。スバルも左右に動いたら気づいただろ？」

「う、うん」

「だから、オレは左右ではなく前後というか上下に動いたんだ。最初スバルが捕まえようとした時に後方へ移動しスバルの目が手に向かったときに一気に前に出る。そうするといきなり消えたように見える。後はずっと服に着いとけばいい。自分の体に有ると思わな
いからな。」

「私の時もそうやって・・・」ギンガが納得したように

「ギンガの場合はちょっと違う。動き方は一緒だが目線の高さから外させずに移動させた。見ていた位置から変わっていないように見えるが実際は接近している。意外と気づかないもんだ。ちなみに、これはオレの父さんの世界の文献に有った物だ。地球っていったか？その武術の縮地と呼ばれるものだ。色々説はあるようだが、オ

レが見たのはそれだ。」

「地球ってお父さんの御先祖様がいたところ？」

「ん？ああ、ゲンヤさんの先祖も地球出身なのか。意外と世間は狭いな。」

話も終わったところにクイントから声がかかる。

「ご飯の準備できたわよ。手を洗って・・・あら、ギンガもスバルも泥だらけじゃない。先にお風呂に入って来なさい。」

「はい」

「ジン君も一緒に入ってきたらどう？」にやりとした笑みを浮かべるクイント

「そうだね！ジン兄も一緒に入ろう！！」元気よくスバルが答える。

「みんなで、洗いつこしようか。」ギンガも乗り気だ。二人とも子供なので羞恥心という物がないらしい。

「折角のお誘いですが、遠慮させてもらいますよ。オレもまだ子供ですが、これでも羞恥心くらいはあるので。」

「え〜一緒に入ろうよ」スバル達が言っているがスルー

「なんだ、もつと慌てるかと思ったのに・・・クイントがつまらなさそうな顔をする。」

「これでも医者なんで。そんなこと言ったらクイントさんやメガ・又さんの治療なんてできませんよ。」

「あら、それは私たちの体には興味があると言っ事かしら？」笑いながら聞いてくる

「子供に何を期待しているんですか？そんなこと言っると今度の治療で失敗しちゃうかもしれないよ。ケガが長引くのはつらいですね」黒い笑みで答えると

「もう冗談よ。」笑っでごまかすが、内心焦っているクイントだった。

.....

手を洗い食卓に向かうとメガ・又さんとルーテシアがいた。ルーに会うのは久しぶりで忘れられているかと思っ近づいたけどどうやら覚えていたようだ。にっこりと笑っ手を振っってくれる

「ルーは何歳になった？」

「3歳。お兄ちゃん久しぶり」元氣よく飛びついてくる。オレがまだあつた頃はあまり喋れなかつたし、あるけもしなかつた頃だからそれから考えると大きくなつた。というより良くオレの事覚えているな」

「久しぶりだな。忘れられてなくてよかつたよ。よく覚えていたなルー。オレがあつた時はまだメガ・又さんに抱えられていた頃なのにな」

「あんまり人と会う事はなかつたし、お兄ちゃんは私の遊び相手をしてくれたから、なんとなく覚えてるの。」

そう、メガ・又さんがうちに来た時急に仕事が入つてオレが代わりにルーの面倒を見た事がある。赤ちゃんの割に手のかからなかつた事を覚えている。その時、ルーに懐かれたらしい

「そおか。うれしい限りだ。それに、今日はオレ以外にもいるから友達が増えるな。その内来るだろうから後で自己紹介しときな」

「う、うん。大丈夫かな？」心配そうにするルー

「大丈夫さ。スバルは人見知りするようだがさすがに、自分より年下な子にはないだろう。ギンガはもともと面倒を見たがるようだし、新しい妹ができたみたいで歓迎してくれるんじゃないか？」

オレの言葉に少しは和らいだものの、二人が来るまで緊張していたルーだった。

その後風呂からあがって来た二人にルーが緊張しながら挨拶したが、意外にもスバルがお姉ちゃんぶりを発揮しすぐに仲良くなった。当然ギンガも仲良くなり今は三人して仲良くご飯を食べている。オレは一応大人組みに交じり談笑しつつも食事を頂いているところだ。

食事も終わり片付けをしてる頃には遊び疲れたのかルーとスバルが寝ている。ギンガも寝むそうだ。クイントさんに3人を寝かしてきつてと言われたので、ギンガに案内してもらい部屋に向かった。ルーをおんぶしてスバルを抱えて部屋を目指す。

部屋についてスバルとルーを同じ布団に寝かせギンガも自分の布団に入る。

「お休みギンガ」

「おやすみなさい・ジンさん・zzz」相当眠かったらしくすぐに寝てしまった。ギンガの布団を直した後クイントさん達のもとに戻る。何か話があるらしい。

「ジンお前はこれからどうする？」ゲンヤさんに言われて考えてみる。

オレは一応ゼスト隊の一員なので部隊解散後は所属が空く。クイントさんとメガ・ヌさんはケガのせいもあって内勤に異動となりゲンヤさんの部隊に行くようだ。

「オレはまだ、首都防衛隊で働こうと思います。もう少し訓練もしたいですし……」

「辛い？」メガ・又が気にかけてくれるが

「辛いって言ったらうそになりますが大丈夫です。それにあそこには銃を得意とする人がいたのでその人に学ぼうと思います。」

「そうか。お前さえよければオレの隊にきてもらおうと思ったんだがお前がそう言うなら無理に誘うわけにはいかねえか。」ゲンヤさんがポツリと言う

「すみません。」

「気にするな。お前はお前のままであってくれればいいさ。」そう笑って言うてくれる

これで話も終わりかなと思ったところに

「それで、ジン君は三人の中で誰が好きだった？スバル？ギンガ？それともルーちゃん？」まじめな雰囲気壊すクイント。

「ハア、クイントさんもう少しまじめに行きましょうよ。それに今日あったばかりで好みも何もないでしょう。ルーなんて久しぶりに見て大きくなってたし。それに、みんな妹みたいでかわいいとは思いますが……家族目線の感じですかね」

「つまらないの。ジン君にならうちの子を任せても良いのに」ちよつと子供っぽい顔をして言ってくるクイントにあきれながらもらしいなと思ってしまう事が少しうれしい。オレが助けられたことを実感できた時であった。

その後はメガ・又さんも参戦してきたりゲンヤさんがまだ嫁には出さんとか言って暴れだしたりして大変だったが、こんな日常もうれしく感じられるようになったのは良かったと思う。ゼストさんがない事がオレの中にしこりとして残っているがそれは時間が解決してくれるだろう。暴れだしたゲンヤさんをクイントさんが抑えつつメガ・又さんが笑っている姿を見て思うのだった。

第7話 二人目の……

ナカジマ家に泊ってから数日経ってオレは職場に復帰した。一応オレは医務官として此処にきているので他の人に比べて仕事が少ない。だから、訓練に時間を多く当てる事が出来る。まずは、あの人を探さないと……

とりあえず訓練場を目指す。何人かが訓練をしているようだが、あてさているだろうか？

……いた！目的の人物を見つけその人のもとに向かう

「あの～すいません。訓練中申し訳ないんですが……」

「ん？どうしたんだ？・・・おお、お前さん確か最近配属された天才医務官じゃん。そんな奴がどうしてここにいるんだ？」

「ええつとですな。オレに銃を教えてもらえませんか？」最初はたどたどしい感じで言っていたのだが真剣な表情で尋ねた

「その顔を見るとわけがありそうだな。何で銃を教わりたい？」

「もうこれ以上大切な人を失わないために！オレの目の前で救えないなんて事がないように！だから強くなりたいんです。オレに近接の才能はありません。ただ銃なら……でも我流なんで扱いを知

っている人に教わろうと思って。此処で銃を使っているのは貴方くらいですし、前に見た時にすごいと思いました。だから、お願いできませんか？」

「ううん。とりあえず腕を見てみたい。オレと軽く模擬戦しよう。」

「は、はい。お願いします。ランスターさん」

「オレの名前まで知ってるのか？それにティータでいい。それじゃ始めるぞ。」

.....

「それじゃー始めるぞ。ルールは撃墜されたら負けの簡単なやつだ。とりあえず、お前がどれでけやれるか見てみたいから、全力でやれよ.....スタートだ」

ティータが一気に駆け出す。それに対応してこちらは足元を狙った狙撃。それを難なくかわすが、それは囷。回避して空中に逃げたところに連射。誘導弾ではなく弾速を重視したため結構速い

が、ティータはそれを全て撃ち落とす。態勢が悪いにもかかわらず正確無比の射撃

「すげえ〜」感嘆の声が漏れる。

「呆けてる暇はないぜ。それ！」いきなりの三連射。オレとは違い全て誘導弾。

「（避けるか？・・・でも相手の意図がわからない。此処は落ち落とす！）」迫りくる弾丸に弾丸を命中させる。だが、命中する瞬間3つの球が分裂し6つの球になる。当然こちらの攻撃はそれ6つの球が襲いかかる。

「!？クツ」即座に連射し落とせるものは落として後はすべて避ける。・・・だが一発掠ってしまった。

「これがオレのスプリットショット。意外と油断しているやつには当たり易い。その点に関してはなかなかの反応だ。」余裕のある感じ話す

「弾を分裂させるなんて器用ですね。・・・でも、オレもそう言うの得意なんですよ。ファントム!!」

「yes」オレの声に反応して魔法球を作り出す。その数10個。

「へえ〜その数を制御するのか。なかなかすごいな。さっきの感じだと誘導弾は得意じゃないと思ったんだけど・・・」

「ええ、その通りです。誘導弾はあんまり得意じゃないんですよ。でも、あまり関係ないですし・・・」

「ん？」

「行きます。テレポートショット!!」10個の弾丸をティードに向かつて飛ばす

「そんなバカ正直に打つても当たるかよ」迎撃のために弾丸を飛ばすが……

「そうですね。なのでこうします。チェンジ!!」ティードに向かって行った弾丸の前に魔法陣が現れ10個の弾丸がすべて消える。

「な!？」ティードもいきなり消えた弾丸に驚くが次の瞬間

「これでチェックメイトです。」ティードのまわりに魔法陣が現れ弾丸が飛び出す。慌てて反応するが遅い。数発を防いだもののそれ以外は直撃。煙があれりとバリアジャケットがボロボロなティードが現れた

「痛てて。おいおい俺の負けじゃねーか。ハア〜お前オレに教わる必要ないだろ。」

「そんなことないですよ。今回は不意を突かせてもらっただけです。実際の所射撃技術では全くかないませんし。」

「いや、でもなく。教えるやつが教わるやつより弱いのはどうよ。」

「いや、たまたまですつて。こっちはそちらの情報を知ってましたから。対策もねれました。スロースターターってことは知ってますし。オレを子供と思ってなめてくれていたのもわかってましたから。」

「……負けた身では何も言えない」

「それでもあなたがオレよりも銃を扱うことにたけているのは確かだ。だから、貴方に教わりたと思った。どうでしょう？お願いできますか？」

「……ハア、負けちまったからな。毎日は無理だが暇なときは教えてやるよ。後お前の癖もな」

「癖？」

「お前照準を合わせる時、片目つぶるだろ。一対一なら何とかなるかも知れんが複数いる時に死角を増やすのは自殺行為だぞ。」

「でも。それやらないと合わせられないんですけど……」

「だから、そう言うのも含めて教えてやる。基礎はできていそうだが対人を想定しすぎている。いろんな場面があるんだ自分の能力を制限するのはもったいないぞ。」

「やはり貴方を選んで良かった。これからお願いします!」

「まあぼちぼちな。」そう言って今日の反省会をした後訓練を終えるのだった。

.....

ティーダに師事してから数カ月ジンの射撃技術はティーダをも凌ぐものになっていた。もともと基本はできていたので、後は積み上げるだけ。収束魔法を撃てないという欠点はあるものの元来の器用性を生かしそれを補えるだけの技量は身に付けた。

実戦不足という指摘もティーダとともに様々な任務をこなした事で十分なものになって来た。ティーダが言うには

「お前と組めば大抵の事はなんとでもなるな。ケガしても治療できる医務官が前線にいるなんてオレらからすればかなり安心できる。」らしい。

ただ、早く力をつけようと無茶も何度か繰り返したのでよくティードに怒られた。まあ、命をないがしろにするようなものではないのでそこまで怒られはしないが結構心配をかけているらしい。申し訳ない。

そんな感じで日々を過ごしている。あと、デバイスマスターの資格を取った。もともと頭は良かったので構造を理解するのはそこまで苦労しなかった。今使っているデバイスはゼストさんに貰ったものなので大切に扱っている。ただ、そうなると自分で整備をした方がいいのでは？という結論に達しデバイスマスターの資格をとる事にした。

取った後はティードのメンテもついでにやってあげている。一応師匠なので……

今日も訓練をしようと思ったところに呼び出しがあった。どうやら任務らしい

任務内容は犯罪組織の検挙と逮捕らしい。ティード主導で捜査が進められようやく足取りがつかめたらしい。ミッドのはずれにある地区で違法物の密輸が行われてるらしい。人員は確保できたので今日乗り込む予定だ。ただ、まだ不確定な事があるのでティードは反対したようだが上司が強引に捜査に踏み切った

「今回は犯罪組織の逮捕が目的だが何分位置が特定していない。人

員もいることだしいくつかに分けて捜査を行う事にする」「上司が告げる

「ここで、人員を分けるのは悪手ではないでしょうか？相手に強力な魔導師がいた場合対応しきれない場合があります。ここはやはり、もう少し調べてからの方がよろしいのではないですか？」ティータが冷静に意見を述べる

「何を言っている！犯罪者がいるとわかっているのにそれを見逃さずなんて管理局員のする事か！！我々は管理局員だぞ。犯罪者は捕まえねばならんだ。」

「ですから、万全を期すためにももっと調べた方が…」

「くだい。臆したか！！そんなんだから執務官になれんだ！！もうよい。此処からは全権を私がとる」「いきなりわけのわからない事をいう上司

「ちょっと待ってください。この調査はティータさんが調べていたはず。いきなりそれを横取りするのはいかななものかと……」
ふざけた事をぬかす上司に正論を行ってみるが

「ふん、そんな奴に任せていたら捕まるもんも捕まらわ！！お前らは私の指示に従えば良い。以上解散だ、各員準備しろ」

なぜこんなにも焦っているのかというところの上司後ろ暗い事をして
此処まで上り詰めたようだが最近その事が調べられているようだ。
今回の密輸組織とも裏でつながっている可能性があるということだ
ティーダが調べているということだ。そのティーダに対して何かと
文句をつけるといふいかにもな反応をするあたり脈ありだろう。

.....

区画潜入

「お前達はA地点を他はB、C地点を行け。ランスター一尉。」

「はい。」

「お前にはD地点を任せようと思う。優秀なお前の事だ一人で大丈夫だろう」

「はあ？」思わず出てしまった。

「上官、よろしいでしょうか？いくらなんでもそれは作戦とは言えないのでは・・・単独で潜入なんてありえませんか。」

「何を言う。ランスターは若くして一尉にまでなった、優秀な魔導師だ。問題あるまい。」

「いや、これだけの人数がいて一人だけなんてあまりにも……」

「ええい黙れ！！上官命令だ。私がそう判断したんだ。これが最善なんだよ。新米が偉そうに意見するんじゃない！！」

「ジン、俺なら大丈夫だ。だからお前の仕事に集中しろ。」

「いやでも、先輩……」

「上官の命令は絶対だ。オレ達は軍人なんだ。」

「……了解です」

「よし。ではこれより作戦を開始する。各員持ち場につけ。」

「」「はい」「」

（嫌な予感がする……このオッサン何をたくらんでいる？）

全員が持ち場に付き作戦を遂行する。一応この区画には一般人もい

るため下手に戦えないのがネックだ。速攻で制圧するしかない。

オレ達の担当のC地点。倉庫に人影はなし。辺りを警戒してから潜入。中を調べる……！！

出てきたのは質量兵器。それも大量に。これは完全に辺りか？そう思いながら押収していく……

質量兵器を回収している時に見方からの声が届く

「敵襲！！」銃火器の音と伴に仲間からの声が聞こえた。

「人数は？」冷静に状況を判断する。

「質量兵器を持ったやつが6人。魔導師らしきやつが一人。おそらくAランク魔導師です。」

「了解。魔導師はこちらで何とかする。他のやつらを任せられるか？」

「はい。大丈夫です。気をつけて」

「そちらも」そう言ってバリアを張りながら魔導師の方に向かって進む。此処でドンパチをやると味方にも被害が出かねないので倉庫から追いつく。

「そら!!」連射で相手を押しだしていく。相手もそのまま引き下がって行く。剣型のデバイスを持っているので此処じゃ存分に戦えないと判断したのだろう。素直に外に出る。

「こちらは時空管理局。密輸容疑ならびに質量兵器保有の現行犯で逮捕する。武器を捨てておとなしく投降しろ」

「くそ。あのやる、こつちには強いやつはいねえって言ったのに……いるじゃねえか。」

「何?あいつとは誰だ?」

「教えるかよ!!」そう言って向かってくる。だが、日ごろからテイーダさんと訓練してるしゼストさんに比べればこの程度の相手

「足元がお留守だ。」両足を撃って相手を倒しバインドで拘束。というかAランクもないだろ弱すぎる。Cランクが関の山だろう。この報告をしたやつ……!?!? パン!!

「フツ」バリアを張って銃弾を防ぐ。

「陸曹これはどういふことだ?他のやつらはどうした?」

「ククク、中で寝てますよ。銃弾には過剰に反応するのに催眠ガス

には警戒が全く足りないなんて。」

「裏切りか……」

「そんな大層なもんじゃありませんよ。ただ私は部隊長のおこぼれにあずかるだけ。」

「やっぱりあいつが黒幕か。それで、これからどうする？ 気絶させられてから捕まると素直に捕まるとどっちがいい？」

「ハハハ、御冗談を。そこにいる奴を倒して気が強くなっているんですか？ そいつはCランク魔導師です。それに比べて私はB+。あなたは空戦C。さらに質量兵器を持ったやつらがこちらにはいる。貴方には部隊長の事を言っしまいましたからね。此処でサヨナラです」

「……………」

「恐ろしくて声も出ないですか？ まだ子供ですからね。どうですか？ 私のゆう事を聞くなら助けてあげても良いですよ。若くして医務官の資格を取るほどの頭脳と技術、此処で死なすにはもったいない。」

「寝言は寝て言え。そんなだから、その年になっても陸曹どまりな

「んですよ。」

「なんだと！？ガキが調子好きやがって・・・やれ！！」一斉に銃弾が飛んでくるが

「リフレクション」バリアを張って跳ね返す。跳ね返った銃弾に当たり悶絶するABC。陸曹も腕に当たり叫んでいる

「うわああああ。痛てえ！！早く、治療を・・・」

「その程度なら死にやしませんよ。まあ手が使えなくなる可能性はありますが・・・」その言葉を聞いて顔を青くする陸曹

「た、頼む。助けてくれ。本当は部隊長に脅されていただけなんだ！！」

「さっきの威勢はどこに行ったんですかね？治療は後で受けてください。今は用事があるので。パン」とりあえず撃って気絶させる。バインドで縛り犯人一味とともに指令本部へ転送。一応念話で報告しておく陸曹のデバイスは没収。データを引きぬき部隊長が犯した罪の証拠を抜きとる。

「これで大丈夫か。あとはティータさんのところか」

全速で飛ばしてティーダのもとに向かう。が……

倒れ伏すティーダを見つめる。血だまりができている……

「テ、ティーダさん!!」 駆け寄りすぐに治療を開始する。だが、出血が多い

「よう、ジン。どうした？ 珍しく慌てて？」 目の焦点が微妙に有ってない

「黙って!! 今治します」 全力で治すが足りない血が補えない。クソ!!

「もういい。オレはもう此処までだ。わかる」

「あきらめんなよ!! オレまだあんたに教わりたい事いっぱいあるのに!!」

「グフツ……ハア……それなら問題ない。お前はオレよりも強くなつたからな……」

「そんなこと……」

「数か月で抜かれるとは思わなかったけどな。基礎ができてたし。それに教えた人が良かったしな」

「それならもつと……」

「ああ、目がかすんできた。ジンオレが助けた人は大丈夫だったか

？」「そうティードの近くには一般市民が倒れていた。外傷もないし
気絶しているようだ」

「大丈夫です。気を失っているだけです。」

「そうか。ランスターの弾丸は守るためのものだからな。これで妹
にも顔向けできる」

「ティアナちゃんですか？」

「ああ、かわいいぞ。将来は絶対に美人になる」

「シスコンですね。何回も聞きましたよ。」

「ああ、たったひとりの家族だからな。でも一人にしちまうな・・・
」

「だったら・・・頑張ってくださいよ!!」

「そうしたいんだがもう限界だ。お前の顔がぐちゃぐちゃで見えん。
泣いてるのか？」

「泣いてませんよ」「泣きながらそう答えるジン

「そっか。ジン最後に一つだけお願いできるか？」

「はい。」震えながらもちゃんと聞く

「ティアナを、妹をよろしく頼む。あいつ一人になっちまうからな。お前になら任せられる。」

「・・・はい。任せてください。」

「ありがとう。これで安心して・・・い・ける。」グタつと力尽きるティータ。

「ティータさん!!チクショウ!!うわああああああ!!!!」
当たり前すべてに聞こえるのではないかというくらい
の声でジンは泣いた。ジンにとって二度目の近い人の死だった。

第8話 人生ままならない

ティードの遺体を丁重に運んでから数日。ティードの葬式が行われることとなった。クイントさんやメガ・又さんも元首都防衛隊なので面識があつたらしく葬儀に参加している。

妹のティアナは兄の死が信じられないのかボーっとしたままだった。葬儀が始まり参列者が入った後つつがなく取り行われたがここで

「まったく首都防衛隊の顔に泥を塗りおつて。犯人を追いつめておきながら取り逃がすなどあつてはならん事だ。無能め！」オレ達の上司がふざけてことを口走った。それを聞いたティアナは泣いている。兄の死が無意味だと言われたからだ

「三佐！このような場でそれもご遺族がいる場でそのような発言は・・・」クイントが注意する

「何だ見た事あると思つたら、犯罪者にやぶれた無能部隊の隊員じゃないか？何しに来た？同類を憐れんだか？」

「・・・」メガ・又とクイントが唇をかみしめる

「フン、殉職した隊長とやらも無能だったのだろう。全く最近の防衛隊はなつとらんな」言つてはいけない事を行った

パン、パン、パン

壁際に座っていたクソ野郎に銃弾を3発ぶち込む。全て顔面スレスレだ

「おい無能言葉を慎め。あの人たちはお前ごときがけなして言い人たちではない。」

「き、貴様！！上官に対してこのような事をしてただで済むと思っているのか！！」

「お前こそただで済むと思っているのか？確実に軍法会議にかけられるぞ。」

「なんだと！？おい、この無礼者を捕まえろ！！」捕まえようとしてきたやつらを軽くあしらう

「今回ティードさん主導で始まったはずのこの潜入捜査。それをお前が横やりを入れた。なぜだ？」

「フン、あんな無能に任せてたんじゃ捕まるものも捕まらんからだ！！！」

「違うな。自分の悪事がばれるのを恐れたんだ。今回の密輸組織と繋がってたんだろ？」

「何をでたらめな！！証拠はあるのか！！」

「あるさ。陸曹がきつちり全部吐いてくれた。幾ばくかの金を握らせて黙秘させようとしたらしいがちよつと自分がした事でどういう刑になるか話したら、全部話してくれたぜ」

「し、知らんぞ。あいつが私を陥れようと嘘の証言をしたに違いな。犯罪者の言う事など信用ならんわ！！」

「残念だが裏付けも取れている。お前達のやり取りを残したデータと不正に流れた密輸品のデータはきつちり抑えてある。残念ながらお前はもう管理局員でさえない！！ただの犯罪者なんだよ」

「でたらめな！！やつの言う事に耳を傾けるな！あいつは私を陥れようとしているだけだ。早く捕えろ！！」

誰も動こうとはしない

「此処に逮捕状も出ている。お前に命令権などない。お前が捕まる事は確定だ」

「そ、そんな・・・」

「ただ、オレが言いたいのはその様な事じゃない。なぜティードさんを一人で潜入させるような事をした!？」

「……………」

「答える!」パン!弾丸をうつむいてる足元の所へ打ち込む。

「次は当てる。さっさと答える」

「…………あいつが邪魔だったからだ……」

「何?」

「あいつは独自に私の事を調べようとしていた。証拠も握られてしまった。だから……」

「無茶な命令をして消してしまおうと…………拳に力が入る」

「い、命まで取る気はなかった。あいつらにも無力化した後にデバイスを奪ってデータをとるだけで良いと言ったのに、乱戦になって、それで…………」

「それで、殺したと…………」

「でも、あいつもあいつだ。一般人に威嚇で撃った弾を体で止める

から……」

我慢の限界だ！！ バコオオン。拳が顔面に突き刺さる

「当たり前だろ！！一般人を守るのが局長だろ！！それを……

」

「仕方なかったんだ。あいつにばれたら今まで築き上げてきたものが……」血を垂らしながらも答える元上司

「全部汚いやり方で得たもんだろ！！そんな物のためにテイーダさんを……許さねえ！！」

「ま、待ってくれ。私が悪かっただから暴力は……グフツ、ガハア」たこ殴りにする。顔の形が変わるくらい。気絶しても殴ろうとする
と誰かの手に阻まれた

「ジン君もうやめなさい。それ以上やると死んでしまっわ！！」クイントが止めに入る

「構わないでしょう！！こいつに生きる資格なんてない」

「ええ、でも、私達は管理局員なの。犯罪者を殺そうとする事は罪になるのよ。そんなやつのために貴方の一生を台無しにする気？」

「でもこいつは、ゼストさんの事まで馬鹿にして・・・」

「なら、なおさらよ。隊長はそんなこと望んでなんていない。」

「・・・」しびしび手を離しクソ野郎から離れる

「ジン君。今回貴方のした事は問題よ。それなりの罰が下るわ。」
メガ・ヌがたしなめるように言う

「覚悟の上です。どうしても、こいつだけは許せなかった・・・」

「とりあえず、身柄を預かるわ。ついてきてちょうだい。」

「ちょっといいですか？」

「何かしら？」

「ティーダさんの妹に話しておきたい事があって・・・」

「わかったわ。外で待っているから。終わったらきてちょうだい。」

ティアナのもとに向かう。途中ティーダさんの親せきや同僚からよ

くやったと声をかけられた。みんなあいつにムカついていたらしい。次に何か言ったらブツ飛ばすつもりだったらしい。

そしてさっきのやり取りをみていて唾然とするティアナの前に腰をおろして話しかける。

「どうも、はじめまして。オレはジンって言うんだ。先輩にはお世話になったんだ。名前教えてくれるかな？」

「・・・ティアナ」

「そうか。・・・ティアナ、今回の事本当にすまなかった。」土下座して謝る

「どうして、謝るの？」戸惑いながら聞いてくる

「先輩を助けられなかった。オレがもう少し早く行けば助けられたかもしれないに・・・」

「・・・兄さんは無能だったの？」絞り出すように言ってくる。さっきのクソ野郎の発言が気になるらしい

「いや、すごい人だった。尊敬している。最後まで一般市民を守り抜いたんだ。誇っていい」

「ホントに？」泣きながらも聞いてくる

「ああ。ランスターの弾丸は守るための弾丸だって。妹にも顔向けできるって言ってた。オレはそんな先輩を誇りに思う。」

「兄さんは無能なんかじゃないよね？兄さんの死が無意味な死なんかじゃないよね？」

「ああ、立派だった。あの人の死が無意味なんてあるわけがない。そんなことを言うやつがいたらオレがブツ飛ばしてやる。」笑いながら言う

「また怒られちゃうよ。」泣きながらも微笑みながら言う

「ああ、聞いてたのか。でも気にするな。オレは正しいと思った事をしただけだ。先輩を侮辱したやつを許す気なんてない。」

「怒られても？」

「ああ、いくらだって怒られるさ。怒られる事よりも侮辱されたまま何もしない方が辛い。」

「ありがとう。」涙が止まらないティアナ

「それだけ立派な人だったんだ。だから、決して忘れるな、ティードランスターは立派に職務を果たした。ランスターの弾丸は守るためのもんだ。おまえの兄さんは本当の英雄だってことを」

「うん、うん」手で涙を拭こうとしても止まらない。

「今はいっぱい泣いとけ。お前の兄さんに頼まれているからな。妹をよろしくって。だから、今はいっぱい泣け。天国にいる兄さんに届くくらい。そしたら、ひょっこり出てくるかもしれないしな。あのひとシスコンだから」

「そんなわけないじゃない。でも、そうだったらいいのに・・・兄さん・・・兄さん・・・うう・・・うわああああああああん！」オレの胸の中で泣くこの小さな少女をしっかりと守ろうと思った。

.....

ティアナの事は親せきの人にまかしてメガ・ヌさんと本部に向かう。オレの処罰に関する事らしい。一応ティアナには連絡先は渡しておいた。困った事があつたら連絡して来いとだけ言っておいた。

地上本部到着

会議室のようなところに入る

「ヤナギバ医務官」

「はい。」

「今回の事は管理局の汚点でもあるので、灸口令を敷くことにした。他言は無用だ。」

「どうということでしょうか？」

「なかつた事にすると言っているんだ。」

「それでは、事件解決の手がかりにもなつたティーター尉の褒章はどうなるのでしょうか？」

「それもなかつた事になる。ティーター尉には申し訳ないが事故死ということになる。そのかわり君には昇進の機会を与えよう。医務官は曹長相当扱いだが三等尉に昇進とする。異論はあるまい？」

「・・・あります。ありますよ。おかしいじゃないですか！？事件解決できたのもティーターさんのおかげなのにそれをなかつたことになんて・・・」

「君ももうわかつてても良い頃だ。世の中にはこういふ部分もあると言ふ事だ。これは決定した事だ。異義は認めない」

「そんな・・・」

「割り切りなさい。これが大人の世界というものだ。管理局に不正があつてはならんだ。これで要件は終わりだ。下がりなさい」

「・・・・・・・・」黙つたまま動こうとはしない

「君が受け取らなくても他の誰かが受け取る事になるんだ。ティーダ君と仲が良かったそうじゃないか、なら君が受け取った方が彼も喜ぶだろう」

「・・・・・・・・失礼します」そう言われては引き下がるしかない。殉職で二階級特進とは行かないようだ。なぜなら、なかった事にされてしまったから。事故死に特進などないだろう。

クソ！！壁を殴りつけて本部を後にするのだった。人生ままならない

・・・・・・・・

ティアナに連絡を取る。事の次第を伝えるためだ。

ティーダさんの事がなかった事になると言う事、そして本来ティーダさんが受け取るはずだった褒章をオレが受け取る事になってしまった事。他言無用と言われたが、ティアナには話しておかなければ

ならない。

罵られるかと思ったがティアナはオレに対して何か言う事はなかった。それどころか

「貴方が受け取ってくれるなら兄さんも喜ぶと思う。あなたが忘れない限り兄さんの名誉はずっと残るもん。だから気にしないでください。」

と言われてしまった。10歳の女の子にそんな事を言わしてしまう、そんな世の中がむしようにやるせなかつた。オレは、何も言えずただ頭を下げて連絡を切ることしかできなかつた。

「情けないな。本当に情けねえ。医務官になっても大切な人さえ救えず、守るために身につけた力も何も役に立ってない。オレ何してんだろうな」ベンチに腰掛けながら愚痴をこぼす。

「これが人生ってやつか？フン、ままならいね。どれだけ頑張ろうとも願った通りにはいかず。まあ当たり前と言えば当たり前か。世の中そんなにうまくはできていないよな。・・・ハア」

・・・俯いたまま顔を上げる事が出来ない。今までの人生を振り返ってみて結局失敗しかしてないんじゃないだろうか？そんなことしか考えられない今の自分に余計嫌気がさすのだった。

ティードの葬式が終えてからオレの職場はゲンヤさんの所に移動となった。本当はまだ残っていても思ったのだが、たび重なるエース喪失のせいで本局から魔導師が派遣される事になった。

だが、そいつが問題でどうやら闇の書の守護騎士の一人らしい。オレが闇の書の被害者である事を知っていた上司の人が気を利かせて移動させてくれる事となった。

正直ありがたい。今の状況なら八つ当たりをしてみまつかもしれない。母さんは済んだ事と割り切っていたが今の精神状態で制御できる自信がない。おそらくそう言ったところも考えて異動になったのだろう。毎回問題を起こされたら上司としてはたまったものではないから。

ゲンヤさんの部隊に配属になった。一応武装局員として。今は医務官の仕事をやれる精神状態ではない。今回のことで三等空尉の地位を持ったので医務官としてではなくても問題ない。

ゲンヤさんもちらの事情をわかってくれたようで、了承してくれた。少し残念そうではあったが。

武装局員としての仕事は結構忙しく何かしらの問題が起こるとすぐに出動になる。一番ひどかったのは小学生のケンカに駆り出された事だ。誤報だったらしく暴れているやつらがいると言ってみればまだ子供の取っ組み合い。すぐに仲裁し注意して終わった。

そんな感じで日々を送っている。仕事の方は可もなく不可もなくと言った感じでやるだけだ。邪魔と言われるほど怠けているわけでもなく、かと言って熱心にやっているわけでもない。前にクイントさんにシヤキつとしないと言われるくらいだったが、メガ・又さんがサボっているわけじゃないから問題ないのよといっておさめてくれた。

クイントさんからすれば昔のオレを知っている分今のオレの状態が許せないのだろう。メガ・又さんも言いたい事があるようだがどうも濁してしまっている。

二人の言いたい事もなんとなくわかるのだが今は……

一年程仕事をして仕事にも慣れてきた頃、またしても予期せぬ事が起こった。世間の荒波はいつでも襲ってくると言う事だ。……八神はやてが来てしまった……

指揮官研修で104部隊に来ているはずなのだが、なぜか108部隊にいる。どうやらコロコロ部隊を移動しているようだ。今回それがここだったってだけ。ハアゝ

とりあえず彼女とは合わない方向でやり過ごそう。速攻で事務作業に逃げ引きこもり極力顔を合わせないようにする。久しぶりにオレ

がやる気を出したと勘違いしたクイントさんがいても仕方ない事だ。

一週間ほどして彼女はまた別の部隊に異動となった。やっと安心して仕事ができると安堵していると

「もうまた隠れながら仕事してたの？」

「あ、クイントさん？」

「まあ会いづらいのはわからなくもないけど……」

「あの人に何かあるわけではないんですけどね。ただあの人の……」

「

「わかってるわ。でもいつまで気にしても仕方がないでしょう。先輩なんてすぐに忘れてたわよ。」

「まあ、母さんですから。神経の造りが人と違うんですよ。オレこれでも繊細なんです。」

「ハア」。折角やる気を出したと思ったのに……私のぬか喜びを返しなさい」

「ガンガン出してるじゃないですか。ただ相手に伝わらないだけで

す。それにスバル達に家庭教師をしてるでしょう。それでチャラです。」

「それはありがたいんだけどね。なんとというか、ハア〜」

「ため息つくときけるって言いますよ」

「なんですって!?!」怒気が強まる

「幸せが逃げるって言ったんですよ。あははは」

「フ〜、まあ良いわ。それと今日の事覚えてる?」

「?」

「あんたそう言うところ又ケてるわよね。今日ギンガとスバルとルーちゃんがうちの所に見学に来る話よ」

「ああ、そんなこと言ってましたね。ただスバルの目的は近くのアイス屋さんでしょうけど・・・」

「あの子、アイス好きだからね〜。きつと山盛りね」

「ゲンヤさんの財布が冷たくなりますね」

「まあ娘にねだられるとついつい甘やかしちゃっからね。」

「親バカですもんね。」

「娘離れできないと大変なのにな。ギンガ達が嫁に行く時が大変そう」

「確かに、旦那さんになる人は相当な覚悟が必要でしょうね」

「あら、貴方なら問題ないんだけど・・・あの人も貴方なら良いって言ってるし。ギンガ達も結構好きみたいだし」

「まあ家族愛ってやつですね。ギンガ達もそんなところでしょう。オレにはなんとも言えませんよ」

「だらしないわね。お宅の娘さんをくださいぐらい言えないの?」

「どうでしょうね?いつかそういう時が来るかもしれないし来ないかもしれません。それに忘れてるようですけどオレまだ14ですよ。ギンガと違って1つしか変わらないお子様ですって」

「そう言えばそうね。昔から働いていたから忘れていたわ」

「まだまだお子様ですよ。だからそういう話をもっと大きくなって

からという事で。もっともそのころには他の人を好きになる可能性もありませんが……」

「ん〜なんなら今の内に私の事お義母さんと呼んでみる？」

「別に言っても良いですけど、照れるってほどではないですよ。子供のころから面倒見れもらっているわけですし、メガ・又さんやクイントさんはもう一人の母親って感じですね」

「そこでメガ・又の方を先に言った意味はあるのかしら？」

「いや〜どちらかというとなが・又さんの方が母性に溢れて（ス〜）いると思ったんですがやっぱり二児の母であるクイントさんの方が母性がありますね。ハハハ」

クイントが拳を構えるのを見て即座に意見を変える。魔導師ではなくなつたがその拳ははまだ健在で冗談ではすまされないパンチが飛んでくるのにすぐにほめた方が身のためである事を身をもって知っているからである。

「そうよね。なんか聞き間違いをしちゃったから、あははごめんなさいね。」そう言って笑っているがかなり怖い。

と、そんなことを話していると突然警報が鳴った。嫌な予感がしな

がらもクインツさんと一緒に部長長室を目指すのだった。

第8話 人生ままならない(後書き)

はやてと絡ませようかとも思ったんですが次回に回す事にしました。
次回の更新をお楽しみに

第9話

空港火災とその後

「それでゲンヤさん、何があつたんですか？」

部隊長室に着いて現在の状況を聞く

「空港火災だ。空港内部のタンクが爆発し火災が起つている。現在近くの地上部隊が消火と救助に当たっている。今から緊急出動だ。魔導師隊は先行し現地の指示に従つて救助の手伝いをしてくれ。オレ達も現場に入り次第すぐに指揮系統を調整する。ジン！」

「はい！」

「お前は転移魔法で先に行け。お前単独ならすぐに行けるだろう。人命救助を優先してくれ」

「了解」

「それじゃー各員出動するぞ。一人たりとも死人を出すな！」

「了解」「了解」それぞれが準備をしに戻つて行く。だがクイントとメガ・又は残つたままだ。

「あなた、ギンガ達は……」

「おそろく、中に取り残されているだろう。時間的にはピッタリだからな。」

「それじゃー急がないと!!」慌てるクイント

「落ち着け。上官のオレ達が慌てたら他のやつらに伝染しちまう。大丈夫だ。あっちにも魔導師隊はいるし、なによりジンが先行する。」

「そうよ、クイント。ジン君ならやってくれるわ」

「そうね。ごめんなさい、取り乱して」

「仕方ないわ。今はやるべき事をやりましょう。」

「ええ!」

.....

一方その頃のジンは先行して空港に到着していた。現在の現場管制官に指示を仰ぎに行く

「陸士108部隊から救援に来ました。現在の指揮官はどなたでしょうか?」

管制場のようなところで尋ねる

「あ、私です。臨時で此処の指揮を任されています。本局特別捜査官八神はやて一等陸尉です。108部隊はもう到着したんです・・・か？」お互いが顔を合わせると微妙な空気に。ただジンは切り替える

「・・・いえ、自分だけです。転移魔法が得意なので部隊長の命により先行しました。状況説明と指示をお願いします。」

「・・・は、はい。現在タンクに引火した火が燃え広がり魔導師陣で防御している状況です。それで今回臨時で協力してもらっている本局の魔導師の人に救助の手助けをしてもらっているところです。そこらには人命救助の手助けをしてもらいたいのですが・・・」

「了解です。空港内の詳しい見取り図はありますか？それでも短距離転移は得意なものなので・・・」

「それならこの子を連れてあげてください。私のユニゾンデバイスなんです。リインしつかりとサポートしてあげてな。」

「了解です。はやてちゃん。よろしくお願いしますね。え」と・・・

「

「ジンニヤナギバです。」

「よろしくです。こちらはリインフォース？です。」

「よろしくお願ひします。では行きましょう。」

「はい。」リインを連れて転移する。ちなみにリイン嫌悪感を抱かないのは闇の書とは無関係だからである。無関係なものにわざわざ当たるような事はしない。リインの無邪気さに戸惑ったというものもあるが……

「ここか？要救助者がどこにいるかわかりますか？」空港内に入る。辺りは煙と火でよく見えない

「任せてください。サーチを開始します……見つけました。座標ポイントは……これです。」リインから正確な座標が送られてくる。

「了解。それじゃー行きますよ。」

「はいです」こうしてラインと組み救助者を見つけるとは救助隊のもとに転移で送り届けて行った。自分でサーチもできるのだがそうすると転移するのに時間がかかりラインに任せる運びとなった。

結構息が合いどんどん救助者を送り返していく。問題は数が多い事だ。後何人だ？それにまだスバル達を見つけられてない。どこにいる！？

「次の救助者を見つけました。集団で固まっているようです。エン
トランスホールの近くです。」

「了解」急いで転移する

.....

「助けに来ました。時空管理局です。これから安全なところまで皆さんをお送りします。」オレが転移した先に金髪の女性が先に着いていた。確かあの人は.....

「フェイトさん！！」ラインが寄って行く

「り、ライン？どうしてここに？はやてと指揮してるんじゃないの？」

「ジンさんのお手伝いです」

「ジンさん？・・・あ！」「こちらに気づいたフェイト。

「二人とも今は救助が先です。オレがこの人たちを転移させますんで・・・この防壁はずしてもらえますか？ハラオウン執務官」

「えっとそれ私がやったものじゃないんですけど・・・」じゃあ誰かと聞こうとした時

「お兄ちゃん！！」聞きなれた声が聞こえた？

「ル、ルー？よ、良かった。此処にいたのか。もう大丈夫だ安心しろ。ギンガとスバルも一緒か？」

「うん。スバルちゃんのはぐれちゃってギンガさんが此処に魔法障壁を張って助けに向かっちゃった。私はまだうまく魔法を使えないから此処でじっとしてって。早く助けてあげて」

心配そうするルーの頭をなで

「任せとけ。お前達を届けたらすぐに向かう。救護班のところで安心して待ってる。その内メガ・ヌさんも来る。」

「う、うん」不安そうにしているが今は構ってられない。すぐにル
ー達を転移させギンガが探しに行った方に向かおうとする。

「行きますよ。執務官はどうしますか？」

「私も行きます。他にも救助者がいるかもしれないので」

「わかりました。それじゃー行きますよ」フェイトとリインを連れ
てギンガの所に向かう。

・・・

ギンガ視点

「スバルどこ！？返事して！お姉ちゃんが今助けに・・・きゃああ
あ」スバルを探しているギンガの足元が崩れる。

ギンガはなすすべもなく落ちるが・・・

「ソニックムーブ」何かの機械音のような声が聞こえてすぐ。自分
が浮いている事に気づく

「良かった。間にあって」

「え?」ようやく自分が抱えられている事に気づく。ポーっと見ると自分の良く知る人の声が聞こえた

「ギンガ無事か!？」かなり慌ていたようだが

「ジ、ジンさん!？」

「おお、オレだ。その様子なら無事のような。悪かったな。もう少し早く来るつもりだったんだが。それとハラオウン執務官ありがとうございます。転移後の一瞬では間に合わなくて」

「いいえ。無事でよかったです。御家族ですか?」

「まあそんなところです。妹みたいなもんです。・・・ギンガ、スバルはどこにいるかわかるか?」

「わかりません。この近くで、はぐれたはずなんですが・・・」

「ジンさん!生命反応あり。近くに魔導師さんがいるようですが・・・」

「」

「わかりました。すぐに向かいます。すみませんがギンガをお願い

できますか？」フエイトに尋ねる

「わかりました。この子を届けたらすぐに援護に向かいます」フエイトはそう言っつてギンガを連れて戻って行った。こちらも急いで生命反応があつた場所へ転移する。

.....

「デイバイーン・・・」転移したところに物騒な声が聞こえる。なんかめっちゃ収束してるのが見えた。慌ててリインが止めに入る。

「うわああ、な、なのはさん！！ス、ストップです！！そんなのくらったらリイン達は骨も残りませんよ！！」リインが射線上に入った事に気づいたのはが慌てて魔法を解除する。

「り、リイン！？どうしてこんなところに？」さっきも似たような質問をされていた。

「ジンさんのお手伝いです」同じ返答だ

「え！？ジン君？」なのはが視線をこちらに移す。ジンはなのはに会釈しながらも救護者を見る。やっぱりスバルだった。

「ジン兄！！」スバルが泣きながら飛び込んでくる。

「悪かったなスバル。遅くなった。でももう安心だ。」頭を撫でながらスバルを安心させる。

「でも、ルーちゃんとギン姉が・・・」二人の事が心配で少し慌てる。

「二人とも無事だ。さっき救助隊に引き渡してきた。ゲンヤさんも指揮に入っているしクイントさんももう来てる。だから今から送ってやるから高町教導官と一緒にいな。」

「う、うん。でもジン兄は？」

「オレはまだ残されてる人がいるかもしれないから探してみる。安心しろ、逃げるのは得意だ。・・・ということでもよろしいですか？高町教導官。二人を此処から転移させますんでスバルをよろしくお願いします。それとあまり言いたくはないんですが、局員が建物を破壊しようとするのはやめてください。それに、此処で収束魔法なんて使ったら崩落の危険があつて二次災害が起こる可能性もあるので。」

「うう久しぶりに会ったのにジン君冷たい！！」膨れたように言う

「今はそんなアホな事をしている場合じゃないんでとりあえず送りますね。文句は聞きません」そう言っただけなのはとスバルを転移させる。なのは何か言っていたがそんな事は無視。救助者を探しに行く。

「それじゃー行きますか？まだ反応はありますか？」リインに聞く

「ええ」と……ありました。Aブロックに生命反応あります。」

「了解！」「リインとの救助活動が続くのだった。

ひとまず空港内の救助者は全員助け出した。オレとリインが助け出したのだ全体の半分も占めるのだから頑張った方だろう。火災の鎮火は専門外なので地上本部の応援部隊に任せる。

今はリインとともに離れたところで休憩している。いくらバリアジヤケットや障壁と纏ったと言っても長時間火の中にいたせいで体が

熱い。熱くなった体を冷ましている。リインはオレのふとももの上で倒れている。どうやらかなり疲れているようだ。

ふうふう海風が今の体には気持ちいい。今なら海に飛び込んでもいいと思えるくらいだ。そんな物思いに耽っているとリインから話を振られる。

「ジンさん・・・」オレの足の上で倒れていたリインがこちらを向いて聞いてくる

「ん？なんですか？」

「ジンさんは私たちの事を恨んでますか？」おそらくオレが闇の書の被害者であることを彼女たちから聞いたのだろう。

「なんで？」

「だって・・・」

「恨んでないとは言わない。幸い母さんやオレも無事ではあったけど、もし母さんに何かあったらどうなったかわからないし・・・ただその事が理由で貴方や貴方の主人を恨む理由にはなりません。特に貴方は関係がないわけですし。」

「そんなことはありません！！私だって・・・」

「いいえ。たとえ、貴方の先代の意思を引き継いでいようと貴方はオレ達の事とは無関係です。それにオレは襲われたからどうこうしたいのではありません。守護騎士連中を許せないのはもっと別の所に有ります。」

「それは・・・」

「教えるわけにはいきません。それに今教えたところで意味などないですし・・・今彼女たちに謝られてもつつとしいだけなので・・・正直もう済んだ事です。あちらが関わってこなければどうでもいいことなんですよ。」

「・・・」

「だから、貴方を恨むなんてことはないですよ。むしろ、今日の事には感謝したい。おかげで大事な妹分達が助けられたのですから。」

「そ、そんな・・・リインはサポートしただけです。ジンさんの転移魔法がなければリインなんてダメダメですう」慌てて否定しようだが、少しうれしそうだ。ほめられたことが素直にうれしのだ

ろつ。

「そのサポートがあつたからオレは転移に専念できたんですよ。オレが両方やっていたらかなりきつかつたと思います。まあテレやな誰かさんがそう言うのでしたら二人の成果という事にしましょう。どちらが欠けてもできなかった事ですし。」

「はいです。それがいいです。私たちは良いコンビなのですよ。」

「そうですね。」

二人でそんな会話をして楽しんでいるのだった。

リインとの休憩も終わり管制室のようなどころへ行く。なぜかリインが頭の上に乗っているがあえて気にしない。仕事に着いたら切り替えるだろう。．．．．．実際頭から肩に移動しただけなんだが．．．

ゲンヤさんに事後処理はこちらでやるから帰っていいと言われたので言葉に甘える事にする。今日は疲れたので早く休みたい。

「（ギンガ達もケガもなかったし（スバルは転んで足をすりむいたようだ）クイントさんやメガ・又さんが付き添っているから大丈夫だろう。さつき様子を見に行った時にお礼を言われたしオレがいると変な気を使わせてしまつかもしれないからな。怖い思いもしたから母親といるのが一番安心だろう。」

そう思って帰ろうとすると後ろから声をかけられた。どうやら彼女たちも仕事片付いたらしい。ただ、はやてとなのはがいる以上めんどくさい事になるのでさっさと退散する事にした。

「お疲れ様です。自分は仕事（帰って寝ると言う）がありますのでこれで・・・」頭を下げて帰ろうとする。しかし、

「ナカジマ三佐は仕事はないって言ってたで。」はやてがゲンヤさんと話していたとは・・・

「部隊長の勘違いでしょう。自分は隊舎に戻りますので失礼します。お三方と会える機会なんてもうないと思えますがもし出会う事があったらその時は気にしないでもらえるとうれしいです。」

「も〜ジン君。久しぶりに会ったんだよ、冷た過ぎ！」なのはが膨れたように言う

「あ、そうですね。お久しぶりです。高町二等空尉。体調はよろしいようで、なによりです。先程も言いましたが仕事があるんで失礼します。お体には気をつけてください。では」

振り返って帰ろうとするがそんな事は許されず

「もうお仕事は終わりなの。だから、なのはで良いよ。みんなそう呼ぶし。ジン君だってお仕事終わりでしょう？久しぶりにお話しよう。」

「ハア、あいかわらず」なの。って語尾に付けてるんですね。そろそろそんな年でもないでしょうに・・・それと年上の女性を名前で呼ぶなんてできませんので高町さんと」

「でも、スバルと話してた時、スバルのお母さんの事クイントさんって呼んでなかったっけ？」

「なかなか目ざといですね。でも、クイントさんともう一人メガ又さんっていうですけど、二人は小さいころから知ってますし、家族ぐるみでお付き合いをさせてもらっているので問題ないです。」

「それなら、私の先生だった訳だし名前で呼んでも問題ないよ」引き下がらないのは。

「もう昔の話です。今は上司と部下の関係です。プライベートでも年上と年下の関係ですよ。それに管理局の白い悪魔と目される方に親しくできる一般局員なんて恐れ多くていませんよ」

「ぶつゝ昔のジン君の方がかわいかった。それに悪魔じゃないもん
!」

「あ、これは失言でした。言い代えます。管理局の白い魔王でした。申し訳ありません。」

「ううゝフェイトちゃん。ジン君がいじめるゝ」フェイトに泣き
つくなのは

「よしよし。」とりあえず頭を撫でるフェイト

「それじゃーお二人の邪魔をするのは気が引けるんで退散しますね。
」

「ちよおゝと待ち!!なのはちゃんは騙せてもつちは騙されへんで。さあ観念してうちらとお話しようやないか?こんな美人が3人もいるや断る理由はあらへんやろ。」

「え！？疲れたので断りますけど、何か問題でも？」

「そんな、なに言ってるのこの人？みたいな顔するんじゃない！こ
つちが恥ずかしいやんか」顔を赤くして叫ぶはやて

「ジンさん、はやてちゃんのお話を聞いて欲しいです。」

「まあ、リインさんの言うことなら仕方ないですね。それで、何か
用ですか？本当の所早く帰って寝たいところなんですが。」

「「リインに負けた！」「はやてとなのはが反応する

「ジンさんとリインは仲良しさんです。」

「そうですね。」

「ちょくつと納得いかん事もあるんやけど、今はええ。とりあえず
家に来へん？そこで話そうや。それにうちなら休めると思うよ。」

「嫌ですよ。そんなことしたら、あなたのご家族とご対面しちゃう
じゃないですか。」

「家の子達は今は別任務であらんから気にせんといてや。」

「それじゃ〜そちらもオレの事は気にせず三人で仲良く遊んでください。というより帰っていいですか？」

「ジン君。とりあえず、ごめんね。」なのはのその言葉を最後に意識は薄れて行った。最後に見たのは後ろから魔法を使ったらしきなのはの申し訳なさそうな顔だった。

第10話 話し合い（前書き）

かなり偏った見方があると思いますがご了承ください

第10話 話し合い

空港火災での救助を終えてからなのはに意識を飛ばされてようやく目が覚める。

「此処どこ？」辺りを見回すとどこかの一室家具などは最低限のものしか置いてなく来賓者用の部屋のようだ。

「・・・思い出した。あのあと気絶させられたんだっけ。これ軍に出したら問題にできるかな？」

「それはやめて欲しいんだけど・・・起きた？」管理局の白い悪魔がそこにはいた。

「!!!・・・ええ、なんとも気分の悪い目ざめですけど。オレに恨みでもありましたか？一応貴方の治療者なんですけど、恨まれるようなことしましたっけ？」

「うつつ、ごめんなさい。あの時はああでもしないとジン君話をしてくれそうになかったから・・・」申し訳なさそうに言うのは

「いや、むしろ余計に話をする気にならなくなったんですけど。誘拐されてのん気に話す人ってなかなかいないと思うですよ。常識的

に

「うっ」「さらに落ち込むのは

「それで誘拐の目的はなんですか？金ですか？まあそれなりには持っているとは思いますがエースと呼ばれるあなたほどではないと思うですけど。それにこの場合管理局に通報した方が良いですかね？誘拐するのもされるのと同じ管理局員なんですけど・・・」

「だ、だから誘拐じゃないんだってば！！」手をバタバタさせながら否定してくるのは・・・子供っぽい

「知ってますけど。冗談ですよ、相変わらず反応がわかりやすいですわ」

「うっ、ジン君も相変わらずなの」からかわれた事に気づいて落ち着いたなのは

「その語尾もどうにかした方がいいと思いますよ。」

「が、頑張ってるの！クセだからしょうがないでしょ！！」「恥ずかしそうに言うのは。自覚はあるらしい

「で、本題に戻りますけど話してなんですか？ 特にお話するよ
うな事はないと思うんですけど」

「それは・・・はやてちゃんの方から。さっき念話で伝えたからもう
来ると思う。」

「ハア〜」ため息しか出ない。いまさら何を話せと言っただろうか。
めんどくさいなと思っっているとはやてとフェイトが入って来た。は
やては人数分のコーヒーマットを持って来てるようだ。

「ごめんな〜無理やり連れてきて。あ、コーヒーマットでええか？ 嫌なら
別のを用意するけど」

「いえ、お構いなく。ありがたく頂きます。どうも当たりどころが悪
かったのか撃った人が悪魔だからなのか頭がすっきりしなくて」な
のはを見ながら言う

「うつつ、またそうやって・・・それに私悪魔じゃないもん!!」

「また言い直しをさせるんですか、仕方ないですね魔「魔王でもな
いもん!! 普通の女の子!!」・・・もうなんですか、自覚がある
なら最初からそう言うてください。」

「フェイトちゃん」再びフェイトに泣きつくのは。それを慰めるフェイト。見慣れた光景だ。

「で、八神さんは何の話ですか？予想はできますけど」

「予想通りの話や。うちの家族がした事についてやな。」

「それはもう済んだ事です。今更何も変わりません」

「それでも謝らせて欲しい。この通りや」土下座の格好になったはやて

「顔をあげてください。貴方に謝られても困ります。実際の所貴方の知らないところで起きた事ですから。」

「でも、私はあの子達のマスターやから。責任はとらないかん！」

「……ならあいつらを拘置所にもぶち込んでください。できますか？できないでしょう。貴方達は管理局に罪を償って今は局員ですから罪なんてないですしね。それに管理局の方も貴方達を手放したりはしないでしょう。Sランク魔導師がいるんですから、人手不足の管理局がそんな事をするわけありませんし」

「……………」沈黙するはやて

「だから、今貴方のしたことはただの自己満です。そもそも許してもらってどうする気ですか？オレ以外にも被害者もしくは遺族の方はたくさんいます。今みたいに全員に頭を下げて行くんですか？あなたが。関係ないものもあるでしょう。というより貴方は主というだけで闇の書関連の事件に全く関係ありませんし」

「で、でも」

「あなたが言っている事は包丁を作った人が、それを殺人に使われたから罪を償うと言ってるようなものです。そんな事があつたら世界中の人が犯罪者になりますからね。だから貴方には関係ない。」

その言葉にまたも言葉がなくなったはやて。沈黙が続く空間に声が入ってくる。

「なら、私なら関係があるのだな」ピンク色の髪をした女性が部屋に入って来た

「シグナム！！」はやてが驚いたように振り返る。どうやら彼女を呼んだわけではないようだ。

「すみません主はやて。仕事が予定よりも早く終わり帰ってきたら話声が聞こえてしまって・・・」やはり偶然のようだ

「・・・」突然の事に驚きながらもやはり気分が悪くなる。すると、はやてと話していたシグナムがこちらに向き直り話しかけてくる

「私はヴォルケンリッタの将シグナムという。貴方の事は覚えてる。あの時は本当にすまない事をした。」今度はシグナムが土下座の態勢をとった。フェイトは驚いているようである。実際シグナムがこういうことをするのを見た事がなかったんだろう。

「・・・で、オレはもう帰っても良いですか？」

「ジン！！シグナムが此処までやってるんだよ」「フェイトが割って入ってくる

「やめるテッサロッサ。これは私たちの問題だ」

「でも・・・」

「それで、帰っていいですか？」気にせず帰ろうとする

「ま、待ってくれ。私たちにできる事なら何でもする。私たちのことは嫌ってくれて構わない、しかし主はやての事は……」

「何言ってるんですか？そもそも八神さんをどうしようもだなんて思ってもいませんよ。しようと思っただらとっくにやっています。それと何でもするなんて軽々しく発言しないでください。イラつきます。そもそも貴方に何ができますか？戦うことしかできない貴方が。」

「私にできる事なら何でも……」

「ならとつと拘置所にも行って務所暮らしでもしてください。できるんですか？」

「……」

「そう、貴方にできることなんて何も無い。それに今更謝られたところでどうにかなるんですか？他の方達はどうするんですか？まさか、形だけでも済ませようなんて思っているんじゃない」

「それは無い！！謝る事が出来るなら謝りたい。しかし、誰に謝ればいいのかわからないんだ。私達は転生するたびに記憶がリセット

されてしまつて、昔の事はよくわからないんだ。だから、今の私達にできる事は、少しでもそついつた被害者を減らすことしか……」

「それはご立派な事です。そう、だから意味がないと言つたんです。貴方達は昔とは違つたのでしょうか。被害者の方からすれば納得ができない人は多いかもしれませんが……それと貴方はひとつ勘違いをしています」

「それは一体……」

「オレは貴方達が蒐集した事に関しては特に思うところはありますが。主が大切だったんでしよう。オレも同じ状況ならおそらくそうします。家族が死にそうなら助けようとするのは当然です。」

「じゃーなんでそこまでシグナム達を……」疑問に思ったフェイトが言ってくる

「リンさんにも言つたんですけど、あまり言いたくはありません。いまさら言つてもしょうがない事だし、空気を悪くするだけなので……まあ今でも十分悪いんですけどね」

「教えてもらえんやろうか……この通りや」はやてが頭を下げる。

「ハア、頭を下げられては仕方ないですね。別に大したことはありませんよ。それよりその人に質問していいですか？」

「ええよ」

「では、貴方に聞きます。貴方は蒐集を命令されたんですか？」

「それはない。昔はそうだっただろうが今回は私たちの意思だ。」

「そうですね。おれもそう聞いています。むしろ八神さんはやらないうちに言っていたと」

「事実だ。それを破って、騎士の誓いを破って私達は蒐集を開始した」

「では次の質問です。なぜ貴方達は主の命に背いたんですか？」

「主はやてを助けたかったからだ。「嘘などないと言わんばかりの顔である」

「なぜ？」

「理由などない！助けたいと思う事に理由が必要か？」

「いえ。つまりあなた達には感情があり、自分で判断できるんです
ね」

「ああ。」

「では、なぜ昔はそうしなかったんですか？判断できるのでしょう、
自分のしてる事が。今回主の命令に逆らえたのですから逆らおうと
思えば逆らえたはずです。なぜしなかったんですか？」

「そ、それは昔の主に強制されて・・・」はやてが庇う。

「でも逆らえたはずです。それをしなかったという事は貴方達にと
つて人を襲うと言う事は大したことではないと言う事です」

「そ、そんなことはない！！」シグナムが否定するが

「ではなぜ襲ったんですか？ああ、記憶がないからわからないんで
したっけ。それでは今のあなたに言っても意味はありませんが、所

詮は魔力補給程度でしか考えてなかった事でしょう」

「……………」反論したいが事実があるので否定できないシグナム

「今回は主が温厚で子供だったという事もあって人をあやめてはいないようですが、それもあくまで主に迷惑がなるべくかからないようにするため、つまり人の命など別段気にはしていない。」

「そんなことはない！！家の子達は皆優しい子たちや！」

「では、なぜ襲う必要があるんですか？」

「え？そ、それは、うちのために……………」

「別に蒐集するのに襲う必要はないんですね？」シグナムに聞いてみる

「……………ああ。」

「では、なぜ襲ったのでしょうか？魔力を提供してもらっただけなら穏便に済ませられたかもしれないのに……………高町さん」

「な、何？」いきなり話を振られてビックリするのは

「貴方は幼い死にそうな少女のために魔力を提供することを断りますか？もちろん自分の命にかかわらない範囲で」

「ううん。そんなことしないよ」

「そういうことです。少なくとも高町さんを襲わなくても魔力は得られたはずだ。しかし、貴方達は襲いかかった。なぜでしょう？」

「.....」

「答えは所詮魔力補給だからです。死ななければどうなろうと構わない。その程度の認識でしかないんですよ、貴方達にとって人なんて。」

「ち、違う」

「いいえ、違います。現にオレ達のと看だつて魔力をとつた後は放置だつたじゃないですか。あの後救助の人が早く来てくれたから助かりましたけど。母さんはかなり危険な状態だつた。命にかかわるほどの」

「……………」

「それに襲われた局員のデバイス記録もみせてもらいました。たしか、赤い髪の子。ええっと……………」

「ヴィータちゃんのこと？」なのはが答える

「ああそれです。その子は自分で瀕死に追いやった局員から魔力を蒐集したにもかかわらず、大した足しにはならない餌とまで発言したらしいですね。」につこり笑っているが目が笑っていない。

「……………」もうなにもいえないシグナム

「それと貴方達は良く騎士の誇りがどうか言ってますね、そんなくだらないもの捨てたらどうです？主を救うために人に頭を下げれない程度の誇りなんてただの飾りじゃないですか。」

俯くことしかできないシグナム

「自分した事に対して土下座までして許しを請うのにどうしてお願いするのに頭を下げれない。お前ら人の命をなんだと思ってる！！」「シグナムの胸倉をつかんで起き上がらせる。」

「す、すまない……」顔を合わせようとはせずかすれた声で謝るシグナム

「そんな今聞いたつてしょうがないんだよ！！お前ら主が大切だから、生きてて欲しいからだから約束を破ってまで助けようとしたんじゃないのか！？失いたくないから。何でそれがわかってるのに人の命を軽んじる！！もし今回の事で死者が出たらお前らは一生恨まれる。勿論主も。大事な人を失う悲しみはお前らが頭を下げたくらいでどうなるもんでもないんだよ！！それをわかってやってるんだったら今ここで引導を渡してやる！！」デバイスを銃型に変更して構える

「ジン君！落ち着いて」なのはが止めに入りフェイトがオレからデバイスを取り上げる。はやてはシグナムの方に向かう

「……すみません。熱くなりました。もう大丈夫です。」そう言っただけなのはとフェイトを引き離す

「オレが言いたいのは何を思って謝っているのかです。ただ許されたいと思うだけなら謝らないでください。自分の罪悪感を減らしたいだけなら謝らないでください。その所を踏まえて発言してください。できる事なら何でもする。被害者の遺族の方からすれば死んでくれというくらいのことだってある。それくらい大切な人を失っ

た悲しみは深い。だから、貴方達にできる事は何もありませんよ。」

「ならいつたい私達はとうしたら……。」

「知りませんよ。一生悩んでください。それが貴方達の業です。一生消える事のないものです。これは、尊敬する人が教えてくれた事です。罪は償う物ではありません背負って行くものです。管理局に入って貴方達がしてきたことは素晴らしい事でしょう、でも過去にしてきた事が消えるわけではないんです。今度ふざけた事をぬかしたら迷いなく撃ち抜きます。ゆめゆめ忘れないでください。」

「わかりました。」シグナムがやや丁寧な言葉遣いに戻って承知した。

「では、オレは帰ります。というより此処どこですか?」「さっきの雰囲気から一転していつもどおりに戻る。」

「ジン君待って。私もお話があるの」なのはが言ってくる。それを心底嫌そうな顔をして聞く

「なんですか?なるべくなら早く帰りたいんですが……。」

「そ、その顔は傷つくの。」

「なら私が退室しよう。此处にいても空気を悪くするだけだからな。
」そう言つてシグナムが部屋を出て行く。それを見て少し気が晴れる

「それで？何の用ですか？」

「あのね、ちゃんと言つてなかったからずっと前から言おうと思つてただけど、ジン君がどこにいるかわからないから言いそびれてたんだ。ジン君治療をしてくれて本当にありがとう。おかげで今でも空を飛ぶ事が出来ます」

満面の笑みでこたえるなのは。だけど今のジンには眩しすぎた。大切な人を救えなかったジンにとってみれば自分の無力さを再認識した。救えたものと救えなかったもの。そして救えなかったのは大切な人たち。だからなのは言葉はジンには辛いものだった。それを顔に出すようなまねはしないが・・・

「前にも言いましたが仕事をしたままでです。それにオレだけの力ではないですし、あなたもリハビリを頑張ったからでしょう。一応礼だけは受け取っておきますが・・・」

「が？」なのはが首をかしげる

「今は少し後悔しています。まさか恩を仇で返されるとは思っていなかったのです。あの時のあなたの言葉を信じて治そうとしたのにいやはや……」

「ごめんなさい。」即座に頭を下げるのは

「冗談ですけどね。まあ健康そうなのでなによりです。白い悪魔もしくは魔王とまでもくされるまで成長していたのは驚きではありませんが……治療してよかったですか」そう首をかしげながらフェイトに話を振ってみる

「ええ！？いい、良いと思うよ。なのはが元気なのは良い事だから」慌てたフェイトだが友達を思い肯定する

「そのせいで局員にトラウマが生まれても？オレもさっきトラウマができるどころでしたし。リンさんには感謝です。あの人が止めてくれなかったら今頃海に散っていました。」

「た、たしかになのはの砲撃はトラウマものだけど、それがなのは

の良さでもあるんだし……」「フォローしているようではないフ
ェイト

「なんと！！砲撃魔とおっしゃりますか。怖いですね。捕まえよ
うとしても砲撃で返り討ちですか。最強の魔王誕生ですね！」

「そ、そんなことないよ！」慌てて否定するフェイト。それ見て更
に煽るジン。なんかもとの話からだいぶそれってしまった。

「二人ともその辺にしておかんなのはちゃんか……」「はやて
が苦笑しながら

「そう言えばさつきから静かな気が……」「先程まで自分の近
くにいたな的是がない。辺りを見回すと部屋の片隅で膝を抱えて
の字を描いているな的是がいた。すごく暗い、いやものすごく暗
い。

「……あははは、冗談に決まっているじゃないですか。患者が
健康になる事を望まない医者がいましようか。医者にとって患者が
元気な事は何よりのプレゼントですよ。いや、ホント元気になって
良かったですねハラウオンさん。」

「そ、そうだよ。なのはが元気なのは私達もうれしいし・・・だから元気出してなのは！！」フェイトがなのはに寄って行く

「でもさっき、トラウマとか砲撃魔とか・・・うつ」がん泣きのなのは。虐めすぎた。

「やはりここは仲の良い御二人に任せて自分は退散という方向で・・・」

「ちょっと待ちい！！あの状態にしたままはまずいやろ。おたくが責任とらんかい！！」

逃げようとしたがはやてに捕まりあえなく失敗。慰める方向で行くしかなくなった

「ええつと高町さん。二つ名がつくなんてかつこいいじゃないですか。パンピーのオレには縁のないものですし、凄腕の魔導師の証明でもあるんですよ。それに高町さんを見たら犯罪者の方も自首するだろうし、安全に解決できるなんてすごい事です」

どうだと言わんばかりのフォローだが

「アカン、それは傷口に塩を擦り込む所業や!!」

「つまりジン君は私が犯罪者も恐れるほどの悪魔だと言いたいのか?」
目がかかなりやばい事になっている

「あはははははははははは」もう笑ってごまかすしかなかった。

.....

しばらくしてフェイトの頑張りで何とか持ち直したなのは。だが、
まだジンの事をにらんでいる。怖くはないんだこそ.....

「.....反省してる?」

「.....はっ」

「もうその間はなんなの!!女の子に言っちゃいけない事はいっぱいあるんだよ!!」手をぶんぶん振って言ってくるがそれがあまりにも子供っぽくて全然真剣に聞けないジン。だがその事は理解している(主にクイントの歳とかで)

「わかりました。以後気をつけるようにします。」完全な棒読み

「もう怒ったんだから。レイジングハート!!」なぜかデバイスを起動させようとしてるので、命の危険を感じすぐさま謝罪をする。かなり真剣に

「もう、ホントにわかってくれたの?これからは気をつけてね。女の子はすつごく繊細なんだから。今度言ったらデバイスバスターだからね」なんか物騒な事を言いだした。完全に悪魔が誕生した(ジン限定で)

「了解しました。」もう冗談なんて言えない。言えば死につながるから

「まあ、これでもう大丈夫やる。それに結構時間もたってもうたし、皆でお昼にでもしようか?ジンもまだ何も食べてへんやる?」

「いえ、できれば帰していただければ……」

「ジン君？」なのはの抑揚のない声がそれを否定させる

「と思いましたが、おなかが減って倒れそうなのでごちそうになります。」

「ハハ、そんなの準備するからリビングで待っててな。リンも起きてる頃やろうし、シグナムはさっき仕事に行ったからな（どうやら念話してたらしい）。なのはちゃんとフェイトちゃんは少し手伝ってな」

「わかりました。待たせていただきます」

早く帰りたいジンであったがまだ時間がかかるようだ。

第11話 話し合いその？（前書き）

独自の設定があるのでご了承ください

第11話 話し合いその？

「うちそうさまでした。」

「はい、お粗末さま」

はやて達が食事の支度を終えた頃にリインが起きてきて少し話をし
て食事を頂いた。普段はそんなに食べないのだが今日は結構動いて
おなかも減っていたのでかなりの量を食べた。料理がおいしかった
ということもあるが……

「ジン君ちよつとええか？」食事を終えた後リインとお話をして休
んでいたところにはやてから声がかかった。若干めんどくさそうな
顔をする

「その顔は傷つくわゝさっきのなのはちゃんの気持ちわかる気がす
る」

「でしょゝジン君の嫌そうな顔はホントにいやそうだから……」
なのはが便乗してくる

「本当に嫌なんですよ。すみませんね嘘がつけない素直なところが
チャームポイントなんです。自分に正直なんです」

「アカン！それでも乙女にその顔はアカン。なんか自信なくすわ」

「それこそ大丈夫ですよ。ハラウオンさんだつたらそんなことしませんもん。それでも空気を読んで嘘をつくのは得意な方でしてね」

「さっきと言ってる事が違うの〜！！」なのはがやけに食いつく

「何を言ってるんですか。自分に正直なのは本当ですよ。ただ、時と場所と人を選んでるだけです。」

「一番最後のは余計なの！！人は選ばなくても良いの」やはり自分が嫌がられてる事が気になるようだ。

「それで、何の用ですか？これと言って話す事はもうないと思うんですけど……」

「無視された！？」普通にスルーされて落ち込むのは。フェイトが慰めるという方程式は完成されている。

「いや〜あんな顔された後やとすんごく話すらいんやけど……」

「

「あ、それなら結構です。無理してまで話さなくて良いですよ。特に面倒なことは・・・」

「ハハハ、面白い事言うやんか自分。そんな言われたら話さないわけにはいかんやないか。フラれたらちゃんと答えるのが関西人つてもんや！」ちょっと怒気が入りながらも笑って話してくるはやて

「意味がわからないんですけど・・・関西人？」

「ん、それはまあええ。話しっちゆうんはジン君は今の地上の本局部隊をどう思ってる？」

「質問で返すように悪いんですけど、質問の意図がつかめないんですけど・・・」

「今の地上本部は行動が遅いと思わんか？」

「……………」

「うちは今日の事もそうやけど、行動が遅いと思ってる。承認まが得られるまでに時間がかかり過ぎてる。そんなんじやいつか大変な事になると思っんや。だから……………」

「だから何ですか？」

「私は自分の部隊をもちたいと思う。それでな、もしうちが部隊が持てるようになったら……………協力してくれへんか？」はやてが真剣な表情で聞いてくるも間髪いれずに答える

「お断りします。」

「……………訳を聞かせてもらえるか？やっぱり、うちの子達か？」

「それもありますが。貴方のような人の下にはつきたくはありません。」

「ジンー！」「フェイトが強く言っがはやてが制す

「うちがもと犯罪者やからか？」

「いいえ、そんなことではありません。そもそも、貴方自身は犯罪を何一つ犯してないのでそんな事は考えていません。」

「じゃあなんでなん？」

「現実が見えてないからです。」

「現実？」なのはが首をかしげる。

「はい。八神さんは先程地上の部隊は行動が遅いと言っていました。が、ではなぜ、行動が遅くなるのでしょうか？」手を返してはやてに尋ねる

「それは、承認なんかをとるために時間がかかりすぎやからちゃん？」

「確かに正解です。ではなぜ時間がかかると思えますか」今度はフエイトに手を返して聞いてみる

「うっっん各部署の引き継ぎがうまくいかないとか、上層部の意見

の食い違いとかじゃないかな」

「そういう時もあります。違います。答えは人手不足なんです。」

「そんなどこだって一緒やん。管理局はどこだって人手不足やん。」

「言い方が悪かったですね。ええっと、現場での指揮官の不足ということです。」

「どづいう意味？」

「そのままです。基本的に地上部隊はトップがしっかりしています。がそれを伝え命令できる指揮官が圧倒的に不足しているのです。では、なぜでしょうか？若くして執務官になった貴方なら理由がわかりますか？」

「……優秀な人が少ないってこと？」

「正解です。ではなぜ少ないと思いますか？教導官殿」

「え〜っと……」 答えがわからないのは

「単純に育成不足ちゃうの？」そこにはやてからフォローが入る

「そんなことはありません。もともとミッドには陸士学校や士官学校などありますし育成面においては問題ありません。それは貴方もご存じのほうです、研修生殿」

「そやった。うちがお世話になったところはしっかりしとったわ。
・・・じゃあなんでなん？」

「育てた優秀な奴を本局が持つて行くからですよ。金に物を言わせて」

「え！？」フェイトが信じられないと言った顔をする。

「事実です。正直地上部隊の職場環境はあまり良くありません。それに給料も佐官クラスにならないと多くはありません。その点本局や海では地上部隊よりも環境が良く尉官クラスでも結構な額が貰えます。それならそちらになびく人は多いのは仕方ない事です。」

「でも、それは管理してる世界のために……」フェイトがフオローしようとするが

「確かにそうですが、本局はやり方が露骨です。少しでも優秀もしくは魔力が高い人を優先的に昇進させ海にいさせようと思います。実際貴方も子供のころから良くしてもらったのでしょ？」

「う、うん。リンディさんたちは良くしてくれたよ。」なのはが答える。

「地上ではなかなかできません。それはなぜか？……資金不足なんです。本局と地上本部との予算額にどれだけの違いがあると思いますか？本局は次元管理の名のもとにかなりの予算を確保しているんですよ。」

「で、でも……」フェイトが何か言いたそうだが

「そのお金はどこから来てると思います？ミッドの市民からの税金や有志による寄付です。確かに次元世界での依頼料や管理世界からの寄付などもあると思いますが、殆どが税金や有力者からの寄付から来ているんですよ。それなのに予算は本局が大半をもつて行く。ミッドに平和を維持しているのは地上部隊なのに……おかしくありませんか？」

「……」何も言わない三人

「法と正義を貫くのは構いませんが慈善団体ではないんですよ。働いた分はきっちりもらうのが普通です。それを海の連中は正義の名のもとにボランティア活動。そして、そのしわ寄せはミッドの市民に来る。そしてミッドで問題が起これば非難の対象は地上本部なんです。そしてそれに便乗して本局は地上部隊に難癖をつけて色々干渉してくる。ありえませんか？そちらのしりぬぐいをこちらにさせといて文句をつけるなんて、頭がおかしいとしか思えない。」

「……」俯いてしまうはやて。

「それに承認が遅いと言っていました。当たり前です。指揮系統がしっかりしているんですから。その分時間がかかる。これは今後の課題ですが……でも海の連中は艦船の艦長に全権が渡されその判断で動く。たとえ間違っても自分の次元とは関係ないのでなんらかの処罰もしくは降格程度で済みます。今までに言う事はありませんでしたか？例えば犯罪者の逮捕を優先して世界に被害が出るのを無視したとか」

「……あ！確かにある。フェイトちゃんの時だ」なのはが思いだして言う

「私？」フェイトが疑問に思っているようだが

「ジュエルシード事件の時フェイトちゃん竜巻を発生させたじゃない？」

「う、うん」

「その時私が危ないから助けに行こうとしたんだけどクロノ君が疲れきって弱ったところを捕まえれば良いって傍観しようとしてた。リンディさんもこれが管理局のやり方だって・・・」

「ああジュエルシード事件ですね。知ってます。執務官殿が関わってたんですっけ？」

「そ、そう。あの時はたくさんの人に迷惑をかけた」フェイトが若干落ち込む

「あの時は命令を無視して助けに行っちゃたけど、今考えてみると海鳴がかなり危ない事になっていたよね」

「そうだね。あの時は夢中だったけど。実際なのはがいなかったら封印できなかった。そうなれば被害も出てたと思う。」

「それに事件解決に導いた高町さんには表彰状だけで済ませたんでしたっけ？ありえないですよね」

「にはやは、それは別にいいんだけどね。そういえば闇の書の時も地球で覚醒しようとしてたし」

「せやな。あの時は気が動転してしまつて覚醒してしまつたけど、無人惑星だったらそこまで被害が出なかつたはずや。実際アルカンシエル撃とうとしてたし。」

「實際海の連中が介入して状況を悪化させたケースは少なくない。ロストロギアは管理局が管理しなくてはの思想のもと良くも知らないのに勝手に封印、そしてほぼ強制的に持っていく。抵抗する場合は犯罪だとか言つて権力を使う。どっちが犯罪者かわかりませんよ。その星の人たちの方が知っているかもしれないのに。管理局の技術力が一番だと言う驕りで相手の話も聞かない。暴走したら知らんぷりしてとんずらしたケースだってあります。そのあと意気揚々と強制介入して管理外世界を管理世界にしますし。」

「ジンは何でそんなに詳しいの？」疑問に思ったフェイトが尋ねる。

「オレは小さい頃医学の勉強で無限書庫の本をたくさん読んだんで

すよ。管理世界の医学関係の本も。その時各世界の歴史を綴ったものや日記のような本もありましていろいろ読んでいたら書いてありました。一つとかだけだったら気にもしなかったんですが探してみると出るわ出るわの大繁盛。海の連中は否定するでしょうが各世界で同じような事が書かれてるんだから疑いようはありません。案外無限書庫を使えば管理局崩壊なんてのも可能かもしれません。．．．少し話がそれました。それで貴方達本局の方々はそんなぬるま湯のようなところで大切に育てられてきたからあれなんでしょうけど、この状況で地上本部を非難する資格が貴方に有りますか？本局特別捜査官殿？」

「．．．あらへんわ。うちは何も見えてへんかったということやね。」

「意外ですね。認めないかと思ってましたが」

「そこまで言われて認めないなんてことはせーへん。うちかて箱入りのお姫様ではないんや。」

「執務官殿はなかなか納得してくれませんでしたか．．．」

「うっ」フェイトが肩を狭くする

「フェイトちゃんは家族が本局の人やから。」

「ああ、エリート一家でしたっけ？まあ本局の人たち全員が悪いと言うつもりはありませんが・・・どうも本局のエリート育ちの人は否定的な目を向けてしまいますね。すみません。」

「う、ううん。地上で仕事をしていれば仕方ないよ。私も今まで全然不思議に思わなかったから。確かにロストログアに関しては強奪まがいの事をしているし」

「いや、まがいではなく強奪です。」

「うっうっ」

「あんまりフェイトちゃんをいじめんな。・・・ジン君たちはもう少し地上と本局との違いを知ろうと思う。そして自分の部隊を作る!」

「諦めてはいないですね」

「当然や。でもさつきまでとは違う。確かに今までは甘えてたと思う、だからこれから知っていかなアカン。その上で部隊を作るんや。」

「まあ頑張ってくださいとしか言いようがないですが……ちなみに誘われても行きませんよ。」

「なんでなん!?!」

「正確には行けないが正しいですね。おれはそこにいるエースの方々と違ってパンピーなのでそんな部隊には行きたいとは思いませんし上司の命令なしで異動なんてできません。」

「そやった!!尉官クラスの方は引き抜きができへん」今気付いたといわんばかりのはやて

「そう言う事です。残念ながらこれでも三尉なもんで、ゲンヤさんの命令がなければ無理ですね。」

「お宅も十分エリートやん。」

「おこぼれですよ。オレの手柄ではないです。まあ貴方に言われるほどではありませんが、一尉殿「少し辛そうにしたのをなのは気になったが触れないでおいた。」

「でもな〜リインと結構相性いい見たいやし転移魔法はすごかったしな〜・・・やっぱ欲しいわ〜」

「そのぶん戦闘力ははそれほど高くないんですけどね〜」

「え！？でもギンガはすごいって言ってたよ。ギンガを連れて帰る時に少し話したんだけど陸士候補生になっても全然歯が立たないって言ってた。」フェイトが気になったのかギンガとの会話の内容を話す。

「いや〜ギンガの身内びいきに決まってるじゃないですか〜。自分なんて大したことありませんから。」とりあえず否定しとく。なんとなくめんどくさい事になりかねない。

「でも、スバルもジン兄はすごいって言ってたよ。」なのはもフェイトに続く

「それは鬼ごっこですかですよ。逃げるのは得意なんです」

「うん、じゃあ試してみたらいいとちゃうん？幸い今日は皆休みなんやし。」

「ああ、残念です。実はこれから仕事がありまして……」

「ジン君？」なのはの笑顔が怖い。が此処で引いたら命の危険が・

「嘘です。休みです」レイジングハートを手に持ったのを見て引くしかないと思った。どうせ散るならあらがってから散るほうが良い。

「それじゃー私と模擬戦しようねジン君？」

「さすがにエースと呼ばれる方とはやりたくないんですけど……」

「大丈夫。私これでも教導官だから、悪いところがあつたら教えてあげるよ。」なのは勝てると思っっているんだろう。確かにジンはこのメンバーの中では一番魔力が低いが……

「それはつまり余裕で勝てる？」

「そんなつもりはないけど・・・」

「負ける気はないと言う事ですね。わかりました、やりましょう。こちらを舐められたままでは師匠達に顔向けができないので。悪いですけどその自信をへし折って上げますよ。伊達に訓練は積んでないところをお見せしましょう。」

「わ、私だって負けないよ！ジン君に治療してもらってから頑張つて来たもん。魔法の操作だって得意なんだから」なのはも負ける気はないらしい。

はやては若干失敗したかと思いつつもこれはこれで面白そうなのでよしとした。さすがに家に模擬戦をやるスペースがないので管理局のトレーニングルームに向かうのだった。

第12話 模擬戦

管理局の訓練施設に到着。昨日の空港火災があったため、今日はトレーニングをしている人が少ないようだ。

ジンは結構気が立っている。睡眠不足と予期せぬ対面。さらには模擬戦と言う始末。自分でもおかしなテンションで受けてしまった事を後悔している。

ただ負ける気はさらさらでない。ゼストとティータの教えはこんなところで敗れるようなものではないからだ。地上と本局との戦いの違いを見せる機会でもある。

それに相手は高町なのはである。魔力量は自分よりも多いが現状では問題ない。それにエースオブエースと呼ばれるだけあって戦闘に関する資料は何かと多い。相手の情報はバッチリである。典型的な砲撃魔導師で防御が恐ろしく硬い。普通に考えれば勝つのはかなりきついが勝てないわけではない。幸いこちらの情報は転移と銃型デバイスというだけであまり知られていない。

彼女を治療した際に魔力の流れに関しては把握済みなので相手の攻撃もある程度は先読みできる。フィールド設定もこちらに決定権があるので、負ける要素はない。

「それじゃーフィールドは森の設定で行きましようか。市街地戦になると砲撃魔の貴方では能力が半減されてしまうでしょうから。あ、それでもいくらバーチャルフィールドでやるからってむやみに森林を破壊するのはなしですよ。環境破壊は自然保護部隊に怒られてしまいますからね、それで良いですか砲撃魔さん？」

かるく挑発する事も忘れない。相手の冷静さをなくすことは戦闘において大事なことから

「もうージン君！！私は砲撃魔じゃないの！！もう怒ったんだから、ジン君この試合に勝ったらもう悪魔とか魔王とかじゃなくて名前で呼んでもらうんだから！」

「それじゃーそちらが負けた時はこちらの言う事を一つ聞くと言う事で良いですか？」

「いいよ。絶対負けないから！！」なのはがそう叫びながら空に上がって行く。空戦魔導師らしく空で戦うらしい。

そこにはやてとフェイトが審判に入る。

「ほんなら、撃墜されるか、戦闘不能になった方の負けや。準備はええか？」

「大丈夫です」「うん」

「レディ〜〜ゴ〜〜〜!」はやてとフェイトの声が重なる。

はやて、フェイト視点

「それじゃーお手並み拝見と行こうか」はやてが戦闘域からはなれて観察モードに入る

「そうだね。ジンの戦闘スタイルはわからないけど転移魔法を得意としてるならやっぱりバックスかな？」

「いや〜そうとも限らないんとちゃうん？銃型のデバイスやったし、うちの子達だって単独転移はできるけどシヤマルを除けばバリバリ前線型やん。」

「でもジンは医務官でしょ？それならシヤマルさんと同じ後方型じゃないの？回復する人が最前線ってのは考えにくし」

「うっくん、まあ見てればわかるやろ。」そう言ってモニターに視線を移す。

.....

ジン視点

「(さてどうしますかね？とりあえず試合前に煽っておいたから幾分冷静ではないだろうし・・・でもエースだからな〜手堅く様子見と行きましようか。どの道こちらは長期戦方なわけだし)」

そんな事を考えながらなのはの様子を探る。こちらは開始と同時に転移魔法で姿をけたので相手はこちらを探している最中だろう。エリアサーチを使って・・・無駄なだけだね。

こちらのデバイス、ファントムには相手のデバイスをもごまかすほどの隠蔽工作ができる。直接相手に偽情報を送りこちらの場所を見つけられないようにしてある。あちらのデバイスが自分で発見したかのように錯覚させて・・・

なのはの方もいろいろ場所を移しているが偽情報に騙されてこちらの位置をつかめないでいる。あ、弾幕をはった。

なのは視点

「もう、ジン君はどこに行ったの！ さっきからちっとも見つからない。レイジングハートわかる？」

「すみません、マスター。どうやら相手のデバイスのほうがうまくかわしているようです。先程から魔力反応を見つけていますがどれもはずれのようです。」

「もうこうなったら自分から出てくるようにさせてやるんだから！ アクセルシューター」なのはのまわりに魔力弾が生成される。

「行って！！」誘導弾が森の中に放たれる。

ジン視点

「あら、あんなに無駄弾撃って、これだからまだに魔力がある人は・・・おおっと」こちらに向かって来た魔力弾を避ける。どうやら魔力反応のするところすべてに撃っているようだ。

「相手も結構じれてるし、そろそろ仕掛けますかね。．．．．フ
アントム、シルエツト」

「yes」無機質な返答が返ってくる。非人格型だからしょうがないけど．．

「空で戦う恐ろしさを教えてあげますよ。」

．．．．．

なのは視点

「マスター反応があります。下です」

「!?クツ」したから襲ってきた魔力弾をシールドで防ぐ

「来ます!!今度は上です．．左、右からも来ます!!」自分のデ
バイスの指示に従い魔力弾を防いでいく。四方八方から襲ってくる
魔力弾に防戦一方になる。陸戦魔導師なら壁を背にしたり余程特殊
な条件じゃない限り地面からの攻撃もない。カバーする範囲が少な
くて済む。実際平地で戦えば空戦魔導師の方が圧倒的り有利である
が状況は時と場合による。現状では空戦は悪手にしかならない。

「さすがに360度見るのかなりきついね。まだ魔力弾の威力がそこまででもないから問題ないけど、これ以上威力を上げられるとかなりきつくなる。レイジングハートいったん下りるよ。相手の位置がわからない状況で空にいたらただの的にしかならない」そう言って森の中に入って行くのは。そこにはトラップがあると知らずに

.....

ジン視点

「こちらの準備は上々。後はあちらが下りてくるのを待つだけ。状況判断は早そうだからもうすぐ降りてくると思うけど・・・来た！！」なのはが下りてくるのを確認しトラップを発動させる。

「第一陣行け！！」そう言って魔力弾をなのはに向かって撃つ。もうチェックはかけている。

なのは視点

「マスターこちらに接近する魔力反応数5、来ます」

「まかしてこれくらいなら・・ウツ」なのはが杖を構えようとした時バインドが発生する。ジンが仕掛けておいたトラップその1。あらかじめ下りてくるところに設置しておいたものである。そのために魔力弾で降りてくる場所を限定したのである。

「マスター!!」

「大丈夫これくらいなら防ぐよ。」バインドされた状態でシールドを張ろうとするが

「あまいな」そのバインドは特製なんですよ。・・爆ぜろ!!」ジンの声が聞こえると自分の手足を縛っていたバインドが爆発する。

「キヤー!!」非殺傷設定であるため物理的なダメージはないが衝撃として魔力ダメージが残る。さらに魔力弾が直撃する。

「まずは一発」

「痛たた。でも大ダメージってほどじゃないね。バインドも解けたし。今度はこっちの番!!アクセル」なのはが展開した魔力弾が陣に向かって襲いかかるがジンは木などを利用してうまく防ぐ。

「全く環境破壊はいけませんよ。砲撃魔さん。自慢の砲撃もこじや役立たずですけどね」

「ううそんなことないもん!!それなら見せてあげる!ディバイ
ン……」なのはが魔力チャージに入る

「そんなための長いやつが一对一で当たるとは思わないで……!
?」ジンの体がバインドで捕縛される

「さっきのお返しなの。姿を現したのが命取りだったね。行くよ・
・バスター!!!」なのはからレーザービームが放たれる。森を破
壊しないように細く制御されているが威力は十分である。バインド
状態のジンはその砲撃に飲み込まれた……瞬間に消えた

「!?!?幻術。本物はどこ!?!」辺りを見渡すが……すぐに見つかつ
た。なんと幻術の後方、ディバインバスターの射線上にいた。なの
はは驚いて意識をそこに向けたが次の瞬間後ろからピンク色の砲撃
が襲ってきた。

「(これ、ディバインバスター?)」「薄れゆく意識の中で最後の思っ
た事が自分の技が後ろから来た事に対する疑問だった。

はやて、フェイト視点

「ええええええ！！！！なのはちゃん負けてもったやん。それに最後のあれ……」

「うん、ジンが何かしたようだったけど……わからない。それにバインドが爆発したのも気になるし。」

「とりあえず二人の所に行ってみようか。なのはちゃんも心配やし」「そうだね」二人はバリアジャケットを展開し急いで二人のもとに向かった

ジン視点

「とりあえず異常はないな」なのはの様態を確認し問題がないので一安心する。

「ジン、なのは！！」空からフェイトとはやてが下りてくる。リインははやての肩に乗っている。先程まで寝てたが試合が始まった頃に起き出し観戦していたようだ。

「高町さんなら問題ありませんよ。魔力ダメージで気絶しているだけですよ。先程ヒーリングもかけておきましたからもうすぐ起きるでしょう」

「そう、良かった。」フェイトが胸に手を当て一息つく。

「なのはちゃんも無事のようによかったですわ。それにしてもお宅すごいな、エースオブエース相手に無傷で勝つなんてな」はやてがニコニコ笑いながら言う

「ジンさんすごいです。なのはさんに勝ってしまうなんて。」リンも元気に飛び回りながら賞賛してくれる。苦笑しながらラインと話してるとなのはが目を覚ましたようだ

「う、うつつ。此処は？私・・・」

「なのは、此処は訓練所の休憩所だよ。なのはが撃墜されてからジンが運んで治療してくれたんだ。」フェイトが状況を説明する。

「そおつか、私負けちゃったんだね。最後はどうやって倒されたかわからないけれど・・・」

「あ、それ私も気になったんだ。ジン何をやったの？」フェイトが

聞いてくる。

「特別な事はしてません。ただ、高町さんの撃った砲撃を送り返しただけです。さすがにノーガードで自分の砲撃が当たれば意識も失うでしょう。」

「え？でもどうやって？ジン君がシルエットの後ろにいたのは見えただよ。」なのはが思いだしながら答える

「そもそもなぜオレがわざわざ射線上にいたと思いますか？」

「……わからない。」

「まあわからないのが当然なんですけどね。シルエットを使っているのに射線上にいる意味はありませんし。理由はオレの魔法ですね。」

「砲撃を送り返したというやつか？」

「はい。まあ転移魔法と大して変わらないんですけどね。ちょっと工夫した転移魔法で砲撃を送り返しただけです。まあ言うのは簡単ですが条件がありまして……。」

「条件って何？」フェイトが疑問に思った事を言う

「秘密です……嘘です。だから八神さん杖をこちらに向けないください。」

「自分ふざける時は選ばんと大変な事になるで〜」ニコニコ笑っているが収束しだした魔法を見ると冗談では済まないので此処は折れる

「一つは相手の魔法を受けれる位置にいる事。だから射線上にいる必要があった。二つ目は一つ目とかぶるんですけど設置した転移魔法陣の中に魔法を入れる事」

「どづいつ事？」

「いくらなんでも瞬時展開して砲撃を送り返すなんて芸当はできません。だからあらかじめ設置してそこに魔法を入れるしかないのです。これが意外に難しい」

「でも、そんなんじゃないや使いどころがないんじゃない……」フェイトがそう言うが

「実際使って見せたじゃないですか。見事命中です」

「確かにそうだけど・・・」納得がいかないフェイト

「まあ単品では意味がないのは確かです。そのためのシルエットなわけですし。高町さん何かおかしいと思いませんでしたか？」

「・・・そう言えば、シルエットなのにしゃべってた。それにバインドで縛ったのに消えなかったし」

「そう言う事です。シルエットは衝撃に弱いのが通例ですし声が出せないのが難点なんですが・・・そもそも声ってどう出していると思いますか？」

「声に出すんじゃないの？」

「高町さん・・・」憐れんだ視線を向ける

「な、なんなの！？その目は！！」

「ちゃんと学校に行かないとバカになりますよ。いくらエースだか

らといって魔法だけでできればいいというわけだはないんですから。書類仕事とかあるでしょう？二等空尉殿」いっそ侮辱に近い目でののはを見る

「大丈夫だもん。わからないところがあったらレイジングハートが教えてくれるもん」手を振り怒っているかのようにアピールをするなのは

「ほほう。つまりそれは学校のテストでもカンニングをしていると言つ事になんですかね？いけませんよカンニングは。貴方達の世界では良いのかもしれませんが、こちらではかなりの問題になりますね。どう思いますか執務官殿」

「なのは……」フェイトが信じられないというような顔をする

「ち、違うよフェイトちゃん。カンニングなんてしたことないよ！テストは自分の力で受けるもん！！」

「で結果は？」

「うっ、文系は苦手だけど、理系なら大丈夫だもん！！」

「でも、今音の仕組みわかっていませんでしたよね？記憶違いでなければ物理の範囲だと思うですが・・・ああ、そちらでは物理がないと言う事ですかね？どうなんですか、八神さん。」

「いやいや普通にあるよ。結構前にやったことやし。なのはちゃんケガを治している間に進んだところの範囲や。聖小は進む範囲早いから小学校の時に音はやってるんや。それになのはちゃん治った後も魔法にどっぷり浸かってたからな〜成績が急降下してるって桃子さんが嘆いてたわ。うちの子の将来が心配だつて・・・」

「はやてちゃん！！それは言わなくて良いの！！」なのはが顔を真っ赤にして言う

「まあ高町さんの頭が残念だという事実は「残念じゃないの！！」ちよつと忘れてるだけ！！」放つておいて、本題に戻ります「また無視された！？」ちよつと静かにしてもらえますか？話が進みません。できないなら計算ドリルでもやっててください。レイジングハートさんお願いします。」

「了解しました。マスターこれを・・・」なぜか乗ってくれたデバイス

「レ、レイジングハートまで・・・」がっくり両膝をついて落ち込むのは

「それで、音とは要するに振動して伝わる音波みたいなものです。だから、シルエットにオレの声を振動させてしゃべらせました。」

「そんなことできるの？」フェイトが聞く

「できてる事実があるのでできるとかしか言いようがありませんが、現状オレしかできるのを見たことないです。前にメガ・又さん、あオレの後方魔法の師匠さんなんですけど、その人もできないって言ってました。オレがふざけてシルエットでお子さんルーテシアっていうんですけど、話してた時に言ってました。魔力で振動に干渉して話すなんてどんだけの魔力制御よって。意外に難しいらしいです。オレ的にはおふざけ魔法の一つではあるんですけどね。いたずらに使うとかなり便利ですし実際戦闘でも使えました。」

「それで、一体どういう意味があったの？」なのはが話に入ってくる

「なんですか、計算ドリルは終わってからにしてください」「終わったよ」意外と速いですね。それにまさか本当にやっているとは思いませんでした。マルチタスクまで使って・・・能力の無駄遣いです

ね。……でええっと、意味でしたっけ、それは高町さんを挑発する以外に意味はありません。」

「ジン君!！」

「ふざけているわけではありませんよ。実際貴方は挑発に乗って砲撃をしようとしてましたし、こちらとしても砲撃が来るとわかったので準備しておきました。」

「でも、いくらなのはちゃんでも挑発されたくらいで……」はやてが言うが

「確かに普段なら冷静に対処できたんでしようが、試合前からかなり煽ってましたし開始早々にこちらが姿を消して隠れながら攻撃してましたしかなり焦れてましたからね。そこにバインドでの攻撃と魔力弾の攻撃を受けてさらに挑発、やった本人がようやく現れると言った状況ならああいった行動になるは当然です。こちらとしてはそれが狙いですが」

「そう言えば何でバインドが爆発したの?」なのはが聞いてくる

「オレの能力です。オレは魔力を爆弾に変えることができます。言

いづらい事ですが闇の書の蒐集にあつてから発現したもので以前のオレにはなかったものです。」

「・・・すまん」はやてがバツが悪そうに言う

「いえ、現状では便利な能力ですしラッキーといえればラッキーなので」

「でも、後天的に能力が付与することなんてあるの？」フェイトが疑問を投げかける

「わかりません。原因はよくわかってないのです。ただ闇の書の後にできるようになったとしか・・・それに、魔力も上がっていますし。こちらも原因は不明です。どちらにしてもこちらにとっては良い事なので気にしないでください」

「わかった。」ジンが説明しているとはやてがつらそうな顔をしたのでジンがフォローを入れる。

「後は砲撃をこちらに向けて撃たせて送り返すだけです。挑発の結果高町さんは攻撃範囲を狭くして森に被害が出ないようにしてくれましたし、オレもそうするように挑発しました。此処まで準備が整えば後は簡単です。あ、ちなみにシルエツトが消えなかった理由はオレの努力のたまものですので別にレアスキルというわけではあり

「ません。ただ緻密な魔力制御が必要なだけです。」

「でもなのはがジンが準備してないところに降りたらどうする気だったの？」フェイトが至極当然の質問を投げかける

「それもありえませんか。高町さんが偶然降りて来たのではなくちゃんと目的地に下ろしたんですから。」

「私はちゃんと判断して下りたよ」なのはが反論するが

「確かにあの判断は正しかったと思います。的になるだけでしたから。でも本当に降りる必要があったんですか？貴方は数々の現場を戦っているはずですよ。もちろん今回のような状況で戦うことも初めてではないはずです。その時は地面に降りましたか？」

「ううん。だって下からの攻撃だけ気にしておけば空戦の方が有利だし・・・あ！」

「気づきましたか？そうです。そもそも地上と空では圧倒的に空の方が有利なんです。下から来る攻撃に注意を払ってあげればいいわけですし、何より空にはさえぎる物が何もありません。回避や防御をするのはそこまじ難しいわけではありません。程度によりますけど」

「でも、ジン君の時はいろんなところから攻撃が来たよ。レイジン
グハートも気づかないうちに」

「そういう事です。普通空戦魔導師が陸戦魔導師と戦う場合上空や
左右を気にする必要はない。しかし、オレは後方魔法が得意なん
ですよ」

「魔力弾を転移させたってこと？」フェイトが答える。

ジンはさすがは執務官と賞賛しながら説明を始めるのだった

第13話 帰宅した後（前書き）

少し長くなってしまいましたがご了承ください

第13話 帰宅した後

「さすがは執務官殿。正解です。オレの転移魔法は少し特殊で召喚魔法と組み合わせています。以前までは転移先に魔法陣が出てバレバレだったんですが、幻術で誤認させられるようになってからはオレの十八番です。実際効果はあったでしょう？」なのはに聞いてみる

「うん。防ぎづらかった。でも、威力はそこまででもなかったよ。ずっとシールドを張ってれば問題なかったし」

「それは当然です。大して威力は込めてませんから。重要なのはいつ来るかわからないという点です。精神的に焦っている相手にあれはかなりの攻撃になるはずですよ。ここにいたら的になるという考えが出てしまうほど」

「うっ、その通りです・・・」

「あとは降りる場所をこちらで操作しながら網にかかるのを待つだけです。普段の冷静な貴方なら気づいたかもしれませんが冷静さを失った状態では簡単にかかってくれました。そして後は詰めるだけですね。」

「うっ、うっ。」

「貴女は戦技教導官なのでしょうが、こちらは戦闘屋です。力を策略をもって制す、それが地上部隊の戦い方です。趣味が砲撃、特技が殲滅の砲撃魔さんは派手な戦いで勝利を収めますが、こちらは勝てる手立てはなんだって打ちます。もちろん法律な範囲ですけど。地上部隊に負けは許されないので。負ければ被害が出るのはこちらを信じてくれている市民です。頑張ったけど負けましたでは話になりません。」

「私はそんな趣味も特技もないの！！それに砲撃ならはやてちゃんの方がすごいもん！！広域殲滅型なんだよ！」

「まさか友達を売るなんて・・・最低ですね」

「なのはちゃん・・・うち悲しいわ」

「それに、広域型にさりげなく殲滅を付け加えてますし酷い人です。友達は大切にしないとイケませんよ」

「は、はやてちゃん、べ、別にそんなつもりじゃー・・・」慌てて否定するのは

「ああ、それと先程の約束は保留という形をお願いします。先程の

話を聞く限りあまりやれる事がなさそうなのでお願いできる事があつたらその時にお願いする事にします。」

「わ、私バカじゃないもん！！それに急に話を変えないで！！」

「さっきのだって冗談じゃないですか。友達の仕事わからないんですか？八神さん笑ってましたよ、泣き真似しながら」

「それを言っちゃアカンよ。もう少しじっくりたかつたわ」

「もうくはやてちゃんまで！こうなったらジン君に再戦するの！そして今度こそ名前前で呼んでもらうんだから」

「どこら辺がこうなつたらなんですか？そんな試行をしてるから砲撃魔なんて呼ばれるんですよ。嫌な事があつたらすぐ砲撃、昨今の若者はキレやすいから困ります。」

「そんなことしないよ！ただ、練習の成果を試すだけ！」

「まさか、人を実験台にするなんて・・・なんて恐ろしい。模擬戦の度に命を賭けると言っんですね、なかなか鬼畜ですね。」

「ち、違うもん！」なのはは否定したいようだが言葉が見つからない。

「良いでしょう。ならこちらにも条件があります。」

「何？」ジンからの提案が出されてホッとするなのは

「こちらが出すテストに合格できたらやりましょう。さっきの残念さではルーにも勝てないでしょうけど…いやこれはルーに失礼かな、比べるまでもない」

「ルーって？」フェイトが聞いてくる

「さっき話してたルーテシアです。メガ・又さんに頼まれてオレが勉強を教えるんです。ちなみに訓練校に行くまではギンガも教えてましたし、スバルにも教えています。ルーはメガ・又さん譲りでかなり賢いので高町さん程度なら完勝ですね。一般学ならおそらくどのジャンルでも勝つでしょう。」

「でも、ルーテシアって昨日の火災に巻き込まれた子でしょ？ジンが助けた時にいた。かなり小さい子だったような」フェイトが思いだしてかのように話す

「今年で六歳になります。魔法学ではなく一般的知識ならギンガよりも上です。最近ではデバイスにも興味を持ちだしたので教えてますし、建築系は独学でやっています。そちらは専門外なので・・・」

「へえ、エリオやキャロと同じ年ですごいね。」

「誰ですか？」

「私が保護してる子達。まだ二人は会ったことないんだけど二人とも言い子なんだ。その内二人とも会わせたいと思ってる。」嬉しそうに話すフェイト

「その年で子持ちですか。たしかオレよりも一つ上だから15歳ですよね？ってことは9歳で出産ですか。お相手が高町さんと八神さんですか。家庭が複雑だから会わせられないんですねわかります。どちらをお母さんと呼ぶのでしょうか？医学的にも神秘ですね。女性同士とは・・・なかなか非生産的ですね、いやこの場合生産してるから問題ないのか？」

「へ！？ち、違うよ！！なのはとはやてとはそんなじゃないもん。私が預かっている子ども！」

顔を真っ赤にしてフェイトが言う

「わかってますよそんなの。9歳で子供が産めるわけないじゃないですか。慌てる方が逆にあやしいですよ。」

「ジン！変なこと言わないで。私はそのルーテシアって子に二人を会わせたいと思っただけ。」

「冗談ですから本気にしないでください。それとその事についてはオレの一存では決められないので今度聞いときます。」

「それじゃーこれ私の連絡先」フェイトがデバイスに連絡先を送ってくる

「ああ、それなら私も！」なのはが自分もと言って話に入ってくる

「えええ」嫌そうな感じで言う

「もー女の子が連絡先を教えるんだよ！もっと嬉しそうにして！」

「いや、日課が砲撃の人に連絡先を教えて砲撃された嫌ですし。ただ若いので死にたくないから拒否していいですか？」

「そんな日課はないのー！」

「というよりあれやな、こないな美人さん達の連絡先を苦もなくゲツトするなんてジン君もなかなかやるな」はやてがニヤニヤしながら言う

「ああ、それは盲点でした。オークションにかけたらいくらぐらいで売れますかね？エースと若き執務官の連絡先。そう言う事なら八神さんのも頂けるとよりよいですけど・・・」

「いらら、何しようとしとるん自分。それはアカンやる」

「冗談に決まってるじゃないですか。ただ今は情報社会ですからうつかりオークションに流れてしまいかもしれませんという事です。安心して連絡先を教えてください」

「完全に確信犯やないか！そないなやつに教えられるかい！」

「あそれなら結構です。貴女は何かと面倒臭そうなので・・・」

「ジンさん、リインはどうですか？」

「リインさんは大歓迎です。これがこちらの連絡先です。ただご家族の人には秘密にしてくださいね。こちらの知らない人から来た場合変な所につながるようになってありますんで・・・」

「はいです。こちらがリインのです。そういつてこちらに送ってくる

「ちょっと待ち！ご家族がいる状況でその話はアカンやろ。私と連絡とる気ないやろ」

「それが何か問題でも？」

「いや、問題はないんやけど・・・」

「それなら大丈夫ですね」

「大丈夫やない！それにお宅レアスキルの申請教会に出してへんやろ？レアスキルは教会に登録しないと認められんのよ。私の知り合

いに教会の人がいるから仲介してあげるわ。だから連絡先教え！」

「ええ教会ですか？あんまり好きじゃないんですけどよね〜あそこ。それにわざわざ申請なんてしなくてもかましません。特に何かがあるわけではありませんので」

「でもレアスキルもちは昇格が早いんですよ」

「現状で十分です。下手に偉くなる方が面倒ですし。ゲンヤさんを見てるとそう思います。別段お金に困ってるわけでもないですし。」

「なんて欲のない。まあ欲だらけの人よりはましやけど・・・」

「あなたみたいなの？」

「自分なかなか毒舌やな〜」

「それほどでも」

「まあええわ。とりあえず連絡先を教えなさい」

「・・・しょうがないですね。これです。あまり連絡してこないでください。それとご家族から連絡があった場合は連絡先を変えますのでくれぐれも気をつけてください。いちいち連絡先を変えるのは面倒なので・・・」

「わかったわ。」

「そつちの話は終わった？それじゃージン。よろしくね。きっと良い友達になれると思うから。」フェイトが話を戻す

「わかりました。ルーも友達が欲しいでしょうから大丈夫だとは思いますが。了解がとれたらこちらから連絡しますんで」

「わかった。」

「ジン君私もいっぱい勉強してリベンジするんだからね！！」なのはが決意を宣言する

「まあ頑張ってください。ちなみに問題は魔法学ではないので一般的な勉強を頑張ってください。ミッドの歴史は大変でしょうから地球の方で良いですよ。オレも興味があるのでそちらの勉強に会わせます。後でそちらの使っているテキストのコピーを送ってください。そちらから問題を出しますので・・・レイジングハートさん申し訳あ

りませんがミッド語に翻訳してもらえますか？」

「了解しました。翻訳してお送りします」

「ジン君なんでレイジングハートにはそんなに丁寧なの!!」

「何を言ってるんですか。高町さんにだって丁寧語で話しているでしょ。ちよつと扱いが雑なだけです。小さい事を気にすると大きな大人になれませんよ。年上としての威厳をもって軽口くらい華麗に対処しなくては・・・」

「そんなこと簡単だもん。私は立派な大人だから何を言われても平気だもん」腕を振りながら言うが

「その動作はどう見ても大人ではありませんね。というかその程度で完成系ですか？随分と子供っぽい大人なんです。自分はそうならないように頑張ります。・・・!?まさか、自らダメな大人としての見本を見せようとしてくれてるんですか？それならお礼を言わないといけませんね。ありがとうございます、わざわざダメなふりまでしていただいて・・・」

「うえ〜ん、フェイトちゃん!!」もう何も言い返せずに泣きつくこの光景を一日だけで結構見た気がする。

「ジンあまりなのはをいじめないであげて」「注意しているが若干うれしそうである」

「顔がにやけてますよ。実際泣きつかれてうれしいんですね」

「違うよ！・・・ただちょっとかわいいなと思っただけ」

「・・・本当にお二人とも結婚してないですよ？なんか信じられなくなってきたんですけど・・・同性愛は別にかまいませんが公にやるのはちょっと・・・局員の男性の方々が報われませんか。」

その後なのはをからかい少しお話してからジンは自宅に帰った。といても昨日帰宅してない事がギンガやスバルにバレ心配していると言う事なのでとりあえずナカジマ家に行くことにした。ちなみにアルピーノ家もいるようだ。

「お邪魔します。昨日は連絡せずにすみません。したかったのですが悪魔に襲われまして・・・」

「ジン兄」「ジンさん」「お兄ちゃん」

三人がこちらを見ると一斉に飛び出す。

「おお、元気そうだな。スバルが転んだ以外はケガはなさそうだし当然と言えば当然か。昨日は大変だったな、大丈夫か？」

「ジン兄こそどこ行つてたの！？心配したんだよ、私たちに顔を見せた後すぐにどこか行っちゃうし、そのあとも帰ってこないし」

「そうです。せめて連絡くらいしてください！！」スバルとギンガに怒られるとは思わなかった。

「いや〜ごめん。仕事が終わったと思って帰ろうとしたら魔王に捕まってしまった、それでようやく帰って来たんだよ」

「「魔、魔王！！？」」スバルとギンガの声が重なる

「そつだ、管理局の白い魔王いや、今は悪魔か。・・・でその人に捕まった。知らないか？魔王からは逃げられない！！」

「そ、そんなすごい人が管理局に入るんだね・・・」スバルが若干引きながら言う

「ジ、ジンさんそれって・・・」ギンガが本当の事を言おうとするが

「ギンガみなまで言うな。オレにはわかっているぞ、お前も一応管理局長だ。噂くらいなら聞いた事があるだろう。怖かったんだなよしよし」言いきる前にギンガの頭を撫でて止める

「／／／」若干でれているギンガをよそにスバルに話しかける

「スバルはなんかいい事でもあったのか？」

「ん、なんで？」スバルが首をかしげる

「なんか顔つきが変わったぞ。いつもの元気いっばいなおバカさんから、少しキリっとした感じだ。」

「わ、私はバカじゃないもん。ちょっと勉強嫌いなだけ。・・・でもそんな私はもう終わり。ジン兄、私魔導師になる！！」やる気に満ちたスバルが宣言する

「・・・どうして？」一瞬驚きはしたもののスバルの真剣な表情を見て適当な事を言っているのではないと悟る

「昨日の火災で私思ったんだ、強くなりたいて!!。昨日の火の中で誰もいない時すごく怖かった・・・でもそれ以上にすごく情けなかった。泣いているだけで何もできない自分が」

「お前ぐらいの歳だったらそれが普通だ。子供はできる事の方が少ない」

「うん、確かにそうだけど・・・私は見たんだ。自分が泣いて困っている時に助けてくれた人を。とつてもきれいで強い人だった。私はあこがれたんだその人に。だから、情けない自分でもその人のようになりたいって思ったんだ。」

「（強いと言うのは否定しなけど・・・憧れるとあんなになってしまうのか？スバルが砲撃魔・・・嫌過ぎる!!）でも痛いのかは嫌なんだろう？良いのか？魔導師になればそう言う目にたくさんあうぞ」

「うんわかっている。でも私みたいに怖くて泣いているような・・・助けてって言うてるような人を助けられるようになりたいから!!」
スバルの決意は固い。それは昔の自分を見ているようだ。

「ハア〜・・・やっぱりクイントさんの娘だな。一度決めたら引かないところがそっくりだ。・・・ゲンヤさん達には話したんだよね？」

「うん。お父さんなんかは最初は反対したけどお母さんが色々言うてくれて最後にはやりたいようにしなさいって。」

「ならオレからは何も無いな。頑張れよスバル」頭を撫でながら言う

「反対しないの？」

「なんで？」

「なんかジン兄なら反対すると思った。危ない事するなって」

「ギンガの時だって止めなかっただろ？そりゃーお前が適当に言うたんだったら反対もするが、違うだろ？」

「うん」

「なら何も言わないさ。お前の人生だ、他人が口出ししても仕方がない。」

「ジン兄ありがとう！あとね、ジン兄も私の目標なんだよ」

「感謝されることじゃないが・・・オレが目標？」

「うん。ジン兄すごかった。あの火災の中たくさんの人たちを助けてたし。なのはさんとも知り合いみたいだし」

「おまえ後ろの部分が本音だろ」

「ち、違うよ。ジン兄を目標にしてるのはホント！私もいつかジン兄やなのはさんみたいにたくさんの人を助けられるようになるんだ」

「・・・スバル目を覚ませ。あの人は人助けはしてないぞ・・・いやお前を助けてはいるけど。あの人は二次災害を起こす可能性のある砲撃魔なんだ。目を覚ませ！もしくは眼科に言って見てもらって来い」

「ジン兄何でそんなこと言うの！！なのはさんは強くてカッコいい人なんだよ。」

「それは幻覚だ。強いのは否定しないがあれはただの砲撃魔だ（今の内にスバルに砲撃志向の考えをなくしておかないと大変な事になる）」

「違うもん！！なのはさんはすっごい人なの！！ジン兄もいつかわかるよ」笑顔で言うスバル。ダメだもう手遅れらしい・・・

「なら一つだけ言うておくれ。・・・砲撃魔だけにはなるな」

「え！？」

「いいか？それだけ心に刻んどけ」

「??よくわからないけどわかった。」

「ちょっと不安だがわかってくれたなら良い。……スバルは訓練校に行くのか？」

「うん！だから今から頑張るの。訓練校に入るまであと半年くらいしかないから」

「そおか、頑張れよ。シューティングアーツならクイントさんやギンガが教えてくれるし勉強ならオレが教えてやる」

「うん！」そう言って元気に部屋に戻って行った

「本当に良かったんですか？」ギンガが話しかけてくる

「ん？ああ、あいつが自分で決めただ、それなら応援するしかないだろ？」

「そうですね……心配です」

「それはそうだろうけど、反対したって聞かないだろ。それに心配なら訓練を見てあげれば良いじゃんか、お姉ちゃん」

「そ、そうですね。訓練校に入るまで私と母さんで一生懸命教えます！」「頑張りますと言わんばかりの顔だが」

「といってもお前の休日もあと少しだからクイントさん任せになるけどな」

「あ、そうですね！……それなら今からでも……スバル！練習しよう」そう言ってスバルのもとに向かう

「ほどほどにしとけよ……って聞こえてないか」ギンガはこちら声が聞こえないくらいのスピードで走り去って行った

「……おおそうだ。ルーを探さなきゃ」「フェイトと約束を果たすためにルーを探しに行った。」

（最初はスバルと一緒にいるのかと思っただけど先程までオレとスバルが話していたからそれはないし、オレがこの家に来た時には飛びついて来たからいるはずなんだけど・・・いた！）考えながら話している。外の日向でメガ・又さんに抱かれて眠るルーがいた。とりあえずルーの所へ向かう

「メガ・又さん。ルーはお休み中ですか？」メガ・又の正面から歩いて行って話しかける

「そうね。どっかの誰かさんが朝帰りなんてするもんだから、うちの子が心配で起きてるなんて言うのだから。」少しニヤニヤしながら言う

「その言い方だとオレが悪いみたいじゃないですか。むしろオレも被害者です。いきなり連れ去られたんですから」

「冗談よ。でもルーが心配してたのはホント。ジン君を見て飛びついた後は安心して寝むちゃったみたいだから」優しくそうにルーを見ながら言うメガ・又

「ルーにも心配かけちゃったか。さっきスバル達にも怒鳴られまし

たよ「ルーの頭を撫でながら言っジン

「あの子達も心配してたからね。ダメよ女の子に心配かけちゃ」

「かけるつもりもなかったんですけど・・・すみません。」

「私じゃなくルーに言ってあげて。・・・ジン君ルーを少しお願いできるかしら？」不意にルーの世話を頼まれる

「良いですけど仕事ですか？」ルーを受け取りながら聞く

「違うわ。今日は貴方と同じでオフよ。その代わりナカジマ家が事後処理を頑張っているけど。・・・そろそろルーが起きそうだからホットミルクでも作ってこようかなと思ってね。ジン君はコーヒーで良い？」

「ありがとうございます。オレもあまり寝てないんで助かります。」

「フフ、じゃーちょっと言ってくるからルーをお願いね」「そう

言いながらキッチンに向かって行った。

しばらくしてルーが起きた

「……？」起きた時にオレがだっこしてる事が不思議なのだろう、首をかしげている

「起きたか？ごめんなルー心配かけたみたいで。メガ・又さんから聞いたけど起きててくれたんだってな。」

「お兄ちゃん？」まだ寝ぼけているらしい

「ああそつだ。眠いならまだ寝てて良いぞ」

「うん、起きる。」目をこすりながらオレの胸元で態勢を変えてこちらを見る

「無理しなくてもいいのに。あとちょっとすればメガ・又さんがホットミルク持ってきてくれるから」

「うん」それからメガ・又がくるまでルーとボーっとしていた。

少し経つとお盆に飲み物と少しのお菓子をのせてメガ・ヌさんが戻って来た

「お待たせ〜・・・ルーも起きたのね。はい、ホットミルク。ジン君はコーヒー、少しお菓子も頂いてきたわ、後でクイントに言っておかないとね〜」ニコニコしながらお菓子とコーヒーを渡してくるメガ・ヌ。ルーテシアはおいしそうにチョコレートとミルクを食べている。

「ルーオレのも食べて良いぞ、甘いもんはあんまり好きじゃないんだ。」

「ありがとう。」そういつてオレからチョコレートをもらって食べるルー。・・・なんか小動物のようだ

「・・・それでジン君は何か用があるの??」メガ・ヌがいきなり話を振ってくる

「・・・唐突ですね、まあ話があるのはあるんですけど・・・ル

「に」

「私？」ルーが首をかしげる

「そ、話というより相談なんだけど、ルーは友達欲しくないか？」

「スバルちゃんやギンガさんがいるよ」

「まあそうなんだけど、スバルの話は聞いたか？」

「うん。訓練校に行くって」

「そうだから会えなくなるし、ギンガも休暇がそろそろ終わりだろ？だからルーがさびしくなるんじゃないかと思って・・・」

「うん」

「それで今日知り合いの人と話してたらルーと同年の子がいるから会わせてみないか？って話になったんだけど、どうするルー？会ってみるか？」

「……わかんない」

「まあそうだな、いきなり知らない子と会って友達になるのは大変だからな。しかも、あちらの二人は離れて生活してるしお互いに顔を合わせてないっていうし」

「どういう事？」メガ・ヌが聞いてくる

「何か二人とも保護児童らしいんですけど、少し特殊らしくて……オレも良くは知らないんですけど、だから二人で別々に暮らしてるらしいんです。で、ルーのこと話してたらどうせなら会わせようと言う事になりました、ルーも同い年ですから友達になれるかな〜と思ったわけですよ」

「そう。その保護責任者の方は？」

「ああ、フエイト・T・ハラオウン執務官です。最近人気の若手の執務官さん」

「ああ、彼女ね。話は良く聞くわ。そうになるとあちらも忙しくてなかなか会えないんじゃないかしら？」

「そこはうまく家族とうまく連携を取っているようです。うちと同じですね」

「ルーちゃん会ってみない？きつとお友達になれると思うわ」オレの話を聞いてメガ・又さんがルーに話しかける

「でも、知らない子だよ？」

「最初はみんなそうよ、でも話しているうちに自然と友達になっていくものよ。ルーだって友達はいっぱいた方が良いでしょう」

「うん」

「それに会う時はジン君が付いて行ってくれるから大丈夫よ」

「オレですか？」

「そうよ。私はその執務官さんと面識ないわけだしいきなり行っても悪いでしょう？だからジン君がお兄さんとしてちゃんとルーを連れて行ってちょうだい」

「まあもともとそのつもりでしたけど……ルーオレと一緒に行くか？」

「……お兄ちゃんが一緒なら行く」

「あらあら」娘を微笑ましそつに見る母

「それじゃー少し連絡してみますね」そう言ってフェイトに貰った連絡先にアクセスする。少し経ってから画面上にフェイトが出てきた。後ろにははやてやなのはもいる。まだ一緒にいるようだ。

「今平気ですか？」確認をとる

「うん、大丈夫。それで？」

「えーっとさっき話してた事なんですけどルーに了解がとれたので連絡をと思ひまして」

「ホ、ホント！？私もさっきエリオとキャラ口に連絡したら会ってみたいって言うてくれたんだよ。」

「そうですか。一応ルーを紹介しておきますね。それにルーのお母さんも」画面を少しでかくして二人を入れる

「こんにちわ。私はメガ・ヌアルピーノ。こちらが娘のルーテシア、よろしくね」「ニコニコ笑いながらフェイトに話しかける。若干フェイトは焦っている

「は、はいこちらこそよろしくお願いします。フェイト・Ｔ・ハラ
オウンです。」

「知ってるわ、有名だもの。優秀な執務官さん」

「／／恐縮です。こちらもジンから聞いています。なんでもジンの
魔法のお師匠さんだと・・・すごいです」

「今はもう教えてないし、ジン君は優秀だったからね。私は特に何
もしてないわ」

「あの～二人で話すのは良いですけど、本題に入りませんか？」

「あらごめんなさいね。少し話してみたくて」

「それはまた後日にでもゆっくりと話してください。それでハラオ
ウンさん、いつ頃なら大丈夫ですか？オレもそちらに合わせて休
みを取りますんで」

「ちょっとまってね今確認するから・・・再来週なら地球は夏休みで学校もないし私もちょうど仕事が入ってないからそこで良いかな？」

「まあ構わないんですけど・・・会うのは地球ですか？管理外世界に行くのは手間なんですけど・・・」

「あ、それなら大丈夫。転送用のポートもあるし。私がそっちに迎えに行つてその後キャラとエリオを連れて行くよ」

「それでいいなら良いんですけど・・・ルーもいいか？」

「良いよ」

「じゃーそれをお願いします」

「うん。正確な日時とか決まったらまた連絡するから」

「わかりました。それでは」

「うんまたね。メガ・又さんとルーテシアもまた今度」そう言つて二人に手を振りながら画面を切る。メガ・又さんも手を振りルーモ恥ずかしがりながらも手を振つた。

その頃ジンは休暇の申請をする準備をしていた。

第14話 遊園地へ

ゲンヤさんから休暇をもらってから一週間今日がフェイト達との約束の日である。ルーは昨日からそわそわしていてなぜかうちに泊まりに来た。本人的には・明日遅刻するのがまずいから・らしいがやはり不安のようだ

ルーはメガー又さんが内勤になるまで同年代の友達がおらず、スバル達と出会ってからほとんどスバル達と遊んでいるかオレと勉強していかのどちらかなので同年代の子達と遊んだ経験がほとんどない。フェイトによると向こうもそんな感じらしいから、今日はなかなか大変だろう・・・だけどこれでルーに友達ができれば学校に行った時とか楽になると思うし何よりルーにとって良い事だろう。

「ルーは準備できたか？」

「うん、大丈夫。そろそろ時間だし行こう」

ルーと手をつなぎ家を出る。ミッドの本部前で待ち合わせてそこから転移ポートを使って地球に行くらしい。フェイトの話によるとあちら二人は事前に地球に移動して今はフェイトの家族と一緒にいるようだ。だからフェイトと合流したら直接向かう事になった。

しばらく交通機関を使って移動し今は本部に向かって歩いている。

「ルーは緊張はしてないか？」

「うん。」

「今日はちゃんとおめかししたからかわいいな」

「うん。」

「ルーは男の子だよな」

「うん。」

だめだ。かなり緊張している。家を出る前まではそんなでもなかったのに、本部に近付くにつれてこの有様。さっきから何を聞いても・うん・しか言わない。とりあえずルーを落ち着ける事にする

「ほらルー少し落ち着け。緊張するなどは言わんが今からそんな状態だと会った時には倒れちゃうぞ」とりあえずルーの頭に手をのせてこちらを向かせて話す

「え、でも・・・」ルーもちゃんと反応してくれた

「大丈夫だ。今日は遊びに行くだけだろ？スバル達とも行ったことあるじゃないか？その時と一緒にだ」

「スバルちゃんとギンガさんは友達だから・・・」

「なら今日会う子たちとも友達になれば良い。それにそんなんじや遊んでてもきつと楽しくないぞ。折角遊ぶんなら楽しい方が良いだろっ?」

「う、うん」

「だったらそんなに緊張するな。お前がそんなんだったら向こうだって話しづらいだろ。それに折角かわいい服来た来たんだから笑顔でいらないとな」

ニコッと笑いながらルーに言うと、まだ少しぎこちないが少しはほぐれたようだ

そんな感じで本部に着くとフェイトがもう着いている。どうやら待

たせてしまったようだ

「すみませんね。遅れてしまって」

「うん。私が早く着いただけだからそれにほら」そう言って時計を見せる。まだ約束の時間まで15分もある

「まだ、時間までは結構あるけど早く着いちゃったから行くのか？」

「そうですね。それと今日はお世話になります。それとこっちがルーテシアです。ルーもあいさつしとこうな。」

「う、うん。ルーテシア・アルピーノです。今日はよろしくお願いします。」そう言って頭を下げる

「うん、よろしくねルーテシア。うちの子達、エリオとキャロっていうんだけど良い子達だから仲良くしてあげてね」

「はい」

少し話した後転移ポートに移動して地球に転移した。

「ほら、此処が地球だよ。」なんかお屋敷みたいなところに着いた。
しかもかなりでかい

「ハラオウンさん、此処は一体どこですか？ずいぶんとでかいお屋敷がありますが、此処が実家ですか？すごいですね。やっぱりハラオウン家くらいになるとこれくらいの家に住むのが普通なんですね。ルーすごいな」

「うん、大きい家」ルーも驚いている

「ち、違うよ。此処は現地の協力者の家で私の友達の家だよ！うち
は普通のマンション」

「なんと！？マンションをすべて買い取るのが普通と言いますか。
ルーやっぱエリートクラスになると庶民とは違う金銭感覚をしているらしい。ルーも頑張れよ、お前なら佐官以上にはなれると思うから。ジ、ジン違うからマンション全部が家じゃないから。一室が
私たちの家！」またまたご謙遜を・・・」

「でも、どうせなら自分でつくりたいな。」

「そうか、ルーは建築系も勉強してるんだったな。将来はルーに家を建ててもらおう事があるかもしれないな、その時はよろしく頼むよ。」

そんな風に目の前の光景に対して現実逃避をしていると屋敷の中からメイド服を着た人と少し紫色の髪をした女性が現れた。

「すずか！」フェイトはこちらをほったらかしにしてその女性の方へ行く。オレ達としては仲良くしゃべっているのを邪魔するのもあれなので近くにいたメイドさんに話しかけていた

「あのごすみません。」

「はい？・・・あ、フェイトちゃんが話していた方ですね。私はフアリン・K・エアリヒカイト、この月村家でメイドとして仕事をさせていただいています。ヤナギバ様とルーテシアちゃんですね。はるばる地球へようこそ」

「（月村？）あ、いえありがとうございます。・・・あの～やはりこの皆さんは知っているんですか・・・魔法を」

「ええ。こうして転送ポートの置き場として場所を提供しています。ほとんどすずかちゃんも協力してますが」

「（すずか？さっきも言っていたけど、あの人の名前か？地球だとどっちが名前だっけ？）そうですか。あの～申し訳ないんですがあの二人止めてきてもらえませんか？このままだと時間が・・・」

「あ、そうですね、かしこまりました。」

ファリンが二人のもとまで止めに行くものだと思い一息つく

「（やっぱりメイドさんはしっかりしているな～）」と思っている

「すずかちゃん、そろそろ話を切り上げてくださ～い！！」とその場で叫んだ

「ブッ！！な、なぜ叫ぶんですか？普通呼びに行くでしょ！貴方にした感心を返してください！」

「え？だってそっちの方が早いじゃないですか？」

「い、いえ、まあそんなんですけど・・・おかしくないですか？メイドさんとして。あ、あれですか、ドジっ子さんなんですか、実際にドジっ子は現実では許されないんですよ！」

「わ、私はドジっ子ではありません！少しミスが人より多いだけです」ファリンが顔を赤くしながら否定する

「ドジっ子はみんなそう言うんです。まずは自覚するところから始めてください。まだ間に合う・・・はずですよ」

「なんですか、その間は！・・・こうなったら私が優秀なメイドさんである事を証明して見せましょう。」

「ほほっ、う、う、う、で、で、で、ど、ど、ど、ち、ち、ち、って証明するんです？」

「・・・」
「黙るファリン。ど、ど、ど、やら証明できるものがないらしい」

「ハハ、もう仲良くなったんだね。ファリンはそう言うところがいよいよね」さすがにニコニコしながら言ってくる

「すずかちゃん、ファリンはドジっ子さんなんですか、何も取り柄のないドジっ子メイドさんなんですか（泣）」

「そ、そんなことないよ。ファリンにはいつも助けてもらっているし」

「でもそもそも助けられないメイドさんってメイドさんの意味ないですよ？むしろそれが普通なのでは？本人が優秀と言える根拠は一体……」

「え〜と……かわいいところかな？」困った挙句すずかが出した答えはメイドの優秀さとは関係ない事だった。それを聞いてファリンが地面にのの字を描いて落ち込んでいる。慌てて慰めに入るすずか、なんか、フェイトとなのはに似ているなと思ったジンであった。

「もう、そっやってすべいじめるのは良くないよジンー！」

「いえ、別にいじめてるつもりはないんですが、しかも最後にダメ押ししたのはオレではないんですけど・・・エアリヒカイトさんすみません。」とりあえず謝っておく

「うう、だ、大丈夫です。お見苦しいところをお見せしました。それと私はファリンで構いません。」

「年上?の女性を名前では呼ばないようにしてるので、すみません。」

「何でそこが疑問系なんですか!!ファリンは立派な大人の女性です!こつ見えてもすずかちゃんよりも年上です!」

「!?!.....すみません」

「謝らないでください!今の間が余計に傷つきます!」そんな感じで驚愕の事実には驚きながらも会話を続けると

「ええっと、すみません。」すずかが話しかけてきた

「私月村すずかっけって言うんですけど、ジン君だっけ？・・・以前私とどこかで会ったことありません？そのごく小さい頃」

「・・・？わかりません。そもそも地球に来るのは今回が初めてですし、確かに貴方のような女性を見た事があるような気がします。が、小さい頃というとおかしな話になるので他人の空似でしょう。」

「そ、そうだね。ごめんね勘違いしちゃって」

「いえ、構いません。・・・ハラオウンさん、そろそろ行きますか？」

「そうだね、行くところか。それじゃーすずかまた後でね、アリサにも今日はよろしくって言うておいて」

「うん。じゃあ現地で」そう言って月村邸を後にする。はて？また後では・・・

フェイト家到着

「ここが私の家。さあ入って二人も待っているから。」

「お邪魔します」「お邪魔します」

ルーと家にながらせてもらつと奥から緑色の髪をした女性が出てきた。

「あ、帰って来たわね。・・・はじめましてリンディ・ハラオウンです。そこにいるフェイトの母です。ジン君で良かったかしら？今日はフェイト達をよろしくね」

「母さん、ただいま。」

「はじめまして、ジン＝ヤナギバです。こちらこそ今日は娘さんたちに迷惑をかけてしまつかもしれませんので・・・」

「フフフ、フェイトが言っていた通り礼儀正しい子ね。」

「いえそんなことは・・・」

「もう、ジンも母さんもそんなところで話してないでリビングに行くよ。エリオとキャロが待ってるよ。」

「そうね」

「そうですね、ルーちゃんと自己紹介するんだぞ」

「う、うん。大丈夫・・・」緊張するルーにリンディが優しく声をかける

「ルーテシアさん、大丈夫。二人とも言い子だから仲良くなれると思うわ。それにそんなに緊張してちゃ折角のかわいい顔が台無しよ。ウインクしながら言うリンディにルーは少し緊張が解けたようだ。一方ジンはさすがにウインクは・・・自分の母親と年代代の人のウインクを見て若干ひきつる。まあ見た目は若いから良いんだろうけど・・・なんとも言えない感じが

「・・・何か？」顔は笑顔なのになぜか寒気を感じる

「いえ、なんでもありません。さすがは母親だな〜と思っていたところですよ。ハハハ」背中に嫌な汗が流れたが、あの笑顔はクイントさんの時と同じなのでここで墓穴を掘るような事は言わない。

「それなら良いのだけど、何か嫌な感じがしたから」

「・・・ハハハ」もう笑うしかない

「ほら早く」先にリビングに向かったフェイトからの呼びがかかる。あゝグットタイミング

「じゃー行くぞルー。笑顔でな」

「うん」リビングに入って行った

.....

リビングに入ると

少し赤みの混じった髪の毛の子と桃色の髪の毛の女の子がいた。何か二人ともぎこちなく座っている

「ジン、ルーテシア、紹介するね。こっちの男の子がエリオで、こっちの女の子がキャロ。さ、二人とも挨拶して」フェイトが二人を紹介する

「エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエです」

「オレはジンニヤナギバだ。こっちはルーテシア。ほらルー挨拶して。」

「うん。ルーテシア・アルピーノです。」少し声は小さいがちゃんと言えた。

「それじゃー少し話してみな。お互いの事を知らないと思いつきり遊べないだろ」

「うん」そう言われてエリオ達のもとに向かうルー。フェイトも二人をソファアの方へ移動させこちらに来る。子供たちだけにすよっだ。

「とりあえず、問題が無さそうでしたです」

「そうだね、エリオもキャロも昨日会ったばかりだからまだぎこちないんだけど、話していけば大丈夫そうだし、ルーテシアも二人と仲良くなれると思う。」

「そうですね。．．．それでこの後はどうするんですか？もうそろそろ向かいますか？」

「うーん、まだお昼食べてないでしょう？とりあえずお昼を食べてからにしようか」

「だったらもう行きませんか？遊園地ならお昼にできそうなものがあるでしょうし、アトラクションは混みますから早めに言って並んでおかないと．．．」

「あ、それは大丈夫なんだ、今日は貸し切りにしてもらっているから。」

「えー？．．．貸切ってどんだけ金持ってますか、恐るべし」

ハラオウン家！」

「ち、違つよ！私の友達の家が今度あたらしくアミューズメント部門で遊園地を開くからその体験として呼べれてるんだよ」

「友達つて月村さんですか？確かに豪邸でしたね」

「うん、すずかじゃないよ。もう一人いるんだ民間協力者で私たちの親友が。今日会うはずだから紹介するね。」

「いやいいです。なんかオレの金銭感覚で付き合えるような方ではなさそうなので遠慮します。月村さんでさえぶっ飛んでますから。これ以上は無理です。」

「ハハハ、大丈夫だよ。確かに二人ともお嬢様だけど私達と同じだよ。」

「いえいえ、あなたと私を同じにしないでください、本局の執務官と地上局員ではかなり給料に差がありますからあなたと私も同じ金

銭感覚はしてないと思います」

「だ、大丈夫。ちゃんと買物だつて行ってるし、商品の相場くらいわかるよ。普通だからふ・つ・つ」

「……まあいいですけど。どっちにしろ遊園地に行った方が良
いんじゃないですか？お友達も待っているんでしょう？」

「そうだね、そうしようか。……エリオ、キャロ、ルーティ
ア、そろそろ行くよ。車の中でもおしゃべりはできるから続きは車
の中で」

「……はい」「……三人の声が重なる。

もう準備はできていたので車のある駐車場に向かった。運転はリン
デイさんがしてくれるらしい。……地球での免許はあるのだろうか？

そんな疑問を抱きつつも車に乗り込み遊園地に向かうのだった。……
……車でけえ

遊園地到着

遊園地と言えばにぎやかなイメージがあるのだが、今はオープン前なので人がいない。少しさびしい感じもするがルー達が遊べれば問題ないので気にしない事にする

ちなみにルー達は仲良くなったようだ。最初に話していた頃はちょっと緊張してうまく話せてなかったが、車内でフェイトが話に混ざったりして話しやすくしてだんだんと話すようになった。今では三人で手をつなぎながら歩いている。子供らしい光景だ

「仲良くなれたようで良かったですね」「フェイトに話しかける

「そうだね。これからこうやってなんとも会えればいいんだけど・

」・

「なかなか難しいですね。住んでる世界がバラバラで保護者が仕事で忙しいとなると・・・」

「そうだね・・・それでも連絡とか取り合えば大丈夫だと思うし」

「そうですね、オレもたまにならルーを連れてこれると思うし、メガ・又さんだって休暇を取れば大丈夫でしょう。」

「私の方もなんとか合わせてみるよ。メガ・又さんともお話してみたいし。」

そんな感じで話しながら入口に向かうと、何人かの集団がこちらに手を振っている。おそらくフェイトの友達とその関係者だろう。月村さんらしき人がいるので間違いないはず

「来たわね。連絡があったからみんな呼んだけど、やっぱりお昼が先よね、みんなお昼食べてないって言うし」気の強そうな金髪の女性がフェイトに話しかける

「そうだねアリサ。私たちもまだお昼食べてないからそうしよう。」

それにみんなの紹介もしたいし」

「それじゃー中に入りましょう。」

そう言われてそろそろ中に入っていく食事どころはすぐに有ったのでルーと同じ席につく。結構でかいテーブルでる以外にフェイトやエリキヤロ、月村さんに先程の金髪の女性が座った。他の席には月村さんに似た女性とイケメンな男性、その男性に似た人と高町さんに似た人とリンディさん、黒髪の女性、私服姿のファリンさんともう一人の女性が座った

金髪の女性が代表して注文し食事が来る。比較的オーソドックスなファーストフード。しかし、油が抑えられていて女性にやさしそうである

「それじゃーまずは自己紹介をしましょう。殆どの人は知ってるんだけど、知らない子たちのためにね私はアリサ・バニングスです。向こうに座っている人から・・・」そういつてアリサが俺たち以外を説明しだす。

わかった事は月村さんらしき人はそのお姉さんで忍さんと言い、イ

ケメンな男性が高町恭也さんでもう一人の男性が高町士郎さん。高町さん似の女性は桃子さんと言い黒髪の女性が美由希さんといい全員高町さんの家族らしい。桃子さんに関しては何姉ではなく母親らしく女性の神秘を感じる……若すぎだろ

ファリンさんと一緒にいる人はノエルさんと言いファリンさんのお姉さんらしい……ファリンさんとは違いしっかりしてそうである

「そしたらそっちの番ね」そう言っオレから始めようとしたが三人が一斉に立ち上がり自己紹介を始めた。緊張して思わず立ってしまったらしい

「エ、エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシフェ……ルシエです」

「ルーテシア・アルピーノです」最初の二人は少し詰まっだがルー大丈夫だった。それでオレの番になったので自己紹介する

「ジン＝ヤナギバです。よろしくお願ひします」ペこりと頭を下げる。そうすると向こうの席の椅子がいくつか倒れる。高町家のメン

ッだ。しかもこっちに向かってくる始末……何かやらかしたか？

「ええ〜っと、何かご用でしょうか？」

「君がジン君なんだね」土郎が聞いてくる

「他にもジンいると思いますが、一応ジンです」

「なのはを治療してくれた子かい？」

「なのは？……そういえばさつき高町って……？申し訳ないんですけど、高町なのはさんの事ですか？」

「そうかやはり君が……なのはを治療してくれてどうもありがとうございます。」「深々と頭を下げる土郎さん。それに続き他の高町家の人も頭を下げる

「いえ、お気になさらず、医者としての仕事をしただけなんです……つと言いたいところですが、高町さんのご家族なら退かないと思うので此処は素直にお礼だけ受け取っておきます」

「こちらとしては、それだけでは……あ、そうだ、うちは喫茶店をやっているね、なかなか評判なんだ、うちに来てくれたらサービスするよ」

「……機会があればぜひ。ただ、あいにくとそう頻繁にこちらには来れないと思いますが……」

「それは残念だ、けど機会があったら目一杯サービスするからね」

「ありがとうございます」

「うちの人気商品はシュークリームなのよ」桃子が話に入ってくる

「そうですね、今日は無理でしょうが、明後日くらいならいけると思います。一応3日ほど休暇を取って来てるので」

「ホント、じゃー用意しておくわね」

「すみませんが、たくさんお願いします。うちには大食漢が多くてかなりの量を食べるので・・・」

「あら、大家族なの？」

「そう言うわけではないんですが、昔から家族ぐるみで付き合っていてその子がたくさん食べるんです。それにあと少しすると寮暮らしになると思っているので、お土産でも買って行ってあげようかと」

「まあ、それならいっぱい作るわね」

「お願いします。とにかく沢山です」

「了解」その後当たり障りのない会話をして会話を終了する

その後子供たちは待ちきれないと言う感じで三人仲良く遊びに行ってしまった。保護者としてリンディさんが付いて行ったようだ。フ

エイトには友達と遊んで欲しいようだ。

フエイト達と一緒に行かないかと誘われたが、女の子3人に入って行くほど勇気があるほうではないのでジンはこの場で休憩する事にした。桃子さんと土郎さんはカップルのようにデートを開始する。同様に恭也さんと忍ぶさんもデート。溢れた美由希さんをファリンさんとノエルさんが慰めながら廻る運びとなった。

皆が行って静かになる。こういう日はボくっとしてるのが一番だ。持ってきた本を出して皆が戻ってくるまで本を読みふけるのだった

第15話 意外な事実

遊園地に来たのに遊んでいないジン。遠くから見るとみんな楽しそうに園内を廻っている。

持ってきた本もあらかた読み終えたので今はベンチに座ってポクッとしている。ルーが楽しそうにしてるでよかったと思うが、メガ・又さんの代わりに保護者としてきてるのに結構ほったらかしにしてるのは良いのかと思いつつも空を見上げている。

ポクッと空を見てると横から声をかけられた。

「ジン君ちょっと良い？」話しかけられた方向を見ずに答える

「構いませんけど・・・」

「まあ用って程でもないんだけどね、少しお話をしてみたいな」と思っている

「こちらは構いませんが、面白い話なんてできませんよ。それに他の人たちは良いんですか？」

「あ、うん、アリサちゃん達はまだ園内を調査するって言ってたし、私は疲れたから休んでるって言って来てあるから大丈夫だよ」

「そうですか、でも疲れてるなら休んだ方が良いですよ。」

「それも大丈夫、そこまで疲れてるわけでもないから。ただ、ジン君と話がしてみたいなと思ったただけだから。」

「自分で言うのも何なんですけど、オレそんなに面白い人間じゃありませんよ。何か興味を引くような事がありましたっけ、月村さん」
「ジンはやっつと空から視線を話しかけてきた人物に移す。その人物は月村すずかだった」

「お姉ちゃんとかぶるからすずかで良いよ。それと、最初からフアリンと仲良くなれるんだから面白い人だと思うよ」

「まあ出会った時にも言いましたが、年上の人は名前で呼ばないよ
うにしてるんです。なんか慣れなくて……。月村さんのお姉さん

がいる時は、月村さんのお姉さんと呼べば済む事なので」

「でも、それだと大変じゃないの？」

「まあ慣れてますし。それに、一応名前で呼んでる人もいますしね。昔から世話になってる近所の人なんか名前で呼びますし。ちなみに、ルーのお母さんがその一人ですね」

「へえ〜じゃあ、いつかは名前で呼んでもらえるかもしれないんだね。」

「まあそうでしょうけど、月村さんとこの先お会いすることの方が少ないと思いますけど」

「そんなことないと思うよ。これから地球に来たりするんでしょ？ だったらその时会えるかもしれないし、もしかしたら私がそっちに行くかもしれないし」

「月村さんがミッドに来るなら会うかもしれないませんが、オレが地球に来る事はそんなないと思いますよ。今回はたまたまハラオウンさんとの話があって、メガ・又さん・ああルーのお母さんです・その人の代わりについてきただけなので、今後来るとは限りません」

「フエイトちゃんやなのはちゃんとは会ったりしないの？あとはやてちゃんとか」

「あの3人とは知り合い程度の関係なんでそれほど親しいわけではないです。それに会うにしたらってあの人たちはミッドに来ますから地球で会うことはないんですけど・・・」

「・・・そうだね。みんな仕事で忙しそうだし、その内ミッドの方に引越しちゃうかもね。今はまだ中学生だからこっちにいるけど来年には此処を出て行っちゃうかもしれないね。」

「そう言えばこちらには義務教育って言うのがあるんですけど、でもあまり意味はなさそうですね・・・」

「ん？どうして？日本の学力は世界的に見ても高い方なんだよ、あくまで地球内だけ。」

「勉強自体に意味がないと言ってるわけではないんです。以前高町さんとこちらの勉学の事で話したんですけど・・・酷いものでした。」

「

「……で、でもなのはちゃんは理系は得意だよ」「フオーローにまわるすずか

「それもなかなか微妙な感じでしたけどね。執務官になるほどのハラウンさんや捜査官になる八神さんしか比較対象がいなかったのでなんとも言えませんが、高町さんの学力はそれほど高くはないと思っっています。魔法学に関してはわかりませんが……。それに管理局勤めでこちらの勉強を疎かにしてしまっているせいでもあるんでしょうが、それでも問題があります、というよりそれが問題です」

「？」「すずかが首をかしげる

「おそらく学校側は高町さんを黙認しているのでしょう。学校を休んでもある程度の結果さえ残せばあまり気にしてないように思えます。これは他の二人にも言える事です……。そのせいで高町さん達は学校の勉強にそれほど重きを置いていなく、得意教科だけで成績を出している状態です」

「けど、それは悪い事じゃないと思うけど・・・」

「確かにそうです。得意な事を伸ばす事はむしろ喜ばしい事なのです。しかし逆を言ってしまうえば他の事はやらなくても良いという志向になってしまいます。オレも職業上一点突破型ですけど基本的な知識と言うのは必ず役に立つものなのです、それは仕事に就いた後よく思います。けど地球の場合は義務教育と言う名に縛られて勉強そのものに意味をなしていない気がします。だから学校で出されたものさえクリアすればOKという志向につながるわけです。そもそも勉強やらされるものではなくやるものだと思っています。人は昔からいろんな事知って来ました。それはどの世界でも共通でしょう、では月村さんなぜあなたは勉強するんですか？」

「え、え〜と将来必要になるからじゃないかな」

「そうですね。それじゃあなぜ勉強が必要だと思いますか？」

「必要だからじゃないの？」

「まあその通りなんですけど。これは自論なんですけど、昔の人たちは勉強を勉強ととらえていなかったんじゃないかと思います。自分が知りたい事があってその過程で必要になるから学ぶ、そしてまた知りたい事が出来て学ぶといったサイクルを続けてるんだと思います。目的があってそれに沿う、これが勉強の本質だと思っています」

す。勉強はあくまでも手段であって目的ではないという事です」

「でも私たちの中にも良い学校に入るために勉強している人もたくさんいるよ、それは目的を持っているのとは違うの？」

「オレは何も貴方達を否定してるわけではありません。ただ、良い学校に入るために勉強した人のその先はどうでしょう？良い学校にはいったは良いものの。その先の展望を考えていなかったため結局はどうしたかったのかが分からなくなる人が多い」

「そう・・・だね。全員がそう言うわけではないと思うけど、良いところに行ったのに結局やめちゃったりする人が多いってよく聞くな。お姉ちゃんなんかは月村家当主としての自覚があったから学校以外でもたくさん勉強してたっけ」

「結局何をするのかではなく、何がしたいのか。そしてそのために何が必要なのかを考える事が大事なんだと思います。義務教育のメリットとデメリットってわかりますか？」

「メリットは最低限の学力の確保、デメリットは・・・思考の均一化かな」

「メリットの方はそうですね。デメリットの方もそれであっていると思います。ただオレは危機意識のなさを招くものと思っています」

「危機意識？」

「はい、義務教育中は義務だから学校に行かなくてはいけない、裏を返せば義務教育中は学校にさえ行っていればいいんです。そんな環境の中で勉強をするというのはなかなか難しい」

「どうして？」

「誰かにやらされるものと言うのは言い訳ができるんですよ。――自分は思っていないけどやれって言われたからやってるだけ――みたいな考えが出てきます。自分に対して責任を負わず他人に責任転嫁する。これは最終的に自立心を生まない結果を生むと思います」

「じゃあ義務教育は必要ないってこと？」

「いえ、必要ではありません。この日本の学力がそれを証明しているでしょう。ただ、それを活かさきれてないというのもまた事実です。折角勉強するのなら実用的なものにするべきなんです。将来的に使わないから・・・みたいな発想が勉強を阻害するとオレは思うん

ですよ。他にも遊びたいとか理由はありますが、勉強の時間がとれないほど遊ばなきゃいけない人なんていないと思いますし、要はやる気ですね。それは結局先を見据えてない勉強方針が問題だと思っわけです。」

「へえ、なんかジン君先生みたいだね。」

「そんなことはないですよ、実際この案をやるうとするにはかなりの苦勞が伴うでしょう、昔からの習慣を変えるのはなかなか難しいものです」

「そうだね、今でもいろいろ教育課程が見直されてるけどこれと言って成果が出てるわけではないからね。」

「難しい限りです」

「……そう言えばジン君はなんでそんなにここの教育に詳しいの？」

「ああ、ミッドにはいろんな世界の事が書かれてる本が保管されているの書庫があるんです。昔そこに入り浸ってまして、そこでいろ

んな世界の事を知ったのです。その中に地球の事もありました。それに高町さんとの約束の事もあるので最近勉強してるんですよ地球の事。」

「約束？」

「ええ、以前模擬戦をした時に運よく勝ってしまったって、それで模擬戦をまた申し込まれそうになってしまつて、こちらの出すテストに合格できれば引き受ける事にしたんです。もちろん範囲は高町さんに合わせてまして。オレもこちらの事を勉強しなおしてるんです。一応オレの方が年下なので高町さんもがんばって勉強してるようです。オレだつて命は惜しいですから生き残るために頑張っています」

「ええ！！ジン君負けたら死んじゃうの？」

「ええ、残念ながらあの砲撃魔の魔の手から生還する手はないでしょう。負けたが最後砲撃の的に成るだけです」

「なのはちゃんはそんな事をしないとと思うよ」

「知らないんですか？魔王からは逃げられない・・・これはもはや曲げようのない事実なんです。困った事があるとすぐ砲撃を撃とうとする、あの悪魔はためらわないんです」

「でも、なのはちゃんは優しいよ」

「月村さんは本当の姿を見てないだけです。あの人が管理局でなんて呼ばれてるかわかりますか？・・・管理局の白い悪魔ですよ。まず普通の人には付かない名ですよ。きっとその内、悪魔が魔王に変わりますね」

「……………」
「絶句するすずか。親友の新事実言葉が出ないのだから」

「ジン、そうやって騙すのは良くないよ」「フェイトが参入してくる

「騙してないですよ、全て本当の事です。貴方だってあの人が砲撃魔である事は認めてるじゃないですか」

「そ、そうかもしれないけど……………」

「なのはちゃんが変わっちゃったんだね。」遠くの空を見て何か悟った目をするすずか

「すずか！？戻ってきて！なのはは変わってないよ」

「なんと！？昔から砲撃魔とおっしゃるのですか？・・・貴方達よく生きていられましたね」

「そう言う意味じゃないよ！」フェイトが叫ぶが場がかなり混沌としてきた

「何？この状況？」アリサ到来

「いえ、楽しく談笑してるだけですよ。議論の方も解決しました。結果はやはり魔王ということですよ」

「何よそれ」

「気にしないでください。貴方の友達は昔から変わらないという事です」

「なんか納得がいかないけど、まあいいわ。それで、ここの感想を聞きたいんだけど・・・」経営者側から感想を聞かれた。なので話を二人に振る

「だそうですよ、どうだったんですか、お二方？」先程回復した二人に振るがなんか微妙な顔をしている。アリサの方を見ると若干方が震えてる

「風邪ですか？」

「あんに聞いてるのよ！！」アリサが叫ぶ

「・・・と言われましてもオレ此処で本読んでただけですし、どこも廻ってないのでわかりません。あ、でも昼はおいしかったですよ。」

「ハア、あんな今日何しに来たの？」アリサが呆れたように言う

「一応保護者としてきたんですけど、それも微妙なところですね」

「まあいいわ、それじゃー今から何かに乗って来なさい。ついでに園内を見て感想を聞かせて。こういうのはいろいろ意見があった方が参考になるのよ」

「……とても面白かったですマル」

「あんたふざけてるのかしら？」アリサがこめかみをピクピクさせながら言う

「いやさすがに遊園地を一人で見るとかなりきつくないですか？主に精神に」

「なら誰かと一緒に行けば良いじゃないの」

「………なんですかそれは、オレに女性を連れて歩けとおっしゃるのですか？無理に決まってるじゃないですか、全くもう少し考えて物を言ってください。オレはアニメの主人公みたいにモデルわけではないんですよ、女性と歩くなるととてもとても」

「じゃあ私と一緒に廻ろうか？」

「・・・何のつもりでしょう、月村さん？」

「だって、ジン君が一人で回るのは嫌だって言うから、二人なら平気だと思っただけど？」

「そこは、バニングスさんが大人の器量を見せて諦めれば済む事なんじゃ・・・」

「わたしはあきらめる気はないわよ。一人でも多くの感想が聞けた方が良いし」

「わぁー経営者の鏡ですね」

「そうよ、だから私のために行きなさい。それにすずかとデートできるなんて相当な事よ。」

「アリサちゃん！ーデートじゃないよ」顔を真っ赤にしてアリサに言うすずか

「男女が二人で遊園地を廻るのがデートじゃなかったら一体何がデートなのよ」

「それじゃー行きましようか、月村さん？」アリサを無視して席を立とうとする

「え？いいの？」「すずかとアリサの声がかぶる

「良いも何も月村さんと廻れるのなら役得ですし、オレが回るのにはバニングスさん的には決定事項なので一人よりは二人の方が良いじゃないですか。だからと言ってここにいる全員と廻るほどの勇者じゃないですけど」

オレが話しだしている時にフェイトも付いて行くみたいな顔をしてるので先に言うておく。さすがに2対1は辛い

「それじゃーよろしくお願いします」すずかが頭を下げる

「いえいえ、こちらこそお願いします」

そう言って二人で遊園地を廻るのだった。

.....

すずかと園内を廻っていくつかのアトラクションに乗る。意外と楽しめたのはすずかのおかげだろうか、園内を廻りながら会話するのも楽しいものだ。アトラクションもいくつか乗ったので最後は定番の観覧車に乗っている（すずかが教えてくれた）

「こつこつ狭いところに閉じ込められるのはなんかいやですね」

「そう？ 私はこつこついうところ好きだな、好きな人と二人きりになれるし」

「申し訳ないです、今回がオレなんかか。月村さんは将来理想の相手と乗ってください」

「そんなことないよ、ジン君はなんか大人びてるしとても魅力的だと思っよ」

「月村さんに言われると照れますね。うれしい限りです」

そのあと何気ない会話がされるが観覧車がちょうど天辺に来た時急に止まった

「あれ、故障ですかね？」

「どつだろ？でもこのままだとちょっと怖いね」

「その点は問題ないですよ、いざとなった魔法がありますから」

「そう言えばそうだね、ジン君も魔法使いだもんね」ジンの言葉を聞いて安心したさすがが軽く返す

「……それならちょうど良いかな」

「何がですか？」

「……ジン君やっぱり私達前にも会ってると思うんだ。小さい頃」

「オレもそのような記憶がありますが、地球に来たのは今回が初めてですよ、オレの覚えてる限りでは……」

「でも、小さい頃にジン君と話した事があると思うの」

「ん〜、よくわかりませんが、ちょっと聞いてみますね。母さんなら、オレが地球に来たかどうかかわかると思うので」「そう言っただけで、未を取り出し連絡を入れる。すると、すぐに画面が出てきて母親の顔が映る」

「ん？どうしたのジン？今日はルーちゃんと旅行じゃなかった？」

「まあそうなんだけど、ちょっと母さんに聞きたい事があった」

「何？」

「オレって小さい頃地球に来た事あっただけ？」

「何、そんな事？あるじゃない、貴方の父さんの御実家に挨拶に行つた時に一度だけ」

「嘘！あれって地球だったの？父さんが地球出身なのは聞いてたから知ってたけどあの時は母さんの実家だと思つてた。」

「何言つてるのよ、私の実家には何回か言つてるでしょ。全然違つじゃない」

「そんなのわからないよ、大体部屋の中にいるだけなんだから。」

「まあそうよね。あなた同年代の子がいてもあまりしゃべらなかつたし、友達少ないもんね」

「うっ」「ジンの心に何かが刺さる

「でも地球に行った時はずっと女の子と遊んでたじゃない。あの時はジンによくやく友達ができたと思つたわ。たしか、あの人の親せきのご令嬢じゃないかしら……ええっと月村って言つてたよ

うな気がするわ。やくね歳をとると物忘れが激しいわ」

「……………」

「どっしたの？」

「今その時のご令嬢と会ってると言ったらどうする？」

「あら良かったじゃない、貴方の初めてのお友達でしょ。なんならお嫁さんでもいいけど」

「もうボケたんですね。いや〜歳をとると大変ですね。自分の息子の年齢すら忘れるなんて。お歳なので大変でしょう、ではこれで画面の向こうで母親が何か言ってるが無視して通信を切る」

「……………だそうです。すずかさんだったんですね。小さい頃は名字がわからないので名前で呼んでいましたが、まさかあの時の子だったとは……………。よくオレの事覚えていましたね。」

「うん、ジン君は他の子とちょっと違ってたから。それに私の初めてのお友達だし。ジン君に忘れられてたのはちょっと悲しかったけど」

「うつつ、すみません、なんとなく覚えている感じだったんですけど、地球に来た事はないと思ってたんで気づきませんでした。」

「フッフ、冗談だよ。それにジン君もさっき会った時会った事がある気がするって言ってくれたし、少しでも覚えてくれてたんだね」

「まあ初めての友達ですから。あれから会うことはなかったけど、オレの最初の友達ですからね」

「その最初の友達の顔を忘れたのは誰かな」

「すみません」

「フフ、じゃあ罰として今日はうちに泊まらない？」

「……なぜそうなるのでしょうか？」

「だつてずっと会いたいと思ってた人に会えたんだよ、もっと話したいよ。それにホテルにでも泊るんでしょ？だつたらうちに泊まれば問題ないよ。」

「そうなんでしょうけど、それって問題じゃありません？それにル」の意見だつて聞かないといけないし」

「だつたら後で聞いてみよう。それで大丈夫ならお泊り決定つてこ
とで」

「まあオレ的にはありがたいですけど、これでも14なので泊めてくれるホテルをハラオウンさんに聞こうと思ってたくらいですから」

「ジン君って案外計画性ないんだね」

「……」

そんな会話をしていると地面が近づいてくる。いつの間にか動いていたらしい。ようやく地面かと思うとなにやら下に黒ずくめの集団がいる

「あの〜つかぬ事お聞きしますがあの下の方で待ち構えてる人たちはお知り合いですか？」

「え・・・うん、知らないよ。誰だろう？」

「なんか確実にオレ達の事待ってる感じですけど、心当たりあります？」

「・・・」「どつやら心当たりがあるようだ」

「まったく計画的にお金を借りないからその筋の人に狙われるんですよ」

「ちがうよ！あれはたぶん私達月村家を狙ってる人たちだよ」

「もう借金生活ですか、裕福な頃の生活が忘れられないからそういうことになるんですよ」

「だから違うよ。たぶんうちの親戚が雇った人たちだと思う。私を攫ってお姉ちゃんに交渉する気だと思う。」

「……ハア、お金持ちにはお金持ちなりの苦労があるんですね。誘拐なんてパンピーのオレには縁のない話です……あれ？最近されたけど……まあいいや。とりあえずあの人たちを捕まえれば良いんですね」

「危ないよ」すずかが不安そうな顔で言うが

「オレこれでも局員ですよ。武装した程度連中に後れは取りません。まあすずかさんもいるので慎重を期しますが」

ジンがなにか悪だくみを思いついたような顔で笑った。

第16話 事件解決とその後

「それで結局どうするの？もうすぐ下に着いちゃうよ」

「まあオレが魔法使いってところを見せますよ。とりあえずしゃがんでください。」言われた通りしゃがむすずか

「とりあえず転移で場所を移しましょう。ここにちゃんと身代わりを残して」

「そんなことできるの！？なのはちゃん達に魔法を見せてもらったことあるけど、そう言うことできなかつたよ」

「オレはあの人たちと違ってこういうセコイ感じの魔法が得意なんですよ。・・・それじゃ移動しますね」

そういつて場所を移す。今いるのは黒服達が見えるところ。あちらがこちらに注意を払えば気づけるが、上にいる囿を見ているためこちらには気づかない。

「そろそろ囿が地面に着きますよ。とりあえず見ててください」

そう言われてじっと状況を見守るすずか。すると観覧車が地面に着いた瞬間黒服達が一斉に入り中にいる二人を取り押さえる。偽ジンと偽すずかは抵抗しているように見えるが銃を突きつけられおとなしくしたようだ。

それを見て黒服達は油断し偽ジンが行動に出る。正面にいたやつに飛びつく。相手の方もとつさに避けようとしたが油断していたためそのまま押し倒される。その事に怒りを覚えたのか偽ジンに向かって銃を発砲

偽ジンが崩れ、偽すずかが叫ぶ。これを聞けば入り口近くにいるフイト達にも聞こえるだろう。男たちも慌てて偽すずかを連れて立ち去る

しばらくしてから騒ぎを聞きつけた高町家や月村家が到着した。倒れてるジンを見て顔がこわばるが、さすがにそろそろ良いかなと思いをかける

「どうかしましたか？怪我人でも出たのなら治療しますが」

「そうだ、ジン。ジンが撃たれてここで倒れて……あれ？無事なのかジン」慌てていた恭也がジンに詰め寄るが撃たれたと思っ
ているジンが現れてビックリしている。他のメンツも同様である

「魔法かい？」意外に冷静な士郎がジンに尋ねる

「ええ、身代わりをここに残しオレ達は別の場所に移動しました。
すずかさんも無事です。」そう言って後ろにいるすずかを出す

「すずか！」姉の忍がすずかに抱きつく。心配をかけさせてしまった

「で、でも先程連れて行かれたすずかちゃんは……」「ファリン
が混乱しながらも聞く

「あれも身代わりです。それよりもどうしますか？一応オレの魔法
なんで居場所はわかりますが、しばらくすると消えちゃうんですけ
ど」

「そうね、まず首謀者を捕まえに行きましょうか。私の妹に手を出

そうとした報いを受けてもらっわ」「忍が何かドス黒いオーラをだす。若干周りが引いている

「ま、まあオレ達も協力するさ。こっついうやつは徹底的にやらないと調子に乗るからな」恭也が協力を宣言する

「ありがとう恭也。それで居場所はどこかしら？」

「ここから2キロ先を移動中ですね。なんか港の方に行くって言ってます」

「会話がわかるのかい？便利な魔法だね、うちのなのはもこっついう事ができるのかい？」士郎が感心したように言う。

「いやできないと思いますよ。オレはどちらかと言うと裏方なんでこっついう魔法の方が得意なだけです。ハラオウンさんだって無理だと思えます」

「そっか、すごいんだね。ジン君って」美由希も会話に加わる

「それじゃー恭也、行きましようか。ノエル準備してちょうだい。ファリンはすずかと一緒にいてあげて」

「畏まりました」「はい」

「敵戦力は大体10人くらいですね。ボスらしき人を除けば全員武器を所持してますね。あとなんか人じゃない感じの人もいますね。．．．おそらくロボットか人形みたいな感じですね。感じ的にはエーアリヒカイトさん達に近いですね」

「!?!」周りが驚く。

「これでも医者ですよ。見ればわかりますよ」

「そ、そう。．．．この事は．．．」「忍が言いづらそうに言っ

「別に何もしませんよ。人間でないだけで人ではあるんですか」

「どづいう事?」「すずかが真剣な表情で尋ねる

「生物学的には人間と言う区分に入らないんでしようが、エアリヒカイトさん達は貴方達の家族なんでしょう？それに感情もあるようですし、そこまであつたら十分に人でしよう。種族が人間ではないというだけの事です。」

「・・・でも普通の人とは違うんだよ？」

「やけに食いつきますね・・・それで、それがどうかしましたか？」

「え！？」

「普通と違う、確かにそうでしょうが普通と違う人なんてこの世に一杯いますよ。そもそも正確に普通と言える人なんてほとんどいませんよ。どこかしら違うんです。だってそれが人ですよ。みんなが同じなんてありえません。世の中には良い人だっている。それに善人過ぎればあなたから見ればそれは異常ですし、根っからの性格破たん者だっている。それに普通と違うって意味ならオレだって十分に異常ですよ、魔法が使えるんですから。」

「……」

「普通でない事に問題なんてないんですよ、他人の迷惑にならないければ……要は他の人になんと言われようとしつかりと自分を保てばいい、そして自分の事をわかってくれる人を見つければ良いんです。万人に好かれる人なんてそうそういませんよ。みんな普通にそうやって生きてます。だから人間じゃない事に問題なんてないんですよ」

そう言うはずか泣きだした

「ええ！？何でそこで泣いちゃうんですか？なんかオレが泣かしたみたいじゃないですか」

「うちの妹を泣かすなんて、責任とってちょうだいね」忍がニッコリと笑う

「そつだぞ、女の子を泣かせた責任はとらないといけないな」恭也も乗ってくる。ここでひいては後は弄られるのみ……ならば

「そういう意味では高町さんのお兄さんも余程多くの責任を取って来たのでしよう。先達としてご教授願いませんか？」

「グッ」

「ハハ、そうだよ、恭ちゃんいろんな女性を泣かせちゃってるもんね」美由希が乗る

「恭也……」士郎が息子を蔑むような目で見る

「違う！オレはそんなことしてない！！」

「自分の非を認めるのも男らしさですよ……たぶん（ボソ）」

ジンをからかう筈だった状況から無理やり恭也に移す。恭也がイケメンなのでそういう事があるんじゃないかな程度で話してみたが本当だったようだ。

そんな感じで場が和んでいるとすずかが落ち着いたようだ

「ジン君、後で話があるから」そう言っただけでファリンと一緒にアリサ達の方に向かった

「・・・オレなんか悪い事したっけ？」お話しが、O・H・A・N・A・S・H・Iに聞こえてしまうのはどうしてだろうかとジンは深く悩むのだった

その後場が元に戻って作戦会議が開かれる

「それじゃーオレと父さん、ノエルが突入して、忍と美由希は後づめで待機してくれ。制圧次第連絡する」

「そうね、それで行きましょう。向こうには自動人形がいるみたいだし、無茶はしないでね」

「あ〜ちょっと良いですか？」

「何？」

「場を制圧するだけで良いのならオレができますよ」

「嘘！？ジン君ってお医者さんじゃないの？」美由希が驚きながら聞いてくる

「まあそうですね、一応武装局員でして・・・荒事の対処もある程度できます」

「ホントに大丈夫なのかい？無理はしなくて良いだよ？」土郎が心配そうに聞いてくるが

「別にオレが直接制圧に行くわけじゃないんで危険はないです」

「どづいつこと？」「忍が聞いてくる

「オレの能力ですね。油断してる相手なら余裕で鎮圧できます。ただその自動人形だけはどうなるかわかりませんが」

「それでも他の連中を倒してくれるのなら大助かりだ。あとはこちらで対処できるから」恭也がそう言う

「それじゃー行きましようか。早く終わらせないとルー達が心配するので」

「それじゃー早速移動しましょう。ノエル車を出して頂戴」

「その必要はないですよ・・・言ったじゃないですかオレ魔法使いなんです」その言葉が終わると同時に転移した

.....

「え？」美由希が声を漏らしたが自分が今どういう状況にあるのかわからないようだ

「静かにしてください。気づかれます」小声で言う

「ちょっとこれどういう事!?!」美由希も焦っているようだ。がちゃんと小声で話す

「オレが転移で皆をここに連れてきただけです。早く準備をしてください、他の方はもう準備できてますよ」

「え?」周りを見てすでに戦闘態勢に入っている事に気づく。どうしてこんなにも早く順応できるのだろうか、私の方がおかしいのだろうか。と思ってしまう美由希

「美由希もまだまだだな。帰ったら鍛えなおさないと」恭也が物騒な事を言う

「冗談だよね!?! 恭ちゃん」

「静かにしてくださいって」

「そつだぞ美由希」

そついわれて落ち込む美由希

「それではこちらから仕掛けます。仕掛け終わったら中に転移させますんで中の人たちの捕縛をお願いします」

「わかった。それでどう仕掛けるんだい？」

「オレには魔力を爆弾に変える能力があるんですよ。ちゃんと非殺傷だから死にはしませんし、衝撃で昏倒するくらいの威力にするんです。あとはお願いします」

「でも、その爆発させるものなんてあつたけ？」復活した美由希が聞いてくる

「すずかさんがいなくて良かった。身代わりとはいえ自分が爆発するところなんて見たくないでしょうから」

「まさか！？」美由希も何が爆発するかわかったようだ

「行きます」その言葉と同時に轟音が鳴り響き、美由希が何かを

言う前に転移させた。

結局戦闘はほとんど行われなかった。ジンが最初に行った爆発でほぼ全員が気絶、残っていた自動人形も主人を失い沈黙。命令がなかったらしくそのまま忍とノエルによって停止された。高町家は気絶した者たちをすぐさま捕縛。捕縛された者たちは警察の御用となり、忍によってトラウマを植え付けられてしまったためこの先出所したとしても月村家に関わろうとはしないだろう。

ちなみに忍のトラウマを植え付ける姿を見た恭也は忍は絶対に怒らしてはならないと心に刻み込んだらしい。

誘拐騒動も粗方方が付いたので遊園地に戻る。戻った後は何をしていたのかアリサ達に問い詰められたが適当にごまかして何とか逃げた。誘拐犯を捕まえに行っていましたとは言えないし、人助けとはいえ魔法も行使しているのでフェイトやリンディ辺りにバレるのはまづい。適当にごまかすしかなかったともいえる

その後、納得してないアリサだったが、さすがが助け船を出してくれたのでなんとか引き下がった。だが、今度は遊園地の感想を聞かれる事になりすずかと廻ったのはそれほど多くないので、少ないながらも良い点と悪い点を述べた。と言うか空戦魔導師に絶叫系の感想は無理なんじゃないだろうか、もっとすごいアクロバティックなことをしてるのに怖いとか楽しいとか、そんな感想出てこないと思う

とりあえず、こちらの感想に満足したらしく（他の人たちはあまり悪い点は述べなかつたらしいので悪い点まで言ってくれた事が良かったようだ）それ以上絡まれることはなかった。

それと今回のお礼がしたいということなので忍が自宅に招待してくれる運びとなった……先にすずかに誘われているんですが……

その事もあって、ルーに確認をとる事にした。ルーに確認したら快く了承してくれたが、泊る場所を考えてなかった事にダメ出しをされてしまった。6歳児にダメ出しをされるオレって……

遊園地の調査はここで終了。子供たちは大いに喜び、当初の目的は達成できた。ルーも他の二人と友達になれたようで良かった。しかしここで問題が発生。なんとキャラ口がルーともっと話したいと言い出した。こちらとしては良い事なんだが、今はタイミングが悪い。

ルーをハラウン家に預けるといふ選択肢があるが、さすがにメガ
・又さんの代わりの保護者として来てるのでそれは拙い。でも、す
ずかや忍との話も大事そうなので断れない。そのことをフェイトと
すずかに話したら、なんとエリオとキャロも泊れば良いと言い出し
た。当然保護者としてフェイトも来る。さらには便乗してアリサも
泊るといふ始末。・・・どうしてこうなった？

.....

その後ノエルさんが運転する車に乗り込み月村家へ移動。ルーとオ
レの荷物はリンディさんの車から移してある。フェイト達はいつた
ん帰って準備してから来るらしい。

フェイトが来る前にすずかを含めた月村家の方から大事な話がある
という。なぜか恭也もいるが、おそらく関係者なのだろう。ルーは
今ファリンさんに面倒を見てもらっている

「とりあえず、今回の事に関して、月村家当主として、お礼を先に
言わせてもらいます、ありがとうございました。」向かいあったイ
スから立ちあがって頭を下げる忍

「いいえ、お気になさらないください。たまたまです。あの状況です。かさんを見捨てるという選択はなかったですし、オレも一緒に誘拐なんてされる気はなかった。ただお礼だけは受け取っておきます」

「そうしてもらえると助かるわ。それでここからが本題なんだけど・・・これはなぜですか？狙われたのかから話す必要があるわね」

「身代金とかじゃないんですか？・・・でもそれだったらバニングスさんも狙うか・・・」

「お金じゃないわ。理由は月村家にあるの」

「エーアリヒカイトさん連絡みですか？」

「そうね。うちは夜の一族と言つものでも月村家は由緒正しい家柄なのよ。ここから先はさすがが言いたいそうだから、聞いてあげて」

「夜の一族？」ジンがすずかに聞く

「私はたちは特殊な人間なの」すずかが言い辛そうに言う

「特殊？それは俺たちみたいなものですか？でも魔導師には必ずあるリンカ コアがありませんよ。」

「ジン君達とは違うの。私たち夜の一族は吸血鬼の集団なの」それを言うときすずかが下を向いてしまった

「吸血鬼ですか・・・地球で言うとき血を吸う妖怪の類でしたっけ？なんかの本で読んだ事があります」

「正確には吸血鬼のようなものと言うのが正しいわ。妖怪と言うわけじゃないの。ただ普通の人間とも違うわ。突然変異が定着した種族で、美しい容姿と明晰な頭脳、高い運動能力や再生能力、あるいは心理操作能力や霊感など数々の特殊能力を持つ集団なのよ。これらの代償として体内で生成される栄養価、特に鉄分のバランスが悪いため、完全栄養食である人間の生き血を求める。私たちは人の血

を吸うのよ」「さすがの代わりに忍が説明を入れる

「そういえば、吸った人を吸血鬼にできるんですけどっけ？」

「さっきも言ったけど私たちは吸血鬼に似ているだけで完璧に吸血鬼であるわけじゃないの、だから血を吸ったからと言って吸血鬼にできるわけではないわ。せいぜい貧血になる程度ね。中には死ぬまで吸うやつもいるけど」

「それで、それをオレに話してなんか意味があるんですか？」下を向いたまま、その言葉を聞いてさすがが答える

「ジン君は怖くないの？私たちは化け物なんだよ！」

「そんなこと言ったらオレだって十分化け物ですよ。普通の人に魔法なんて使えないんですから」

「でも、私たちは人の血を吸うんだよ」

「まあ、それだって人を襲って吸ってるわけじゃないんでしょ？さすがにそう言うことされたらあれが……」

「そんなことはしてないよ！今は輸血パックから吸ってるから」

「でしょう？だって怖くはありませんよ。他人に害をなしてないなら恐れるような事はありません」

「でも、人よりも力が強いから相手を傷つけちゃうかもしれないよ」

「そんなの誰だってそうですよ。今日子供でさえ人を殺したりするんですよ、それに物理的にやらなくても精神的に人を傷つける人なんて一杯います。力が強い事が悪いわけじゃない。使い方が問題なだけです。使い方を誤れば力の大小など関係なく人を傷つけます」

「随分としつかりとした考え方ね。でもみんながみんなあなたの言うような考え方ができるわけではないわ。人は異端を嫌うものなのよ」忍が今までの経験から語る

「それはどんな動物だってそうですよ。でも、異端でなくなっただけ嫌いの物は嫌いだし異端であっても好きなものは好きこれもまたどんな動物だって変わらないと思います。だから高町さんのお兄さんはあなたと共にいるのでしょうか？」

「・・・そうね、確かにその通りだわ」

「だから、オレにとって貴方達は別段普通と変わらない。まああくまで地球外の人間の意見ですけど・・・」

「それじゃ、ジン君は私の事を気持ち悪く思わないの？」「さすがが訴えるような顔をして聞く」

「他の人がどう思うかは知りませんが、オレ個人ではそんなこと思わないですよ。逆に聞きますがあなたはオレが気持ち悪くないんですか？」

「私もそんなことは思わないよ」「さすがはつきりと答える」

「それは良かったです。初めての友達に嫌われるのは嫌ですから」

「私もそうだよ」すずかが嬉しそうに答える

「それじゃ〜話もまとまったところで契約に入りましょう」忍が真剣モードをとりて明るい声で言う

「契約？」

「そ、契約。夜の一族の事を他言しないようにしてもらったためにする契約よ」

「何するんですか？」

「簡単よ。すずかと恋人になればいいのよ？」

「お姉ちゃん!!」すずかが顔を赤くして言う

「冗談よ。ただ誓ってくればいい、ただその誓いを破れば……」

「大丈夫ですよ。誓います、この事は誰にも口外しません」

「宜しい。本当は月村家の身内にするために結婚とかさせるんだけど、貴方達にそれはいらぬわね。なんかすぐにくつつきそうだし」

「もうお姉ちゃん!!」

「ハハハ、冗談よすずか。でも頑張りなさい、彼みたい人はなかなかないから、絶対に逃しちゃうダメよ」

「……うん」すずかが顔を赤くしながらもちいさく頷いた。当のジンは恭也と話して見ていない

話し終えた頃にフェイト達が到着しみんな夕飯を食べることとなった。すずかの事はフェイト達には話しているのかと尋ねたら、ただだったらしく、全員が揃った時に打ち明けるようだ。今日の事で決心が付いたらしい。

- - - - -

夕飯も終わって各自が部屋に戻る。子供たちは同じ部屋でフェイトやアリスはすずかと一緒に寝たい。溢れたジンが一人さびしく一人部屋になるかと思っただが、ルーがまだ見知らぬ土地で寝るのは心細いらしくオレが子供部屋で寝ることとなった。フェイトもエリオとキヤロを心配して一緒に寝ようとしたがさすがにそれは拙いので、何とか説得して引き下がってもらった。

今は部屋も決まったのでそれぞれの部屋でお話をしている。さすがに子供の会話に入っていくわけにはいかないのですずか達の部屋に御厄介になる。これはこれで問題があるような気がするが・・・

「今日は楽しかったね」

「そうだね、すずか。アリサも今日はありがとう。おかげでエリオ達もすごく喜んでくれた」

「別に気にしなくていいわ、こっちも協力してもらったわけだしお互いさまよ」素直にお礼を言われて照れて見えるようなアリサ

「あれがツンデレなんですね。初めて見ました。実際見るとなんか面倒な感じですね、すずかさん」

「ジン君、あれはすごくかわいいんだよ。うれしいけどそれを素直に表せないそんな乙女の表情なんだよ」

「なるほど〜深いです。自分はまだその域には達していませんでした。これから精進します」

「頑張つてね、アリサちゃんはすごくかわいいから。」

「ちょっとそこの二人聞こえてるわよ！誰がツンデレよ」

「え！？」「二人の声が揃う」

「何、その自覚ないの」「って感じの反応は！！私はツンデレなんかじゃないわよ！」

「またまた」

「だ・か・ら」「ホントはわかってるくせに」「みたいな反応はやめなさい！」

304

「アリサ落ち着いて」

「離さないフエイト、あのニヤニヤした顔を止めさせないと」

「ジンもすずかもあまりアリサをからかつちゃダメだよ」

「フフフ、ごめんねアリサちゃん。アリサちゃんがかわいくてつい

「すみませんね、バニングスさん、ただ暇だったんでからかっただけです」

「あなたの方は性質が悪いわ!」

「冗談ですよ、冗談……2割くらい(ボソ)」

「最後の言葉聞こえてるわよ!もう!!!」

「バニングスさん、夜中なんだから静かにしないと近所迷惑ですよ」

「大丈夫よ、すずかの内の近くに家はないわ!」

「そついう問題ではないですけど……ハア」

「な・に・よ、その反応は〜！〜！〜！」

「アリサ落ち着いて、ジン！これ以上アリサを怒らせないで」

「了解です」ひとしきりいじったのでとりあえず満足しておく。

「ところでさあ、あんたとすずか妙に仲良くなったじゃない？すずかだけ名前で呼んじやったりして」「ニヤニヤしながら話を変えるアリサ」

「ああそれですか。これには深い事情がありました詮索無用でお願いします」

「何よ、良いじゃない教えてくれたって」

「アリサあんまり無理言っちゃダメだよ」

「まあ、別にかまわないんですけど」

良いのかよ！みたいな顔でジンを見るアリサとフェイト。すずかはただ笑っているだけ

「大したことではないんですけど、すずかさんはオレにできた初めての友達ですから」

「……あなた、大変だったのね。今まで友達ができなかったなんて……私でよければ友達になるわよ」

「ジン、言ってくれば……」盛大に勘違いする二人

「え、いや、あの、勘違いしないでください。別に今日友達になっただけじゃないですから」

とりあえず弁解から始めるジンだった

第17話 空気ヨメ

「オレとすずかさんは小さい時に一度会ってるんです」

「でもあんたはあっちの世界の人なんでしょ？ だったら会えないじゃないの」

「ええ、オレもそう思って今日最初に会ってすずかさんに聞かれた時はわからなかったんです。すずかさんは気づいたようなんですけど」

「ジン君忘れてたもんね」

「うっ。・・・その時似たような子とは会った事あるけど、あれは管理世界での出来事だと思ってたんで気づかなかったんです。それで遊園地に行つて二人で話してた時にやっぱり会った事があるんじゃないか？ という話になりました、母さんに聞いてみたんです。すると、オレが管理世界だと思ってたのは実際は地球で、似ている子じゃなくて本人さんだった訳です」

「へえ、そんな事があつたんだ。だからすずかは私達と友達になつた時、一番最初って言わなかったのね。なのはや私はそうだけど、

「すずかは一人居るって言うてたもんね。ただ会えなくなっちゃったって言うてたけど、こいつがそうだったのね」

「そうだよ。ジン君とは小さい頃にあつてそれっきり。連絡先はわからないから会えなかったんだ。親戚の集まりで行けば会えると思つてたんだけど、それ以来一回も会えなかったんだよね」

「母さんが仕事が忙しくなかなか動けなかったもので、その後オレが8歳の時にちよつとした事件に巻き込まれて、下半身不随になつてしまつたんです。オレはそれを治すために医者になることを決めました。母さんの治療は終わったけど、今度はオレが忙しくなつたものですから、なかなか遠出する機会がなかったんです」

「世の中って狭いのね。でもなんでジンはこつちの世界に来たの？」

「オレの父さん、オレが生まれてすぐ事故で死んだらしいですが、父さんが地球の出身らしく母さんが親戚に挨拶に来たんです。オレはそれにくつついて行つただけです」

「ごめんなさい。知らなかったとはいえ・・・」アリサが謝る

「父のことですか？気にしないで良いですよ、オレも覚えてるわけではないんで実感わかないんで。ちゃんと父代わりみたいなのはいいましたし」ゼストの事を思いながら言うジンの表情はどこか辛そうなものでった。ジンは3人とは違う方を見ながら言ったので顔自体は見られてない

「そう、なら気にしないわ」

「切り替えの早い事は良い事ですよ。どんな職場についても重宝されます。」

「褒め言葉として受け取っておくわ」

「普通に褒めてます・・・あ、照れてますね？さすがさん、これもツンデレですね。ちょっとわかったような気がします」

「うん。これはなかなか判りづらいところだよ。よくわかったね」

「そこ！本人を前にして変な会話すんじゃないわよ！」

「すみません……わざとです」

「ムキイイイイイ！！」アリサの臨界点が突破した

「ジン、そう言うの良くないよ。すずかも。……でも結局ツンデレってなんなの？」アリサを抑えながら、疑問に思った事を口にするフェイト

「アリサちゃんの事だね」

「そうですね。アリサ・バニングスとかいてツンデレと読むくらいのレベルです。彼女のためにあるような代名詞でしょう」

「そうなんだ。かわいいつて事かな？」天然なフェイトの対応がまぶしかった

「それで良いと思います」「うん」オレとすずかの同意にフェイトは良かったと思いき息ついた。アリサはもう何も言わなくなった。これ以上反応してもまた弄られるだけだという事を理解しているようだ

ある程度話も終わったのでそろそろ寝ようと思いつつさ達の部屋を後にする。フェイトも一応子供たちの様子を見るためについてくるようだ

子供部屋に着いたが何か騒がしい。何かで盛り上がっているのかなと思いつつも、二人で部屋に入る

「随分盛り上がっているようだけど、なんか面白い話題でもあったのか？」

「あ、お兄ちゃん。・・・お兄ちゃんからも言っておいて、お兄ちゃんの方がフェイトさんよりもすごいわ！」「ルーが珍しく気合が入っている。その気合の入り具合にちょっと引いた

「フェイトさんの方がすごいよ」「そうだよ」「エリキヤロも応戦

「ええ〜っと何の話かな、ルーテシアさん？」

「私がお兄ちゃんの事がすごいって教えてたら、エリオとキャロがフェイトさんの方がすごいって言うから……」

「ちよつと言い合いになったと……意外にルーも子供だな〜」
二人随分仲良くなれたようで良かったと思うが、言い合いまでするとは……しかもその内容が自分を擁護するもの……ちよつと恥ずかしい

「子供だもん」プイっとな顔をそむけるルー

「フェイトさんからルーちゃんに言っただけでお願いします、フェイトさんの方がすごいって！」キャロも気合が入っている

「え、あの、うん、その「普段見ないキャロをみて困惑するフェイト。ここで助け船を出そう」

「それじゃー三人に聞くが、何をもってすごいと言えると思う？ 戦闘か、頭脳か、はたまた別のものか？」

「よくわかんない」「僕も」「私も」子供に出すような問題ではなかったようだ

「ハハ、悪かったな、まだ難しかったな。でもこれだけは覚えておいてくれ、すごさにはいつぱいあるんだ。だから、他人と比べたって仕方がないってことだ。人のためになるならどっちがすごいとか関係ないだろ」

「うん」「はい」「はい」「どうやらわかってくれたようだ」

「でも、お兄ちゃんとフェイトさんならお兄ちゃんの方が強いよね？」「前言撤回、あまりわかってくれてないらしい」

「フェイトさんの方だよ」「そうだよルーちゃん」

「オレの言った事がわかってもらえてないようであれだが、戦闘だ

「つたらオレが負けるんじゃないかな。オレどちらかと言つとサポーター派だし」

「ほらルーちゃんのお兄さんだつてそう言つてるよ」

「お兄ちゃん……」嬉しそうにするキャロにちよつと泣きそうなるルー。子供特有の優越感だろつ。ルーを悲しませるのはあれだが、下手に何かを言つてフェイトと戦う事になる事になったら目も当てられないのでここは黙つておく。すまんルー、意気地のオレを許してくれ

そんなこと思つていと事態を悪化させる天然さん登場……空気
ヨメ

「そんなことないと思うよ、ジンはなのにも勝つくらいだから、私だつて勝てないかもしれぬ」

その言葉を聞いてルーの顔に笑顔が戻つた

「それじゃーどつちが強いの？」ルーが聞いてくる

「ちよつとわからないかな。やってみないと・・・」危ない発言をするフェイト・・・バトルマニアか！

「いやいや若くして本局の執務官になられるほどのハラウンさんに一般局員のオレが勝てるわけないじゃないですか。冗談はよしてくださいよ、ハツハハハ」

「ジンだって小さい頃に医務官になつたんでしょう？私と変わらな
いよ」

「何をバカなこと言ってるんですか？医務官と執務官では戦う場所
が違つてしょうが」

「でも、なのはにだって勝つたし」

「あれもたまたまですよ」

「お二人が戦えばいいんじゃないでしょうか？」何とかごまかそう

としてるのに、エリオが余計な事を言う

「ちよ〜つとエリオ君、お話しようか？主に君の空気の読めない事に関して。大丈夫きつちりとわからせてあげよう」オレの表情をみてエリオが後ずさるが、その前にフェイトが立つ

「ジンでも、エリオをいじめると許さないよ」

「何を言ってるんですか、オレは男として空気の読める男にしてやるうと・・・」

「ジン勝負だよ！」

「話を聞いてください」

その後説得を試みようと奮闘したが、親バカっぷりを発揮したフェイトには何を言っても通じず、子供の方を懐柔しようたしもフェイトが阻止して結局模擬戦をする事になった。その話がアリサ達にもバレたため、明日その模擬戦を観戦するらしい。しかも迷惑がかからないようにバニングス家が所有する何もない無人島のようなところで戦う事となった。模擬戦が決定してからアリサが驚くべき速さで場所を抑え、フェイトがリンディに封鎖領域を展開してもらう約

束を取り付けた。管理外魔法使用はダメじゃないのか？オレが言えた義理じゃないけど・・・

どうやらリンディが許可を取り付けたようだ。恐るべしハラオウン一家

翌朝、起きたら船の上にあった。正確には船の個室にあるベット。オレが寝てる間にアリサが運んだらしい。驚かせようとしたらしく、丁寧に睡眠薬まで嗅がせて起きられないようにしてまでやる仕込みっぷり。どんだけ

とりあえずムカついたので不貞寝。なぜかルーがオレの上で寝てたが気にしない事にする。その光景を見たアリサからロリコン疑惑をかけられたが、

「家族愛ですけど、何か問題がありますか？まさか、バニングスさんは家族に欲情するんですか？・・・ちよつと近付かないで貰えませんか、ルーの教育に悪いので」と言ったら烈火のごとく怒りだし鉄拳を振る舞う。からかい過ぎるのも考え物だな〜と思いつつ意識がおちて行った。

次に目覚めると船が到着していた。海鳴市はまだ寒かったがここは

非常に暖かい。プライベートビーチらしくお金持ちのすごさを改めて痛感した。

「それで、いつからやるんですか？」

「ジンが準備できればいつでもいいよ。母さんもいつでも良いって言うてるし」

「それじゃあ、あと5年位待ってもらえます？それくらいには準備できると思うので」

「うん、わかった……っジン！また人をからかって」

「いや、割と本気なんですけど……」

「もう準備できてるなら、外に行くよ。みんな待ってるから」そう言われてフェイトに引っ張られながら外に向かうのだった

少し考えたようだがリンディが了承してくれた。実際そんな理由で言ったわけじゃない。基本的に自分の戦闘記録が残されるのはジーンにとって良くないため、この提案をするしかなかった。リンディが本当に記録しないとは思っていないため、ファントムを使って撮影機材にハッキングをかける。仮に撮影されようともこっちで勝手に消せるし、どこかに送られようとしてもファントムが阻止するのでこれで問題なく戦える。あちらがこちらのハッキングに気づいたとしても言質をとったのでなんとでもなる

「それじゃ、始め！」リンディの合図で試合が始まった

まずはフェイトがこちらに突っ込んでくる

「ハアアア」形態をアサルトフォームにして鎌をを振り上げながらこちらに来る

さすがにそんな簡単に接近を許すわけにはいかないの、牽制弾を撃って足止めしている。ファントムの形態はワンハンド型。第二形態がトウ・ハンド型。第三、四形態もあるがここでは使わない、奥の手は見せないのが普通だ

自分の足元に数発撃ちこまれたため、フェイトも減速。こちらの様子をつかがいながら近づいてくる。

「接近してしまえば勝てると思ってます？甘いですよ。オレがそんなこと許すわけじゃないですか。ファントム、シルエツト」
そう言っつて五体ほどの分身を出す

「オレの能力は以前説明しましたね？フェイクだと思って甘く見るとケガしますよ？」

「知ってるよ。甘く見るつもりはないし、油断もしない。それにジンの全力を私は知らない」

「オレはだいたい知ってるんですけどね。有名人ともなると戦闘記録が残っているのだからあなたの戦闘パターンは分析済みですよ。さすがに全力まではわかりませんが、予測はつきます。先に言っておきますが早さが主体の相手ならオレにとって相性は最高ですね。オレ的に一番相性が悪いのは高町さんですから」

「その手には乗らないよ。こつちを焦らそうとしても無駄」

「残る念、高町さんなら簡単に引つかかるのに……でも嘘に聞こえる本当っていうのもあるんですよ」「そう言つと自分の分身をフエイトの周りに転移させる」

「クツ、でもこれくらいならなんとでもなるよ！このシルエット自体は少し頑丈つてだけなんだから」そう言つて自分の正面のシルエットに斬りかかり、そして斬りつけた……がしかし

「キャー！！」フエイトが切りつけた瞬間シルエットが爆発した。その反動でフエイトが吹っ飛ぶ

「高町さんなどの模擬戦を見て判断したんでしょうが、少し不注意ですよ？オレの能力は魔力を爆弾に変えられるんです。シルエットだって例外じゃない」

「……でも、これでシルエットから離れた。今度はこつちの番だよ」「そう言つてソニックムーブでこちらに近づこうとするが

「甘いですね」フェイトが突っ込んでくるところにシルエットを移動させ防御する。接近戦主体の魔導師封じの鉄壁の防御。自分から近付いて攻撃するタイプの魔導師は攻撃しないとダメージを与えられない。しかし攻撃した相手は爆発するとなると攻撃もできない

「あなたは速さが売りなんでしょうが、そんな物オレには無意味です。早く動いて消えたように見えても、実態はあるのですからオレまでは届きません」

「私にだって射撃魔法くらいある！ハーケンセイバー」フェイトから斬撃が飛んでくる

「ご苦労様です」そう言うと魔法陣が登場しハーケンセイバーを吸収そしてフェイトの間後ろに転移させる

フェイトも魔法陣が出た段階で素早く反応し自分に向かってくる攻撃を回避する。が急な回避で態勢が崩れる

「そろそろお終いにしましょう。これでチェックです」魔力弾を5発フェイトに向かって撃ち、シルエットも特攻させる

フェイトも何とか回避するが次に来たシルエットへの対処が間に合わない。自爆覚悟で魔力弾を放ち誘爆させようとするが、今度のシルエットは爆発せずに魔力弾はそのまま通り抜けた

「チェックメイト」虚を突かれたフェイトは転移で後ろに回り込んだジンに反応できず頭に銃を突きつけられたので敢え無く降参となった。

- - - - -

フェイトとの模擬戦も終わり観客の所へ戻る。ルーは大喜びでエリオとキャロは驚いた様子、リンディに関しては表情に出さないようにしているが何か考えている

「二人ともお疲れ様。すごかったよ」さすがが労いの言葉をくれる

「そうね、フェイトに勝てるとは思わなかったけど、あんた意外とやるじゃない」ツンデレ

「ホントね。フェイトはかなり強い方なんですけど、簡単に勝ってしまっただわ」リンディ

その後子供たちからも同じような感想を貰った。ルーだけはやけに褒めちぎっていたけど・・・

フェイトにも同様に労いの言葉がかけられているようだが、簡単に倒されてしまったてどうやら落ち込んでいるようだ。面倒なので励ましたりはしないのだが・・・

「ちょっと良いかしら？」リンディに呼びとめられる

「何ですか？」

「あなたの魔法について聞きたい事があるんだけど・・・」

「ノーコメントで。魔法技術に関しては個人の判断で情報を提供もしくは遮断ができるので、こちらからお教えする事はありません。撮影がされてない以上オレの情報は漏れませんし」

「そうね。仕方ないわ」簡単に引き下がるリンディ、この感じだと・
・
「ちなみにあなたが約束を破ってこの戦闘を撮影してる場合があるので、こちらで撮影機材にハッキングしたのでたとえ記録されても消去済みです。同様に情報を送ろうとしても無理なのであしからず」

「え!？」

「その反応をみると、やはり撮影していたのですね？地上の戦力でも調べようとでもしましたか？そう言う事をやってるから本局の人は嫌われるんですよ。約束を守らないのは人として最低です」

「……………」ニコツとして表情を崩さないが、逆にそれが無様に見える

「休暇中なのであれですが、上官の方に失礼な事を言っすみませんでした」

「いいえ、こちらに非があるようだし、今は休暇中なので問題ないわ」

「そうですか、ではこれで」そのまま去っていくジン。リンディはジンに不信感を抱かせただけだった

第18話　もう一人の告白と友達の定義

模擬戦が終わったので、折角プライベートビーチに来たのだから泳いで行こうとアリサが提案した。というかもともとそのつもりで来たらしい。

泳ぐなんて疲れる事をしたくないので、水着を持って来てなどいないという理由でコテージで休ませてもらおうかと思っただが、さすがはお金持ち、全員分の水着を用意してあるとのこと

子供たちは昨日に引き続きはしゃいでいるようで何よりだが、こっちは疲れるような面倒なことはしたくないのだ。だから、模擬戦での疲れが出たと言って休もうとしたが、アリサが大して動いてないじゃないと発言、その言葉を聞いてフェイトがぶつぶつと何かを言いながら落ちこむ

すずかはずっとニコニコしてるだけだが、助けてくれる気はないよ
うだ

仕方なく水着に着替えてビーチに向かう。すでに子供たちは全開で遊んでいるようだ・・・若いつていいな

ビーチに来たのは良いのだが、いかんせん、泳ぐ気が全くない。疲

れることは基本的に嫌いなのだ。でも、ただボクっとしてるのもあれなのでサンドアートでもすることにした

・・・30分後

「意外と大作になってしまった。適当に作るうかと思っただけ、一度凝ると妥協できなかつたな」

そこには等身大高町なのは（魔王バージョン）が立っていた。他を圧倒するほどの威圧感。どうやって砂で表したのかわからない目の色。ハイライトが消えて無表情となっている。魔王の愛機、レイジングハートまで精巧に作られている

子供たちが見たら真っ先に逃げ出すであろう代物が出来上がってしまった。これはもうこの島の守り神としてここに置いておこう・・・
・魔力で強度を保ちジンはその場を後にした

・・・その後ジンの作ったサンドアートは子供たちに見つかり、キャロが号泣。エリオも膝が震えていた。ルーに関しては何とか持ちこたえたようだ

フェイトは作った犯人であるオレの所まで来て説教を開始。子供たちを脅かしてしまった事が問題らしい。ちなみに出来を聞いてみたところ、フェイトが震えだした。どうやら何かトラウマを抉ってしまったようだ

他の人たちの反応もあまり良くなく、

すずかは「上手だけど、なのはちゃんじゃないよ」「ホントの姿を知らないとはなんて幸せなことだろうか

アリサには殴られた。こうなったら本人に聞くしかあるまい、とりあえず大作を撮影してなのはに送る。面白そうなのではやとリリースにも送っておいた。タイトルは「魔王降臨」・・・芸術大賞でもとれるんじゃないだろうか？

・・・しばらくしてメールが届く

はやて「ハアハハ、最高やわ！自分随分とうまく作ったな。ただ、これかなのはちゃんにバレたらスターライトブレিকা やな」最後にサムズアップマークまでつけて送ってくる

なん だ
と!？

リン「うう、ジンさんのバカ！少し怖くて泣いちゃったじゃないですか（あ、これは皆には秘密です）この写真のせいで空港火災の時のことを思い出しちゃったじゃないですか！あの時リンが止めてなかったら二人とも海に散っていたのですよ！・・・今日ははやてちゃんと一緒に寝る事にします・・・夢に出てきたら恨みます」

リンにとって呪いのビデオ的なものになってしまったらしい。この写真が他の人に回ると「オレ」が殺されてしまいかもしれないのですね、すぐに消去するようにと返信しておいた

そして最後になのはからのメール。メールを開く前から汗が止まらない　しかし見なくてはならない、死ぬとわかっている戦場に送りだされる気分だ　いざ！

「ジン君、次会った時には・・・わかってるね？全力全開のスターライトブレイカーと全力全壊のスターライトブレイカー、どっちがいい？答える時は受けるか当たるかで答えてね？」最後のマーク以外女の子とのメールで出るものじゃないんだけど・・・会わないようにしよう、うん、オレの命のために　いや、いつそ見なかった事にしよう、そうすれば回避できるはずだ

恐怖のあまり返信するのを忘れて現実を直視できず、自分から死地

に行った事を深く後悔するのだった

.....

自爆して、恐怖から精神的にガリガリ削られて、日頃の三倍以上疲れた。海でのバカンスもいったん休憩にしてどうやら昼食をとるようだ。豪華にバーベキューらしい。さつきからせつせと準備をしている。オレは基本的に料理ができるまで子供たちの相手だ

「ルーは楽しんでるか？」

「うん、お兄ちゃんが変なの作らなきゃもっと楽しかった」

「ウツ、でも実際そっくりだから！自分でもビックリするくらい
の出来だ」

「フェイトさんからなのはさんの写真見せてもらったことあります
けど、全然違いますよ」エリオの空気ヨメない発言

「黙りなさいKY。お前は真の高町なのは知らないんだ！あの人は普段の状態からあと変身を2つ残している。」

「変身するんですか！？」キャロが驚きの様子で聞いてくる

「ああ、第一段階がノーマルなのはとするなら、第二段階が高町なのはversion悪魔、そして最終形態がああ魔王だ」

「うっう」キャロが思い出したのかまた泣きそうな顔をしている

「ああ、泣くな。大丈夫だ、魔王には弱点がある」

「な、何ですか？」エリオが聞く

「頭が弱いんだ、残念なくらい。倒すなら頭を狙え。」

「頭ですか？」

「ああ、でもお前らもちゃんと勉強しないとだめだぞ。最近相手も

頑張っているらしいから」

「勉強？・・・でも勉強すれば倒せるんですね？なら僕頑張ります」
「私も」勘違いした二人が一生懸命勉強しているのを見てフェイトが困惑するのはまだ先の話。そもそもなのはを倒すことが前提になっている

「ああ、頑張れ。だが無理はしちゃダメだぞ。わざわざこちらから仕掛ける必要はない。下手に出てご機嫌をとり、戦わないというのも一つの手だ。あの人は魔王だが、一応誇示がある、子供相手に突っかかりはしないだろう」

「わかりました。でもいざという時のために勉強はしたいと思えます」エリオとキャラコがなのには対してかなりの偏見を持ってしまっただが、これも未来ある若者のために仕方ないことだとここに記述しておく

「ちなみにほとんど嘘だよね？お兄ちゃん」二人に聞こえないようにルーが話しかけてくる

「ああ。でも本当の事も混ぜてる。魔王であるのは事実だし頭が弱いのも事実だ。ただ話をすこし誇張しただけだよ、問題ない」

「問題あると思うけど・・・」その後ルーがなのは普通に話しかけているのを二人が見て慌てて謝らせようとしたのも先の話である。

その後ずか達が用意してくれた昼食を終え昼休みとなった。結構な量だったのだがほとんどをエリオが食べつくしたのは正直引いた。あの小さい体のどこに入るのだろうか？少し調べてみたいと思った。

今は外に出されたイスに座って本を読んでいる。そこにフェイトがやって来た

「ジン今いいかな？」

「見てわからないんですか？読書中です。お静かに」

「う、うん、ごめん・・・ってそうじゃなくて話があるの」

無視して読書をしようとしたが、どうせ後で聞かれるので話を聞く

ことしに本を閉じた

「で、何の話ですか？」

「さっきの模擬戦の事なんだけど……」

「反省会ですか？そんなの一人でやってくださいよ。オレ自分の手の内を明かすの嫌いなんですから」

「ごめんね。でも、どうしてあんなにあっさりと負けたかわからなく……」

「……ハア、それ話したらもう良いですか？」

「うん」

「理由はいくつかあります。まず第一オレがあなたの情報を知っていた事。相手の戦闘スタイルを知ってるのと知らないのでは大きく違います」

「うん、それはわかってる」

「次にオレとあなたとの相性です。これは模擬戦の時に話しましたが近接主体の人はオレにとって相性のいい相手となります。普通遠距離型のタイプの人は相手の接近を許さずに勝つ方法を考えます」

「うん、なのはなんかは接近されても対処できるけど、はやてなんかは遠くから攻撃するね。」

「まああの二人は魔力値が高いのでそれで良いんですが、オレはあの二人よりも魔力値低いですから遠くから攻撃してもスピードを得意としてる人には回避されてします。そうなると魔力切れを起こしますから、普通ならオレとあなたの相性は逆転するんです。高町さんみたいに弾幕を張って相手の動きを封じることができませんから」

「でも、私とジンの相性はジンにとって良い」

「そうです。オレは近代ベルカ式なのに剣や槍を持つての近接が得意ではありません。なのでベルカ式には珍しい遠距離型なのですが、
・・・この事は他言しないようにお願いします」

「うん」

「オレは砲撃系の魔法が一切撃てません。収束することはできませんがそれを放てないんです。」

「……」黙って聞くフェイト

「でもオレにとってそれは大した問題ではありません。なぜなら……」

「レアスキル」

「そうです。収束はできるのですから後は爆破させれば立派な武器になります。使いどころは難しいですが……」

「そうだね、爆発は範囲が広いから」

「だから基本オレはバインドなど使って捕獲、その後爆破で大抵勝ちます」

「捕まっちゃったら、なかなか防げないもんね。なのは防いだみたいけど」

「まああれは手加減したというのかもしれませんが、基本は捕えてさえしまえばオレの勝ちです。しかし・・・」

「私のようにスピードを重視するタイプは捕えるのが難しい」

「そうですね。ここまでだと、完全にあなたは天敵なのですが、オレは後方支援系の魔法がすごく得意なんです」

「それは知ってる。医務官だから回復系はもちろん、転移、幻術といろいろ出来るもんね」

「はい、だから、何もバインドにこだわる必要はないんですよ。転移で後ろを突いても良い、幻術を接近させて爆破しても良い。オレは戦闘技能で戦うのではなく、いかに相手を自分のフィールドで倒すかを考えます。あなたのように遠・中・近すべて兼ね備えるオーラウンダーではありませんが、自分の場に引きずり込めば関係ありません」

「私の砲撃では貯めが長くて撃たせてもらえない。射撃魔法でも転移で送り返される。かと言って接近しても爆撃されるだけ」

「そう言う事です。八神さんみたいに広域殲滅なんてされたらそれこそ逃げるだけですが、接近主体で防御力の薄い相手ではオレは負けません。あなたがオレに勝てるとしたら、オレより早く魔法を発動し一気に叩くしかないですね。そんな事させませんけど」

「ジンの短距離転移の方が私より速いもんね」

「そうですね、あなたは消えたかのように見るぐらいのスピードなんでしょうが実態はありますので壁を用意すれば突破はされません。オレは点から点に移動しているので実際に消えてるんです。速度の領域であなたに負けるとは思いません」

「だから、私ではジンに勝てないと・・・」

「ええ、大体そんな感じですよ。場所が変わればまた別なんですけどね・・・」

「どうすれば勝てるかな？」

「どんだけ勝ちたいんですか？・・・まあ高町さんのように防御が硬く砲撃に特化してれば勝てるんじゃないですか？あなたはあの人

と違って頭の回転が早そうですし、簡単には倒せないでしょう。チエックをかけるまでに何手必要になるかわかりません」

「無理だよ」

「だったら弱点でも探してください。オレにだって弱点はあります・
・教えませんが」

「うう。イジワル！」

「自分の弱点を人にさらすなんてバカのある事です。ちなみに高町さんの模擬戦の時、オレの魔法の説明をしましたがかなり嘘が混じってますんで」

「ウソ!？」

「冗談ですよ。ホントかもしれないけど・・・オレの言葉はなるべく信用しない方がいいですよ」

「うん。でもそれじゃーさっき言ってた砲撃ができないっていうの

も・・・」

「ああ、じつはじつじつ。」

「ジーンンン。嘘は良くないよ」

「ホントかもしれませんが？答えは神のみぞ知るってやつですね」

「ハア、もう良い。だけどこれはちゃんと教えてジンの魔力ランクって何なの？ジンくらい強かったら結構有名になると思うんだけど。」

「空戦Cランクです」

「ジンまたそうやってウソついてー！」

「これはホントですよ、疑うんでしたら管理局のデータベースで探してみてください。」

「うう、ジンが何を言っても嘘にしか感じない」

「じゃあ別に信じなくても良いです。」

「ウソだよ、信じるから！……何でジンはCランクのままなの？」

「忙しくて試験を受けなかったというのもありますが……」

「が？」

「オレの戦い方の問題です。ハラオウンさんはオレの戦い方をどう思いますか？」

「そんなに見た事があるわけじゃないから、なんとも言えないけど、勝つ方法を取ってるって感じがする。私やなのはだってもちろん勝つ気でやってるけどジンみたいに深くは考えていないと思う」

「まあ貴方達には魔力がありますから、当然と言えば当然なんですけど。・・・それでオレの戦い方は管理局特に本局の人たちには嫌われる戦い方です。いかに相手を畏にはめるかに重きが言っているので正義を謳う本局の方には理解されない事が多いです。セコイとかそれでも管理局員か！みたいなことを言われたこともあります。そんなオレが試験を受けると色々言われるんで、めんどくさいから受けただけです。幸い医務官としての階級があるのでそこまで昇進にこだわりませんし」

「で、でも」

「言いたい事はわかりますが、実際魔導師ランクなんて昇進を目指してる人以外には邪魔なものでしかありません」

「え？なんで？」

「相手に自分のランクがバレているんですよ？対処されてしまうじゃないですか。仮に敵対する組織がいたとして、こちらを襲う計画があったとします、その場合自分のランクが知られているという事は敵の人数も決まるという事です。自分と同ランク、もしくは自分

「よりもランクが低いけど人数が何倍もいるなんて状況になりえます。」

「そうだね。」

「後はリミッタ ですね。結局フルで自分の能力を使えなくなる事が多いので魔導師ランクが高い事は良い事ばかりではないという事です。たしかに利点がありますが」

「利点？」

「1つは昇進。後は相手へのけん制です。こちらにはこれだけ強力な魔導師がいるぞ！という。でもこれも高町さんやあなたのような高ランクの人でしか意味を為さないです。」

「でもジンなら高ランク魔導師になれると思うけど・・・」

「オレは貴方達のようにバトルマニアじゃないので好き好んで戦いにはいきません。オレにとって魔導師ランクなんて枷でしかありませんよ」

「私はバトルマニアじゃないよ！」

「寝言は寝てから言ってください。人の話を聞かずに模擬戦をしようとしたのはどなたでしたか？」

「うん」

「自覚がないなら早めに自覚してください。自覚のないバトルマニアほど面倒なことはないのですから」

「……うん。……それともう一つだけ聞いていいかな？」

「……何でしょうか？」もう話終わりだと思った矢先に話を続けられ心底嫌そうな顔をするジン

「その顔は傷つくよ……遊園地の事なんだけど」

「企業秘密です」

「私知ってるんだ。ジンとすずかが何を話してたのか」

「は？」

「ジン少しだけ魔法使ったでしょう？バルディッシュが反応してね、それで気になってサーチャーを飛ばしてみたんだ」

「……サーチャーか、あの時は周りに注意を向けてなかったからな、気づかなかった」

「うん、私もジンやすすか達を見つけた後気付かれないようにして
いたから」

「盗聴は犯罪ですよ」

「それを言うなら管理外世界での魔法行使もそうだよ」

「こちらから言わせてもらえば人助けです。どちらかといううち興味
本位で魔法を使ったあなたの方が問題あるのでは？」

「うう」「やはり口ではジンに勝てない」

「・・・もしかして提督にバレています？」

「ううん。母さんには言っていないよ。母さんはデバイス持ってきて
ないから気付かなかったみたいだし」

「それは良かった。あの人は何かとめんどくさそうなので」

「娘を前にして言う言葉じゃないよ」

「これは失敬」

「ハア、まあいいけど。・・・それでするか達の事なだけけど」

「ご本人に聞いてください。その内話すって言っていましたから」

「うん、それは良いんだけど、すずか達に言った事ってホント？」

「とーいしよとー」

「人間であるかどうかは関係ない、人であれば良いって事」

「本当です。なんですか？人間じゃなければダメみたいな発言をするタイプですか？嫌いですよ、そう言うの。個人の自由なので強制はしませんけど、すずかさんが悲しみますよ」

「ち・違つよ！私だってそんなこと気にしないよ。・・・ただ」

「？」

「私も普通の人間じゃないから」

「へえ、実は魔王の生まれ変わりとかですか？魔王はあの人だけで十分です」

「なのはに言っちゃうよ」

「ごめんなさい。それであなたが普通ではないとおっしゃいましたが、そんなの知ってますよ」

「え!？」

「だってリンカ コアなんてあるんですよ、オレもそうですけど、普通じゃありません」

「確かにそうなんだけど・・・私のはもっと違うの・・・」

「言い辛いんなら言わなくても結構ですよ。すずかさん達にも話してないんでしょう?」

「うん。なのはとか母さんは知っている事だけど、ジンになら良い...むしろ知って欲しい。当然その内すずか達に話すけど」

「オレ的には聞きたくないんですけど・・・聞いた事で何か不都合な事が生じますか?」

「うん、何も無いよ。ただ、私の事が気持ち悪くなるだけ」

「なら大丈夫です。あと内容にもよるので後者に関してのコメントは控えさせてもらいます。実は高町さんと結婚して子供がいるんですとか実は男でしたみたいなのがあつたらちよつと反応に困ります」

「……実は」ジンのコメントを普通にスルー

「私クローン人間なんだ。人の手によって作られた人造魔導師なの」

354

「へえ、それは随分とすごいですね。クローン技術はなかなか問題があり短命と聞きますが、あなたを見る限りそんなことはなさそうですね」

「うん、検査でも問題ないって言われてる。……嫌だと思わない？」

「嫌だと思われたいんですか？」

「え？」

「あなたは人造魔導師としての自分に何か思うところがあるようですが、そんなこと大した問題ではないのです。むしろ医学的な見地から見れば素晴らしい事です。母体が弱くて子供が産めない母親に自分の遺伝子を持った子供授ける事が出来るのですから。確かにクローン技術は臓器移植用に作られたり、死んだ子供の代用など様々な面で問題がありますが、それは使った人の問題で生まれてくる子供に罪はありません。子供は生まれ方を選べないわけですから」

「・・・」

「普通に産まれたオレが言っても説得力はないでしょうが、それでも産まれたことには変わらないんです。オレの知り合いにもいます。元気に育ってます。あなたが自分の事に負い目を感じるのには勝手ですが、自分と同じような子供達を否定するのはやめてください。いくらオレでもそれには腹が立ちますんで」

「やっぱりジンは違うね。私の事を知った人も気にしないと行ってくれたけどそんな風に言ってくれる人はいなかった。母さんのことを褒めてくれる人はいなかったから」

「・・・提督がその技術を？」

「あ、ち、違うの。私の本当のお母さん、プレシアっていうんだけど、その人が私を造ってくれ・・・ううん産んでくれたの。もう死んじゃって会えないけど」

「ああ、だからテストロッサの姓があるんですね、納得です」

「私はもともと母さんの本当の娘アリシアのクローンとして生まれた。最終的には母さんに拒絶されたけど、やっぱり母さんは母さんだから、私はあの人の娘でありたい」

「随分とすごい人ですね。自分の娘のためにクローン技術まで生み出すなんて。よっぽどそのアリシアって子が好きだったんでしょう。でもそのアリシアは二度と戻らない事を気づかなかった。いくらクローンでもあなたとそのアリシアって子は全くの別人。その事に気づけば二人目の娘だったんでしょうね。アリシアとしてはなくフエイトとして見れば別の結果だったのかもしれないね。今更ですけど」

「ありがとうジン。やっぱりジンに話してよかった。これから私は自分の生まれにちよっとずつだけど自信が持てる。エリオもきつとそうなってくれる」

「ああ、あの少年もそうなんですか？そうするとキャラも？」

「キャラは違うよ。キャラはアルザスの龍の召喚士で強すぎる力のためにね……」

「追い出されてしまったと。人は異常を嫌いますからね……子供を守ってやるのが大人の責任でしょうに。」

「だから、私が保護責任者になつたんだ。」

「15歳で二児の母ですか、地球で言うとヤンママですね。髪も金髪ですし、ピッチリです」

「私はヤンキーじゃないよ！」

「義務教育の学校をサボっている人が何を言っているんですか？十分にヤンキーです。不良娘になってしまってお母さんも悲しんでいるでしょう。」

「うっうっ」

「あゝあ、冗談ですよ、泣きそうにならないでください。ハラオウんさん仕事以外だと意外とポンコツですよね。すぐ泣きそうになるし、高町さんと子供が絡むと暴走するし。」

「うっうっ」

「泣かないでくださいよ。」

「じゃあ、フエイトって呼んで。」

「いや何故に？」

「ハラオウンだと母さんとかお兄ちゃんと区別つかないよ」

「大丈夫です。役職をつければ問題ありません。それにハラオウンがダメならテストアロッサの方を使えば問題ないです」

「でも、なのはは友達になるには名前で呼べばなれるって言ったよー！」

「どんな理論ですか？ナンパしてきた人が名前を読んだら友達ですか？あの人いっぱい友達がいるんでしょうね。自分でなのははいよって言ってますもんね」

「で、でも、ジンは私と友達じゃないの？」

「まあ、違いますけど」

「ガーン」地面に両手両膝をついて落ち込むフェイト・・ort

「効果音を自分で言う人初めてみました」

「ジンにとって私って何なの？」

「まあ一応上司ですね。執務官がどれくらいの階級が知らないですけど」

「友達じゃないの？」泣きそうな顔をするフェイト

「どうなんでしょうね、オレには友達が少ないからわかりませんが、少なくとも今現在では違うのでは？すずかさんって例外はいますけど、あなたとの会話なんてほとんどなかったわけですから、知り合い程度が妥当でしょう」

「じゃあ、友達になって！」

「嫌ですけど」

「ガガーン」また落ち込む

「やっぱり面白い人ですね。あなた個人と友達になる事は全然構わな
いんですけど、オプシオンとして魔王とか八神一家が付いてくるの
がいただけなんです」

「うっ」

「全くすぐ泣くのはやめた方がいいですよ。女の涙は安くないって
メガ・又さんが言っていました。あなた安売りしすぎです、バーゲン
セールですか？」

「……………」
「そう言われて必死にこらえようとしてるが泣きそうである

「ハア、オレなんかと友達になっても面白い事はないでしょうけ
ど、それで良かったら友達になりましょう」

「えっ？」

「嫌なんでしたら構わないですけど」

「い、嫌じゃないよ！こちらこそよろしくジン」「そう言って手を差し出す

「よろしくお願いしますハラオウンさん」「そう言って握手をする

「・・・フェイトって呼んで。もう友達でしょ」

「無理ですね」

「うわあぁくん、ジンのバカ！！」「そう言って泣きだして走り出したフェイト。それを見たアリサがとび蹴りしてきた事は言うまでもない・・・普通に避けたけど・・・顔面からの着地は痛そうだなと思った

第19話 魔王×帰還×それから

フェイトからの相談の後、子供たちは遊び疲れ寝てしまい。アリサはジンを殴る事に苦心し、色々と策を巡らせたようだが、逆にジンのトラップに引っ掛かってしまい、疲労困憊になって倒れた。

実はアリサが追いかけていたのはただの幻影で、本体は優雅にすずかとティータイムを満喫していた。その事実を後で知ったアリサは烈火のごとく怒りだし本来のフェイトを泣かせたから殴るという目的を忘れ、ひたすらジンを追いかけまわした。

当然のごとくジンはまた幻影と入れ替わってアリサをからかう始末・・・鬼畜すぎる。アリサがようやく捕まえたジン（偽）に勝ち誇ったかのように色々言っていたところをビデオに抑え後ろからドッキリの看板を出しながら登場した時にはアリサの顔は真っ赤だった。その顔も撮影しアリサのツンデレ記録なるものを作っている（すずかと共同で）

「これは良い物が撮れましたね、すずかさん。タイトルは『ツンデレアリサここに有り』で良いでしょうか？」

「うーん、無難に『ザ・ツンデレ』とかで良いんじゃないかな？」

「あんな・たち…いい加減にしなさいあああいい！！」

「アハハハハ」二人で逃げる。意外とすずかも人が悪かったりする。ただそこは長年の付き合いなのか基本的に怒りの矛先はジンの方向に向かっている。あ、またすり替わった

ひとしきりアリサを弄った後、疲れたのでコテージに有る風呂に入る。当然男女別に分かれているわけではないので、ちゃんと男子入浴中の札をかけて風呂場に入った。うっかりハプニングなど起こさない

まったりと風呂に浸かって、夕食まで休むことにする。子供たちは起き出して今は風呂場、フェイト達が洗っているようだ。6歳児だから男女一緒でもかまわないだろう。

子供たちが風呂から上がり夕食タイム。昨日に引き続きエリオの食事量には驚かされる…なんか見ているだけでお腹がいっぱいになる。その内エリオダイエットなるものができるのではないだろうか？スバルとギンガを入れたら完全に食欲が失せるだろう

夕食後はまたしても雑談会。ただジンは面倒なのでさっさと就寝。アリサに何か言われたがそれも幻影を使って逃れた……。魔法使い過ぎな気がする

翌日 ジンの休日も最後と言う事になり海鳴市に戻る。すずか達とは連絡先を交換、アリサの連絡先は拒否しようとしたが強引に交換された

遊園地での約束も有って高町家が経営する喫茶店でお土産を買ってからミッドに戻る運びとなった。なので今喫茶翠屋の前にいるが……入りたくない

あの恐怖の大魔王が接客してるのが見えてしまった。先日の一件もあり見つかったら死ぬ可能性がある。早めに謝らなかつた事を後悔する

……。物陰に隠れ悩む事5分、ルーには呆れられてしまった。

ルーが

「魔法使えば良いんじゃない？」それだ！何も自ら死地に訪れる必要はない。そう思ったら行動は早い、周囲に人がいない事を確認しシルエットを発動する。――管理外世界で魔法を使い過ぎな気がするが命には代えられない

準備も整ったので翠屋に入る（偽ジン）

カラんくコロん

「いらっしゃいませ・・・あ、ジン君」なのはがこちらに気づいたようだ

「いらっしゃいジン君、それにルーテシアちゃん。約束通りサービスするよ」土郎もこちらに気づいたようだ

「それでは遠慮なく。ここで食べれる用のケーキをルーの分お願いします。あとお土産にシュークリームを20個程ください」

「20？それはまた随分と多いね」そんな事を言いながらも厨房にいる桃子さんに注文を届けに言った。

その間に、ルーと席に座り待つ事にする。当然なのはが来るのだが、接客中と言う事もあり、すぐに注文を取りに行った。あとはシュー

クリームが出来上がるのを待つ　早くしないと死んでしまう。休憩時間にでもなったらオレの命が…

シルエツトなのに汗をダラダラ流しながら待つ。1分間がこれほど長く感じたことはない。神に祈るような思いで待っていたのだが、どうやら神様はオレの事が嫌いらしい

「なのは、そろそろ休憩でもしなさい。あつちでジン君と話してくと良い」おお神よ、私はあなたに嫌われるような事をしましたか？

「ありがとう、お父さん。」なのはが笑顔だ……。それが逆に怖い。トコトコとこちらに近づいてくる。その足音が死刑判決を待つ罪人の心境を思わせる

「ジン君、ここ良い？」

「良くないです。今ルーと家族の団欒をしてるので、できれば遠慮してください」

「別にいいよ」

「ルーさん!？」まさかのルーからの攻撃

「ありがとう。え〜っと」

「ルーテシア・アルピーノです。」

「私は高町なのは。なのはで良いよ。よろしくね、ルーテシアちゃん」

「はい、いつもお兄ちゃんがお世話になってます」地球に来た時とはえらい違いで、緊張せずにルーは挨拶する。とても6歳児には思えない挨拶だ。兄的ポジションにいるオレとしてはうれしい限りなのだが、いかんせん今はその優秀さが憎い

「ジン君が言ってた通りしっかりしてるね〜」

「ハツハハハ、自慢の妹分ですから。学力だって高いんですよ」「こうなったら昨日の話に持って行かせないようにする。自分の頭の残念さを悔やむと良い!」

「ハハ、そうみたいだね。それでジン君昨日の事なんだけど」
N〇〇ん。なぜ今日に限って釣られない。この後テストの話に持
って行こうとしたのに！オレのバカ、最初からその話題を振って
おけば良かった

「ええ〜つと何かございましたか？昨日は何分、ツンデレさんに追
われてまして大変だったんです。だからあまり昨日の事は覚えてな
いんですけど」

「ジン君？」目のハイライトが消えて声に抑揚がない。しかもルー
には見えないようにしている。なんとという周到さ、これではルーを
引き合いに出して逃げることもできない。

「昨日は申し訳ありませんでした。溢れる創作力を抑えきれなかつ
たんです。」

「ふ〜ん、そうやってまだふざけるつもりなんだね？いいよ、それ
なら……」

「ウソです！冗談です！ごめんなさい」 必死に頭を下げる

「もう！初めから謝ってくればいいの！女の子にああいう事やっちゃダメって前にも言ったでしょ。今頃の女の子はすごく傷つきやすいんだから！」

「…すみません」女の子？みたいな顔をしてしまったが、一応謝っておく

「何？その顔は！私だって傷つきやすい女の子なんだよ！」

「……はい」

「だから、その間はなんなの！ジン君は一体私の事どう思っているの！？」

「魔……いや、ちょっと無茶しがちな元患者さんですね、はい。」

「最初の魔は何？しかもその後取ってつけた言い方はなんなの！」

「他意はありません」

「……ハア、もういいよ。ジン君は変わっちゃったんだね。昔はもう少しかわいかったのに……」

「昔の話ですね。それに昔を語られる程あなたとは親しくはないです」

「しっし」

「昔は医者と患者。今は上司と部下の関係です。それ以上でもそれ以下でもない」

「友達じゃないの？」

「違いますね」

「ガーン」

「その反応はもう見たので面白くありません。ネタがかぶるのは芸人として失格ですよ」

「私芸人じゃないもん！普通の女の子」

「寝言は寝て言ってください。あなたが普通だったらむしろ異常が何なのかわからなくなります。普通ってというのはルーとかさずかさんみたいな人を言うんです。けしてツンデレや魔王ではありません」

「ま、また、そうやって……うつつ」

「あんまり家のなのはを泣かせないでくれるかな？」苦笑いしながら土郎が話に入ってくる。どうやら代えのコーヒーとジュースを持って来てくれたようだ

「泣かせてるつもりはないんですが、いつも事実を言つと取り乱すんです」

「事実じゃないもん！」

「ここであなたの武勇伝を語れと？……わかりました、直接見たものは空港のみですが、聞いた情報をもとにわかり易く解説してあげましょう。いかにあなたが悪魔、魔王と呼ばれる存在か」

なのはが防ごうとしたが他の客にわからないようにバインドをかけて椅子に固定。その後なのはの武勇伝を誇張しながら士郎とルーに話す。

……しばらく経って

「なのは……」

「なのはさん……」

二人が遠い目をする

「これが現実です。受け入れてください」

「何勝手にまとめてるの！？ジン君が言ったのは話を誇張してるよ！」

「いえいえ、そんな事ありませんよ。実際オレとリインさんだって海の藻屑と消え果てるどころだったんで誇張というわけではありません」

「誇張だよ！」まあ最後以外は自分の主観がかなり入ったものではあるが、断じて誇張ではない・・・はず

「あら？楽しそうね。」

「高町さんのお母さんも聞きますか？娘さんの武勇伝」

「ジン君、もういいの！」「もうやめてという顔をして止めに入る。いつの間にかバインドも解いている

「聞きたいのはやまやまなんだけど、まだ仕事があるからまた今度お願いね。」

「わかりました。ネタを仕入れておきます。管理局にいれば勝手に入ってくる情報ですので」

「お願いね。・・・それでシュークリームの方なんですけど、注文の20個完成しました。袋にも詰めましたので、そのままお持ち帰りください」お客様用の口調に変えた桃子に少し驚いたが、こういうところははじめをつけてるのだろうと思いきシュークリームを受け取って帰る準備をする

「ジン君、もう帰っちゃうの？もっとお話ししようよ」「不満そうにいうのは

「話してる暇があるなら、勉強でもしてください。すずかさんとも話しましたがあなたの成績は残念な感じらしいので。オレとの勝負に勝てませんよ？オレ的にはその方が良いでしょうけど...」

「うう、今勉強してるもん！見ててジン君のテストなんかすぐに合格して模擬戦してもらうんだから！」

「はいはい」 適当に流す

「そ、その余裕、ぜったい後悔させるんだからね！」

「はいはい」

「うう」 また泣きそうになるのは。 涙腺が限りなく弱いらしい

「それじゃーオレ達はこれで。 すぐかさんの家に挨拶してそのまま帰ります」

「そう言えば、さっきから思ったんだけど、何でするかちゃんだけ名前で呼ぶの？私は何回言っても呼んでくれなかったのに」

「企業秘密です。」

「お兄ちゃんの初めての友達なんだって」ルーが横から言ってしまう

「ジン君……」

「誤解してるようですから言っておきますけど別に今回で友達になつたわけではないですよ。小さい頃に友達になつたんです」

「でもジン君ってミッド出身じゃないの」

「面倒なのですがかさんにも聞いてください」

とりあえずこれ以上いてもあれなのですかの家に向かう。途中で本体と入れ替わるのも忘れない。あまり幻術を使った意味はなかったが、保険を掛けとく事は大事だ、万が一魔王が降臨したら軽く死ぬる

.....

月村家到着

すでにフェイトがいて準備してくれている。彼女もミッドに用があるらしく一緒に帰る事となった。エリキヤロはまだ地球にいるらしく、朝に別れを告げたので問題ない

「こちらも用が済みました。いつでも帰れます。ハラウンさんさんの方は？」

「こっちも大丈夫だよ。それからフェイトって呼んでって言うてるでしょう！」

「すずかさん、今回はここでお別れです。時間が取れたらまた来ますのでその時はよろしく願います」スルー！？とフェイトが何か言っているがここは敢えて無視しておく

「うん、またねジン君。でも連絡先を交換したんだから連絡くらいは欲しいな」

「はい、近況報告なんかはしたいと思います。それじゃ、元気で」

「そっちもね」

うっう 私だけ無視されると嘆いてるフェイトを引っ張り転移ポ―

トに移動する。ルーはフェイトを慰めながらついてくる。

転移ポートが光出しミッドに戻った。ここでフェイトとも別れる

「今回はありがとうございました。おかげでルーにも友達ができま
した。」ルーの頭に手を当てながらお礼を言う

「うん。こちらこそありがとう。エリオとキャロもすごく喜ん
でくれたから、また会ってあげてね。もちろんルーテシアも」

「時間が合えば」「はい」

「ではオレ達はこれで。ハラオウンさんは仕事以外ではポンコツな
ので気をつけてください」

「わ、私はちゃんとしてるよー!」

『……………』オレとルーが無言のアピールをする。ルーもこの3日
間でフェイトのポンコツぶりが理解できたらしい

「うううううう」

「もう、泣かないでくださいよ。こんな所で泣いているとオレ達が悪いみたいじゃないですか」

「悪く見えるのはお兄ちゃんだけけど」

「ルーさん！？……随分と強かになっていませんか？」

「お母さんの娘だもん」

「微妙に納得です」この3日間でルーも成長を遂げたようだ。最初の初々しいルーはいなくなってしまうたんだな

「うううう」「さっきから放置されてまだ泣いているフェイト

「フェイトさん、泣き止んでください」

「えー！？今ジン、名前で」

「幻聴じゃないですか？現実と妄想のくらい区別してくださいよ。
イタイ子に見えますよ」

「ジン！今、絶対名前を呼んだよ」

「はいはい」

「もうっ！」

「それではお元気で。」

「さよなら」そう言って立ち去るオレとルー。後ろで何か言っているが無視だ。

.....

ナカジマ家到着

なぜか全員集合する時はナカジマ家に集まる。クイントさんやナカジマ夫妻も仕事から帰ってきている。序に家の母さんも。ギンガだけ訓練校にいたのでいない。お土産はまたいつか買う事にしよう

「ただいま帰りました。メガー又さん、ルーも元気です」

「あら、ルーちゃんに手を出さなかったの？根性ないわね」

「オレはメガー又さんに言ったんだけど、歳をとると耳が遠くなるからな、それに正しく言葉を理解できなくなるぐらい知能が低下してしまったのか？病院で検査した方が良いんじゃない？母さん」

「フッフ、相変わらず先輩とジン君は仲が良いわね。それとルーテシアの事ありがとうジン君。ルーはお友達はできた？」

「うん。また会おうって約束もした。」

「それは良かったわね、今度はお母さんがルーのお友達に会いたいわ」へへとアルピーノ親子は楽しそうにやり取りをしている

「^{スバル}ワンコ、^{お土産}エサ買って来たぞ」

ドタドタと走りながら来る

「ジン兄なんか変に聞こえたんだけど

」

「^{スバル}どうしたワンコ？何か変なところがあるか？」

「やっぱり、なんか変。でも良いや、それよりお土産な〜に？」

「お前の憧れのエース様の母上が作られたシュークリームだ。結構有名らしい。」

「え！？なのはさんのお母さん？」

「ああ、あの魔王とは違って優しそうな人だった。どうやったらあのような魔王が生まれてくるのか」

「も〜う、ジン兄！なのはさんはそんなじゃないって言っているでしょ！！なのはさんは強くて、優しくて、かっこいいんだよ」

「それは幻想だ。いいか？本当は、砲撃魔で破壊神、そして頭が残念な人だ。これしっかり覚えとけよ、訓練校のテストで出るかもしれないぞ」

「出ないよそんなの！一体どんなテスト!？」

「管理局の砲撃魔は誰？答えは高町魔王なのはだ。これはきつと出るぞ。しっかり復習しとけ」

「出ないよ!」そう言ってシュークリームだ奪って居間に行くスバル。食料は確保していくんですね

その後皆でシュークリームを食べながら3日間の事を話した。ルーに友達ができた事をスバルも喜んでくれた。ただスバル…シュークリームそんなに食って気持ち悪くならないのか？

話し終えた後は食事をし一同解散という流れになる。オレも明日から仕事になるので早く帰って寝ようと思ってゲンヤさん達に挨拶をして帰ろうと思ったが

「ジン、おめえ明日聖王教会に行つて来てくれ」

「はい？」なんかメンドイ事になりそうです

第20話

ハア〜行きたくないんですけど(前書き)

かなり独自の解釈があるので気にしないという方だけご覧ください

第20話

ハア〜行きたくないんですけど

「はい？」

「ん？だから明日聖王教会にだな

」

「いや、そっじゃなくて何でオレが」

「ああ、あのチビ狸が要請してきたんだ。お前のレアスキルの申請」

「いつの間に…」

「最近、あいつの研修に付き合う事が多くてな、その時言われた。お前の昇進にもつながるから了承してきたんだが 拙かったか？」

「ゲンヤさん、オレが聖王教会嫌いなもの知らなかったんですか？クイントさんなら知ってるはずですけど それと今の階級で十分です。昇進とかいいです。だから、断れませんか？」

「そうだったのか、すまねえな。しかし、あちらに連絡入れちまつたからな
悪いなジン」

「ハア、クイントさんに言いつけますね、ゲンヤさんが若い女の子に懸想しているって。ちなみに離婚調停の場合、浮気をした方に罰金が発生するので 気をつけてください」

「お、おい！いくらなんでも

「では

「ま、待ってくれ！ジン、ジーンシーー！！」

ゲンヤが後ろで騒いでいるが無視。当然クイントさんにも誇張して報告。クイントさんが

「フフフ、久々に私の拳が火を噴きそうね。待っていないさいあなた。

「ドス黒いオーラを出してゲンヤさんのもとに向かった。なんか数秒して

「待ってくれ、クイント！オレがそんな事」

「言い訳は聞かないわ！」

「ジン！覚えていろよー！」その後人間が殴られた音ではない音が聞こえた。やはり、若い女に嵌ってお金を貢いだりしていると、言ってしまった部分が問題なのだろうか？それとも年増よりやっぱり若い方がいいと言ってしまった事だろうか？……確実に後者だけど、まあ問題ない

問題なのはオレの方だ。……聖王教会か、嫌な思い出しかない。ハア〜と息を吐いて、明日の事を思って暗くなりながらも家路につくのだった。

- - - - -

翌朝

出勤してすぐ部隊長室に向かう

コンコン

「ゲンヤさん、入りま す。」入った瞬間見たのはモザイクが掛
けられて人前には出せないような有様になったゲンヤさんがいた

「だ、大丈夫ですか？」

「おめえが言うな！あの後大変だったんだぞ。誤解が解けるまでオ
レがどれだけ」

「心中お察しします。クイントさん怒ると怖いですもんね」

「おめえのせいだろうが！適当な事言いやがって、オレはクイント
一筋だ！」

「惚気は結構ですよ。それにもとあと言えは、ゲンヤさんが悪いん
じゃないですか。聖王教会なんて所にオレを送りだそうというので
すから」

ゲンヤの顔がいつの間にかもとに戻ってまじめな顔をして聞いてくる。これが所謂ギャグ補正か？地球で見た文化はためになるな」とのん気な事を考えている

「何か有ったのか？」

「まあ昔の事ですけどね。それで、オレはいつ向かえば良いんですか？」

「ああ、もう少し待ってくれ。もうすぐ来るはずだから」

「一緒に行かないといけないんですか？現地集合で良いじゃないですか」

「なんでもおチビの空曹さんが一緒に行きたいんだとさ」

「リンさんですか？なら仕方ないですね」そう言われて少し待っているとはやてが着いたという連絡が入り部隊長室までやって来た

「失礼します」独特なイントネーションの音が聞こえた

「失礼なので帰ってください」

「そうですか？それじゃーさいなら……ってちやうやるー！」

「部隊長室ですよ、お静かに」

「は！すみませんナカジマ三佐」

「ホント頼みますよ」

「お宅には言われとうない！」

「リンさん久しぶりですね。お元気でしたか？」

「はいですう。ジンさんも、お元気でしたか？」

「無視か？無視なんか！？」

「あれ、いたんですか？八神一尉。すみません気づきませんでした」
ぺこりと頭を下げる

「お宅数秒前の会話を思い出してみい！明らかに気づいたやろ」
「！」

「幻聴でも聞こえたんじゃないですか？ダメですよ、薬物は犯罪です。どうしましょうか部隊長、薬中を捕縛しますか？」

「お前ら、いつもこんななのか？」

「いえいえ」

「褒めてねえからな。呆れてるんだ。 ……とりあえず八神と一緒に聖王教会に言って来い。一応レアスキルの申請で行くが、何かあるようならやめても良いからな」

「はい。それじゃーあちらと喧嘩になったら部隊長に責任が行くという事でよろしいですね？良かったです、これで気兼ねなく行けます」

「お、おい、ちょっと待て！」ゲンヤが何か言っているが

「リンさん行きましょう」「はいですっ」そう言って二人は出て行ってしまった。

「八神 置いてかれていますぞ？」

「もういいです。ハア」そう言って二人の後追うはやてだった。

.....

ポートからベルカの自治領に移動し今は聖王教会の前にいる

「帰って良いですか？」ダメもとではやてに聞いてみる

「ダメに決まっとするやる！さ、行くで〜」はやてが中の人に連絡して入る許可を待った。しばらくすると中から人が出てきてこちらを案内してくれるようだ。

「あ、あなたは」

「お久しぶりですシスター。まだいたんですね？」

「なんや、ジン君。シスターシャツハと知り合いなんか？」

「昔、ちょっと会っただけですよ。もともと教会は好きではなかったんですけど、それに拍車をかけた原因になった人の一人です。」

「黙ってしまうシャツハ」

「なんや、良うわからんけど、シャツハは良い人やで。」

「ええ、そうなんでしょう。昔いかに聖王様が偉大でベルカの騎士

がすごいのか、そりゃ〜もう熱く語ってくれましたから、こっちがうんざりするくらい。主に肉体言語で。たかだか数分で嫌いになりましたね」

「アハハ シ、シャツハ 「はやてもフォローできない

「しかも、聖王に関する記述が特にないのには私は聖王様の事はわかるんですけど言わんばかりのテンションで説明しだすし、聞かないと戦闘したがるし、全くここには嫌な思いでしかありません」

「申し訳ありません。あの時は、私も、若かったもので 「シャツハが当時の事を思い出したのか、申し訳なさそうに謝る

「宗教信者に有りがちなパターンですよ。しかも信仰上、聖王様のためなら何でも許されるという勝手な妄想。あの時ほど、ここの人たちを捕まえてやろうと思った事はなかったですよ。」

「すみません」深々と頭を下げるシャツハに、同情したのか、はやてがとりあえず中に入ろうと言っていったん話を切る

「それじゃー帰っても良いですか？このままいくと原因その2が出てきそうなんですけど・・・」

「だからアカンって言うところやろー！」

「リインも一緒に行きますから、行きましょっつー」

「仕方ないですね、じゃあ行きましょっつか」

「何でお宅、リインには甘いねん」

「リインさんですから」

「ですすう〜」ね〜と二人でわかり合っている。そんな二人を見て、はやてはタメ息を吐くばかりであった。

ある部屋に到着

「騎士カリム、お客様がいらっしやいました。」

「どうぞ」中から声がかかったので入る事にする。シスターシャツハは飲み物を用意しに行ったようだ

「カリム久しぶりや」

「はやて、いらっしやい。あなたもお久しぶりですね、ヤナギバ三尉。」

「ええ、お久しぶりですね。息災のようで何よりです。」言葉は丁寧だが、目が物語っている、話しかけてくるなど

「やっぱ、カリムとも知り合い何か？それにシャツハの時みたいに何か有ったみたいやな」

「シスターが教会嫌いになった原因その1なら、騎士グラシア殿はその2ですね。今では教会騎士の重鎮はほとんどが嫌いになりましたけど」

「カリム？」はやてが疑問に思つてカリムの方を見る

「あの時は本当に申し訳ありませんでした。あの時のような事がないように教会としても気をつけまので」

「許せとでも言いやがりますか？ハッ！なかなか人を苛立たせるのがうまいですね。良い特技です。誇つて良いですよ」

「で、でもあなたもあの時の事を解消したいから今日こちらに来られたのではなかったのですか？」

「それに関しては申し訳ありませんね。八神一尉がうちの部隊長と勝手に話を進めてしまったために起きた事で、来たくて来たわけではないんですよ。随分と自分達に都合のいい解釈をお持ちのようです」

「！！」ジンがああの時のわだかまりを解消しようとしてくれると勝手に思ったカリムが、勘違いに気づき驚いている。宗教信者はどこまでもお気楽らしい

「なあ、何かあったん？ジン君もちょっと態度が変やで、いつもとちやうやんか。」

「今日は教会の人を見れば良いんですね？」

「そつだ。」

「無限書庫で本を読んだ時、いろいろ教会の事についても見ましたけど、なかなか胡散臭いところですよ、聖王教会って」

「どついうこと？」

「聖王様を奉っているようですが、やってる事はそこら辺の犯罪者と大して変わらないということです。聖王の名を使い市民から寄付金を募る、挙句その寄付金はお偉いさん方の懐に入っている始末。ベルカの自治領として統治しているようですが、貧富の差が激しいところですね。宗教の所なんて大概そんなもんでしょうけど。それに聖王縁のロストロギアを集めているらしいですけど、ぶっちゃけ聖王のロストロギアなんて記述はほんのわずかなんですよ。聖王のゆりかごぐらいじゃないですか、はつきりとわかっているのは。それをなんだかんだ難癖をつけて奪い取っているんですよ。それにレアスキルの事だって、聖王にそのスキルがあったからって、レアスキルと呼ばれるものはすべて聖王様の施しによるものだなんて言って、教会で認められないとレアスキルではないという程の傲慢さ。魔力変換資質なんかは関係ないでしょうに。なんか嫌な所ですよ」

「というか、ジン君あなたどれだけ調べたのよ。」

「え？意外とあの書庫なら何でも出てきますよ。もしかしたら。管理局の悪事とかもいっぱい出てくるんじゃないですか？」

「余計な話はせずに、さっさと行くぞ。こちらは仕事できたんだからな。」ゼストが特に気にした様子もなく言う。管理局にも後ろ暗い事があるのは知っているようだ

「はい、でもゼストさん。もし、あちらの対応が悪かった場合はどうしますか？」

「その時の判断はお前に任せる。レジアスも言っていたがあちらにこちらへの命令権がないから頭に乗ってきたら、ブツ飛ばしてやれと言っていた。実際ブツ飛ばしたら問題なのだろうが、そこら辺はレジアスが何とかする」

「じゃあ。模擬戦でブツ飛ばしても構わないんですか？よかった！私加減とか苦手です」

「オレもよかったです。以前病院で働いていた時、ここら辺に住ん

でいる人の治療をしたことがあるんですけど、その人の話だと教会騎士団の重鎮や司祭の人はなにかと傲慢らしく、良いのは表向きの顔だけだそうです。オレも我慢できるかわかりませんから」

まあ、程ほどになんと言って、そのまま教会に連絡を取り入っていった。

とある部屋

現在ゼストとクイントは騎士たちと訓練中である

404

「失礼します。ジン・ヤナギバ医務官、教会の依頼より参上しました。して、患者の方は……」

「なんだ、ただの子供じゃないか。管理局は聖王教会をなめているのか？」

「失礼ですが、子供でもちゃんと資格があるのでご心配なさらず。それにリンカ コアに関する治療とのことでしたので、私に話が回って来たのだと思います。リンカ コアについては他の医務官の方

よりも詳しいと思うので」「それもそのはず、母親のために必死になって学んだためジンのリンカ コアに関する知識は他の医者とは一線を画する。

「生意気な子供だな。まあ良い、さっさと治せ」「偉そうな態度で言ってくるオッサンにさすがに我慢できず

「あの、私はあなたの部下じゃないので命令しないで貰えますか？」

「なんだと？私はこの騎士の中でも」

「あなたの立場など関係ありません。あなたがここでどんなに優れていたとしても、管理局とは別なので私に対して命令する権限はないのです」

「な！？貴様！」

激昂して文句を言おうとしてるところに、金髪の女性とシスターらしき人が入って来た。

「失礼します。騎士カルトス、治療の方はどうですか？おじい様が

聞いて来いとおっしゃられたので」

「ああ、騎士カリム。治療はまだしていません。そのガキがふざけた事をぬかすからな。」

「な！？管理局はこんな子供を送って来たのですか？」シスターが驚いて言う

「子供でも資格があるのでお気になさらず。どうしても嫌だということなら私以外の人をお願いしてください。私は頼まれただけなので、ふざけた事を言われてまで治療する気なんてないです。」

406

「な！？貴様さつきから聞いておれば頭に乗りおって！」

「あなた程ではないですよ」無礼には無礼で返せ。母の教えである。一応管理局員なので問題は起こしたくないのだが此処は仕方ない。上司でもない人に偉そうにされるのはたまったものじゃない

「落ち着いてください騎士カルトス。そして、あなたも言葉を慎みなさい。ここにいる騎士カルトスは歴戦の猛者なのです。聖王様の

ご加護を受ける大変立派な方なのです。そんな方を治療できるなんて本望でしょう」カリムが偉そうに言う

「いえ全く」

「ハア、あなたには聖王様の偉大さがわかっておられないようですね？良いですか」

「まるでご自分は知っているかのような口ぶりですけど、本当に知っているんですか？」

「勿論です。そもそも、この聖王教会は聖王様が立ちあげて、その時に協力したロシア家がいまでも聖王教会に深く関わっています」

「聖王が教会を立ち上げたという記述はどこにもないんですよ。しかも戦乱の真っただ中に自分の宗教を立ち上げる人なんて普通いないでしょう。一体何を根拠に聖王教会なのか教えていただけませんか？ちなみにこちらの情報は無限書庫ですので」

「それは、代々グラシア家に語られる」

「そもそも、当時の戦争の中でグラシア家が聖王に協力したとして、なぜ教会なんて物を作ったのでしょうか？戦争中にそんな無駄な金があるとは思えません。しかも、当時まだ崇められるほどの人物ではない聖王を祀ったとして、民は一体何に祈りを捧げるのですか？仮に聖王様に祈りを捧げていたとして、戦争は聖王がゆりかごを発動するまで止められなかった。そして発動したゆりかごにより多くの死者が出た。祈りの結果が死ぬような宗教なのですか？」

「あなた！聖王教会を侮辱しましたわね」カリムが怒りだすが

「客観的事実を述べたまでです。それにベルカの自治領内での信者は随分を貧富の差が激しいようで、貧しい人の祈りは届かず、裕福な人の祈りが届くとは、聖王教会では祈りにお金が必要なんですか？」

「貴様！さつきから聞いていれば」おじさんも怒りだした。自分の発言が問題あるのはわかっているが止められない

「あなたも聖王様のご加護を受けた騎士なのでしょう？だったら現

代医学に頼らずお祈りすればいいじゃないですか？祈りで治るとは
思えませんけど」

「逆巻けヴァインデルシャフトー!!」

「おお、口で勝てないとわかって暴力ですか？さすがに騎士らしい」

「黙りなさい。シャツハ、聖王様の偉大さをその身に刻み込んであ
げなさい」

「はい！ハアアアア」デバイスを展開して突っ込んでくるが、こ
ちらも展開し

「うるさいです。どこかに行つててください。」強制的に転移させ
暴力シスターをどこかへ飛ばす

「な！？シャツハ！」そのことに驚いたカリムが叫ぶ

「どこかに転移しただけです。瞬時だったので場所は遠くありませんが、まあ問題ないでしょう」

「あなたなんて事を！これは問題行為ですよ」

「先にふざけた態度を取ったのはそちらですよ。攻撃を仕掛けてきたのもそちらです。まさか無防備で殴られるとでも言つつもりですか？」

「その通りだ！聖王様を侮辱した不埒ものに我々騎士団が鉄槌を落とすのだ！」

「神にでもなつたつもりですか？聖王様でさえ神ではなかったのに」

「黙れ！」もう一人の騎士もデバイスを展開しようとするが、ジンは素早くデバイスをバインドで固定し爆破した

「！？私のデバイスが！貴様何をした！」

「さあ？神様の罰でもあったんじゃないですかね？祈りが足りなかったんじゃないですか？」

「あなたもレアスキルがあるのですね？なぜ、聖王様のご加護がありませんか……」

「この力が聖王様のご加護と言うなら、オレが聖王様を崇拜することはないでしょう。昔、ベルカの騎士に襲われましてね、その時に発現した力です。」

「そんなのは貴様の聖王様への信仰が足りなかったからだ！」

「この世のすべての人が聖王様を信仰してるとおっしゃるんですか？そしたら今頃ミッドは全域に信者がいますね？」

「ミッドの連中は聖王様の偉大さがわからないほどのバカなのだ！わが自治領にいる領民はその事をわかっておる」

「妄信者も此処まで行くと滑稽ですね。あなたの言う領民が自分にお金をくれるだけの人ならわかりますが、他の人はそんなこと思っていないですよ。以前ここの領民を治療する機会があつて話を聞いたのですが、本当に聖王様を信仰してるのはごく一部で殆どの人は貴方達の怒りを買わないためだそうです。しかも、この地から逃げようとする聖王様の〜とか言つて武力行使を行うそうですね？自分の信仰がなくなれば、潰す。随分と器量の狭い王様だことで」

「あなたには何を言つても無駄なようです。聖王様の事がわからないなんて、ベルカ式の使い手にとって恥ずべき行為です。あなたは騎士にはなれませんか」

「こちらこそお断りです。祈つてどうにかなるのなら、オレ達家族はここにはいない。オレ達が此処にいるのは、昔から受け継がれてきた人類の英知のおかげです。断じて祈りによるものではありません。祈りで世界が救えるなら戦争なんて起こらないんですよ。では失礼します」そう言つてこの場を立ち去るジン

うしろで何か言っているが無視した

その後ゼストの所に行く

「すみません隊長。喧嘩を売られたの買っちゃいました」とかわいく言ってみたら殴られた。ゲンコツは痛い

「隊長だって、騎士の人達ブツ飛ばしてたないじゃないですか」

「ナカジマそれはおまえだ」

「だってこの人たち、我々は聖王様に〜とか言って鍛錬もサボっているくせに言う事だけいっちょ前でムカついたんですもん。」

「それはオレも同感だな。」その後帰ろうとしたところに、先程のカリムとシャツハがやってきた。

まだ終わらないのか
…

第21話 仕事後とツンデレ

今は帰ろうとしているところである。仕事で来たけど、オレ自体何もしてないのでおそらく何か言われるだろうが、それでも、我慢できないものだったので仕方がない。レジアス少将もやってしまえと心の中で言っていたので、お咎めがない事を祈るばかりだ

そんな気分で帰ろうとしているところに、まだ何か用があるのか、二人がやって来た。二人とも不機嫌さを表しながらのご登場だ

「ゼスト隊の皆さん、お待ちください。先程の事について、おじい様 現聖王教会理事がお話があるようです。会って行っては貰えませんか？」シスターは苦虫をつぶしたような顔をしているが、カリムは何とか顔には出さず言ってくる

「どうしますか隊長？あちらの様子だと、会って欲しくなさそうな顔をしてるんですけど…特にシスターの方」こちらに指摘で気付いたのか、慌てて表情を変えようとするシスター

「あちらの理事がお会いしたいというなら、会わないわけにはいかないだろう。　　すまないが案内してもらえだろうか？」

「はい。こちらです」一瞬、眉が上がったがすぐに反転して歩き出す二人。どれだけ、会わせるのが嫌なのだろうか？

…… 少々歩いて理事の部屋に到着。途中騎士団の方からの視線は酷いものだった。中には直接罵って来た人もいる。それでもクイントさんが負け犬の遠吠えにしか聞こえないというと、顔を真っ赤にしながら押し黙った。クイントさんかけ。

カリムが入室の許可を求めて、中から許可があり入室する事にする

「おじい様、ゼスト隊の皆さんをお連れいたしました。」

「うむ、御苦労。」なかなか貫禄のある老人だ。特にあの長いひげが雰囲気醸し出している

「ゼスト隊の方々、今回は誠にありがとうございました。」

「「??」「教会理事に頭を下げられるという予期せぬ事に驚いて一瞬対応が遅れる。でも、すぐさま隊長が対応した

「頭をお上げください。感謝されるような事はしてないと思います
が…」

「いや、今回そちらに訓練を頼んでよかった。最近の騎士たちはベ
ル力が最強だと言って驕り鍛錬を怠ける者が多い。ミッド式を卑怯
者と罵り、1対1なら負けないと吹聴する始末。魔力ランクが高い
者もおるが、いかんせんそれだけじゃ。本当の強者ではないので
お、あなた方のような本当の強者で騎士である人に一度叩き潰して
もらいたかったんじゃ。それでも驕りが治らんものはそこまでの器
じゃろう」

「そう言う事でしたか、しかし、あまり効果があったようには思え
ませんが」

「ナカジマ！」事実を言うクイントさんにゼストさんが苦言を呈す

「よいよい。貴方達が見たのは自分に酔いしれてるバカ者じゃ。骨
の残ってそうな者は、今必死になって鍛錬しておる」フオフオフオ
と言いながら鬚をさする理事。自分たちの騎士にちゃんとした評価
を下せるあたりこの人はすごいであろう

「そこにいる、二人はあまりわかっていらっしやらないと思います
けど」

「こらジン！」クイントさんに便乗して聞いてみる。隊長のストレスは溜まるばかりである

「おお、そうじゃったな。我が孫ながらどうしてこうなってしまったのか 教会という限られた中で育ってきて周りにああいう輩がおったのだから仕方がないと言えば仕方がないのだが」

「おじい様！」

「黙れカリム！お主に発言など許しておらんわ！勝手に聖王様を語りよって、グラシア家に恥をかかせる気か！」

「し、しかし その少年は聖王教会を侮辱したのですよ」

「シャツハ、貴様に発言を許したつもりもないわ！それにお主たちの話を聞いていればそう言う事言われても仕方がない。お主らが教会の創設の事を曲解し勝手に解釈したのが原因じゃろが！妄信と崇拜は別物だという事がまだわからんのか！」その迫力によりカリムとシャツハが後退する

「あのごどういう事でしょうか？教会設立には立派な理由があるのですか？」無限書庫で調べた時には出てこなかった情報だが、このご老人は知っているようだ

「おお、お見苦しいところを見せて申し訳ないな。して若くして医務官になったヤナギバ殿、貴殿の情報は無限書庫で調べたものであろう?」「こちらへの対応がしっかりしている。やはりかなりの人格者のようだ。最初に会った3人とはまるで違う」

「はい、医務官として働く前に無限書庫で勉強していきまして、その時に教会の　　というよりベルカの事ですが、興味を持ちまして色々調べてみたんです」

「若い頃からの努力見事じゃ。カリムにも見習わせたいものじゃ。素質はあると思うのじゃが、古代ベルカのレアスキルを継承したからのお、ちよっと驕っているのじゃよ。おっと、今は設立の本当の理由じゃったな。」「理事の発言に自分でも自覚があるのか黙りこむカリム」

「はい。戦争時に教会を作られても　　」

「確かに、そう言う見方もできる。しかし、あの当時の教会設立の真の目的は信仰のためではない。」「」

「「「「???」「」なぜか、カリムやシャツハまで首をかしげている

「お主ら二人は知らなければいかんじやろう。そんな事だから間違った解釈を与えてしまうのじゃ。聖王様を穢しているのは己だと知れ！」

「「申し訳ありません」」自分たちの浅慮さを指摘され顔が暗くなる。自分たちが勝手に聖王様を語っていた事がわかったらしい。

「それで、本当の目的とは？」

「おっとすまんの、こやつらを見ると話が脱線してしまう」

「構いません。こちらとしても、客観的に判断したとは言え間違った解釈をしているのなら謝らなければなりませんから」

「立派な少年じゃ。 当時、戦争が激化してたのは知っておるな？」

「はい」

「その事を嘆いていた聖王様は自分の民が傷つく事を嘆いていた。だから、民を守るための防衛施設を建てた事にした。」

「それが教会。しかし、なぜに教会なのでしょう？」

「当時の戦争の火種は宗教による相互の不理解が原因じゃ。」

「それでは、尚更おかしくないですか？さらに争いの火種を作ってしまうのでは？」

「確かにそうだが、暗黙のルールがあった。」

「暗黙のルール？」

「教会を襲ってはならない、これを破りし者は何よりも先に滅せられるというルールじゃ。当時は宗教が世界のルールであった。信仰する神が違うにしろ、教会とは神聖なものだと思われる。だから教会を襲う事は憚られたのじゃ。逆に言えば、教会のない地域は無神論者として襲われる事は有ったのが・・・。それに教会には苦しんだ民しかおらず、当時の王国が教会に軍人や武器など置く事は許されなかった。だから、教会は言うなれば境界線じゃ。教会にいるものは戦わない民のみ。戦うものは教会から出て行くのじゃ。それ故、聖王様は教会を作り、被害を最小限にまで抑える事にした。その事を教会に匿われた民達が感謝し聖王様の死後、聖王様を祀る事にした。その時、名を聖王教会とし、もともと崇める神の居なかった教会は聖王様を祀ったのじゃ。それで教会設立に深く関わったのが、このグラシア家という事じゃ。」

「……大変申し訳ありませんでした。そんな理由があるとは知らずに書物から勝手に判断し、聖王教会を侮辱してしまいました。」

「よいよい、最近ではこの話を知らずに勝手に聖王様を語る者がおるのでな、嘆かわしい限りじゃ」そう言っただけでカリムとシャツハを見る。二人とも俯いたままだ

「レアスキルの申請に教会が関わるのは聖王様を尊んでの事。聖王様のような能力があるものが将来世界を平和にしてくれるという願いを込めて、聖王様のご加護という事にしたのだ。断じて聖王様に認められた選ばれし者というわけではない。新たな聖王様のような人が出てくる事を願ったのじゃ。最近ではそれを勘違いした教会騎士団が神の遣いのような態度を取っておるがお。ホントに嘆かわしい」

神の遣いになりきっていた二人はもう顔を上げる事が出来ない。自分の勝手な聖王像を勝手に広めていたのだから

「しかし、私達のような者に話しても良かったのですか？」

「ゼスト殿、これはむしろ知ってもらいたい事なのじゃよ。一部の司祭や騎士たちが己の利益のために聖王様の名を語り寄付金を巻き上げているのが現状じゃが、聖王教会はそんなものではないという事を知って欲しい。わしも全力をあげてそういう者たちを排除してきたが、もう年じゃ、若いもんには任せたいのじゃが、若い者もそう言う輩に言葉巧みに洗脳されてしまつてのお。」

「だから、私達に訓練の依頼をなさつたんですね？」

「そうじゃ。本物の騎士とはどういふものかを見せれば何かが変わるかもしれないと思つたのじゃ。他力本願的で情けないようじゃが今のわしでは、ここらへんが精一杯じゃ。よろしければこれから時々騎士たちを鍛えては貰えないだろうか？愚か者は容赦せずに叩いて構わんから…」

「そう言う事なら喜んで引き受けましょう」「ゼスト隊長が珍しく、にごやかな顔で言う」

「おお、それはありがたい。司祭の方はわしやカリム、後は信頼できる者たちで何とかしようと思う。カリムできるか？」

「はいおじい様。全力にて完遂して見せます！」

「シャツハ、お前には騎士たちの事を頼みたい、やれるか？」

「はい、お任せください！」

「うむ、二人とも頼んだぞ」

「はい！」

―――回想終了

「こうして、今の聖王教会になったの。まだ完全とは言えないけど、おじ様が目指した形に近付いてきているわ。昔の事だったとはいえ、本当に情けない事をしたと思っているの」

「そう言う事か、うちが此処に来てすぐの頃はなんや、やな連中がおったけど、最近ではそういう連中も少なくなったから疑問に思ってた。これで納得やな。」はやてが事情を理解したようだ

「この理事も今では亡くなってしまって、オレとしてもここに来るのは嫌だったんですけど、騎士グラシア殿がおっしゃったように、改善されつつはあるようですね。領民たちに前ほどの悲壮感がありません」

「はい、一部の者たちが行っていた強制的な寄付金の回収を徹底してたたきましたから。それに、住むのに困っている人には教会の一室をあげ、職を斡旋し普通の暮らしができるようにしています。それでもまだ完ぺきではありませんが。」

「理事の言葉実行なさっているようで何よりです。」

「それが、私達の使命ですから。聖王様を穢してしまった事は許されざる事なので、これから償って行きたいと思います」

「理事もそれを聞いて安心でしょう。それでは、私はこれで……」自然な流れのまま帰ろうとするが、狸が邪魔をする

「ちょい待ちい！お宅ここに何しに来たのか覚えてへんのか？レアスキルの申請に来たんやろ！」

「だから、先ほども言ったじゃないですか、改善されつつあるとは言え、理事亡き後の教会は基本的に嫌いなんですよ。それに、オレは昇進にはあまり興味がないので別にいいです。」

「お宅もベルカ式使うんやろ？だったらレアスキル持ちのほうが教会でも何かと待遇がいいで。私も昔はそうやったから。」

「教会での待遇が良くなる事がオレに何の関係があるのですか？全

く持っていないりません。」

「なんで、そこまで、嫌がるんや？」

「それをあなたが言いますか？もともとオレはこの能力は持っていなかったんですよ。まあここの教会の人の仲間みたいに思われるのが我慢できないという事もありますけど……」

「……すまん」はやてが思い出したのか、辛そうな顔をしている。彼女に非がないので何とも言えないが、このスキルはある意味オレの道標であり咎である。大切な人を守れなかった事を忘れずにいさせてくれるし、これを使って守れる事もできることを教えてくれた。

「いえ、オレも言い過ぎました。」

「それじゃーせめてお茶でも飲んで行ってください。」話を換えようとカリムが提案

「いえ、オレはこれで失礼します。」そう言って部屋を出て行ってしまった。

はやてとリンはそのまま残り話をしているようだ。オレとしては教会に行った後は仕事はないので今日はもうオフ。明らかに仕事を

サボっているように見えるが仕方がない。時間が空いたので久しぶりにティアナの様子でも見に行くとする。

――魔法学校到着

今日は休日らしく寮生の生徒は各自適当に過ごしている。一応休日での見学は認められているので、たとえ入ったとしても侵入者に間違われる心配はない

ティアナも此処にいる。おそらくあいつは練習でもしてるだろうから、練習場にも知るだろう。いた

「ティアナ、元気してたか？」

休憩でもしてたのか、若干息が荒い。こいつは基本的に真面目なのだが、真面目すぎるところもあるため練習でも飛ばし過ぎてしまう

「あれ、ジンさん？お久しぶりです。今日の仕事はサボりですか？」

この生意気な態度を先輩が見たらどう思うだろうか？

「誰がサボりだ！今日は聖王教会に行った後はオフだから、生意気なツンデレを心配して見に来てやったんじゃないか。」

「誰がツンデレですか！それにジンさんでも神様にお祈りを捧げる

よづになつたんですね？似合わない事してると、罰が当たりますよ。」

「知らないのか？医者には頼らない。お前オレが医務官である事覚えてないだろう？」

「そう言えばそうでしたね。すっかり忘れてました。」

「お前、今度治療してもらつ時気をつけるよ？うつかり手が滑つてかなり痛くなるかもしれないから。大丈夫、傷は治るからな。
…ただ痛いだけだ」

「い、ごめんなさい！もう生意気言いませんので許してください」
前に一度だけティアナを治療した時、人の言う事を聞かずに無茶をして怪我してきたので、ちよつときつめの治療をしてやった。そのときティアナは泣きまくり、それ以来この治療法はティアナにはトラウマでしかない。自分が泣き喚く姿を人に見られたくないのだから。ケガ自体はすぐ治るのだけど

「聞きわけの良い子は好きだぞ。オレだって小さな女の子が泣き喚くところは見たくないしな。」

「喚いてはいません！ちよつと声が出ちゃっただけです！ジンさんそうやって女の子の過去をバラすなんて最低です、悪魔です！」

まさかあの悪魔と同列に扱われる日が来ようとは

「ティアナ」

「な、なんですか？」

こちらが急に真剣な顔をしたので焦り出すティアナ。どうやら怒られると思っただらしい。意外とビビりだ

「お前はまだ、本物の悪魔を知らない。本物は別格だぞ？困ったならなんでも砲撃で解決、屠った人は数知れず、倒れてる相手にも容赦なく砲撃をかます。それが、本当の悪魔、いや魔王と言い変えて良いだらう」

「ど、どんな人ですか！いい、いませんよそんな人」

とか言いながら若干信じてる。こういうところが意外とかわいい。

「ティアナ世界は広いんだという事を知っとけ。世の中常識では考えられない事はたくさんあるんだ。オレの命もその人に見つかってしまっただら紙クズ同然になる。」

「ジ、ジンさん、も、もしかしてその人と知り合いなんですか？」

「ああ、名を高町なのは、職業は魔王」

ティアナがズッコケる。しかも地球で見た芸人さん張りのリアクション…腕をあげたなティア

「その人ってエースオブエースの人じゃないですか！そうやってすぐ嘘をつくのは良くないですよ」

「」

ティアナを数秒見て、おもむろに空を見上げる。その悲壮感ただよふ表情が何よりも物語っている

「 本当何ですか？」

「…ああ。」

「そうですねか……」数秒の沈黙。

「あ！そう言えばジンさん今日オフなんですよね？だったら私の訓練見てくれませんか？」ティアナが話を変えるために自分の訓練を見てくださいと言っ

「そうだな、久しぶりに見てみるか。少しはうまくなったか？」

「当然です。見ててください」

そうやって自分の訓練の成果を見せようとするティアナだった。

.....

ティアナとの訓練後どうせなら一緒に食事でもしませんか？とティアナが言うので学校の食堂に来ている。一応学生と一緒になら外部の者でもここで食べれるらしい。

「それにしてもうまくなったなティアナ。だんだんと先輩に似てきている。」

「そうですね？兄さんに教わった事はありませんでしたけど、自分では良くわかりません。ジンスさんの真似をしているだけです。」

「まあ教わった人が同じだから似ているのは当たり前か。オレも先輩の真似をしたからな。シスコンという欠点を除けばかなりすごい人だったからな。」

「兄さんって仕事場ではどんな感じだったんですか？」シスコンのところでも少し眉をひそめたが兄が褒められるのは嬉しいようで兄について聞いてくる

「仕事は優秀だったし、人当たりも良いから人望もあつたけど、それを台無しにするくらいシスコンだった。基本パートナーを組んでいたけど、仕事後のお前の自慢話はかなり聞かされた。」

「兄さん……」

「まあそれでも尊敬してるし、オレの師でもある二人の内の一人だ。」

「二人？もう一人の方もいるんですか？」

「ああ、オレを魔導師にしてくれた人だ。人生の師でもあり父親みたい人だ。」

「ジンさん」「ジンの様子がいつもと違っていたのでそれ以上テイアナは何も聞かなかった。」

「あ、そう言えば、お前、士官学校の試験受けなかったんだってな。お前なら受けると思ったけど。」

「前にジンさんに治療された時までは受けようと思ってましたけど、空戦適性もあまり高くないし、無茶してもあれなので普通に陸士の学校に行くつもりです。執務官を諦めたわけではありませんけど……」

「先輩の夢だったからな。お前が叶えてくれれば先輩も本望だろうよ。ただそれに囚われ過ぎて自分の人生を台無しにするような真似

はするなよ。それは先輩の望んだことじゃないからな」

「わかっています。前にそれでジンさんに怒られてからは自分の意志で目指そうと決めたんですから。それに空戦だって諦めたわけじゃありません。当面の目標は執務官、次にジンさんを倒す事ですね」

「おかしいぞツンデレ。なぜ、執務官の次がオレを倒す事になる？」

「だってジンさんに勝つてみたいじゃないですか。それに執務官になればジンさんより階級が上になりますし、ジンさんを倒せば、私が部下としてコキ使っても文句が言えないじゃないですか。」

「ツンデレ、そんな面白くない冗談はやめなさい。オレがツンデレの下になる？バカ言っちゃいけねえよ。寝言は寝て言え。」フッフ、明らかにジンの空気が変わった。

「だってジンさん、昇進には興味ないみたいだし、私が顎で使ってあげますから、それまで待っていてくださいね。」フッフ、ティアナの様子もおかしい。周りがそんな二人の雰囲気を感じたのか、どんどん離れて行く

「上等だ！表出ろこの野郎！ツンデレごときがオレに勝つなんて10年早えって事を証明してやんよ！」

「野郎じゃありません。性別も見分けられないくらいおかしくなりましたか？医者に診てもらった方が良いですよ？あ、そう言えば

ジンさん医者でしたっけ？ 医者は自分で自分の事が見れないから大変ですね〜」

「おし良く言っただぞ小娘。泣かしちやる、絶対泣かしちやる。表出るや！」

「小娘ってジンさんとあんま年変わらないじゃないですか！ しかもキレて女性に手を出そうなんて最低ですね！」 売り言葉に買い言葉。二人のケンカはこの学校ではよく見かける。ジンがティアナの様子を見に来ると大抵はケンカになり最終的に和解して終わる。ケンカの理由はくだらないものだが・・・

「ふん！ 女性だ？ あと5年経ってから出直してこい。お前みたいなお子ちゃまが女性だと？ 笑わせんな！ ツンデレ度も女性としてもバニングスさんには及ばないわ！」

「誰よバニングスって！ いいわ、私が立派なレディである事を証明してあげる」 そう言って訓練場に向かうティアナ。それについて行くジン。周りの観客も観戦モードに突入する。今の所ジンの全戦全胜である

..... 訓練場到着

「いつも通り、ハンデはこちらが射撃オンリー、お前が何でも有り

で良いか？」

「ええ、今日こそ勝つわ！それでごめんなさいって言わせるの！」

「残念ながらそれは無理だ。そしてお前はオレの治療を受け泣き喚く羽目になる。謝るなら今の内だぞ？」

「誰が謝るもんですか！喰らいなさい」一気に三連射してくる。

「そんな物効かぬわ！」キャラが変わってしまったジンだが、全て撃ち落とす。

「どうした小娘、これで終いか？」

「そんなわけないでしょ！これなら」先程と同じように三連射だが、今度は別々に飛ばす。ティアナはジンとは違い誘導弾の方が得意なのでスピードよりも操作性を重視する

「毎回見てる物がオレに通用すると思っただか！」迎撃に入るが

「思っっていないわよ！」誘導弾が分裂してジンを襲う

「！？」それは先輩の技だろ！と突っ込みながらもなんとか回避する。だが回避した際に弾が地面に当たり視界が見えなくなる

「猪口才なことを！小娘がやりおる」とかふざけながらも冷静にティアナを探す見つけた！

「詰めが甘いぞ小娘！魔法陣がバレバレだ！オッラ！」と接近しながら銃で殴りにかかるがティアナが消える

「それはこっちのセリフよ！」後ろから現れたティアナが弾丸を放つ。ジンも攻撃した後なので回避が間に合わない・・・が

「最初からわかってたぜ。甘いな小娘！」そう言って空中で銃を放ち、その反動で弾丸を回避する。ティアナも勝ったと確信したのか、ガッツポーズまでして喜んでいる。

「勝ったと思った時が一番危ない、一つ良い事が学べたな小娘。」油断していたティアナはジンから放たれた弾丸が回避できず直撃した。ジンも気を使ってダメージの少なそうな所に攻撃したので意識はとんでない

ジンに撃たれて座りこむティアナ。両手両足を撃たれたので、動けない

「ティ〜ア〜ナちゃん、っさ治療の時間ですよ。」につこりと笑ってティアナに近づく。ティアナは死刑宣告でも受けたような顔をして青ざめて行く

「す、すみませんジンさん。先程の事は謝りますから、ど、どうかお情けを！」ほぼ半泣きの状態のティアナの懇願を

「あ、それ無理」無情にもその願いが届く事はなかった。

その場に残されたのは少女の悲鳴だったという。

第22話 失くしたものと失くさなかったもの

ティアナが絶叫した後、ティアナを寮に送る。治療自体はちゃんとしたので大丈夫だが、体力的に限界だったらしく、今はティアナを背負っている。途中泣かされた恨みからか、変態とか鬼畜とか言うて来たが、

「まだ治療が足りなかったかな？」その一言で押し黙る。また泣かされるのは勘弁らしい。

寮の前まで送りそこでティアナを下ろす。

「ありがとうございました。」

「おお、訓練校に行ってもしっかりやれよ。」

「当然です。いつかジンさんを私の部下にするんだから。」

「オレが生きてる間に頼むわ」

「クッ。…ねえ、ジンさん？」

「どうした急に女の子みたいになって」ティアナが急にシユンとする

「私訓練校でやっていけるでしょうか？協調性はないし、魔法だつて…」

そんなツンデレにチョップをくらわす。痛いとか言ってるが気にしない

「お前はツンデレだが一人なわけじゃない。それにここでも友達はできたんだろ？ だったら大丈夫さ。それにお前は気づいてないかもしれないが、お前結構強いんだぞ？ 訓練生でもないやつが射撃オンリーとは言え、オレとまともに戦えるんだ。訓練校の連中でもそうできないぞ。お前の実力は不本意ながら証明してやる、お前は間違いなく先輩の妹だよ。先輩も空戦は得意じゃないけど強かったからな。お前もたぶんそうなる」

「不本意とかたぶんとか、かなり不安なんですけど　まあジンさんに言われても説得力はないけどありがとうございます」

「なにおく、オレだって結構強いんだぞ？」

「何で最後が疑問系なんですか！　　実際ジンさんってどれくらい強いんですか？」

「魔王様から逃げれるくらい。あと不意打ちすればほぼ全勝」

「…」ティアナの軽蔑する目が突き刺さる

「いや、冗談だからな。ん〜ん、あんまりまともに戦わないからわからないけど、中の中から上くらいじゃないか？ 不意打ちありなら無敵な気がする」

「……」

「止めてその目地味に傷付くから！」ティアナからの視線がゴキブリを見る様な視線に変わった。そんな目で見られて平気でいられるほどジンの心は強くない

「ハア〜ジンさん、もう少しちゃんとしてれば良いのに。」

「うるさいぞツンデレ。…あ、そうだ、お前陸士の訓練校に行くんだよな？」

「そうですけど…」

「たぶん、オレの妹分も入るから宜しくしてやってくれ」

「妹分ですか？」ちょっとティアナが不機嫌そうにする

「ああ、お前も含めて4人ほどいるが、お前の一歳下の子だ。元気な奴なんだが…どうした？嬉しそうな顔をして」

ティアナは自分が妹分どと思われている事が嬉しかったらしく顔を綻ばせて、それがジンに気づかれてしまった。

「な、なんでもありません。それで続きは？」なんとか誤魔化す

「ん、ああ、元気な奴なんだが人の話を聞かないところが有ってな、根は良いやつだから仲良くしてやってくれ。」

「まあ良いですけど」

「よろしくな。そう言えばいつから訓練校に行くんだ？」

「再来月です。あくまでも試験に合格できたらですけど」

「それは問題ないから安心しろ。現状お前に問題があるとすればその生意気な所だけだ」

「ジンさんにしかないから大丈夫ですね」

「人を選んではいけません。まあいいや、とりあえず頑張れよ。次の休暇がいつ取れるかわからないから、いつ会えるかわからないが、受かる事を祈ってる」そう言ってそう言って去っていくジン

仕事はサボらないようにとか言ってるが、あいつなりの挨拶だという事にしたい。可愛げのない妹分だ事で

……あ、スバルの名前言うの忘れた。まあいいか、すぐわかるだろう。

.....

それから数カ月経ってティアナとスバルは訓練生になった。それに

伴ってギンガが訓練校を卒業し今は108部隊つまりゲンヤさんのもとで働いている。オレの部下にもあたるわけだが、そんな感じはまったくないので気にしないでいる。ギンガがよろしくお願いしますと敬礼した時なんか爆笑してしまった。クイントさんに殴られたけど……

「ギンガも局員になったんだな。ゲンヤさんも嘆いていたぞ」

「でも、父さんや母さんの役に立ちたかつたし、私やスバルみたいな子が生まれないようにしたいですから」ギンガもスバルもクイントさんの遺伝子から造られて人造魔導師、それも機械を融合された戦闘機人である。ギンガはその事を気にしてる

「バカたれ。そんなこと言ったらクイントさんが悲しむぞ。生まれに罪はないんだ、お前達が生まれてきた事自体は良い事なんだよ。少なくともナカジマ家は幸せになった。」

「ジンさん」

「だから、オレ達の仕事はそういう子達を一人でも多く幸せにしてやることだ。不当研究なんかされていたらかわいそうだし許せない。オレ達はそう言う人達を守っていくお仕事なの。次くだらないこと言ったら、お前の大事にしてるハラオウン執務官のサイン付きブロマイド燃やすからな」

「ジンさん、良い事言ってるのに最後で台無しです。それにあれは私の宝物ですので絶対に渡しません！」ギンガもスバルと同じように自分を助けてくれた人を尊敬している。一種のファンみたい

なものでプロマイドをお守りしている。以前ちょっと悪戯して落書きしたらブツ飛ばされた。しかも泣きながら。そのせいでプロマイドにサインを頼むなんて事をさせられ、今でもそれを大事に持っている。

「あの人意外とポンコツだからな。お前やスバルは現実が見えてない。」

「ジンさんはフェイトさんに会えるから良いじゃないですか！私みたいな一般局員ではそうそう会えないんですよ！代わってください」

「別に全然構わないぞ。むしろ代わって欲しい。この日々砲撃の恐怖に晒されるオレと」

「…それは遠慮します」ギンガはなのはの事はあまり知らないのだがジンがあること無い事言いふらしたのでギンガの中では危険物認定にされている。フェイトのポンコツぶりもいろいろ言ったがそっちは耳に入らないらしい。

「おまえら、工作中だぞ。無駄話はやめて仕事しろ、仕事」後ろのドアから入って来たゲンヤさんが注意する

「ほら、ギンガ、部隊長様がああ言ってるぞ。全く新人の癖に油を売ってるなんて、偉くなつたな。」

「な！？ジンさんが話しかけて来たんじゃないですか！後輩に擦り

付けるなんて最低の上司のする事ですよ！」

「もっと褒めて〜」

「褒めてません！」

「お前らいい加減にしろ！そんなに暇なら仕事をくれてやるから」

「だってよ、ギンガ。やったね初任務だね。頑張れ！」

「ジンさんも行くんです！」とギンガに叱られてしまい、しぶしぶ仕事内容を聞く。どうやら違法研究所があるらしくそれを調査して来いとの事

「ギンガの初任務にはかなりきつくないですか？」ジンは少し心配があるようでゲンヤに苦言を呈す

「どこも人手不足だからな。それにお前の所は一番信憑性の薄いとこだ。お前もついていってるんだし大丈夫だろ。一番信憑性の高いところはカルタスに任せている。」ゲンヤも一番安全な所を選んだらしい。

「さいですか。それで場所は？」

「ミッド北部のはずれの山の中だ。だれも近寄らないから見つかりにくいが場所が場所なだけに研究所があったとしても機能してないだろうというのがこちらの予想だ。」

「オレ達は破棄されてるであろう研究所から何かしらの情報を持ち帰れば良いんですね？」

「まあ、そう言う事だ。頼んだぞ」

「了解！」

ギンガと部屋を後にし、捜査の準備に取り掛かる。ミッド北部まで移動し、あとは各班にわかれて捜査を開始する。ギンガも緊張しているようだが、最初はみんなそんなもんだと励ますと少しだが緊張が解けたようだ。今は突入の際の事について話し合っている

「オレが先行してギンガは補助だ。防衛設備は止まっているようだが、常にバリアジャケットは展開しておけ。もしかしたらという可能性もあるからな」

「はい。」

行くぞという合図で突入する。

まあ突入したは良いが何もなかった。どうやらここははずれのようだ。研究資料も全て撤去されているようだ。カルタスさんの方が本命だろう

「何も有りませんでしたね。」

「ああ、もともと可能性も薄いつて言っていたからな。まあ仕方ない……ん？」

「ジンさん、どうしましたか？」ジンが不意に向いた方向が気になったのかギンガが聞いてくる

「ギンガちょっとタンマ。どうやらこっちが本命のようだ。」

「どういふ事ですか！？」そんな事はないだろうと思ったがギンガが聞いてくる

「確かにここには何も残っていないが、おかしいと思わないか？」

「何がですか？」

「綺麗すぎる。此処までなにもないなら随分前に撤去されたはずだ。なのに机や床に埃がない。こういう違法研究の大半が人体実験だが、研究室が汚いと被験者が変な感染症にかかったりするものだ。だから大半は綺麗にしてある。」

「でも、ここには何も無いじゃないですか。」

「だから不自然なんだ。研究所は綺麗なのに何も無い。と言う事は」「ジンが屈み床を調べる。床を叩いて行くと音が変わった

「ビンゴ！」音が変わった床を調べると地下へと続く階段が有った。それを見たギンガはすぐに行こうとするが、ジンが止める

「ここが本命であるとかかった以上応援を待つべきだ。今カルタスさんに連絡を入れる。皆が来るまで待機だ」

「そんなの待っていていられません！ここには人体実験をされている人がいるかもしれないですよ。私一人でも行きます」ギンガが駆け出し階段を下りて行く。

「待てギンガ！」連絡を入れていたので対応が遅くなりギンガの独断専行を許してしまった。チツ、舌打ちしながらもギンガの後を追う。何もなければいいが…

- - - - -

「ここね」ギンガが研究室の入口らしき場所を発見する。一息入れて突入する。全てはここにいるかもしれない被害者を救うために

「时空管理局です！全員大人しくなさい。」そう言ってギンガが入るが、中にいたのは何人かの研究者とフードを被った人。それとユニゾンデバイスだった。

「管理局だと！？ここがバレたのか！クソ。いったん逃げるぞ」

「この実験体はどうします？」

「そのやつに任せろ。そいつはそのためにいるのだから」そう言
って逃げようとする学者達

「待ちなさい。貴方達は違法研究の現行犯で逮捕します。素直に

「捕まりなさいと言おうとした時横から槍が飛んでくる

「お前は私達が逃げるまで時間を稼げ。ついでに実験体も回収して
後で合流しろ」それだけ言ってギンガが下りてきた階段を上って逃
げて行く研究者達。ギンガも後を追おうとするが、フードの男に邪
魔される

「どきなさい！あなたがしている事は立派な犯罪行為ですよ」そう
言ってフードの男を倒そうとするが、軽くあしらわれる。

「（強い！明らかに私よりも強い。でも…）」意を決して突っ込も
うとするギンガ。だが、相手はギンガの突撃を容易にかわし槍を振
り下ろす。

やられる！と思ったギンガは目をつぶり身構える。　しかしいく
ら経っても衝撃がこない。ふと気になって目を開けると

「勝手に命令違反してんじゃねえよ。帰ったら始末書だバカ野郎！」
いつもとは違いかなり怒っているジンがそこには居た。ギンガはジ
ンに抱えられていた。自分が助かったと思ったが、次の瞬間血の気
が引いて行く

「ジ、ジンさん　う、腕が！」左手のないジンを見て一気に焦り出す。

「とりあえず、止血はした。だが、お前を庇いながらの戦闘は無理だ。とりあえず下がれギンガ！」

「で、でも」もうパニック状態で何が何だか分からないギンガ

「死にてえのか！サツサとしろ！」よくわかっていないギンガだがジンの迫力に後ろに下がる

「一応管理局員だから言っておくけど、投降しろ。」

「……」

「反応なしか。仕方がないな。投降の意思なしとみなし、拘束する！ファントム！」そう言って魔力弾を形成し打ち込む。何時ものように牽制などしていられない。早くしないと意識がなくなりそうだなので初めから全力だ

「……」フードの男はジンの形成した魔力弾をかわし、時には斬っていく。ジンも舌打ちしながら、シルエットを展開。五人の幻影が現れそのまま突撃していく

「……」フードの男も迎撃するが、槍で突いた瞬間爆発する。その反

動で吹き飛ばされる。ジンはすかさず残りの幻影も突っ込ませ、相手をバインドで捕える。あいては動かずそのまま幻影による爆発に飲み込まれた。

煙が晴れ、ボロボロになった相手を見る

「非殺傷だから、死にやしないがこれまでだな。逮捕する」そう言っ
つてボロボロになったフードを取ると・・・!?

「な、何で…」驚きの顔がそこにはあった。

「何であなたが生きているんですか！ ゼストさん！」嘗ての恩師、ゼスト・グランガイツがそこにはいた。

「…」なにも答えない

「答えてください、ゼストさん！ゼストさんなんですよ!?!?」

「…誰だお前は？」

「え？」その言葉に一瞬思考が停止する

「お前など知らん」

「ウソでしょ！オレを忘れるなんて!」そう言って駆け寄りつとす

るが

「ジンさん！危ない」ギンガ叫ぶ。いつの間にかバインドを解除していたゼストの槍がジンを襲う。ギンガのおかげでギリギリ致命傷は回避できたが、足をやられた。目の前のゼストは本気で殺す気だった。頭の中がごちゃごちゃになっても考える。今やるべきことは

「ギンガ！ユニゾンデバイスを連れてこっちに来い！」そう叫び、ギンガもそれに答える。がむしゃらになって走り、ユニゾンデバイスを拾い上げるとジンの所まで全力で走る。ゼストの方も動き出そうとするが、ジンの爆発によってまだ立てない

「ここはいったん退く。カルタスさんに事情を説明しろ」そう言っ
て転移魔法でカルタスのもとに転移した。ジンは出血がひどく、転
移した後に意識を失った。

カルタスはいきなり現れたジン達を見て、驚いたがジンの様態を見て事情を察しすぐさま医療班を呼ぶ。泣いているギンガをどかして、医療班に引き渡し病院に直行させる。ジンは病院に搬送され、そのまま手術。出血はひどいものの命に別状はなかった。それに貫かれた足も問題なく治るらしい。だが、斬り落とされてしまった腕は現代のミッドの技術をもってしても治せなかった。

- - - - -

ジンの意識覚醒

「ここは　「病院のベッドのようだ。あの後倒れたんだな　それに左腕の肘から先の感覚はない。やはり治せなかったようだ。まあ当然と言えば当然か、腕はあそこに放置したまんまだもんな。」

「ジンさん…」　ギンガがオレのベッドに寄りかかって寝ているようだ。目を見ると涙の跡が残っていて目元は赤くなっている。

「心配かけたようだな。でも、お前が無事でよかった」　ギンガの髪を撫でながらジンはそう思った。

「バカ言ってるんじゃないわよ。あんたが無事じゃなかったらどうなったと思っているの？」　ドアの方から聞こえてきた声。そこにはクイントさんとメガーヌさん、ゲンヤさんがいた。

「無事だったから言ってるんですよ。幸い腕一本で済みました。ギンガの命に比べれば安いものです。」

「その事について感謝してもしきれないけど、あなたもつと自分を大切にしなさい」　久々にクイントさんがマジギレしている

「すみません」

「ん〜ん・・・!？」　ギンガが目を覚ました。

「ジンさん起きたんですね！よ・よ・よ・が・だあ・。ホオ・ン・ト・
によ・が・だあ。」ギンガが泣きながら言ってくる

「心配けて悪かったな。お前のおかげで助かった。」ポンポンとギンガの頭を撫でる。ギンガは泣きながら俯いている。ベットのシーツを力いっぱい握って

「ゴ・メン なさ い。」絞り出すように謝罪の言葉を述べる

「ギンガ、顔をあげろ」

「は、はい。」泣き顔が見えたがひどいもんだ。可愛い顔が台無しだ。

「歯食いしばれ！」パシン！病室にその音が響き渡る。ジンがギンガの顔を平手で叩いたのだ。

ギンガは言われた通り歯を食いしばっていたのでそこまで衝撃はなかった。そのあと殴られるだろうと思いついて歯を食いしばる。当然だ、自分で独断専行した拳句、そのせいでジンは片腕を失ってしまったのだから。殴られれば許されるもんじゃない。しかしいくら経っても次の衝撃は来ない。恐る恐る目を開けてみるとすでに横になったジンがいた

「ど、どうして？」

「ん？今のは命令無視した罰だ。後で始末書も提出だからな。」

「そ、そうじゃなくて、ジンさんは怒ってないんですか!? 私のせいで」

「当然怒っている。お前が自分のことを考えなかった事に」

「え!?!」

「あの時、現場にいたのはオレとお前だけ。地下に何人いるかわからない状態で行くのは無茶すぎる。確かにお前からすれば、被害者を一刻も早く助けたかったのだろう。でもな、それで自分の事を度外視して良いわけじゃない。お前がいなくなったら悲しむ人がたくさんいるだろう?」

「それはジン君もよ。あなたがいなくなったらルーが悲しむわ。もちろん私たちだって」

「すみませんね、メガー又さん。ほら、ギンガお前のした事がわかったか?自分が死ぬ事で残されたものがどんな思いになるかわかったか?ゲンヤさんなんてきつと後を追うぞ」

「何変なことやってやがる! まあそれでもこいつを助けてくれたんだありがとうよ」ギンガの頭をポンポン叩きながら言う

「ホントにね。ギンガあなたは今回死ぬところだった。でも救ってもらった。この事は一生覚えておきなさい。ジン君の無くなった左手の事までしっかりよね」

「…」

「返事はどうしたのギンガ！」

「ふあい！」「泣きながらクイントに返事する。もう何を言ってるのかわからないくらい泣いている。

「ならこの話はここまでだ。とりあえず無事でよかったよギンガ」

「ジンさん　うえ、うわあああああんん！！ごめんなさい、ごめんなさい・・・」ただ泣きついて謝るギンガをそっと抱いているジンだった。

第23話 アギトの行方と …

ギンガが泣きやんだ後、ゲンヤさん達と話があるのでギンガに部屋を出て行ってもらい、話をする。まず、あの違法研究所で逃げだした連中の事だが、ジンが捕縛している。ギンガを追いか掛けて、階段を下りて行ったらちようどいてあえなく御用となった。ジンはすぐさまバインドで拘束しカルタスのもとに送って、そのあと、フリードの男との戦闘になった。

「ユニゾンデバイスの方はどうなっています？」

「ああ、色々と酷い事をされていたようだな、記憶があまりないらしい。部分的に思いだせるのは名前くらいでアギトと言っらしい。今のところは内が保護してるからうちで預かっている。上にも報告しようと思ったんだが……」ゲンヤが言い辛そうに言う

「何か、問題でも？」

「ああ。カルタスのやつが研究員を尋問して研究の支援者を調べ上げたんだが、どうやら管理局が一枚かんでいるらしい。」

正義を唱える管理局が犯罪研究に加担していた事に、若干の苛立ちえを覚えるゲンヤ。しかしジンの返答は淡白なものだった

「そうですか。それで、そのアギトと言う子はどうするんですか？上に報告してもおそらく実験材料にされますよ。」

「…確かにそうだな。助けたのがお前とギンガだから、お前に任せ

る。どうするかはあの子と話し合っただけで決めてくれ」

「こっちは任せですか？ 部隊長」

「オレだってやらなきゃいけない仕事がたくさんあるんだよ！ 少しくらい良いだろう！」

「まあ、構いませんけど。それで、クイントさん、メガ・又さん、お二人に確認したい事があります。隊長は、ゼスト隊長はもう死んでるんですよね？」

ゼストの名前が急に出てきたことに疑問を持ちながらも答える

「ええ、確かに殉職してるわ。遺体は研究所の崩壊が酷くて見つからなかったけど、隊長の服が見つかって、そこに着いていた血の量からしても生きていないという結果になったわ」

「…そう ですよ。隊長が生きてる筈がない」

「どうしたのジン君？ 少し変よ」心配してくれるメガ・又

「オレの片腕を飛ばしたのはゼスト隊長かもしれない。」

「え！？」ゲンヤも含めて3人が驚いたようだ。それも当然である、ゼストはもう死んでいるのだから

「最初はフードを被ってて気づかなかったんですけど、戦闘が激し

「ありえなくはないわね。隊長はオーバーSランクの魔導師。洗脳すれば相当な戦力になる。そう考えれば、ジン君を覚えていないのも合点がいくわ」

「なんか、きな臭い事になって来やがった。ジンはこれからどうする?」

「そんなの決まってるじゃないですか」

ジンの言わんとしている事がクイント達にはわかった。

「でも、片腕じゃ、何かと不便じゃない?あなたの戦闘スタイルなら片腕がなくてもなんとかなるでしょうけど、かなりきつくなるわよ?」

「それなんですよね、どうしましょうか?片手だけでもやれなくはないんですけど…」

「まあその話はもう少し落ち着いたらにするか。おまえも結構血を流したから、疲れているだろ?今はゆっくり休め」そう言って部屋を出て行くこととするゲンヤ達、しかし、ゲンヤが振り返り

「それとな、ジン」

「はい?」

「本当にすまなかった。オレの見立てが甘かったせいで」
「ゲン

ヤが深々と頭を下げる

「それはしょうがない事ですよ。ゲンヤさんの判断は正しい。ただ今回は運が悪かっただけです。だから気にしないでください。それから、ギンガの事もあまり叱らないでやってください。あいつなりに頑張ろうとした事は決して悪くはないんですから。あいつにとっても良い経験になったでしょう。幸いオレは生きてます。だから、気にしないでください」

「…すまねえな。お前には妻だけでなく娘達まで助けられている。感謝してもしきれない」

「いいですよ。オレにとつてはみんな家族みたいなもんです。それにもう誰も失いたくありませんから」

「ジン…」

「もう寝ますね。お休みなさい」

「ああ、すっかり休め」ジンの悲しそうな表情を見た三人だがそれ以上は何も言わなかった。ジンを起こさないようにそっと部屋から出て言った。

.....

翌日

まだ、検査の方があるので退院はできない。自分としては平気なのだが、ギンガが泣きそうになって言うので、しぶしぶベッドの上でジツとしている。読書もしていたのだが、なにぶん、片手では読みづらいのでやめた。何もする事がなかったたので窓の外をぼくと見るとドアをノックする音が聞こえた。どうぞと言ってすぐドアが開く。開いたドアの先にはゲンヤさんとユニゾンデバイスの子アギト　がいた。

「どうしたんですか？部隊長自らその子をお届けですか？」

「ああ、オレもこっちに用が有ったし序だ。後はお前さんたちで話し合ってくれ」アギトをこちらに渡しゲンヤさんは部屋を出て行った。

「それで、アギトでいいんだっけ？それで、君は一応オレ預かりとなったんだけど、君はどうしたい？」

「わからない。あたしは自分がなんているかもよくわからないんだ。」

「君はユニゾンデバイスだね？ロードの人はいないのかい？」

「いない。いつの間にかあの研究所にいてそれからずっと研究を受けてきたから」アギトの記憶は相当無くなっているようだ。おそらく純正の古代ベルカ式のユニゾンデバイスだと思う。リインさんは少し違う。

「なら君が何かしたくなるまでオレが保護しよう。何かしたくなったら言ってくれ。力になる」

「なら、私はロードを見つけない。それが私の生まれた意味だから」

「そうか……。なら協力するけど、君はどんなタイプのユニゾンデバイスなんだい？」

「あたしは『烈火の剣精』、炎が使える。」

「炎かオレとは相性が悪いだろうな。オレの魔力変換は爆発だから、意図せず爆発してしまうかもしれない。まあやってみる？」
「たぶん、合わないだろうけど、一応提案してみる。アギトの方もダメもとでやってみようという事になり、看護師さんに散歩すると伝えて庭の方へ向かった」

・
・
・

「ここなら人もいないし大丈夫だろう。融合事故があるかもしれないから、もし何かあったらすぐに解除してくれ」

「わかった。行くぞ！」

・
・
「「ユニゾン・イン」「二人の手を合わせてユニゾンをする」

「まあ、成功かな？思ったよりも相性は悪くない。アギトはどうだ？」

「ああ、結構いいけど、あんた…そういうえば名前なんて言うんだ？」

「言っただけじゃなかったか？ジンだ。ジン＝ヤナギバ」

「そうか、じゃあ兄貴と呼ばせてもらう。私を救ってくれた恩人だからな。よろしく頼むぜジンの兄貴」

「オレ、兄貴って柄じゃないんだけど、まあ良いか。それでアギトどんな感じだ？」

「ユニゾン自体の相性は悪くない感じた。でもやっぱり兄貴の言う通り、変換資質にちょっと問題があるな。うまくやれない事もないけど、それをやるとお互いの良さが消えちまうな」

「やっぱりそうか。いったん解除しよう、部屋に戻って考えれば何か良い策が出てくるかもしれないし。」

ユニゾンを解除し部屋に戻る。ドアを開けようとした時、部屋の中に人の気配がして誰かいるのかなと思ってドアを開けた

「お兄ちゃん！」ルーテシアが飛び込んできた。

「おお、ルー、来てくれたのか。悪かったな心配かけて」ルーの頭を撫でようと思ったがルーを支えるのに片手を使ってしまって、撫でる事が出来ず、片手を失った事をありありと実感する。

「ううん。良かった」ルーが抱きついて泣いている。あまり泣かすような事はしたくなかったんだが、こればかりはしょうがない。ギンガが死んでいたらもつと大変な事になっていただろう。

その後ルーを慰めてベットに座る。ルーはオレの膝の上、ここが一番落ち着くらしい。そんな光景を見ていたアギトが話に入る

「あ、兄貴」

「ああ、悪かったなアギト。こいつはルーテシアって言ってオレの妹みたいなもんだ。お前は会った事あるかもしれないが、メガーヌさんの娘さんだ」

「ああ、あの感じの良い人か。確かに似ている。よろしくルー！あたしはアギトってんだ。」

「よろしくアギト」エリキャロの一件でこういう事であまり緊張しなくなったルー。それにしてもルーってどうしてそんなあだ名に

ルーとアギトはすぐに友達になり、アギトはルーの膝の上に持っている。あたから見たら変な光景だろう。その状態でアギトと話を進め、炎持ちで剣を使う人が一番ベストとのこと。

「炎の魔力変換持ちで、剣を使うやつか…」

「どうしたんだ？兄貴」

「いや、よくよく考えるとお前にピッタリなんだよな。でもな」

「あたしにピッタリなやつを知ってるのか？教えてくれ！兄貴頼む」

「いや、まあオレの好き嫌いをお前に押し付けるのは嫌だしな。でも、あいつはな」

「兄貴その人の事嫌いなのか？」

「ああ。大が付くほどな。でもそれとお前の事とは関係ないし、オレの個人的感情を除けばピッタリだと思う。まあ一応連絡取ってみるわ。それでお前が判断してくれ」

「わかった。」アギトも少し考えたようだが、頷いた。基本闇の書の被害者でもない限りあいつらに悪感情は抱かない。今代の主が善人だったため、その守護騎士たちも善人で通っているし、そもそもあいつらがプログラム体で、ロストログアだったことは一部を除いて特秘事項となっているためあまり知られていない。

とりあえず、はやてに連絡を入れる。

「なんや、そつちから連絡してくるなんて珍しいやんか。どうしたん？」

「今平気ですか？」

「大丈夫やよ。今日は休みやねん。家族みんなでまったりしてる所や」

「ちょうど良かった、あのお願いがあるんですけど…」

「ん？なんや？」

「あの烈火の将を貸して欲しいんですけど…」

「ん？ごめんな、よく聞こえなかったわ。もう一回いつてくれるかあ？」予想外の事についていけなかったはやて

「だから、烈火の将を借りたいんです」

「ど、どどど、どついう事や！？ジン君からシグナムに会いたいて言っなんて！なんか悪いもん食べたんか？」

「で、貸してくれるんですか？」はやてのポケを軽くスルー。この後からんでも面白そうじゃなかったのでサッサと返事を聞く事にする

「本気なんか？」

「ええ、彼女でないとダメな用件なんで」

「それはシグナムを…」

「別にどうこうする気はありませんよ。」

「わかったわ、今シグナムに聞いてくるからちょっと待っててえな
いったん回線を切る

・
・
・
・

「待たせたな、それで貴公が私に用事とはなんだ？」回線を開くと
シグナムが出てきた、やはり彼女を見るとイライラする

「用があるのはオレじゃなくて…」

「あたしだ。」

「ん？…おまえは」アギトがユニゾンデバイスである事に気づい
たらしい

「あたしは、アギト、『烈火の剣精』だ。あんたは剣士で炎を使う
んだろ？」

「ああ」

「できれば、あたしとユニゾンしてもらいたい」アギトのまっすぐ
な目がシグナムを見る

「し、しかし良いのか？」向けられた言葉はアギトではなくジンにだ。ジンは多少嫌な顔をするが

「オレ個人としては嫌だけど、アギトの事を考えるならあなたがピツタリだと思う。おそらくアギトは純正の古代ベルカ式のユニゾンデバイスだ。古代ベルカ式を使い、剣士で炎の魔力変換を持つあなたならアギトのロードになれるかもしれない。」

「…わかった。早く引き受けよう。して、私はどこに行けば良い？」

「今療養中なので、ミッド地上本部の病院に来てくれますか？」

「了解した。では後ほど」回線を切る。少しアギトがこちらを気にするようなそぶりをするが、気にするなと手を振ってアギトを見る。この子は優しい子だと思う、願わくは、この子のロードが見つかりますように

ルーテシアはジンの膝の上で健やかに寝ていた。

.....

シグナムが到着したという連絡があり、はやてやリインも来ているようだ。

ドアにノックが有って入るように言う。ドアを開けたはやての音が最初に聞こえた

「ジン君とうとうなのはちゃん砲撃を喰らってもうたんか？よく

無事でおつたな。」冗談めかして言うはやてに、ベットに横になっていた体を起こし、はやて達の正面に座った。

「いえいえ、あんな砲撃魔に撃たれたらこの世にはいませんって！ちよつと未熟さのせいで不覚をとっただけです」はやて達は見てしまった。無くなったジン左腕を

「……」冗談ぽく言ったはやての顔色がどんどん悪くなっている。当然だろう、冗談ではなく本気で死にかけてのだから

「まあ気にしなくて結構ですよ。先程考えていたんですが、この左腕のあてはできましたし。」

「そ、そおか、…すまんかったな」

「珍しく落ち込んでますね。別にいいですって、リインさんも気にしないでください」リインなんかはジンの体を見た瞬間泣きそうになった。はいですうと答えるが表情は暗い。こんな空気にするつもりはなかったんだけど…

「まあ、この話は終わりにして、用件を済ませましょう。アギト」ルーとじゃれていたアギトをこちらに呼び寄せる

「兄貴、この人が私のロードになる可能性がある人は」

「ああ、おそろくな」シグナムの方に顔は向けないが、アギトの口
ードになる可能性が一番高いと言う

「剣の騎士、シグナムだ。よろしく頼む」握手を求めるシグナム

「剣？でも兄貴は烈火の将って…」

「そう呼ぶのはオレくらいのもんだから気にしないでいいぞ。それ
より、試したらどうだ？ユニゾン」

明らかにシグナムに対してのみ敵意があるが、アギトには関係のな
い事なので先を促す

「ここでやるのは拙い。外に行つてやろう。アギト案内してくれ」
ジンの体をみてこちらに案内を求めるのではなくアギトに頼むあた
り、ジンに対する気遣いが伺える。

「オレの事は気にせず言つて来い。お前のロードであるといいな。」

「・・・兄貴。わかった、じゃあ行つてくる。シグナムこつちだ」
そう言つて飛んでいくアギト

「主はやて、少し行つて参ります。ヤナギバもアギトを借りるぞ」

「はい、アギトは良いやつですから …」ふざけた事をするような

らわかったますね？聞くような顔で

「わかっている。彼女を悲しませるようなことはしない。」

「ならいいです。」そんなやり取りをしてシグナムがアギトの後を追った

・
・
・
・

「あなたが静かだと違和感がありますね？イメチェンですか？似合わないからやめた方が良いでしょう」

「ハア、お宅も変わらん。気にしてるこっちがアホみたいやんか」

「あ、今更気づいたんですか？良かったです」

「お宅、私をなんだと思ってるんや？」

「
…」

「これは怒って良いとこなんか？」

「あはあ、綺麗な顔が台無しになるのでやめた方が良いでしょう？ほら、デバイスをしまつて、しまつて」はやてが起動させたデバイスを見て焦るジン

「まあええわ。それでどないなミスしてそうだったん？お宅なのはちゃんやフェイトちゃんにも勝てるやんか、一体どんな相手やねん？」

「ええ、実は魔力ランクSSSで無尽蔵の体力をほこり、身の丈2メートルはありそうな大柄の女性だったんです。完敗でした」

「嘘やる。もう少しましな嘘をつかんかい！　まあ要するに聞いて欲しくないってことやね」頭の回転が速いはやてはジンの事情を理解した。

「さすがに3人の中で一番まともな人だけの事はある。高町さん辺りだとしつこく聞いてきそうですからね」

「そんな事はないで。なのはちゃんはお見えて人の機敏には聡い子や。ただそれを言葉にしてもらわんとダメみたいで、困ったら砲撃…何しとるんや！」ジンが片手で携帯端末を操作しているのを見てはやてが叫んだ

「いや、八神さんの赤裸々な愚痴を記録し、すこし改竄して高町さんに送ってみようかと思ひまして…」

「お宅、私という時まじめに話す気あるんか？」

「ないですね」

「シュベルトクロイツ！」

「わ、わ、は、はやてちゃん、ここは病院です！落ち着いてくださいあゝい！ジンさんも止めてください！」ルーテシアと話していたリインだ。はやての様子を見て慌てて止めに入る

「離してリイン、その男だけは！」

「ルーあれが地球のテレビで見たやつだ。ほらやってみる」「うんと可愛くうなずくルー」

「殿ゝ殿中でござる、殿中でござる」

「ハハ、うまいぞルー。でもここは病院だから殿中じゃないな」

「でも、病院じゃゴロ悪いよ」

「それもそうだな」

「アハハハ」にこやかに笑う二人をよそにはやてとリインの仁義なき戦いが始まる。暴れるはやてと止めるリイン。リインが、助けてくださゝいと言ってるが、はやてが憤慨した姿はなかなか面白いで放置した。アギトとシグナムが戻ってくるまでその戦いは続いた。

第24話 再び海鳴へ

はやてが暴走してリインが止めると言う状態がしばらく続いて、シグナムとアギトが帰ってきた。シグナムは暴走している車を止めるために苦心し、アギトはこちらに来て話をする

「どうだった？」聞くまでもない。嬉しそうなアギトの顔を見れば一目瞭然だ

「シグナムがあたしのロードだと思う。兄貴とのユニゾンも良かったけど、シグナムとのユニゾンは なんつくか自然な感じがした。」

「そおか？良かったなアギト。それで、お前はこれからどうする？烈火の将がロードになったから、八神家で暮らすか？」

「いや、それはまだいい。ルーラーと約束してしばらくはルーラーの家で暮らすことにした。一応兄貴預かりになっているから、兄貴の家に住んでいるって事になっているけど、兄貴とルーラーの家近いんだろ？だったらルーラーの家で暮らしても問題ないだろ？」

「まあルーラーが一人にならずに済むからこちらとしては願ったりだけど良いのか？お前だって管理局で働くんだろ？」

「まあ、その内にな。でも、今はルーラーが心配だからルーラーといる事にする。一人でいる事の辛さは私にはわかるからな。シグナムもそれを了承してくれているし、いざとなったら応援に行くから大丈夫だ。」

「でも、デバイス登録してないとダメなんだけど　まあそれは八神さんに任せればいいや。後で言っといてくれ」

「わかった。」アギトのことは片付いたのではやてにその事を伝え御退席願う。とうとうはやてが完全に切れてしまったが、シグナムが後ろから手刀をかまし沈黙させた。主の暴走を止めるのもまた騎士の役目だと言って、自分で判断したらしい。昔よりはまともになったが、それでも嫌いなことには違いなかった。これから先彼女を好きになる事はないだろう。

「リインはもう少し残っていくですよ」

「リインさんなら大歓迎です。ルーやアギトと遊んで行ってあげてください。」

「はいですよ」リインとアギトがルーの周りを飛び回る。それを見たルーがうれしそうに眺め、ずっとニコニコしていた。途中アギトがリインに悪戯なんかをしたりして少し言い合いになったが、それをルーが叱って止めお姉さんみたいになっていた。シユンとしている妖精二人に幼女が説教するところはなんかシユールだった。

- - - - -

数日経って無事退院。アギトは最初に来た日にルーと共に帰り、メガーヌ家でお世話になっている。オレとしては仕事に復帰しても良いのだがゲンヤさんが体が慣れるまで休暇してると言ったので兼ねてから計画していた、代わりの左手案を実行に移す事にする。一応

病院で連絡を取っていたのだが、いつになるかわからなかった。その内連絡しますと言ったきりだった。なので家に帰り連絡を入れる事にする。ちなみに家に帰った時見舞いにも来なかった母さんが、オレの事を見て少し涙ぐんでいたのは秘密だ。メガ・又さん曰く、事件後に取り乱していた母さんが命の心配がないとして泣き出し、その泣き跡を見られるのが恥ずかしくて見舞いにも来なかったと言う事も秘密である。クイントさんからも似たもの親子よね」と言われたが……どこら辺がだろうか？

部屋に戻り回線を開く。あちらは今夕方頃のはずなので迷惑はかからないだろう。連絡を入れてすぐあちら側の回線が開かれた

「昨日ぶりですね、すずかさん……それにツンデレさんも今日は一緒のようで」回線の先には、落ち着いた様子のすずかと怒りがMAXなアリサがいた。

「あなた、すずかには話として私には黙ってるってどういうことよ！」まずは軽いジャブ

「腕の事ですか？　でも、なんて説明すれば？腕取れちゃいましたあゝ、あは。とか言えば良いんですか？嫌ですよそんなの」

「でも、じゃないわ！友達なんだから、ケガしたら教えるのは当たり前でしょ……」

「その言葉、高町さんに言ってください。それといつからそのような関係になりましたっけ？記憶にございません」

「なのはにはもう言ったわよ！それとなんか文句でもあるの？私と友達でいることが」

「文句はありませんが…まあ良いです。それで、すずかさん昨日お話した件ですが大丈夫ですか？なんか休暇がかなり取れたのでそちらにお邪魔しようと思うのですが」

「今はこっちは春休みだし問題ないよ。ジン君は家に泊れば良いし」

「お世話になります。それで明日には向かおうと思いましたが大丈夫ですか？」

「うん、お姉ちゃんと準備してるね」

「ジン、あんた覚えてなさいよ、こっち来たらアリサ様の黄金の左が炸裂するんだからね！」

「じゃあ、すずかさんまた明日」

「うん、また明日ね」

「無視するなあああ！！」顔を赤くしているアリサだがボケをスルーされて怒ったのか、無視されて怒ったのかどっちかわからない。あの人も怒っているけど血圧大丈夫なんだろうか？今度診察してあげようかなと思うのだった。

翌日

転送ポートの申請は昨日の内に済ませたので問題なく移動できた。目の前が真っ白になって光が晴れると月村家の庭に御到着。そして、あちらもこちらの到着に気づいたようでファリンさんが出迎えに来てくれた。

「お久しぶりです。ドジ…エアリヒカイトさん。お元気そうだなによりです」

「い、今、ドジっ子って言おうとしましたね！それにファリンって呼んでくださいと言ってるじゃないですか！」

「あ、すずかさん、これから暫くの間お世話になりますね。」

「相変わらず、ジン君とファリンは仲良しだよね」

「すずかちゃん、ジン君がファリンをいじめてるのがどうして仲良しに見えるんですか!？」

「心外ですね。虐めてるのではなく、弄っているんです。そこを間違えないでください」

「同じです!」やはりファリンさんをからかうのは面白い。これで年上と言っただから、世の中わからないものだ。

「とりあえず、お姉ちゃんの所に行こう。そこで話をしようと思うの」

「そうですね、行きましようか。エアリヒカイトさん、そんな所で落ち込んでないで、早く行きますよ。」のの字を書いて落ち込んでいるファリンを呼んで忍のもとに向かう。ファリンも置いて行かないでくださいと言って後をついてくる。というか出迎えに来たメイドさんが置いて行かれるのはなんとも言えないものだな。

・
・
・
・
広間に到着して中に入る

「お久しぶりですね。今日から御厄介になります。」

「良いわよ、あなたにはすずかを助けてもらった恩もあるし、そちらの技術にも興味あるから、むしろこちらからお願するわ」

「それでは早速お願いしたいのですが、オレの義手の作成に協力お願いします。ミッドでも義手の技術は高い物ですが、まだ完全ではありませんので。オレとしてはデバイス型の義手にしたいのですが、なかなか良い案が出来ないんですよ。それで、以前、エアリヒカイトさんを見た時の事を思い出しまして、あれ程の技術がある月村家に協力いただければ満足できるものが出れると思つた訳です」

「私としてもそちらの技術が得られるのなら御の字よ」

「でも、これを世間には公表しないでくださいね。管理外世界でこれをするのは本当はいけない事ですので。民間協力者という立場を

使わなければ、オレが犯罪者になってしまいますし。」

「それは大丈夫よ。ノエルやファリンの技術だって広めてないんだもの。私だってそれくらいの危険性は理解できるわ。」

「ならいいですけど…。それで、まずはこちらのデバイスのことからやろうと思うので、一応うちの部隊長から簡易式のデバイスをもっているんで、それを使ってまずは説明しますね。機械的部分が多いのですぐにわかると思います」

「わかったわ。すずかも一緒に良いでしょ？この子も機械いじりは得意だから」

「構いませんよ」

その後一日を費やしデバイス講座が開かれた。月村姉妹の学習力はすさまじくたった一日で理解してしまった。もともと機械に強いとは言えかなりすごいと思う。いまデバイスマスターの資格を受けても普通に受かるだろう。

今日はデバイスの事を話して終わりにし、明日から本格的な義手作成に取り掛かる。なので、今は月村さんとお話するために部屋に向かった訳だが、ドアを開けると

「どうして、あなたがいるのでしょうか？…バニングスさん」ツンデレがそこには居た

「昨日言ったわよね？覚えておきなさいって？」

「ええ、確かに私がデレるから、しっかり見ときなさいと言われましたけど、わざわざ見せに来てくれるとは思いませんでした。

さあ、デレてみてください」「一瞬でビデオを用意して構える。レンズに映るアリサは肩をワナワナと震わせ、膝を曲げて腰を低くする

「死にさらせ！！」「ハイジャンプからのとび蹴り、迫りくるアリサを防ぐために…ジンはドアを閉めた

・
・
・

ドアの向こうで何かがぶつかる音がしたが、ここはスルー

「すずかさんオレの部屋で話しましょう。ここは危険です」

「だめだよお〜、アリサちゃんきつと怒っているから、謝った方が
良いよ？」

「謝ったら許してくれると思います？」

「うん、アリサちゃんはとても優しい子だから」

「じゃあ、信じますよ？」その言葉を信じてドアを開け開口一番で
謝罪を述べる

「先程はすみ　ズバン」意識を失う前に見たのは綺麗な左ストレ
ートの構えをとるアリサだった。　すずかさんの嘘つき…

しばらくして意識回復

「は！」ベットから起き上がり辺りを見回す。そこにはアリサとすずかが優雅にお茶を飲んでいた。

「あら、やっと起きたのね。まあ私の黄金の左の威力はすごいから、仕方ないんでしょうけど」

「すずかさん、オレにも一杯もらえますか？」アリサを無視してすずかに話しかける

「あんたは」「怒りで震えだすアリサ

「バニングスさん、カルシウムが足りてないなら、牛乳を飲んだ方が良いですよ？あ、でも紅茶にミルクは認めません。」

「黄金の左だけじゃ足りなかったようね？次は……」

「ごめんなさい」

「もう、ジン君も引き際を見極めなきゃだめだよ。女の子はすつこく繊細なんだから」

「……繊細？」アリサの方に視線を向けるが

「何か文句でもあるの？」アリサが立ち上がる

「いえ、ありません。」

ジン君はしょうがないなと苦笑いするすずかだが、アリサが優しくと言う事を信じたのにこの有様、どうしてくれるんだと非難の目を向けるが、ニコツとこっちを見られた瞬間どうしようもできなくなった。オレの鬼門は金髪ではなく彼女のようだ。

「それで、一体あなたはなんでそんな怪我をしたのよ。」

「未熟ゆえです。それ以上の事は黙秘します」

「まあいいわ。体は平気なの？」こちらの意図を察してくれるあたり、アリサの頭の良さがうかがえる

「ええ、たまにバランスを崩しますが、日常生活をする分には問題ないですね。でも。義手を用意しようと思ってるので片腕の訓練はしないつもりです。」

「無理するんじゃないわよ」

「すずかさん、今のがデレですね？」

「うん、かわいいでしょ？友達を心配してデレるなんて、アリサちゃんらしいよね」

「また、あんたらは！すずか、あんたも乗るんじゃないの！」

「ごめんねアリサちゃん、つい」「可愛く笑うすずか。そんな笑顔
されたら許すしかない。 策士や！」

「もう、すずかにそんな顔されたら、怒れないじゃない」「ぶつぶつ
と言っているが本気で怒ってはいないようだ

「それより、あんたサツサとすずかのベットから降りなさいよ」

「え！？」自分がベットに寝ていたのはわかる。当然ここはすずか
さんの部屋なわけで、これはすずかさんのベット……は！

すぐさまベットから降りる

「すみません、すずかさん」頭を下げる

「ううん、良いよ別に。」「すずかはニコニコしているが

「あんた、すずかのベットで寝られるなんて、私に感謝しなさい！」
さも、自分のおかげだと言わんばかりの顔で胸を張る

「人を殴り倒した人のセリフじゃないですよそれ。」

「うるさいわよ」そのあと少しアリサ達とじゃれ合い自分の部屋に
戻って寝るのだった。寝てる最中に先程の事を思い出し、一人悶々

としていたのは別の話……… 実はすずかもだつたりする。

.....

翌日

悶々とした夜が明け、今日からデバイス兼義手を作成する。まあこちらからは要望を伝えるだけでほとんど何もしないのだけでも。実質的な部分は忍さんがやってくれて、補助としてすずかさんとノエルさんが手伝う事となった。こちらが用意してきた図面を渡した時、忍さんが

「手が飛ぶ仕組みがないんだけど？ドリルはどうするの？」と言って来た時はホントに焦った。ロケットパンチやドリルなんていらない。図面通り作ってくればそれで良いので、そのの所をしっかりと伝えた。細かいところはあちらに任せてあるが、すずかさんとノエルさんがいるので大丈夫だろう。

それで、今はやる事がなくてファリンさんとお話してるのだけど

「どつして、あなただけ、ここにいますかね？ドジっ子さんだから、追い出されたんですか？」

「ち、違いますよ！ジン君のお世話を頼まれたんです。断じて追い出されたわけではありません！」

「ホントですか？」

「…ほ、本当です」少し言葉に詰まったので嘘だろう。まあこのドジっ子さんが関わって変な物が出来ても困るのでこれで良かったと思う

「まあ良いですけど。それで、何をしますか？エアリヒカイトを弄るのも面白いんですが、ずっとやってても飽きますし」

「面白くありません！それにファリンと呼んでくださいー！」

「まああなたなら別にかまわないんですけど、年上ほくもないですし。でも、普通に呼んでも面白くないと言っか、やっぱりドジっ子さんとお呼びした方が良いと思うんですよ」

「ファリンは立派な年上の女性です！それにドジっ子でもありませんー！」

「……」

「うう、その目はやめてください、傷つきますう」若干涙目になるファリン

「自覚のないドジっ子が一番危険なんですよ？…わかりました、ではこうしましょう。あなたが得意なゲームでそちらが勝てば名前前で呼び、こちらが勝てばドジっ子さんと呼ぶ事にしましょう」

「な、なんですか、その賭けは！　し、しかし、わかりました。」

その挑戦を受けて立ちます。私が提案するのは ……これです！」「いきなりチェス盤をどこからともなく持ってきた

「チェスですか？良いのですか、こんな知力を問われるようなゲームで。一応ミッドにもこのような遊びがあるため得意ですよオレ？前にバニングスさんとやった時も勝ちましたし」

「まるで、私に知力がないと言わんばかりの発言ですね。もう許せません！私が勝ったらファリンお姉ちゃんと呼ばせて見せます」

「まあ勝てたらですけど ……まあ負けるける事はないだろうと思っっている

・
・
・
・
数十分後

「チェックメイトです」果たしてどちらの発言だろうか？

「ま、負けました」勝者は笑い敗者は泣く、勝負の世界の常識である。今回笑ったのは

「ファリンの勝ちですう」ドジっ子の方だった。

「う、嘘…だろ？知力を競うゲームでドジっ子さんに敗れるなんて！？」あまりの事に現実を直視できないジン

「ファリンはチエスだけは得意なんです。忍お嬢様にも負けた事はありません」

「人は見かけによらないとはこのことだ、まさか、あなたにこんな特技があつたなんて驚きです。それでは時間も経つた事ですし、ご飯にしましょう。」そう言つて席を立ち食堂へ向かおうとするが

「ジン君約束ですよ？まさか、ジン君ともあるう人が約束を破るなんてしませんよね？…さあファリンお姉ちゃんと呼んでみてください。さあ、さあ、さあ」ファリンが迫ってくる。だがそれは何か大切な物を失う気がする。確かに今まで姉と呼ぶような人はいなかったがこれはあまりにも……

「クツ…」

「ジン君は約束を破るような人なんです。ファリンはがっかりです」ドジっ子さんががっかり呼ばわりされるのも辛い

「ふあ、ふあ りん お姉さん」絞るようにして声を出す

「何ですか、最後の方しか聞こえませんでしたよ？もっとはっきり言ってください。それとお姉さんではなくお姉ちゃんです」

「ファリンお姉ちゃん（ボン）」

「聞こえませんかよ、さあもつと大きな声で」

「ファリンお姉ちゃん！！」もうこうなつたら自棄だ

「ジ、ジン君がファリンのことをお姉ちゃんって言うなんて何か新鮮だね」

正面のファリンはニコニコしている。声の出所はここではない。機械のような動きで首を動かす、そこには笑顔のすずかがいた

「ドウシテココニイルノデスカ？」

「ちょっと休憩しててね。それにしてもファリンとジン君がそこまで仲良くなるなんて嬉しいな」

「忘れてもらえませんか？」頼みというより懇願

「無理だよ」ジン君可愛かったよ。」

「……うわあああああん」その場にいることが耐えられず自分のイメージが崩れる事も構いなしに叫んで部屋にこもった。数日部屋から出なかつたのは余談である。

精神的に追い詰められて数日。なんとか気力を取り戻し部屋から出る。ちょうどファリンさんがいて土下座して頼んだ。

「マジ勘弁してください」恥も外聞もなくファリンの前で土下座。急にそんな事をされたファリンは焦ったが意味をわかり憤慨する。しかし、ファリンの人柄の良さもあって、名前で呼ぶ事に妥協してくれた。この時のジンはファリンが女神のように見えたと言う

それでその後久しぶりの食事をノエルさんに出してもらい、腹を満たす。あまりのショックで数日食事を食べていない事に気づき気づいた時には急にお腹が減りノエルさんをお願いしたのだ。

食事を食べ終わった後、忍がやって来て、義手が完成したと言って来た。…嘘？まだ、数日しか経ってないんですけど、月村忍恐るべし

ジンは期待と不安を抱きながら忍の後について行った。

第25話 ジンの復帰と新兵器。ギンガが……

期待と不安で胸を膨らませながら、忍の研究室に到着する。というより地下にこんな研究室があるなんて、やっぱり月村家も相当変だな。

そして、中に入り机の上に置かれている物を見る。見た目は普通、ちゃんと人の腕の形をしている。まあノエルさんやファリンさは見た目普通の人間にしか見えないので当然これくらいの事は出来るだろうけど

「とりあえず、見た目は普通の物にしてみたわ。私としてはドリルとか付けたかったけど、さすがが怒るからやめにしたわ。一応あなたのお望み通りになっているはずよ。試しにつけて見て」

そう言われて義手をつける。神経接続の方はデバイスの方がやってくれるため割と簡単に手が動かせた。若干まだ、ぎこちないがその内慣れるだろう

「ありがとうございます。正常に作動しているようですし、問題ないですね。機能の方は注文通りですか？」

「ええ、でも私たちでは魔法の事はイマイチわからないから、まだ調整が必要だわ。とりあえず、庭でチェックしてみて」

自分としてもどの程度できるか確かめておきたかったので、庭に出て簡易的な結界を張り試してみる。

・
・
・
・
予想以上の出来だ。銃の感触まで依然と同じだし、多少ずれてもデバイスのほうで調整してくれる。なんか以前の腕よりも調子がよさそうだ。それにまだ機能の方はオレ一人では試せないが、この分なら問題ないと思う。

「問題なさそうですね。機能の方はミッドに戻って試さないといけないと思うので、その後何か問題があったら報告し持って来ますね」

「ええ、そうして頂戴。私がいなくてもすすかができるから、もし私がいなかったらすすかに頼んで頂戴。」

「はい。本当にありがとうございます。これでまだ戦えます」

忍との話も終わりすすかを探しに行く。まあ自分の部屋にいると思うのでそこに向かう

コンコン

「はい、どうぞ」やはりいたようだ。

「失礼します。すすかさん義手の件ありがとうございました。試運転もしてきたので動作の方は問題ないです」

「良かった〜ちゃんと動いてくれて。お姉ちゃんが途中変な物をつ

「けようとするとから大丈夫か心配したけど」

「今気になる発言がありました。大丈夫なんですよ？いきなり爆発とかしないですよ？」

「大丈夫だと思うよ……たぶん（ボソ）」

「ちょっと！最後の発言聞こえていますから！たぶんって何ですか、たぶんって！」

「ハハハ、冗談だよ。お姉ちゃんの暴走は私とノエルで止めたから。」

「その事には感謝しますけど。心臓に悪い冗談はやめてください」

「ジン君がいつもからかっているからそのお返しだよ」にこやかに言っているが

「オレ、すずかさんをからかった事なんてありませんけど」

「あれ？そうだったけ？じゃあアリサちゃんやファリンの代わりと言う事で」その見るものすべてを虜にしそうな笑顔が今は悪女のようにしか見えなかった。

「ツンデレさんは報復を受けてますし。ファリンさんは……」その時の事を思い出して完全に落ち込んでいる。両手両膝をついて、辺りには何か暗いオーラの様な物が見えるくらいの落ち込みっぷりだ。

「あれはなかなか可愛かったよ」

「忘れてください、後生ですから…」もう立ち上がる気力もない。終始笑顔のすずかと暗い表情のジン。その光景はファリンがお茶を持ってくるまで続き、持って来た後はファリンとすずかのダブルパンチで精神をノックアウトされるのだった。…きつとすずかさんはオレの事が嫌いなんだ…そう思ってしまったのも仕方がない。

—————

月村家で義手を作成してもらい終わったので、ミッドに戻る事にする。何か不具合が出たら連絡し持ってくる事になった。

ミッドに帰った後はゲンヤさんに報告し、明日から職場に復帰すると言っておいた。たまたま部隊長室にいたギンガがオレの義手が動いているところを見た大泣きしてしまった。余程嬉しかったのだろう。ゲンヤさんが慰めるのを見ながら、ギンガに心配いらないとだけ言っておいた。

家に帰ると母さんがいてオレの腕が付いている事を見て少し泣いた。このパターンは二度目なので、母さんを慰めて左手が動く事を見せる。なんか、感極まって余計に泣いてしまったが、それだけ心配してくれたのだろう、息子としては嬉しい限りだ

母さんが少し落ち着いて

「それにしても管理外世界の技術には、驚かされるわね。ミッド

にだってそこまで精巧な義手はないはずよ。言われなければ気づかないんじゃないかしら」

「いや、これは月村家が異常なだけであって、地球の科学力はミッドには及ばないよ。オレも驚いたけど、デバイスの事を話したら、一日でマスターしちゃったし、この義手も数日で作り上げるし、驚異的な技術力だよ。ミッドに招待したらいろんな事が解決するかもね」

「そうね。それ以上に問題が起りそうな気がするけど」

「それは否定できないかな。ちょっとマッドな気質があつたから、わけのわからないものを作る可能性は十分にある。オレの義手にもドリルとか付けようとしていたし」

「大丈夫なのよね？」母さんがかなり不安そうな顔をする。これについてはたぶんとしか答えられなかった。その発言を聞いた後、母さんが若干距離をおいたのは傷ついた。

・
・
・
母さんと話した後、ルーとアギトの様子を見にアルピーノ家に向かう。

インターホンを鳴らすとルーテシアが出てきて、こちらの左手を見ると嬉しそうに抱きついた。今度はルーを支えながら、頭を撫でる

事が出来たので左手のある事を実感できた。その後、部屋に行き、アギトにも見せたがやはり、ルーと同じように喜んでくれた。

・・・しかし、月村家でのやり取りを話すと母さんと同じように距離をとられた。何だろつか、これが心の距離とでも言うのだろうか？目から汗が流れそうになったが何とかこらえられた事を此処に記す。

- - - - -

翌日

108部隊に復帰。復帰早々にギンガに泣かれ、例によって、事情説明後にゲンヤさん達に距離をとられる。完全な危険物扱いになってしまった。オレはロケットパンチもドリルできねえよ！ましてや自爆機能なんてあるかい！・・・たぶん

現場に復帰してからは、以前と変わらないまでに至った。最初はぎこちなかった左手も今ではデバイスの力を借りて何の問題なく動かしている。で、平和な日常を満喫しているわけだが、ここで面倒な事が起った。∴ガジェットの出現である

「部隊長、状況は？」

「ガジェットがミッド郊外で発見された。目的はわからないが、おそらくロストログアの探索だろう。数年前からたびたび出現しているしな」

「数は？」

「15だな。カルタス、魔導師を連れて破壊して来てくれ、頼めるか？」

「ちよつと待つてください。此処はオレに行かせてもらえませんか？」カルタスが返事をする前にジンが割って入る

「おい、ジンお前はまだやみ上がりだろうよ。オレが指揮で出るから、お前は残っている」カルタスがジンを心配して言うってくれるが「すみません、カルタスさん。病み上がりだからこそ、試しておきたい事があるんですよ。相手がガジェットじゃないと意味がないので、今回はオレに行かせてもらえませんか？」

「お前がそこまで言うなら良いけど、部隊長はどうですか？」

「オレは、カルタスが良いつて言うんなら、反対する気はねえがジン誰かサポートには付けるよ。お前一人と言うのはさすがに許可できない」

「当たり前じゃないですか！ちゃんと連れてきますよ、こいつを」
そう言つて手を肩にあてる

「え！？わ、私ですか？」そうギンガだった

「お前以外にだれがいんだよ。お前、オレが怪我してから実戦任務から離れてるらしいじゃねえか。報告で聞いているぞ」

「で、でも」

「でもじゃねえ！此処で退いちまったら一生このままだぞ。お前何のために魔導師になった？クイントさんみたいになりたかったからじゃねえのか？救われない人たちを救ってやりたいからじゃねえのか？此処で退いたらそれは叶わねえぞ」

「.....」

「落ち込むなとは言わない。だが前を見る。これから先、必ず前回のような状況に陥る事はある。そこで、変わるかどうかは、お前次第だ」かつて、ゼスト死んだあと、塞ぎこんだ自分を叱ってくれた母の言葉。今ギンガをこのままにしたら、嘗ての自分になつていたかもしれない状態になるのだ。それは兄貴分として宜しくない。ギンガが自分で判断して魔導師をやめるのなら止めはしないが、魔導師である事を辞めずに、戦う事を拒否してるなら別だ。ギンガは迷っている。人を助けたいが、また誰かを傷つけたらどうしようとなら、ここは無理やりにも、引きずっていく。

「今回は、オレのサポートだ。しっかり守ってくれよ？」

「わ、わかりました。」まだ、不安があるようだが、ここはこいつのために頑張るしかないと思うジンであった。

.....

ミッド郊外に有る山の中。オレとギンガで来ているが、ギンガの表情は晴れない。

「ギンガとりあえず、オレはガジェットで試したい事がるから下がっていてくれ。」言われたギンガは、素直に下がる

「ファントム、接続開始」ファントムと義手の伝達系を接続させる。これで、思った通りに扱える。

「まずは、三体か・・・」

「うし、行ってみますか！ファントム、キャンセル発動」YESと無均質な声が聞こえる。その後ジンは普通に魔力弾を放った。AMFがあるので、普通なら消されてしまうのだが、三体のガジェットに当たり爆発する

「うし、成功。さすが月村家の科学力は世界一」義手の能力に舌を巻くジン。ジンが忍にお願いした事とはAMFの無効化システムである。魔力結合を解除するAMFを無効化してくれる物を忍に頼んでおいた。ジンはゼスト隊壊滅の時に経験したデータを自分なりに解析し、忍に渡した。自分では完全な物が作れなかったために諦めていたが、忍が完成させてくれた。一応説明したとはいえ、数日で完成させる忍には脱帽するしかない。

実際AMFを展開されても戦えるジンだが、魔力消耗が激しいため、防ぐ手段を考えていた。それに戦闘機人戦となった時に近くにガジェットがいた場合かなり部が悪くなるので、この義手が出来た意味は大きい。ただ、ジンの緻密な魔力制御が有ってこそなので、普通の人じゃまず使えない技術だが・・・

を見てギンガが戸惑う

「悪いなギンガ、お前のトラウマを治そうと思って一芝居打たせてもらった。でも、これで、トラウマは大丈夫だろ？お前の力は人を守るために有るってことだ。変な事で悩んでないで自分の道を進め。ただ、力に溺れるなよ？」結構兄貴分として、良い仕事をしたと思っっているジンではあるが、ギンガにとっては違ったようだ

「ジン…さん？」

「お、おい、その目はまずいぞ？その目をやって良いのはあの魔王だけだ」ギンガの目からハイライトが消えた

「ええ、ジンさん。今なら、魔王にでも悪魔にでも成れます。私の事を思っただけでくれたのはうれしいんですけど、これは少しやりすぎです。少し頭を冷やしましょうか？」一瞬ギンガと高町大魔王がダブって見えた。あれ、おかしいな、こんなはずじゃなかったんだけど

ジンの意識が有ったのはそこまで。・・・ギンガお前なら世界をとれる・・・ぜ…

—————

隊舎に戻った後はゲンヤさんに報告。顔の痣を見た時はケガでもしたのか？と聞かれたが、何でもないと答えておいた。ギンガが後ろで人の背中のを抓っているので…

隊長室を出た後、ギンガに呼びとめられる

「ジンさん、今回はありがとうございます。やり方はあれでしたが、私はもう大丈夫です。」

「それは良かったな。だけど、力の意味を間違えるなよ？力は良い面も、悪い面もあるんだ。力の使い方を間違えれば、人として墮ちて行くだけだ。後魔王化はするな。二人も魔王はいらん！」

「ジンさんってどうして最後に余計な事を言っんですか！それさえなければ」

「なんだ？お兄ちゃんに惚れたか？」ちよつと茶化してみる

「はい、かつこいいですよ。あの助けてくれた時なんて…」

「なあ！？」普通に返されてちよつと焦る

「フフ、冗談ですよ。普段があれなのでかつこ良さは六割減ですね。ニッコリと言うギンガはもう立派な大人の女性のようだった。

「こんな小娘にからかわれるとは 不覚！しかも、六割も減るのか！？」

「ジンさん、私と1つしか変わらないじゃないですか。」

「オレは精神が老成しているからいいの。ゲンヤさんと同年代ぐらいな気がする」

「その年でその発言は拙いですよ。お兄さんではなくてお父さんと

呼んだ方が良いですか？」

「いや、それは止めとけ。それはゲンヤさんの特権だからな。とい
うよりお前オレの事兄さんなんて呼んだこと無いだろ」

「兄だとは思っているんですけど、なんか普段が・・・なので、ジ
ンさんと。」

「なんだその、その飛ばした所は！お前最初に会った時、オレの事
知らなかっただろが！」

「じゃあ、なんとなくです。それとも兄さんとお呼びした方が良い
ですか？」

「うーん、どっちでも良い。」

「何ですか！？その反応は。適當すぎるじゃないですか！」

「今更、お前に兄って呼ばれた所で、お前がオレの妹分なのは変わ
らないからな。あんま意味ない」

「ハア、それじゃ、おじさんと呼びますね」

「ちょっと待てい！何でそうなる！？」

「だってお父さんと同じくらいって言うていたじゃないですか」

「あくまで精神的にはだ！体はまだ若い」

「じゃあ、今まで通りで」

「結局そこに落ち着くんだな。まあそれが一番か」

「そうですね。これからもお願いしますね、ジンさん」

おう！と答えてギンガと別れる。これで、ギンガも問題ないだろう。それに・・

「ギンガはもう大丈夫ですよ、クイントさん」角を曲がった所に、クイントとメガーヌがいた

「ありがとうねジン君。私がやれば良かったんだけど、今回は・・」

「オレが関わっていますからね。オレが適任でしょう。それにオレ医者ですしね」

「そう言えばそうだったわよね。最近見てないから忘れていたわメガーヌが思い出したように言う」

「一応みんなの健康チェックとかはしているんですけどね。ゲンヤさんが疲労がたまっている事以外は比較的全員健康ですね。あ、でも、ルーテシアは気をつけてください。このぐらいの頃の子は病気にかかり易いので、予防接種とかちゃんとしないと」

「そうですね、気をつけるわ。今度休暇を取って、病院にでも行くこうかしら？序に私も見てもらおうかしらね」

「ジャック先生なら、ルーも泣かずに済みますよ。あの人の注射はうまいですから」

「それもそうね、先生には連絡しとくわ」

「そう言えば、アギトちゃんだっけ？その子はいいの？」

「アギトは一応デバイスだから、普通の病院じゃ診れませんよ。八神さんなら知り合いに見られ人を知っていると思うので後で聞いてきます。メガ・又さんにとっても新しい娘だから、いつでも健康をチエックできるようにはしておきたいでしょうから」

「そうね、お願いするわ。アギトが家に来てくれて本当に良かったと思っっているもの。ルーテシアを一人にしないで済むし、なにより、妹ができたみたいでルーテシアが嬉しそうにしているわ。私もアギトの本当のお母さんのようになれたらいいと思っっているし」

「成れますよ。メガ・又さんですから」

「褒めても何もでないわよ」フフ、と笑いながら言うメガ・又の顔は立派な母親そのものだった。

それを見ていたクイントが、私も立派な母親なのよとアピールしていたのをジンが苦笑いして殴られたのは別の話。

そして、月日は流れてジンは18歳になった。そして新たな物語が始まる

第25話 ジンの復帰と新兵器。ギンガが……（後書き）

一応これで原作に入って行きます。次回の更新をお楽しみに

第26話 異動報告と応援

今は部隊長室に呼び出されている。なんでも話が有るらしく、朝っぱらから呼びだされてしまった。

コンコン

「失礼します。ヤナギバー等空尉、部隊長の命により参上しました。」
ちなみにジンは一尉に昇進している。意外と事件を解決しているの
で昇進してしまった。本人は面倒事が増えるから拒否したようだが、
ゲンヤがゴリ押しした

「どうした？何か悪い物でも食ったか？」

「いや、そんなわけないじゃないですか、部隊長殿。オレを勝手昇
進させた中てつけにこのような態度を取っているわけではないので、
お気になさらず」

「昇進させて文句を言うやつはお前くらいだぞ。ハア、まあいい。
それで、今回お前には新しく新設された部署に出向してもらいたい。」

「嫌です。」

「おいおい、即答だな。」

「だって新設した部隊って八神さんが作った部隊じゃないですか。
オレにストレスで死ぬと言うつもりですか？オレがあそこに行った
ら大変な事になりますよ？」

「ああ、でもスバルも呼ぶらしいからな。それにランスターの嬢ちゃんも一緒にな。本当ならギンガでも良いんだが、八神の奴がギンガまでお借りするのは申し訳ないとか言っただけだ。だからお前になつたわけだ」

「いや、そんなにどうでも良いなら、オレじゃなくても良いじゃないですか！なんでわざわざ、命の危険な所に行かなければいけないんですか！」

「命の危険？」

「はい、あそこには必ず魔王がきます。オレに日々砲撃の恐怖に怯えながら暮らせとでも言うんですか！それに八神ファミリーはリンさんを除いて嫌いです」

「ぶっちゃけやがって。でも、お前だって妹分が心配だろ？クイント達もお前が適任だと言ってるし、良いじゃねえか。」

「オレがストレスではげ散らかっても良いと言っただけ？ ゲンヤさんがそんな最低な人だとは思いませんでした。失望しましたよ」

「うるせえ、クイントがスバルの事が心配だから見て欲しいって言うてんだよ。メガー又だっただけでルーテシア嬢ちゃんとアギトが心配だつて言うし。」

「完全に私情入っているじゃないですか！しかも、ルーにアギトがなんでそんな所に！」

「ルーテシアはデバイスマスターの資格を持っているから技術者として呼ばれたらしい。アギトはその付き添い。聞いてなかったのか？」

「ああ、最近忙しくて会ってないですから。つうか、ギンガを除く妹分全員集合じゃないですか！？ギンガ泣いちゃいますよ？」

「いや、あいつもジンさんの方が良いって言っていたから大丈夫だ。ジンさんならスバル達を守って上げられるって言ってたぞ」

「あいつ後でブツ飛ばす。程良く面倒事押しつけやがって！兄に対する尊敬というのがまるで足りん」

「そう言ってやるな。あいつの本心から出た言葉だろうからな。あいつも十分お前を慕っている。」

「感謝してるなら、オレの代わりに行ってくれれば良いのに」

「まあ部隊長命令ということで我慢してくれ。一応お前に権限があるようにはしておいたから。」

「ハア、わかりました。でも、八神さんと話してからでいいですか？昔にもそんな事言っていたんですけど、あの時はただの誇大妄想家だったので、その時のままだと、さすがに同じ仕事場で働けません。」

「ああ、お前が判断してダメだと思つのなら内からは出向しない。」

「わかりました。いつまでに決めれば？」

「再来週からだから、それより少し前に決めればいい。それとお前も準備が有るだろう？だから、もう上がっていいぞ。」

「え？もうオフですか？」

「ああ、だから、スバルの試験でも見て来てくれ」

「親馬鹿」

そう言つて部隊長室を出て、試験会場の方へ向かった、しかも、ゲンヤさんが手をまわしていたのか、試験会場に着いた瞬間、執務官と狸に捕まった。ほぼ強制的にへりに乗せられる

「久しぶりやないか、ナカジマ三佐にお願いした件、もう聞いておるやろうか？」

「ええ、今朝聞きました。当然拒否しました。主にオレの胃のために。」

「え？ジン来てくれないの？」フェイトがありえないと言つような顔で聞いてくる

「いや、むしろ、オレが行く必要ないんじゃないですか？どうせ、八神さん関係の人全員呼んでるんでしょう？過剰戦力じゃないですか。」

「そんなんやけど、ロストログアには万全という言葉はないしな。何が起こるかわからんから、いざという時のために戦力がいて困る

事はないんよ。」

「それが、地上本部にケンカを売る事になってもですか？」

「そうや」フェイトは何の事かわからないようだが、はやてには理解できたようだ。

「ハア、そこまでの覚悟がお有りですか。かなり嫌われますよ。特にレジアス中将」

「わかってる、それでも地上部隊として独立して動ける部隊が必要やった。だから　「ちょっと待って！」ん？なんや、フェイトちゃん」

「地上本部にケンカを売るってどういう…」

「フェイトちゃん、私ら一応本局所属なんや。ある程度の指示は地上本部に委ねられるけど、実質的な所は本局になるんや。地上本部があるにもかかわらず、本局の人間が部隊を作った。これは、お宅らじゃ安心できんと言っているようなもんや。つまり、地上本部にケンカを売ったと取られても仕方ない事なんや」

「で、でも、はやては　」

「私かてそんなつもりはない。でも、地上の人はそうは思わんやろう。　　だけど、私は地上に独立した部隊が欲しかった。」

「それだけの覚悟があるなら、あなたの下で働いても良いですが　」

「やっぱ、うちの子達か？」

「ええ、毎日顔を会わせたらおそろく胃に穴が開きます。ちなみに聞きますが、オレが配属された場合、所属はどこに？」

「フェイトちゃんの部隊や。フェイトちゃんは執務官やから何かとフォアード陣の面倒を見きれない事が有ると思うねんだからその副隊長をしてもらいたいんや。ついでに言うならもう一人の副隊長はシグナムや」

「辞退させていただきます」

「まあそうやるうな。そうなると、なのはちゃんの「ありえませんね。オレを殺す気ですか？」。ほんなら、ロングアーチしか残ってへん。でも、なのはちゃんやフェイトちゃんを倒す程の人を後衛に置いとくのは勿体ない気がするんや」

「ならこうしましょう。遊撃として戦闘には参加しますが、基本はロングアーチ所属という事で」

「まあええか。たまにフォアードの訓練を見てくれると嬉しいんやけど…」

「教導資格なんて持ってないですよ。」

「なのはちゃんのサポートをしてくれればOKや。」

「たまにですよ」

「ありがとうな。これからよろしく頼むわ、ジン君」

「ええ、よろしく願います、一等陸佐殿」

「あんま堅苦しくなくていいで」

「そうですか、ならよろしく願います、子狸部隊長」

「な！？なんでそうなるんや！」顔を赤くさせたはやてが文句を言う

「だってゲンヤさんも言っていましたもん」

「くくあの爺」

「あ、今の発言録音しましたから、ゲンヤさんに送っておきますね」

「ちょ、ちょイ待ち！なんで、お宅そう言う所は抜け目ないねん！やめて」

「オレの特技です。褒めてくれていいですよ」

「そんなん特技ちゃうわ！ただの嫌がらせや！」

「そうですねよ、気づかなかったんですか？」

「うがあああ」はやて暴走

「もうジン、すぐにそうやってからかわないの！」「フェイトがはやてを止めながら割って入る

「いや〜なんか本能が叫ぶです。とりあえず弄れと」

「ジンも相変わらずだね。でも、良かったジンもはやての部隊に来てくれて。よろしくねジン。」はやてを抑えながら器用に握手を求め

「はい、よろしくお願いします。フェイトさん」

「う、うん」名前で呼べと言ったくせに、呼ばれると恥ずかしがるなんて、この人意外とお子ちゃまなんだよな。ギンガに言っても信じてくれないけど

「チヨイ待ち！何で私は変な呼び方なのに、ファイトちゃんは名前やねん！そんなの不公平やないか！」

「世の中に平等なんて言葉が有ると思ってるんですか？人はいつだって不公平を受け入れなきゃいけないんです。当然八神さんとフェイトさんでは扱いに差があります」

「差別や！」

「失礼な！差別ではなく、区別です。Not A but Bの構文です。しっかりと勉強しないとダメですよ！ちなみに差別はdiscriminationで区別はdistinction。似ている意味でNot only A but also Bの構文もあるのでしっかりと覚えてください。意味はAだけでなくBもです。そんなことではデバイスの会話がわかりませんよ」

「何の話や〜！！それにうちのデバイスは話さないから問題無しやー！」

「ま、まさか、リンさんに話をさせないなんて　なんて鬼畜」

「は、はやて…」

「ち、ちがうねん！リンやなくてシュベルトクロイツの話や！」

「あ、そろそろ始まりますね。スバルとティアナはどれくらい成長したかな？」

「あれ？ジン二人の事知ってるんだ」

「人の話を聞けええええ！！！！」はやてが暴走しそうになったのは別の話

スバル・ティアナサイド

「ふっ、はっ、せいっ！！」

廃ビルの屋上で、青髪のショートカットに八チマキをたなびかせたスバルが、自らの手のひらに拳を打ちつけ、シャドウボクシングのように身体を動かしている。

「スバル、あんまり暴れてると、試験中にそのオンボロローラーがまたいつちやうわよ？」

その背後で拳銃型のデバイスの確認を行っているのはオレンジ色の髪を持つ、気の強そうな少女。

「もくティア、いやな事言わないで。ちゃんと油も差してきた。」

「そんな事言つて！前の現場でも危なかったじゃない！誰のおかげでやり過ごせたと思っているの？」

「ティアのおかげです。すみませんでした。」

若干うなだれるスバル。だがなぜかそれが自然なものに見えてしまう
そんなやり取りをしていると試験官から連絡が入る

「おはようございます。さて、魔導師試験の受験者さん二名、揃っていますか？」

「はい！」

「確認しますね。時空管理局陸士386部隊所属のスバル、ナカジマ二等陸士とティアナ、ランスター二等陸士。今回が陸戦Bランクの昇格試験で間違いはないですか？」

「はい！間違いありません」

「はい、本日の試験管を務めるのはわたくし、リイン、フォース、ツヴァイ空曹長です。よろしくですよ。」

「よろしく申し上げます」「二人で敬礼する

「では、試験の内容を説明しますね。二人はここからスタートして、各所に設置されたポイントターゲットを破壊、もちろん、壊しちゃ駄目なダミーターゲットもありますから、注意してくださいね。妨害攻撃に注意しつつ、全てのターゲットを破壊、制限時間内にゴールを目指して下さい。何か質問は？」

「はい」

「どうぞ、ランスター二等陸士」

「試験中に事故や重大な負傷が生じた場合、連絡は誰にすればいいのでしょうか？」

「はい、何かあった場合は状況を的確に私まで伝えて下さい」

「分かりました」

「他に質問は？」

「私は、もうありません」

「ありません！」 ティアナが質問がないとわかったのでスバルも返す。

「ではスタートまであと少し。ゴール地点で会いましょう ですよ？」
「ラインが回線をとじる」

・
・
・

【レディ……ゴー！】

スタートのカウンtdownを行っていたスクリーンに合わせ、二人が行動を開始する。

「おお、始まったな。」

「ティアナは、アンカーガンを使ってるね。それに一つ一つの動作に無駄が少ない」

「スバルの方も、建物へ突入タイミングはほぼ完璧や、何よりもその後の建物内部の状況確認から行動までが速い」

「ま、ガラスを突き破るのは戴けないけど」

「ジンくらいだよ。瞬時に転移で中に入れるなんて」フェイトが苦笑いしながら言う

ガラスを突き破って建物内部へ突入したスバルは近場のオートスファイア二機をリボルバーナックルで破壊。ただ、廃墟で暴れ過ぎな気がする

残ったオートスファイアが距離を取りつつエネルギー弾を連射するが、難なくかわすスバル

「ロードカートリッジ！」

スバルの叫びに呼応して、リボルバーナックルに搭載されたスピナーが回転し、薬莢が落ちる。カートリッジシステムによる魔力増加だ

「リボルバアアツ、シユウウウトツ！！」

カートリッジを一発消費して練り上げられた魔力を、リボルバーナックルから発射する射撃攻撃。

その攻撃は正確に敵を捕らえた。

「ローラーブーツを駆使した屋内での高速機動戦。スバルがシューティングアーツを始めたのは、あの空港火災の後からはずだから、なかなかうまくなったじゃないか。」嬉しそうな顔で言うジン

「それに、ティアナの方もうまく成ってるみたいだし」

ジンが見ていたウィンドウの上では、ティアナが拳銃型デバイスから発射した魔力弾によって、次々にターゲットを破壊していく。

ティアナの場合は拳銃型というデバイスという事もあるが、連射速度は並のBランク魔導師を凌駕している。

「こつちもなかなかだな、ダミーターゲットを的確に分けた上での速度で撃ち落とすのは結構大変なはずなんだけど、ツンデレもあるな。」

「陸士学校首席卒業の肩書は伊達じゃないちゆうことや、まあでも、難関はまだまだ続くよ。特にこれが出てくると、受験者の半分は脱落することになる最終関門、大型狙撃スフィア」

「今の二人のスキルだと、普通なら防御も回避も難しい、中距離自
動攻撃型の狙撃スフィア」

「知恵と勇気の見せどころや」

「あんま勇気も知恵も要らない気がする」

「ジン君！黙つとき！」はやての発言にチャチャを入れるジン。へ
りの中は受験生から見ればかなりふざけていた。

- - - - -

スバル・ティアナ

「良いタイム！」

「当然！」

スバルの言葉に、ティアナは短く答える。

これくらいは当たり前という発言もツンデレならでは。スバルもそ
んなティアナの事をよくわかつている。これでも3年来のコンビ

ティアナの横顔を見やる。

彼女は執務官になるという大きな夢があり、日々に訓練にも、魔導
師としての力量を上げることにまただならぬ熱意を注いでいる。た
まに誰かの事をつぶやいているが、良くわからない

ただ、正確に言えば執務官になることが夢であると同時に、目的を
達成するための手段であることも、自分と、おそらく自分の姉、ギ

ンガ・ナカジマは知っている。どうしても顎で使いたい人がいると… 一体誰だろう？

「（それにしても、やっとBランク試験まで来れた。あれから4年）」

4年という歳月を思い返し、胸の内に感傷が込み上げてくる。

あの事件以来、自分を変えようとして選んだ道。その第一歩として姉が通っていた訓練校に入るために今までで、一番努力した。そして、そこで

「（ティアにはそこで会ったんだ）」

過ごしてきた時間は全く違うけど、最高の親友。出会った当初は自分が未熟なせいで散々迷惑をかけてしまった。

「ティア、次は？」

「このまま上、上ったら最初に集中砲火が来るわ。オプティックハイドを使って、クロスシフトでスフィアを瞬殺……………やるわよ」

「了解」

スバルは使い尽くした弾倉を放り捨て、カートリッジの込められた新しい弾倉をリボルバーナックルへと装填する。

今回の試験内容において問われているのは、本人の技能だけでなく

スバル・ティアナ

「スバル、防御！」そう言いながらティアナがスバルを抱えながら飛ぶ。先程の攻撃で全機破壊したと思っていたが、まだスフィアが残っていたらしい。

「ティアナ」

「ぐうっ!!」

グキリと不吉な音を立てて転んだティアナが、顔をしかめながらも魔力弾でスフィアを迎撃する。

スフィアはなんとか倒したが、右足を痛めたらしく、立ち上がることに難しいようで、再びその場に蹲ってしまふ。

「ティアナ！」

「騒がないで、大した事じゃ」

「でも、捻挫したでしょう、ぐきっていったよ」

「何でもなくはないわね………痛うっ!!」

一生に関わると言うものではないらしいが痛みは深刻のようだ、ティアナは立ち上がらずにそのまま地面に腰を下ろす。

治癒魔法が使えれば応急処置もできるのだが、生憎二人とも使えない

防災担当のため、的確な応急処置なら道具が有ればそれなりに出来るがここにはない。

「ティア、ごめん……………油断してた」

「あたしの不注意よ。あなたに謝られるほうがムカつくわ」

ツンデレはいつだってツンデレ。でも、ティアナは冷静に次の事を考える

「走るのは無理そうね……………最終関門は抜けられないし、ここで無理すれば今後に響いちゃう。あたしが離れた位置からサポートするわ。そうすれば、あんた1人だけでもゴールできる」

「ティア！」

普通に考えればティアナはここで落第になるだろう。いかんせん、今までの行動が良くても、ゴールできないのは致命的だ。

「ダメだよ、そんなの。あたし1人でなんて、ゴールできない」

「……………わかってるわよ、あんたの性格くらい。言ってみただけよ。それに私だって逆の立場なら出来ないし。…………でもこのままなら間違いない二人揃って不合格よ」

「ティアと私ならなんとかなるかもしれない」

「何か案があるの？」

「裏技……反則、取られちゃうかもしれないし、ちゃんとできるかも、分からないけど……うまくいけば2人でゴールできる！」

「本当？」

「うう……ちょっと難しいかもんだけど……ティアにもちよつと、無理してもらおうことになるし……よく考えると、やっぱり無茶っぽくはあるんだけど……なんて言うか、ティアがもし良ければって……」

「……ああもうじれたい！ とりあえずその案を聞かせなさい！」

「う、うん」

やや自信なさげになりながら、スバルは自分の案を伝えていく。

スバルの案の要はティアナの幻術と、自分が先天魔法ウィングロードを用いたショートカット、そして、ティアナを背負っての全力疾走。

バレれば2人そろって落第。

だが、うまくやれば2人で陸戦Bランクに昇格することができるかもしれない。

ジンに叱られる前までのティアナならやっていたかもしれないが、今のティアナは

「却下！ 無茶にも程があるし、アンタの魔力限界までふり絞らな
いと無理でしょそれっ！」

「だ、だけど、2人でやればきつとできるよ！」

「それで、出来たとしてどうなるの？ 私達の仕事はこの試験に受か
る事？」 ティアナが何かを訴えるようにつぶやく。

スバルも少し思案するが分かってくれたようだ

「うん、そうだったねティア、あたし達は管理局員で、人を助ける
のがお仕事。こんな所で無茶しても駄目だよね」

「そうよ。魔導師ランクはあくまであたしの夢のための一歩であつ
て、それは管理局員として優先させるものじゃない。私達は、立派
な局員なんだから。まず優先すべきは仕事」

最前線で働く者たちにとって自分の健康管理は基本中の基本。自分
の都合を優先させるべきじゃない

試験で怪我することはあっても、その怪我を押しして無茶をすること
は、人命救助を担う者としてあってはならないこと。

「だけど、こういう状況下でも、障害を突破することもしなくちゃ
いけない時は来る。ティアにはこれ以上無理をさせられないけど、
あたしはまだまだ行ける。それに、ティアだって出来ることはある。
私はせめて最終関門はクリアしたい。でも、私一人じゃ無理かもし
れない。だから、私が無茶しなくて良いようにティアの知恵を貸し
て」

そして、パートナーであるスバルは、ティアナの言葉の真の意味を、理解していた。

「この試験をクリアするのは無理そうだけど、ただで終わるって言うのもなんか嫌ね。最低でも次につながるようにはしたい。もちろん、無茶しない範囲でだけど」

そう言ったティアナは問題発生時用の回線を繋ぎ、リインフォース・ツヴァイ空曹長に連絡を取る。

「ええ、はい、そうです。棄権はします。でも、最終関門には挑戦したいんです。当然管理局員として無茶はしません。」

「でしたら、私は治療系の魔法を使えるのですぐにそちらへ向かうです。もう一人監督官さんがいるので、ナカジマ二等陸士の安全確認をお願いします。」

「ありがとうございます」

「いえいえ、これも試験官の務めです」

既にこちらへ向かうための飛行に入ったのか、通信はそこで途切れる。後はやるだけ

「よし、それじゃあ、わたしがフェイクシルエツトで援護するから、アンタもきっちり決めなさいよ。一発で決めてみなさい」

「うん、あたしは空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃないし、

遠くまで届く攻撃も無いけど　だから、今の私に出来るのは、
全力で走ることとクロスレンジの一発だけ！」

スバルの身体に魔力が満ち、心の高揚に応じてか、Bランクをゆう
に超える魔力が噴出し。

スバルは相棒を信じてスタートラインにたった。これから乗り越え
る試練のスタートラインに

「ちゃんと、自分たちの現状を理解出来てる。文句の付けようない
わ〜」

「これだけの確に状況判断ができるのは、新人ではなかなかいない
と思う。これは、期待できそうだね」

フェイトとはやて、見守る二人の眼下では、フェイクシルエットを
駆使し相手の注意を惹くティアナと、ウィングロードで最短で最終
関門へ突っ込んだスバル。

そして、ビル内部のサーチャーの映像からは、スバルのデイバイン
バスターが大型狙撃スフィアを破壊する様子が映し出される

「あはは、確かにそうかもしれへんなあ。まあ、ゴールは出来てへ
んけど、この内容なら再試験に引っかかるのは間違いないし、私と
してもこういう人材が欲しい。それに、ナカジマ三佐にはもうお預
かりの許可はもらっているしな」一応親への許可はとってある。

「それじゃ、この後二人に話して、引き抜きだね。ティアナの怪我

モリインが治療してくれてるし、後は……ん？ジンどうしたの」「どこか暗い様子で俯きジンが気になったのかフェイトが尋ねる

「ス、スバルが」

「ス、スバル？スバルは無事だよ。怪我したのはティアナの方だよ」

「ス、スバルが砲撃魔になってしまった」

もうジンというフェイト。へりの下で感動の再会が有る中、へりの中は別の空気だった

第27話 集結と訓練

今ヘリの下では、スバルとなのはが感動の再会をしている。完全にティアナは蚊帳の外。不憫に思ったので転移でティアナの隣に転移して、驚かしてみる

「よう、ツンデレ。怪我は大丈夫か？」

いきなりの登場にツンデレがビビる。やはり、意外とビビりなんだよなこいつ。

「ジ、ジンさん！？い、いきなり現れないください。ビックリするじゃないですか！ 久しぶりに現れたと思ったら、こんな急に。それに3年も間様子を見に来ないのはどういうことですか！たまに連絡してきたと思ったら、こっちの様子を聞いてすぐ切っちゃうし……」

「すまん。色々と立て込んで、忙しかったんだ。オレとしてはもっと楽しかったんだが……。それよりも足のケガ大丈夫か？見せてみる」

「良いです！ジンさんの治療は痛いから……」顔が青くなって行くがトラウマでも思っていたのだろう。

「今回は普通にやってやるから大丈夫だ。サツサと足を出せ」そう言われて、ブーツを脱ぎ、足を出すティアナ。青くなっている、これは完全な捻挫だな。これくらいならすぐに治せるだろう。

ジンが治療に取り掛かると、ラインがやってきた。

「あ〜ジンさん？ジンさんも来てたんですねえ〜。あ、ジンさん治療なら私がやりますですよ。」くるくる飛びながらラインがやってくるが、ティアナは茫然としている。どうやらラインのサイズに驚いているようだ。

「大丈夫です。それにもう始めちゃってますから、ここで代わっても手間ですし。それにティアナの治療は昔からやっているんで問題ないです。」

「そうですか？ならお願いしますう〜。…でも、ジンさんとティアナは知り合いだったんですね？」ラインが肩に乗って話しかけてくるが、気にならない。ラインの無邪気さはある意味最強だなと思っ
てしまうほどである。

「はい。まあスバルやルーみたいな妹分ですよ。生意気ですが」

「誰の事言っているのかわかりませんね。まあ、スバルは生意気ではないと思うんですけど」

「はん、自分の事がわからないくらい耄碌したか？歳をとると大変だな〜」

「ジンさん、自分が私よりも年上だと言う事を忘れたんじゃないですか？ジンさんこそ耄碌したんじゃないですか？」

「ハハハ、笑えない冗談だな。ツンデレ」

「もちろん、冗談じゃないですから」二人の空気がおかしくなる。ジンの肩に乗っているラインはあわあわしているだけ

「上等だ！久しぶりにブチのめしてやんよ小娘！」

「手負いの女の子を倒そうとするなんて、やっぱり最低の人ですね。」

「大丈夫だ、しっかりと治してやる。だからその後、覚えておけよ。越えられない壁というものを見せてやろう」

「ジンさんこそ、覚えておいて欲しいですね。私の目標にはあなたに勝って顎で使うという目標があるということを」

「ハハ、残念でした、この3年間でオレは本意ながら一等空尉にまで昇進してるんです。お前の夢は途切れたな。ハツハハハ」

「クツ、ジンさん昇格には興味ないみたいだな事言ってたじゃないですか！嘘ついたんですね？ペテン師！」完全に子供レベルのケンカになってしまって、感動の再会を終えたのはとスバルが来るまでこのしょうもないケンカは続いた。

今、スバル達は試験の結果報告と新部隊へのスカウトの話を受けている。スバルもティアナも乗り気のようだ。

試験結果は再試験をすることになった。まあ問題なく受かるだろう。今回も怪我がなければ受かっていた訳だし・・・

で、今話を終えたティアナやスバル、さらに魔王とその手下たちに絡まれているわけだが……

「で、何の用ですか？魔お・・・いえ、高町さん」

「い、今、魔王って言うとしたでしょ！何度も言うけど、私普通の女の子！」

「被害妄想です。そう言う返しがくるのは自分でもそう思っている証拠ですね。自己紹介の時は、特技は砲撃による殲滅、趣味は砲撃、最近のマイブームも砲撃って言うといいですよ。まさにあなたの事が皆に伝わると思います。」

「うわああくん、フェイトちゃん」またしても、フェイトに泣きつく。

「もう、ジン兄！なのはさんをいじめないで！なのはさんは私の憧れの人なんだよ！」珍しく、スバルが怒っているけど

「あれが理想？」視線の先にはフェイトに慰められているのがいた。スバルも微妙に視線をそらしている。この姉妹現実をあまり見ようとしないのだ。理想と現実とは常に違うと言うのに

「ティアナ、どう思う？」

「ノーコメント」

「お前が今回の誘いを受ければ、直属の上司で、先生だぞ？良いのか？」

「……大丈夫です・・・たぶん（ボソ）」そのティアナの発言が聞こえてしまったらしく、なのはは余計に落ち込んでしまった・・・

大丈夫なんだろうか、新部隊

「そう言えば、ジン兄も機動六課に誘われたんだよね？どうするの？」

「オレか？一応、子狸部隊長に承諾の報告したんだが、あの人を見て不安になってきた。スバルが砲撃魔になってしまっただけじゃないかと」「視線の先にはなのはがいた。スバルも目で追ったがギリギリ逸らしている

「何の話！？それに、私は砲撃魔じゃないもん。デイバインバスターは、なのはさんの訓練用の教材を見ながら練習しただけ。空港の時は見れなかったし」

「いいか、スバル。その技は心の奥底に大事に封印しておけ。決して開けてはならない禁断の箱だ。^{パンドラ}開けたら一体どんな厄災が降りかかるか…」

「私の技はそんな厄災みたいなものじゃないよ！なんで、パンドラの箱扱いなの！」泣きやんだなのはが両手を大きく振り否定してくる。その様子は数年前と全く変わらない、子供のままだった…成長出来なかつたんだな、ルーでさえ成長しているのに…不憫だ

目に何か熱い物がこみ上げてくる。徐に席を立ち、なぜか、ミッドに有るお茶を入れて、なのはの前に置く…ああ、茶柱が立っている、いい事あるよきつと！

「な、なんで私だけにお茶を出すの！それにそのかわいそうな物を見る目は何！」

「何でもありません。どうぞ気にせずに」その後ものは絡んできたが、適当にからかってその日は終わった。

一応スバルには、砲撃魔になるなど教えてあった筈だが、どうやら無理だったらしい。ギンガが魔王化を身につけ、スバルが砲撃魔か……なんか変な方向に進んでいるのは気のせいだろうか？

2週間ほどして、今は機動六課の隊舎にいる。一応出向の挨拶をして、隊舎を回っている。…無駄に広い。一年間の試験部隊にしてはやたらと設備が揃っている。地上とは独立して入るが、一応所属地上。確実に嫌われるなこれ。

そんなことを考えつつも、集合がかったので、ロビーに集まる。オレはロングアーチ所属なので、隊長陣達側にはいないが、階級は上から数えた方が高いという奇妙な立ち位置である。ゲンヤさんに初めて感謝した。これで、八神ファミリーの部下なんていう、ストレスとの戦いには成らなくて済む。

壇上では、部隊長殿が何か言っているが全く耳に入ってこない。実は昨日まで仕事の引き継ぎをしていて碌に寝てないのである。ゲンヤさんは2週間の期限をくれたのに、自分の仕事を片付けるのが2週間かかってしまった。しかも、ほぼ不眠不休で…いつか、この恨み晴らしてやる。こっちの仕事量を計算して期間を告げるあたり、子狸の師匠と言われるだけの事はある。…クイントさんに浮気報告でもしておこう

あ、いつの間にか話が終わってる。それぞれ解散してるじゃないか。

なら、オレも仕事場に行こうとするかな

・
・
・
・
・

「ここは どこ？」完全に迷った！どうしよう、最初の自己紹介とか、結構大事なのに遅れて行くと何か気まずいじゃんか！……ここうなったら、ラインさん呼び出して……

「ダメだ……恥ずかしすぎる」

ラインさんなら今行くですううとか言って笑顔で来てくれそうだが、迷ったんですかあ？ジンさんも案外子供ですね？なんて言われたら、立ち直れないかもしれない。ラインさんの無邪気さは美德だが、今のオレには決定打にしなければならない。ファリンさん再来の可能性が出てくる……

「何やってるんですか？ジンさん？気持ち悪いですよ？」

「ツンデレは黙ってる。今考え中だ……何でツンデレがいる？」考え事をしていたら、ツンデレとワンコ、さらには子供×2がそこにいた

「私達はコールサインの確認をしていたところです。なのはさんを待っているんですが……」

「おまたせ」

あ、ジン君もいたんだ。…そう言えば、ジン

君も教導手伝ってくれるんだよね？折角だから、皆と訓練場に行こうよ。ロングアーチの方はまだ、大丈夫でしょ？」魔王様来たああ

あ！！

「いえ、これから向かおうとしていた所なのですみません。」

「大丈夫、はやてちゃんは、今日はお出かけで、ジン君は訓練の方を見て欲しいって言っていたから。」

「なら、最初に聞く意味なかったんじゃない？」

「にははは・・・ついね。それじゃ〜行こう！」いい笑顔で先導して行く。遠足じゃあるまいし・・・

しかも、エリキャロは魔王様を見てから、若干震えているし。昔、煽った甲斐があつたか？スバルはなんかうれしそうで、ティアナはなんかこつち見てるし・・・睨むなツンデレ

—————

ところ変わって訓練スペース・・・というか海

「お前らも大変だな、訓練場が海の中とはな・・・まだ寒い時期だから、風邪引くなよ」

「そんなわけないじゃないですか！どこに海で訓練する人がいるんですか！」

「え？知らないのか　新人は最初は海って相場が決まってるんだぞ」

「ホントですか!?」「ナイスコンビネーション、エリキヤロ。息ピッタリだ。」

「嘘よ。二人ともジンさんの話は8割は嘘だと思いなさい。この人根っからの嘘つきだから」

「ツンデレ、海に沈むか?」「フフフ、とまた二人の間で火花が散っている

「…そう言えば、ジン兄、なんでティアの事教えてくれなかったの? 訓練校に行く事は知ってたんでしょ?」「ふとスバルが思いだした

「ツンデレの方には言っただけであつたんだが、お前は 忘れてた」

「ヒドイよ! 家近いんだし、話す機会なんていくらでもあつたじゃん! おかけで最初不安だっただから。」

「まあそれはスマンな。でも、ティアナは分かっていたら?」

「聞いてはいましたけど、名前教えてくれなかったから、誰だか最初は分かりませんでしたよ。まあ、すぐに分かったんですけど」ティアナがスバルの方を見ると、スバルがニッコリ笑う。それを見てタメ息をつくティアナ

「言った通りだろ?」

「はい、言ったとおりでした。その後ギンガさんにも会って、似たもの姉妹だと思いました。」

「まあな。ギンガもしっかりしているようで、抜けているからな。」

スバルは常にだけど」

「そうですね」

ぶくぶくとスバルが反論してくるが、オレとティアナで日常生活の行動を話したら、涙を流して反論を止めてくれた。うん、物わかりが良いのは感心だぞ。なぜか、こういう時はティアナと気が合うのはなぜだろうか？ ティアナは性格が悪いからな、うん、そうだよ。

「なんかすごく不快な事を言われた気がする」

「そんなのいつもの事だよ」

その後、速攻で蹴られた。しかも、太もも。膝はダメだよ、膝は一応オレ上官だぞ。もう少し敬え

そんな感じで悶絶していると、メガネっ娘が走ってきた。なのはさーんと呼んでいる。しかも、ウフフフって笑いながら来るし。これは、まさか…

「エリキヤロ、こっちに来い。二人にはまだ早い世界だ」二人は首をかしげるも、素直にこっちに来る。まさか、こんな真昼間から・・・嫁はフェイトさんじゃないのか

「いいか、二人とも、あれは汚れた大人の世界だ。お前たちはあんなつちやダメだぞ。お兄さんとの約束だ」

「よくわかりませんが、わかりました。」「はい」二人が返事して

くれたので一安心だが、この二人の親はフェイトさんだ。…これは年上として注意しなければ・・・バシ〜ン・・・痛い

「何すんだよツンデレ。今はオレは情操教育中だ。邪魔すんな。しかもそのハリセンどこから出した！」

「何が情操教育よ！子供に変なこと教えるんじゃないわよ。それとこれはなんとなく出てきたのよ」

「お前、完全にタメ口になってんじゃねえか。それに、なんとなくって何だよ、なんとなくって・・・そんな都合のいい事あるかあ！」

またここでケンカしたのだが、なのはがこちらを呼ぶので仕方なく行く事にする。後で覚えてるツンデレ

で、まずは自己紹介から

「メカニックデザイナー兼通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。皆はシャリーと呼ぶので良かったらそう呼んでね。それと」今後訓練を見るためにちよくちよく来るといふ事を伝えたシャリー。しかし、ジンの気になっている所は、なのはの愛人か否かのその一点。ぶつちやけほとんど話は聞いていない。

「ああ、後、私のほかにもデバイスの事を見てくる人が二人いるんで、何かあったら私達の内の誰かに聞いてね。」

「他の二人って誰ですか？」

「エリオは知っているでしょ？ルーテシアって民間協力者の子。フ

「イトさんから聞いていたけど、お友達なんですよ？」

「はい。ルーとはジンさんを通じて友達になりました。でも、後一人は……？」

「そのジンさんだよ。デバイスマスターの資格を持っているから、八神部隊長がメカニックとしても働いてもらうって言うていたし。

「そうですよね？」メガネっ娘がこちらに振ってくるが

「オレはそんな事知らないけど…基本、遊撃と教導のサポート、後はデスクワークだけだから」

「え？でも」

「あの部隊長殿とは後でキッチリ話を着けるから問題ない。それに、ルーもいれば問題ないだろ？。3人もデバイスマスターはいらないだろうし…」

「まあある程度なら手伝うけど」

「そう言っただだ楽しただけなんですよね？」

「そりゃー……何を言ってるツンデレ。仕事人間のオレがそんな事思っわけないだろ。ハハハ」

「嘘をつくのが下手ですね。」「うん」「ジン兄」「ジンさん」「ティアナ、なのは、スバル、エリキャロの順」

「仕方ないだろ！ここしばらく忙しすぎて碌に休めてなかったんだから。休みたいと思っただって良いじゃんか、人間だもの」

「そもそも、ここ数年何してたんですか？私達の事放っただいて」

「ああ。ティアナさんもしかして、寂しかったんですか？そんななら早く言ってくれば、構ってあげたのに。ごめんなく兄貴分として失格だよ」ティアナ肩に手を置きながら言うが、肩が震えている

「だ・れ・が、寂しいなんて言いました？」

「照れるなよツンデレ。ほら、デレていいぞ。」

「死ね！！」ティアナの黄金の左フックがジンを捕らえたかと思っただが、寸前で躲される。その後、連撃を加えようとしても、ヒョイヒョイと躲され全ての攻撃が空をきる。さすがに見かねたのか、なのはが止めに入る

「もう〜ジン君そうやってすぐからかうのはダメだよ。でも、実際何してたの？あんま連絡とれなかったし」

「あゝ ノーコメントで。仕事内容に抵触します。外部に情報は漏らせませんので それに」

「それに？」少し気になったティアナが聞いてくる。ジンの顔がすこし真面目になったのを見て何かあると思ったようだ。

「いや、なんでもない」ガクつと崩れる周り。ただ、ジンの雰囲気が変わったので深くは聞かない事にした。

「それじゃーそろそろ訓練を始めようか。シャーリー！」その呼びかけに答えるかのように空中でキーボードを操作し、準備を始める。少し経つと海上に訓練スペースができた。いくらなんでも金掛け過ぎじゃね？余計に地上部隊の反感買うだろこれ。実

験部隊にこれはないと思う

ジンが呆れている中、他の新人たちは、素直に感嘆していた。この政治的背景が見えなければそうなるのも当然なんだけど

その後、少しの説明を受けて、新人たちが廃墟ビルに設定された訓練スペースに入っていく。ガジェットと模擬戦をするらしい。しかも、いきなり8体。いくら4人いるとしても、軽く8体って誰基準だよ！新人にはもつと優しくしようよ！

・
・
・

しかし、そんな事を思っていたけど、普通に倒した。スバルの倒し方は爆発の危険性や至近距離の攻撃の可能性があるので褒められたものではなかったけど、他の3人は概ね合格だろう。特にティアナ。多重弾殻射撃をやったのけた。一応AAの技術だが、普通にやっけるし。まあ、その後、倒れたから、まだ体が慣れてないんだろうけど…

皆が集合してなのは反省点を述べて、次に移ろうとする。新人たち大変だなく、昔のゼスト隊に比べればまだまだただけど。なかなかきつそうだな。

「それじゃ、次ジン君がやってみようか？」

「は？」おいおい、待てよ魔王、そんな話聞いてないんだけど…

「新人たちに手本を見せるのも教導官の務めだよ。」

「オレ教導官じゃないんですけど…」

「すみません！」 ナイスツンデレ。お前ならオレを助けてくれると思ってた。言ってみてやれ、言ってみてやれ

「どうしたのティアナ？」

「ガジェット戦はこれから訓練を積みだすと思うので、どうせなら、高ランク魔導師同士の模擬戦が見てみたいです。」ティアナはこちらを見ながら、笑っている。野郎、オレの命を散らすつもりか

「うーん、確かにティアナの言う通りかもね。高ランク魔導師の戦いはそうそう見れるもんじゃないし…」 わかった、それじゃ

「それじゃ、オレの出番はないですね。オレ高ランク魔導師じゃないんで」

「……え？」「……」ジンとなのは以外の全員が声をそろえて

「あれ？言ってみてやれ。オレのランクは空戦Cランク。実際この中で最も低いんだよ。」

「う、うそ！？ジンさん私達よりランク下なんですか？！あれだけ強いのに！」

「ティアナ、ジン兄と戦った事あるの？」

「昔ね。一度も勝ったこと無いけど」

「私とギン姉もだよ。ギン姉なんか、同じ部隊で模擬戦とかしてるって言ってたけど、それでもまだ勝った事がないんだって！私は小さい頃遊びでやったただけだから、ジン兄がどれくらい強いのか知らないけど…」

「私は昔簡単に負けちゃったよ。」なのはが苦笑しながら言うが、スバルは信じられないと言う顔をする。それもそうであろう。スバルにとってジンは憧れでもあるが、昔から知っている近所のお兄さん。自分が最も憧れるエースオブエースより強いとは微塵も思っていなかっただろう

「それに、ジンさん、フェイトさんにも勝ってますし。無傷で」

「コラ！エロ男、揉んでやる、そう言う事は言わなくて良いんだよ。いい加減空気よむ事を覚えなさい」

「誰ですか、その変態は！僕はエリオ・モンディアルです！」

「ルーが風呂に入っていた時に入ってきた少年の言葉とは思えないな。おかげでルーは深い傷を負ってしまった。初めて男に見られたと…」

「あ、あれはジンさんが入って無理やり入れたんじゃないですか！それに当時はまだ6歳ですよ！」顔を真っ赤にして無罪を主張するエロ男、もといエリオ。まあ実際子供同士だから、気にしてないと言つのが真実なのだが、こういうのは言わない方が面白い。後で、

ルーと話を合わさねば…あいつなら乗ってくれるだろう

「というか、ジン兄、ルーと昔一緒に入っていたよね？私とギン姉が誘った時は入ってくれなかったのに」

「当たり前だワ^{スバル}ンコ。オレとお前達が初めて会った頃はお前達は今のエリキャラロくらいだぞ？羞恥心って言う物が全くなかったお前たち姉妹は平気でも、ガラスのハートのピュアボーイのオレにはそんなこと出来ないのだよ。ルーはメガ・又さんに頼まれて仕方なくだ。あの時はまだ、3歳とかだから一人で入るのは危ないし、かと言ってメガ・又さんが忙しかったから、入れないというのも可哀そうだからオレが入っていたまでだ。問題ない」

「たまにジン兄が私の事呼ぶ時、何か変に聞こえるのは何でだろう？
それと、私にだって、しゅうちん、くらいあるよ！」

「ちなみに意味は？」

「……………」

「スバル、見栄は張らなくて良いのよ。分からない時は分からないと言いなさい。それと、あんたに羞恥心が有ったとは思えないわ」
ティアナの一撃で沈むスバル。キャラとエリオが慰めている。若干、なのはも自分とキャラが被ったのか、同情の視線を向けている。

「あの〜結局、模擬戦の方はどうなるんですか？」

今まで空気だったシャーリーの言葉で場が戻るのだった。

第28話 模擬戦 … 何回目だよ！

シャーリーの声で皆が本題に戻る

「もちろんやらない方向で。魔王様の相手なんてとてもじゃないが
できない。」

「ジン君！私は魔王じゃないの。でも、私からもお願いで
きないかな？皆に戦い方を見せたいし それにまだジン君に勝つて
ないし」

「確実に最後が本音でしょ！昔の賭け忘れたんですか？それに、オ
レにはあなたにお願いできる権利が残っているんですよ？それも3
回。今まで使ってませんでした、ここで一つ使う事にしましょう。」

「ええ、最初のはそうだけど、残り2回は私へのご褒美じゃないの
？テストに合格したから、戦ってくれたんじゃない？」

「確かにそうですね、勝敗は別ですよ。オレが勝ったんだから、
当然賭けもオレの勝ちです。願い事が増えるのは当然じゃないです
か」

「うう、確かにそうだけど…でも、この前はジン君断らなかつたよ。
今みたいをお願い使えば、断れたのに」

「まあ、あの時はオレにとっても必要な事だったんで。オーバース

との対戦は必要でしたし…本音を言うと接近戦型の人が良かったんですが…」

「というより、ジンさんってなのはさんより強いんですか？」シャリーが話に入ってくる。オーバーSランクのエースオブエースが何度も負けているのが信じられないのだろう

「強いかどうかは知らないけど、負けた事はない。ただ、相手がこの人だから　もし、フェイトさんが高町さんと全く能力が同じなら、勝てないと思いますし。」なのはを見ながらそう答えるジン。

基本的に、スペックはあつちの方が上なので、ガチで戦ったら負ける。しかし、ジンのレアスキルと転移を駆使すればその差が縮まる。しかし、戦い方次第では、これでもなのはの方が有利のだが、砲撃志向のなのはのため、ジンは未だに無敗。なのははジンの弱点に気づいてないのだ

「む、今度やったら勝てるもん！さあ、ジン君勝負だよ！」なぜか、やる気満々。さっきの話はどこに行ってしまったのか

「ジンさん、私からもお願いします。同じガンナーとして、格上相手の戦い方を見てみたいです」

「言ってる事はまともだんだけど　顔がニヤついているぞ。お前、オレが魔王に勝つたのを信じてないだろう？」ティアナのニヤつきがなければ考えたんだが…

「だって、ジンさんですよ？勝ったとしてもなんかセコイ手を使っただしお考えません。そうでもなきや、ジンさんがエースと呼ばれる人に敵うわけないじゃないですか」

「ツンデレ、その手には乗らんぞ？いくら挑発したところで魔王と戦うなんて御免だ」

「ジン兄、私も見てみたい！ジン兄ってどれくらい強いのか？」

「ジンさん、僕も見てみたいです」「わ、私も…」スバル、エリキヤロがティアナの援護に回る。うゝここで断ると子供をいじめるみたいじゃないか　は！　ティアナのやつ笑っていやがる。あいつ、ここまで見越していたとは…策士ツンデレ

「はあ…分かったよ。しかし、お前らにも、苦痛は受けてもらうぞ？オレがああ魔王を倒したら、地獄の特訓が待っているからな、覚悟しろよ？　特にツンデレ！お前には、倒れた方がマシなんじゃないかというくらい地獄の特訓が待っているからな。…大丈夫、気絶してもすぐに起こしてやるから。昔、ギンガにもやったら、泣きながら許してと言ったくらいだ。なゝに、ツンデレはその時よりちよゝつとキツイだけだから心配するな。　楽しみにしておけよ？」

後ろの奴らが顔を青くするのを見てなのはに了承を伝える。

それを聞いて、なのはが嬉しそうにするが、フォワード陣はめっちゃ応援している。　少し、なのはもその異様な雰囲気戸惑ったが、教え子が応援してくれているとあって、嬉しそうだ。

だけど、今回は、絶対に勝ちを譲らない。過去3度勝利しているが、基本はオレの決めた設定のフィールドでやっている。しかし、今回はただの森。前は破壊なしでやったが、今回はありという設定だ。魔王が全力を出せる。

こちらとしては、相手に全力を出させず、こちらのフィールドに持ち込めればいいのだが、過去3度の経験から簡単には引っかけつかってくれないだろう。いくら魔王でも当然学習する。ならば、攻め方を変えるしかあるまい

・
・
・

今、二人が距離を開けて対峙している。フォワード陣と残りの見学者（なぜか、増えている。）は観戦できるように離れた所からサーチャーで見ている。

「準備は良いですか？」機械からシャーリーの声が響く

「ええ」「うん」二人が頷いた

【それでは…レディ〜〜〜ゴー！！】

シャーリーの合図と共に二人が動き出す。この場合いつもジンは転移して姿を隠すのだが、今回はしない。

「行け！」素早く展開した魔法弾をなのに向けて放つ。

「プロテクション」レイジングハートの声が響く。躲す事はできた

だろうが、ジンはいつでも爆発させる事が出来るため、下手な回避はせず、確実にバリアで防ぐ。なのはが、ジンとの模擬戦で得た戦い方である

ジンも相手がそうするだろうと、思っていたのでもう数発放って、2発ほど地面に着弾させる。しかし、なのはの対応も早く、地面に着弾した瞬間空に上がり視界が悪くなるのを防ぐ。しかも、置き土産まで残して

「ちっ！」こちらに飛んできたアクセルシュータを全て撃ち落とす。なのはは、逃げると同時にレイジングハートにジンの位置特定をしてもらい、自分の視界で見ること無く連射した。普通なら弾が逸れるんだが、全てが誘導弾なため、下手に回避をして後々狙われるのも嫌なので、撃ち落とす事にするジン。

フォーワード陣は、ただ、この戦いを魅入っていた。：否、ティアナだけは冷静に分析する

「（あの状況でジンさんは回避を選択せず、撃ち落とす事にした。おそらく、誘導弾が、後々厄介になるからだと思うんだけど、これが、ガンナーの戦い方。逃げるのではなく撃ち落とす。そして、それを正確にやる射撃技術。やっぱり、ジンさんはすごい！普段はあれだけど…）」

ティアナが心の中で割と失礼な事を考えている頃、ジンは作戦を練っていた。

「（やはり、普通にやってもダメだな。仮に撃ち合いになったとしても、魔力量でこちらが負ける。一発一発の強度はこちらに分があ

るが、あつちは弾幕でそれをカバーできるし、オレは誘導弾は得意じゃない。転移魔法で背後から攻める手立てはあるが、自分のまわりに魔力弾を形成して、オレが転移するのを防いでいる。あれで、転移したら蜂の巣だな…さてどうするか…」

先程の撃ち合いから今回のなのは過去の失敗を糧にしていると分析する。自分の周りに魔力弾を形成しておけば、背後を取られる心配はない。ジンがその魔力弾を撃つても、すぐさま生成するだろうか、最終的にはジンが魔力量の差で負ける。しかも、あちらから大きい攻撃をしてこないの、カウンターもできない。意外と手詰まりなんだが…

「（ん？そう言えば、周りに形成している魔法弾は誘導弾。普段20発くらいの誘導弾を操っていることから、多くても40発くらいは操れるのだろう。だけど、あくまで、相手を狙う時のみならず。自分の防御と攻撃両方に気を回せるか？あの人のマルチタスクがどこまで行くか、賭けるしかないな。…頼むから成功してくれよ）」

ジンはシルエットを10体ほど出し、転移させる。シルエットは、唯の張りぼてなので中身なんてほとんどない。一瞬でも掠れば消えてしまう。まあ、相手の上限を見るためなので、その程度に抑えたのだが…これが上手く行くか…

「喰らえ！」まずは、なのはに向かって魔力弾を撃つ。当然、なのはにバレ、こちらの位置が特定される。なのは、周りの魔力弾を使わずにバリアで防ぎすぐさまアクセルシューターを放つ。その数20

「っち、なんてバカ魔力。でも、それが、こっちの狙い！」転移さ

せて待機させていたシルエットを特攻させる。シルエット一人一人が魔力弾を放つのでその数は30を超える。まあ、張りばてシルエットなので、魔力弾が当たっても、意味ないし、あまり魔力を込めてないので、爆発させても意味がない。

しかし、なのはは過去の経験から、これを全て撃ち落さなければならぬ。どれが、本物であるか、わからない以上、下手に躲して、爆発でもされたら、目も当てられない。それに、攻撃に使ったアクセルシューターを20使っているの、ジンの見立てでの後20で防ぐしかない。その筈だったのだが

なのははプロテクションを使っただけで、ジンのシルエットには全く注意を向けなかった。ジンからすれば、これで、誘導弾の上限を図るつもりだったが誤算だ。

しかも、攻撃に使ったアクセルシューターを解除すると思っていたから、こちらにそのまま飛んできてかなり焦る。森を利用しなにか、防いだが、そのせいで、上への注意が疎かになってしまった。

「デイバイ〜ン」魔王が砲撃態勢に入る。ジンも慌てて回避しようとするが、間に合わない。なのは勝利を確信する。

「バスター!!!」レーザービームがジンに向かって放たれる。そして、ジンは為すすべもなく、砲撃に呑み込まれた

ジンが砲撃に呑み込まれたのを見て、なのは大喜びしている。

「や、やったー!!!」じ、ジン君に初めて勝てたよ〜」空の上でガッツポーズまでして喜んでいる。フォワード陣は、当然の結果かみた

いな顔をしているが、エリキャラは顔を青くしている。死んだんじゃないかと不安に思っている

しかし、なのは気づくべきだった。ジンのシルエットはまだ消えていない事に…

「ダメですよ、教導官。勝ったと思った時が一番危ないんですよ。」
そう言っただけ無防備なのはその後ろから、魔力弾を撃って気絶させた。空中から落ちたら危ないので、ちゃんとキャッチしたけど

なのはが倒れてからしばらくして、なのはの意識が戻った。ちゃんと加減したのですぐに目覚めるだろうと思っただし、怪我のないようにしたので、なのはの体にはなんの問題もなかった。

「……また、負けちゃったんだね。」目を覚ましたなのはが開口一番に口にした言葉。自分を心配して見られている教え子達を見て、自分の敗北を悟ったようだ。

「なのはさん、大丈夫ですか？」スバルが心配そうな顔で聞く

「うん、大丈夫だよ。ジン君は模擬戦では必要以上に傷つけないから、体の方は問題なし。ただ、悔しいな。」そう言っている割には顔は晴れやかだ。

「最後の詰めを誤りましたね。今回は本当に危なかったです。次やったら勝てないかもしれません。本当に驚きました……貴女でも学習するんですね？ビックリです。」

「ジン君は…私の事を…なんだと思っているのかな？ ほら、言っ
てごらん」レイジングハートを突きつけて言うセリフじゃない。し
かし、オレは魔王には屈しない！

「とにかく思考が砲撃に直結する砲撃魔。さらには管理局の白い魔
お おっと危ないじゃないですか。おかげで、未来有る少年の命
が断られました。」なのはが、ジンの発言にキレて魔法弾を発射。
しかし、そこで話していたジンはただの幻影。当然魔法弾は貫通し、
ジンの背後にいたエリオに直撃…エリオ、君の尊い犠牲は無駄に
はしないよ。

なのは達がエリオを心配するが、そこに隠れていたジンが

「え、エリオ…！！」まさに自作自演。エリオに駆け寄り、抱きか
かえる。

「だ、誰だ！エリオをこんなにしたやつは！これじゃあ、エリオは
もう」

「え、エリオ君…」キャロがなぜか話に乗っている。あれ？こい
つマジで泣いている気が…

「キャ、キャロ、冗談だからな。エリオは無事だから…」

「子供を泣かせるんじゃないわよ！！」スパーンとティアナのハリ
センがジンを捕らえる。まだ持っていたのか…クツ、アリサさんに
似てきやがって。そんな所は似なくて良いんだよ！ツンデレはみん
なそうなのか？

「コラ、ツンデレ！すぐに暴力を振るのは止めなさい。ツンデレでもやって良い事と悪い事があるんだぞ！デレれば許されると思ったら大間違いだからな！」

「デレてないわよ！それに、ジンさんが子供を泣かせた事実は変わらないし」

「…う、的確に急所を突いてくるなんて、さすがツンデレ。お前へ教える事がなくなっただな。免許皆伝だ。オレからお前に伝える事はあと一つだけだ。……デレる時は顔を赤くするのがポイントらしい」サムズアップ

「し 知らないわよ！！」 渾身の回し蹴りがジンの顎に直撃し、ジンはそのまま気を失った。

・
・
・
・
・
ジン覚醒

ただ、気づいた時はバインドで簀巻きにされている。まさか、こんな趣味が有るとは思わなかった

「ティアナ、兄代わりとして、オレはガツカリだぞ。お前にこんな趣味が有ったとは…目的はなんだ？虐めか？それともサンドバックか？いくら、ツンデレでもこれは度が過ぎるぞ？」すごく落ち込んだように演技するジン。ただ、この状況では悪手だった。

「言い残す事は有るかしら？天国で兄さんに会えたら言っと思ってください。ティアナは元気ですと」銃口を額に突き付けるティアナ

「ごめんなさい。フザケ過ぎました！ティアナさん許して」

「…全く時と場合を選ばないと命を落としますよ？」そう言って、離れるティアナ。ああ〜マジ助かった〜

「このバインドも解いてくれると嬉しいんだけど…」

「それは私じゃないですよ。」

このピンクの魔力光から分かっていたが、あえて触れなかった。オレ的にはここでボケたいのだが、それをやったら完全に死ぬ。これからの発言は死と隣り合わせになってしまう。気をつけなければ…

「高町さん。これを外してもらえませんか？」

「ジン君が質問にちゃんと答えてくれたら外すよ〜。ただ、フザケたら 分かっているよね？」

「sir yes sir」魔王怖え〜。オレ以外のやつも震えるじゃないか

「私が聞きたいのは最後の所だよ」

「ああ、それは簡単です。貴女はオレのシルエットがなんの魔力も通ってないハリボテ魔法だという事は見抜いていましたね？それが予想外で慌てたんですけど…」

「うん、わざと、姿を出した後、転移でシルエットを出現させたから、何かあると思ったんだ。奇襲をかけるだけなら、姿を現す必要はないからね。だから、本命は別に有ると思って、プロテクション張りながら、ジン君の動きを見ていたんだけど、何も起こさなかった。だから、そのまま、アクセルシューターで、デバインバスターが撃てる位置まで誘導したんだけど…」

「はい、オレとしては貴女の誘導弾の制御がどれくらいの数までできるのかを調べるためにシルエットを使っただんですけど、まさか、反応されないとは思わなかったので、正直焦りました。あれで、シルエットまで消されてたら、負けていたと思います」

「アクセルシューターから逃げている間で私の視界から消えた時にシルエットと位置を入れ替えただね？」

「ご明察です。なんか今日の高町さん、随分と賢いですね」

「ジン君？」なのはの目のハイライトが一瞬消えかかる

「何でもありません。ハツハツ　それで、シルエットと位置を入れ替えた後は、貴女が油断している所を突いて勝ちを収めた訳です」

「そっか、でも、あと少しだね？次は勝つよ」なのはがバインドを解きジンを解放する

「次はないですけどね。当然勝ち逃げしますし。お互いリミッタ付きじゃ全力でやれないでしょ。」

「ジン君も付けてるんだね？どれくらい落しているの？」

「もともと、魔力ランクはAAくらいだからBくらいまでですか？基本的に魔力量で戦ってないんで、なんとかなるんですけど…」

「ううー私AAなのに負けちゃったよー」

「魔力量が勝敗を決めるわけじゃないという事ですね。地球の偉人も『戦いとは、常に二手三手先を考えてするものだ』とか『魔導師の性能の違いが、戦力の決定的な差でない事を教えてやる』とか言うてるじゃないですか。ちゃんと偉人の言葉は学ばなくてはダメですよ」

「それは違うような気がするよ。確かに偉人なんだろうけど、なんと、赤い彗星が理解できないとは、さすがさんに言って、DV全巻を高町さんに送ってもらった方が良いな。」

あれ、そういえば

「ティーンズと愉快な仲間達、準備は出来てるか？危うく忘れるところだった。」

「ジ、ジンさん何をですか？もう、今日は訓練は終わりですよ？」

「ああ、高町さんの方はな。　　だけど、オレの特訓はこれから始

まるんだ。さ。hurry up!」

「な、なのはさんからも言って上げてください。もう訓練は」

「ジン君、あまり、無茶しちゃだめだよ？じゃあ、みんな頑張ってるね」爽快に去っていくのは

「さて、教導官の御許しも出たし…逝くか？」

「……どこにですか!!!」……4人がシンクロする

「安心しろ、ティアナを除けば、ちよつとキツイ訓練程度だ。気絶してもちゃんと診てやるから問題ない」

「……気絶するのは、ちよつとは言わないです!」……今度は3人がシンクロする

「何を言っているんだ？ティアナなんてそんなんじゃ済まないぞ？いつそ死んだ方が良くらいまで……」

「じ、ジンさん、久しぶりに会った妹分にそんなひどい真似なんかしませんよね？」顔を青くするティアナに笑顔で答えてやる

「あ、それ無理」

機動六課の今日の天気は晴れのち悲鳴？

第29話 想い

なのはとの模擬戦を終え、フォワード陣への制裁…もとい、特訓を終えてから、しばらく経った。今日もフォワード陣は、朝から元気に猛特訓。日々成長する毎日を送っている。

ジンの方は事務仕事を素早く終わらせ優雅にティ タイム。もともと、スペックは高いので書類整理だけならすぐに終わってしまうのだ。普通なら、誰かのを手伝ったり、訓練のサポートとかするのだが、今は基礎段階で特に教える事もないし、デスクワークは自分のは自分でやるというジンの信条に基づいて他人のはやらない。

首都防衛隊で活動してた時、ジンのデスクワークの速さに目を付けた同僚がジンにお願いしてきた時、当時のジンは快く引き受けていたのだが、後でゼストがジンの仕事量が明らかに多い事に疑問を持ちジンに聞いてみた所、同僚の手伝いをしていると言った。しかし、その同僚はジンに仕事を押し付けただけで自分達はサボリ。それを知ったゼストにその同僚たちは足腰が立たなくなるまで訓練させられたが、それ以来ジンは人のデスクワークを手伝う事をしなくなつた。

どこにでもあるが、決められた仕事を、決められたやつがやれずに他に迷惑がかかるから、手伝ってあげるというのは宜しくない。迷惑がかかればそいつの責任なのだ。自分の責任は自分で負わなくてはならない。誰かが、無理して頑張るとそれを利用し楽をする奴が出てくるので、基本ジンは自分の仕事外の仕事はしないようにしていた。…家族を除いてだが

今ティータイムをしているのは、メカニツクの研究室。

目の前で嬉しそうにコンピューターを操作する、シャーリーに若干引きながらも、ルーとアギトを手伝っていた。まあ、手伝うと言っても、質問された事に答えるだけだけど…

「お兄ちゃん、ここは？」

「それは　　で良いんじゃないか？後は、ルーの判断でやってしまえば良いし、あそこで楽しそうにしているメカオタと相談すればいいだろ。」

「わかった。」

今、ルー達は新人たち用の新デバイスの最終調整に入っている。ルーの仕事は主にデータ集めとデバイスのベースを作る事。例えばスバルのリボルバーナックルとブーツでは物が違う。リボルバーの方はシャーリーが手掛けるのだが、ブーツはルーだ。ブーツはどこに重心が置かれているのか、移動時にはどこに負荷がかかるのか、戦闘の際は？といくつもの情報を訓練などから、収集しそれをデバイスに組み込む。人体工学に詳しい、ジンやすずかに教わった結果、ルーはそっち方面のデバイスマスターになってしまった。

魔法制御の方はシャーリーが作るが、デバイスの握りや、重心、フィット感、そう言う人体に関わる基本ベースをルーが担当し、二人で最高のデバイスに仕上げる。もちろん、ジンはそれなりには協力するが、ほとんどはこの二人が作っている。

二人のデバイス談義が白熱したので、部屋を出て行く事にする。

ル―も意外にマッドだよな」

少し暇になったジンは、フォワード達とは別の場所で訓練をする事にする。訓練スペースは結構広いので問題ない。一応なのはに許可も貰ったし

軽くウォーミングアップをして、体を温める。その後は的を出して、射撃の練習。最初は普通に的当て、次に速射。

ジンの速射は本気を出せば一回で3発撃てる。なのはみたいに、魔力弾を形成して放つのではなく、一回の動作で3発放つのだ。さすがに、両手では出来ないが

これは完全な奇襲にも成るし、ジンの魔法弾は誘導型ではないため、スピードが速い。そのため、余程の相手ではない限り、初見では避けられないだろう。ただ、防御は出来るだろうが…

速射の命中精度を高めるために、同じ動作をひたすら繰り返す。まずは基本。王道から邪道に行く事は簡単でも、邪道から王道に行くことは難しい。基本をしっかりと身につけておけば、あとでいくらでも自分流に変えられる。

だから、まずは型を練習し、その後、実戦を想定し、動きながら速射をする。ガジェットをただ動くだけの設定にし一回で何体まで撃ち抜けるか、その練習は実戦で生きてくる。

一通り訓練をこなしていると、背後に気配を感じた。

「…一体何の用ですか？のぞき見なんて良い趣味ですね」

「すまねえ、お前が訓練しているのが見えたから、ちょっと気になつてな…」

「一応オレの方が上官なんですけど…まあここではそんな事はあまり意味なさそうだから良いけど。鬱陶しいから、いなくなつてくれます？貴女に見られながらやるのは気分が悪い。」

「すまねえ だが、お前にはちゃんと謝っていなかったからな…

あの時は本当に済みませんでした」深々と頭を下げるヴィータ。しかし、このやり取りはもう終わったのだ

「で、もう気が済みましたか？ならとつと失せてください。貴女達の謝罪なんてもうなんの意味もない。昔、そう伝えたはずですけど…」

「…それでも、悪い事したら謝らなければいけねえ。あたしらは昔のようにはならないと誓ったから」

「でも、主の命令次第でしょ？仮に八神さんが攫われたら、貴女達は昔の様になるしかない。貴女達の行動原理は八神さんなのだから…」

「…」

「まあ、その事は誰もが同じでしょうが。自分の大切な人が人質に取られたら、オレだってそうなるかもしれない。ただ、貴女達はそうなる可能性が高いというだけです。新人たちの所に戻

ってください、はっきり言って邪魔です」

「…あたしに何かできる事はないか？」顔を俯かせながら、ジンに尋ねるヴィータ

「鉄槌の騎士、逆に聞くけど、貴女に何ができる？」

「」

「オレに対して貴女達ができる事なんて何も無い……あ、あった！」ジンは何かを思いつく

「ほ、ホントか?!」

「ええ、貴女達にピッタリな事です。」

「何をすればいい?!出来る事なら何でもするぞ」

「オレと模擬戦してください。オレにはベルカ式で近接戦闘を得意とする相手が必要だ。そう言う点で言えば貴女達はうってつけ。それに、戦いの場で貴女達を見て冷静に戦えるかも重要になって来ます。いずれそう言う場面が巡ってくるでしょうから…」

「いずれ? まあ、あたしが模擬戦をすれば良いんだな?」ジンの最後の言葉に疑問を持ったが、そこは気にしない事にする

「ええ、言っておきますが、手加減は必要ありませんよ?こちらを気遣って手を抜いたりしたら、大怪我じゃ、済まなくなりますから

たし…」

ティアナとスバルで議論している所になのはが入る

「にやはは、でも、ジン君の戦い方はああいうのだし。私もジン君がちゃんと勝負している所は見たこと無いな。ただ、ジン君は強いよ。魔法制御ならおそらく管理局でも5指には入るんじゃないかな？」

「な、なのはさん　それはいくらなんでも…」

「ティアナ、疑問に思った事ない？ティアナと同じシルエットの魔法なのにジン君のは喋れたりするんだよ。ティアナはそれできる？」

「出来ません。でもそれが一体…」

「まあ本人も悪戯で作った魔法だって言ってたけど、管理局でそんな事が出来るのは何人いるんだろうね。理屈を教わって私もやってみた事あるけど出来なかった。私が知っている限りではジン君しか出来ないと思う。そしてジン君のあのスタイルなら、あの魔法は脅威だよ。いつ入れ替わっているか分からないから、常に注意を払わなければいけない。本物か、偽物かそれを見極めるだけでもすごい集中力を使うし」

「でも、偽物なら結局無視すればいいんじゃない？」

「ティアナさんそれは無理ですよ」ここでエリオも話に入ってくる

「どうしてよ。私のシルエットだって陽動にしか使えないわよ」

「ジンさんのレアスキルです。昔、フェイトさんが教えてくれました。ジンさんの魔法が爆発する理由を」

「レアスキル?!」スバルとティアナは知らなかったようだ

「あれ?二人は知らなかったの? てっきり知っていると思っていたんだけど」

「私は知りません。ジン兄がちゃんと戦っているのは前の模擬戦が初めてですから」スバルがなのはに疑問に答える

「私もです。ジンさんと戦った事はあるけど、いつも射撃オンリーのハンデをもらってましたから。それでも勝てたことはなかったですけど」若干ティアナが落ち込む

「にははは、それはきついんじゃないかな? ジン君の射撃スキルは私よりも高いし。昔、教わった人のおかげで言ってたけど、教えてくれないんだよね」。私も教わりたいのに」なのはが苦笑いしながら言う。

「ど、どうしたの? ティア。急にニコニコして」

「べ、別に何でもないわよ?!」ジンの師の一人が自分の兄である事は知っているの、それが褒められてすごく嬉しいティアナだった。

「ところで、なのはさん。ジン兄のレアスキルって何ですか?」

「爆発？」

「「爆発ですか？」」ティアナとスバルの声が重なる

「そ、自分の魔力を爆弾に変えられるんだって」

「なんか、危ないですね……」

「ジン兄が使うと余計にね」「ティアナとスバルが少し顔を引きつらせている頃、ジンとヴィータが戦闘を開始した。

.....

今は特にフィールドの設定はされていない。遮蔽物もないただの荒野

「準備は良いか？」

「ええ、いつでもどうぞ」ジンは両手に銃を構え、準備を整える

「じゃあ、カウントがゼロになったら開始だ」

【5 4 3 2 1 0！】

二人が一斉に動き出す。

ハンマーを扱うヴィータは、自分の射程に入れようと突っ込んでくる。ジンはそれを防ぐためにヴィータに狙いを定める

パン、パン

両手の銃から弾丸が放たれ、ヴィータにまっすぐ飛んで行く。

ヴィータの方もハンマーを振り回しながら、その魔力弾を弾きジンに接近する。 普段ならここで転移するなり、シルエットを作るなりして自分の戦いやすい形に持って行くのだが、今回のジンは違った。

「……」無言でひたすら弾丸を撃って行く。ヴィータの方もさすがに防ぎきれなくなったのか、いったん、突っ込むのをやめ、回避に専念する。

相手が離れた事で、ジンも後を追う。遠距離型と近接型ではいかに自分の間合いで戦えるかと言う勝負になってくるので今のところはジンがリードしている。 ……ただ、普段の陣とは違うのが気がかりだが

……

「あれ？」ティアナが異変に気づく

「ティアナも疑問に思った？」なのはも気づいたようだ

「はい……なんかジンさんの戦い方、変ですよ？銃しか使っていない」

「うん、それでヴィータちゃんを追いつめてるから十分すごいんだけど、あれじゃあ、ヴィータちゃんには勝てない。ヴィータちゃんとは私と違って、防御をしながら、突っ込んでいける。 防御が硬いのは私の方だけど、ヴィータちゃんは強度が有るシールドを使いながら接近戦を得意とするタイプ、その内自分の間合いにすると思う」

「それに普段のジンさんの感じじゃない 何と云うか 怒ってる？」

「たぶん、そうだと思う。ジン君はいつもふざけているように見えるけど、実際はすごく冷静で、相手の一手先を読みながら戦っている。でも、今は 」

「冷静じゃないですよね？ なんかヴィータ副隊長がバリアジャケットを展開したあたりから、雰囲気が変わりましたけど…ジンさんと副隊長って何か有ったんですか？」

「それは …」言えない。事件の加害者と被害者と言う関係で有ったという事など。その事件の所為でジンの大切な人が傷付いてしまった事など。 当事者でない人が語る事じゃない事をなのは分かっていた。だから、

「ごめんね。ここから先は私には言えない事なの。だから、気になるならジン君に直接聞いてみて」

「 は、はい、わかりました。」どこか、不満そうなティアナ。

その感情が何なのかは良く分かっていない

「あーヴィータちゃんが間合いを詰めた。あの間合いはヴィータちゃんの間合い」

模擬戦の方も動きが有り、皆が視線をそこに向けるのだった。

ジンの弾幕に苦戦していたヴィータだったが、パターンも読めてきたので攻撃に転ずる事にする。自分にシールドを纏い突っ込む。シールドを突きぬけそうなものだけアイゼンで防ぐ。

ジンの容赦ない弾幕を時には弾き、躲し、そして防御とあらゆる手段を用いてジンに接近する。その甲斐有ってか自分の間合いにジンを入れる事に成功する。

ハンマーを振りかぶり、ジンを襲う。普段のジンなら転移で避けるなり、逃げるなりするのだが、ジンが選んだのは迎撃。ヴィータに攻撃する事だった。

ヴィータは自分の向かってくる弾丸を躲し、ジンに一撃を入れる。もともと、防御が薄いジンは吹っ飛ばされる。しかし、飛ばされながらも、尚、ヴィータに攻撃を仕掛けるジン。もはや、状況が見えておらず、唯攻撃を仕掛けるのみとなってしまうた。

その様子がおかしいと判断したなのはが模擬戦を中止しジンを止め

に入る。 ただ、ジンは止まらない。

ひたすらヴィータに向けて乱射するだけ。その様子が変わった
なのはがジンに魔法弾をくらわせ意識を刈り取った。

- - - - -

「ここは 自分がベツトの上にいる事に気づく。

「医務室ですよ。ジンさん」横を見るとティアナがいた

「何でお前がいるんだ？訓練は？」

「あんな雰囲気の後やれるわけないじゃないですか。今日はもう終
わりです。本当はシャルマル先生がいるはずなんですけど、なのはさ
んが私の方が良いって 」

「そうか、高町さんには感謝しないと。起きてあんな人がいたら、
気分が悪くなる」普段、冗談でしか人の事を悪く言わないジンが本
気で言っているのをいてティアナが驚いた

「 何か有ったんですか？ヴィータ副隊長とも何か有るようでは
なし 」

「ん？ ああ、昔にちよつとな。一応秘匿に関わることだから詳し
くは言えないが、オレがあいつらの事を大嫌いと言っただけだ。自分
的には吹っ切れたと思ってただけ ：情けないな。相手のバリ

アジャケットを見ただけで頭に血が上つちまった……」

「……なのさんは知っていますよね？ジンさんと副隊長達の仲の悪い理由」少し不満そうなティアナ

「まあーな。一応あの人も関わりの有った事件だからな。別に意地悪で教えない訳じゃないぞ？仕事だからな」

「そ、そんなつもりじゃあ?!……」

「どうせ、自分だけ知らないと思っただろ？むしろこの事を知っているのは3人の隊長とスバルやルーの母さんくらいだ。後ゲンヤさん。スバルやルー、それにギンガだつてこの事は知らないよ。」

だからそんな顔するな」

一人だけ除外されてしまったような顔しているティアナを苦笑しながら、慰める。ジンからすればティアナも家族で有り、ティアナからしてもジンは家族なのだ。仲間外れにする気はない

「……」まだ少し不満そうだが、ジンの言葉を理解したのかそれ以上追及はしなかった。

「……でも、情けないな。まさか、冷静さを失うとは思わなかった。こんな事じゃダメだな」ジンのつぶやくきがティアナには聞こえていたがここで聞いてもまた話してくれないだろうと思ひ聞かない事にした。

ただ、意外にもジンの方から話してくる

「お前、やっぱ先輩に似てるよ。先輩もお前に男が出来たらキレていただろうからな。“ティアナは嫁には出さん！”が先輩の口癖だったし」

「あはは…兄さん。でも、私のもそれと同じかもしれないですね。ジンさんに恋人ができるのは複雑です…
…ああ、誤解はして欲しくありませんけど、私はジンさんにそういう感情は持ってませんよ」

「知ってるよ。家族だからな」

「そんな反応されても傷付くんですけど」

「オレは先輩と違ってシスコンではないからな。妹に恋愛感情など持たれても困るわ。先輩なら喜ぶだろうけど…」

「兄さんって変態だったんですね…」

「…ああ」

微妙な空気になる

「でも、本当にお前に好きな人が出来たら応援するくらいの良心は持っているぞ。妹の不幸を望む人じゃないからな」

「それは…私も同じです。ジンさんに好きな人が出来ても 応援

するくらいはします。」

「微妙に間が有るのが気になるけど」

「気にしないでください」

なんか言いたかったが、ティアの笑顔にビビりそれ以上聞けないジ
ンであった

第30話 初出勤(前篇)

ティアナと少し話してから、医務室を出る。今回の事で迷惑を掛けたフォワード達に謝りに行くことにする。それと高町さん、彼女にはお礼を言わなければ・・・

フォワード達は事務仕事をしていたようで、こちらが謝罪すると、気にしないで良いと言ってくれた。もともと、高町さんも訓練を終えて事務仕事にしようと思っていた所らしい

・・・ティアナ、言ってる事が違うじゃねーか！オレの所為で訓練が中止になったみたいな事、言っただけじゃなく、やがったくせに

そう思ってティアナの方を見ると何くわぬ顔で事務仕事に戻っている。・・・おのれ〜ツンデレ〜謀ったな〜！！

ティアナを睨むように見ていると、不敵に笑った。何と言う腹黒さ。オレは一体どこで育て方を間違えたんだろうか？・・・あんまり教育なんてしてないわ・・・

とりあえず、ティアナにはいつか復讐するとして、後は高町さんに礼を言いに行かなければなるまい。彼女の機転で寝覚めに不快な思いをしなくて済んだのだから・・・

「高町さん、今回はすみませんでした。それと、ありがとうございます」

ます」なのはのデスクに行って頭を下げる

「あ、ジン君起きたんだね？それとさっきの事は気にしなくて良いよ。フォワード達も休ませるつもりだったから。ただ、シャマルさんの方は」

「あなたが、ティアナに言ってくれたようで…ありがとうございます」

「う、うん。…でもね、その事も有ってはやてちゃんが話があるって言ってるから、一緒に部隊長室まで行こう？」

「…はい」大方の予想はつくが、ここは行かなければならない。ちよつと憂鬱になりながらも、部隊長室に向かうのはの後ろについて行くしかないジンであった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
部隊長室到着

「失礼します。高町一等空尉、並びにヤナギバ一等空尉、到着しました」

「入ってええよ」

中から入室の許可が出たので入る事にする。　ただ、驚くべきは高町さんにちゃんとした所が有ると思わなかった。てつきり、友達感覚で入室すると思っていたから驚きだ。

「二人ともそこに座って楽にしてくれて構わへんよ。それと、なのはちゃん、あんま似合わへんから、その口調直した方がええよ。」

「も〜うはやてちゃん！折角ジン君が驚いてくれたのに、何で言っちゃうの！あと少して私の年上としての威厳が戻るところだったのに〜」

「いや、それはない！」八神さんと声が重なる。確かに、驚きはしたが、だからと言って、この人を今更、年上扱いはできないだろう

「うう、二人とも酷いよ〜」ちょっと落ち込むのはだが、これがジンの中では普通の事なので気にしない事にする

「それで、八神部隊長、話とは先程の件で宜しいでしょうか？」

「せやな。」

「先程の事に関しては申し訳ありませんと言うしかありません。自分では克服したつもりでも、まだ無理だったようです。バリアジャケットを見た瞬間頭に血が上りました。」

「うちの子らに復讐しようと思ってやったんやないんやな？」

「そのつもりですけど。今は自信がありません。でも、あの人達相手に冷静に戦えなければ、オレの目的も果たせそうにないんで…」

「まだ、やるつもりなんやな？一応ナカジマ三佐から、お宅が人探ししているとは聞いてるけど、それが関係してるんか？」

「はい。詳しくは職務規定に反しますので言えませんが、オレにはベルカ式との戦闘経験が必要なんです。それも、強者との」 「ジンの真剣な顔を見てはやてがため息をつく」

「ハア、そんな顔されたらダメって言えへんやんか。」

ただ、約束してや、ヴィータ達とやる時は誰かの監視下の下で行う事。止めれる人間がいないと問題になってしまうからな。折角地上本部とも仲よかったのに、ここで問題起こされたらたまったもんじゃないからな。」

「え？八神さん、地上本部と話し合ってたんですか？」

「まあ、一応な。研修中に地上の人にいろんなコネを作ってたんとかレジアス中将と話し合う機会を持ったんや。最初はめっちゃ嫌われてたんやけど、折れずに話し合いに行ったら、なんとか六課の設立は認めてもらえたんよ。本当は本局の後見人や教会の支援があるから設立は問題なかったんやけど、下手に地上本部との間に亀裂を入れるのは良くないから、地上本部のトップに許可だけはもらおうと頑張ったんよ。おかげで人選選びが時間かかってもうたけどな」

「へーちゃんとしてたんですね？てつきり伝家の宝刀、本局の権力を使っていると思いました。」

「まあ、使っていると言えば、使ってるんやけど、まあそこまでやない。リミッタの解除に関して結構融通を聞かせてもらったんや。ただ、レジアス中將に許可をとらなアカンけど…」

「それって問題じゃないですか？いざという時に力が使えないんじや……」

「一応緊急の場合は後見人の人が解除できるようになつとから大丈夫やと思つし、レジアス中將もそこはちゃんと判断してくれるはずや。話してみた分かつたけど、あの人はええ人や。ただ、正義感が強すぎる様な気がしなくもないんやけど…」

「まあ、あの人は昔からそうでしたから」

「なんや？お宅、レジアス中將と知り合いなんか？」意外そうな顔で聞いてくるはやて。璃人とレジアス中將の接点などないと思つていたのだろう

「オレは医務官の資格を取つてすぐ首都防衛隊に配属されたんですよ。それで、当時の隊長が、レジアス中將と同期だったらしく、会う機会も結構ありました。健康診断なんかもしていましたし…」

「……お宅、意外と人脈が広いな。教会とも知り合いやし、なんか三提督と知り合いでもおかしくない気がするわ」

「・・・さすがに三提督、全員とは話した事はないですね。」

「せやな、いくらジン君でも三提督とは知り合いではなかったんやな。ハハハ」さすがにそれないかと笑うはやてだが、なのはが有る事に気づく

「待つてはやてちゃん。ジン君は全員とはって言ったんだよ。つまり・・・」

「ミゼット提督とはお会いした事がありますね。たまたまですけど・・・」

「ハハハ、もう笑うしかないやんか」

「でも、八神さんだつて会った事あるでしょ？護衛任務を受けたつて、前にリインさんが言つてましたから」

「私の場合は仕事や！それに、実際に護衛を担当したんは家の子達やから、私は最初しか会つておらんよ」

「オレも大して変わりませんよ。医務官として働いてた病院にミゼット提督がきて、検診しただけです。それ以降何度かやつてましたが、オレが病院を辞めてからはほとんど会つてません。たまに検診するくらいです。なぜか知りませんが、気に入られたみたいです」
「そう言つてるジンだが、自分がリンク コアに関して優れていると
いうことを忘れてるため、ミゼットに気に入られた理由が分からないのだった。」

「お宅、ホントに何もんなんや?」

「一般局員ですな」

「そんなわけあるかい!お宅が、一般局員だったら、管理局が大変な事になるわ!どこの世界にエース相手に勝てる、一般局員がおるねん!」

「ここにいますよ。あと、高町さんにはそろそろ負けそうですけど…」

「にはやは、今度こそ勝つんだから」はやての横で決意を新たにしているが、ジンのテストをクリアしないと、勝負してもらえない事を忘れているのは。今回の模擬戦はたまたまであるという事

その後、はやてとの話も終わり、監視付きでなら、ヴォルケンリッターとの模擬戦が許可された。ジンとしてもその方が良かったので良かったと思っっている。ただ、もし、暴走した際に魔王の愛機が火を噴くことが一番の悩みの種だった。

あれから、模擬戦は数回やっている。ヴィータとの模擬戦では以前のように暴走する事はなかったが、ところどころで精彩を欠いた。無意識に熱くなってしまおうようだ。シグナムと初めてやった時は、

本当に非殺傷なのか？と言うくらいに激しい戦いになり、魔王が降臨した。ジンとシグナムごとスターライトブレイカーが呑み込んだ。二人は瀕死寸前だったという……

ジンも最近ではなんとか感情のコントロールを身につけ始め、まだまだだが、普通に戦闘は出来るようになった。目標まではあともう少し

ジンとは別に、フォワード達の訓練は順調で、今はなのは相手に、五分間逃げ切るか、一発喰らわせられるかの訓練をしている。さすがに魔王、ボロボロの新人相手に弾幕を張ろうとするなんて、なんて鬼畜！

新人たちも、五分間は避け続けられないと悟ったのか、一発を入れる事に専念した。スバルとティアナでスキを作るようだが、どこがおかしい。

「なんで、ティアナはスバルを助けないんだ？あのままだとスバルが被弾するぞ。……まさか、デバイスがイカレタか？」

ジンの視線の先にはティアラ、援護と叫びながら逃げるスバル。その少し後にティアナから魔法弾が放たれる。援護への時間差からデバイスにトラブルが有ったのだと、ジンの推測は当たった。

ティアナの魔法弾がなのは魔法弾を打ち消してから、スバルが攻勢に入る。なのはは難なく防ぐが、そこにフリードの火炎が飛んで

きて、なのはもギリギリで回避。

しかし、これすらも、囿で、なのはが躲した方向にエリオが突貫の構えを見せて待機していた……しかも、キャロのブースト付きで…

「行くぞおお!!」ティアナの指示が有り、エリオが掛け声と共に突っ込む。

普通ここまで、やれば一発くらい入るはずだが……

「残念だったね。あともう少しだったのに……」なのはが防ぎきった。

まあそれも当然である。なのはは、今までに搦め手の得意なジンと戦っていたので、ほぼ条件反射的に、この手の攻撃には反応してしまふ。なのは的にも、喰らっても良かったんだろうけど、無意識のうちを防いでしまった。

攻撃を入れたと喜んでいたフォワード達の顔が変わり、まだ、続くのかと顔が引きつっている。どうやら、限界だったらしい。

しかし、一人だけ、この時を予知していた者がいた

「へえ、ティアナもやるじゃないか。高町さんは、こういう時油断するという事を読んでいたな」ジンの感心した視線の先にはテイ

アナが、シルエットで背後から近付き、魔法弾を放つ。

「バリアブルシュート!!!」ティアナの声に反応したのだが、気が緩んでいたので、少し遅れた。

「ううく!」なんとかシールドを出したが、攻撃はバリアジャケットまで通っており、ミッションコンプリートとなった。

他のフォワード達の歓喜が訓練場に響いた。

.....

「ツンデレ、最後の攻撃はなかなかだったぞ。ただ、最後に声を出したのが失敗だったな。あれさえなければ魔王様を討伐できたのに」ジンが先程の模擬戦を見て感想を言う

「声を出したのはわざとです。エリオの攻撃が通らなかったのを見て、なのはさんが死角からの攻撃に無意識に反応してると思っ、わざと声を出して、こちらを意識させました。思ってた通り、無意識時よりも反応が遅くなって、なんとか攻撃が通りましたよ・・・」
「ブイ」そこまで考えていたのかと、感心しつつも、最後のVサインは余計だとチョップをくらわせておいた。頭を押さえながらしゃがんでるツンデレは存外可愛かったのだが、普段があれなので、ギャップ萌と言つところだろう。

「うつつ、私、教導官なのに・・・」自分の油断で、攻撃を当てられてしまったなのは、少し落ち込んでいる

「まあ、ティアナがこういう所を狙えたのは褒めてあげる所じゃないんですか？油断大敵と言う事を前の模擬戦を見て分かってくれたようだし。そもそも、高町さん、エロ男の攻撃を喰らってあげても良かったんじゃないですか？新人たちなら、あれで十分だと思うんですけど」

「エリオです！」エロ男がそんな事を言っているが、ここは無視。無視された事で落ち込んでしまい、キャラが慰めている

「私もそう思ったんだけど、体が無意識に反応しちゃって防いじゃった？これもジン君との模擬戦の成果だよな」

「可愛く言ってますが、ティアナに出しぬかれた時点で、ダメダメなんですけどね。貴女は最後の詰めが甘すぎる。」

「うつつ、それもジン君の所為だよ。いっつも、完璧にやられたふりをするんだから、気を抜いちゃっても仕方ないよ！」ブーブー言ってるが、それで反撃されてちゃ世話ないでしょうに。

「まあ、それは勝手に反省してください。それより、ティアナもなかなか良かったでしょ？」

「え、あ、うん、そうだね。指揮といい、最後の奇襲といい、なかなかの物だったよ。ティアナ、指揮官訓練受けてみる？」

「む、無理です！訓練について行くのが精一杯です」手を振って断るティアナ

「そんなことないと思うんだけど、気が向いたら、相談してね。ティアナなら、優秀な指揮官になれると思うから」

「は、はい。ありがとうございます」少し、嬉しそうにするティアナ

「それに、エリオ達も十分だったし　クルキュー　」急にフリードが鳴き出した。フリードの視線の先にはスバルのローラーブーツが煙を出して悲鳴を上げている

「スバル、あなたのローラー煙出てるわよ」

「え？・・・あ、あっちゃー、無理させすぎちゃったか。」スバルが自分のブーツを見ながら答える

「ティアナのアンカーガンもそろそろ限界？」先程の模擬戦を思い出し、なのはが聞いてみる

「は、はい。だまし、だましです。」

「・・・皆の調子も良いし、そろそろ、新デバイスに切り替えかな？」

「『新デバイス?!』」

とりあえず新人たちを治めて隊舎に集める事にした。特にスバルの
食い付きがめんどくさかったのは言うまでもない。

.....

じゃ、一旦寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まろうか」

「「「はい！」「」」

全員それぞれ隊舎と寮に戻るために足を運んでいた。

「あれ？ あの車って」

ふと、視界に黒塗りの乗用車が入ると、それは自分たちの近くで
停まり、ウィンドウが開いた。

「フェイトさん、八神部隊長」

名前をあげた2人は軽く会釈をする。

「すごい。これ、フェイト隊長の車だったんですか？」

全員がその車に駆け寄って、その納車したばかりのようなツヤの
ある車に感嘆する。

「そつだよ。地上での移動手段なんだ」

「19歳で乗る車とは思えませんね。これだから、ブルジョワは・

「・

「ジ、ジン、違うよ！これは黒いから、私の好みに合っただけで、別にそんなに高い訳じゃ……」

「ちなみにおいくらで？」

「〇〇〇くらい？」

「ちつ、これだからお嬢様は金銭感覚がおかしいんだ！そんな値段高くないなんて普通言えないぞ」ほそほそというジンの声がフェイトには聞こえなかつたらしく、首をかしげている

そんな二人のやり取りを無視してはやてが新人たちに話しかける

「みんな、練習のほうはどないや？」

「頑張ってます」

はやての率直な質問にスバルは苦笑いしかできず、ティアナが簡単に受け答えした。

フェイトは心配そうに2人の男の子と女の子をみて、

「エリオ、キャラごめんね。私は2人の隊長なのに、あんまり見てあげられなくて」

「あ、いえ」

「大丈夫です」

2人は心配かけまいと頭を振る。

「4人ともいい感じで慣れてきてるよ。これなら、いつ出勤があっても大丈夫」

「そうか？ それは頼もしいなあ」

はやてはなのはの報告を聞いて素直に答えた

「2人はどこかにお出かけ？」

「ちよつと六番ポートまで」

「協会本部でカリムと会談や。夕方には戻るよ」

「私は昼前には戻るから、お昼はみんなと一緒に食べようか」

「「「はい！」「」」

.....

その後フォワード陣はシャワーを浴びてから、デバイスルームに行きシャーリーヤルーから。デバイスの説明を受けている。

ジンも同席しようと思ったが、特に何かするわけじゃないので、ロングアーチとしての仕事をする事にする。実際、今日中にしなけれ

ばいけない事はすべて終えているのだが、暇なので明日分の仕事もやってしまう事にする。

その仕事もすぐに終わってしまったが、ちょうど休憩時間になったので、久しぶりに隊舎を見る事にした。初日で迷って以来、必要な所以外は、行かないようにしていたため、今日は久しぶりの散策である。とりあえず、ヘリの方にも行ってみるかと思った所に緊急のアラートが鳴り響いた

すぐに近くにいたグリフィスがはやてに連絡をつなぎ、それと同時になのはの方からもグリフィスに連絡が入った

「はい。教会本部から出動要請です！」

その横の画面にはやてと通信がつながる。

「グリフィス君か？ こちらははやて。教会騎士団の調査部で追ってたレリックらしきものが見つかった。場所はエーリム山岳丘陵地区。対象は山岳リニアールで移動中」

「……まさか」

「そのまさかや。内部に侵入したガジェットのせいで、車両の制御が奪われてる。リニアール車内のガジェットは最低でも30体。大型や飛行型も未確認タイプも出てるかもしれない。いきなりハードな初出動や。なのはちゃん、フェイトちゃん、ジン君、いけるか？」

どうやら、フェイトにも通信はつながっているらしい。

「私はいつでも」

彼女の音声だけが聞こえてきた。

「私も」「オレも大丈夫です」

それになのはとジンも同意する。

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。皆も大丈夫か？」

「」「はい！」「」

「よし。いいお返事や。シフトはA-3、グリフィス君は隊舎での指揮。ジン君は現場管制を、サポートはリインや」

「はい」

「なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮をお願い」

「うん！」

「ほんなら」

何故か立ち上がるはやて。なぜ立っただらうかと思ってしまうジンは不真面目なのかもしれない

「機動六課フォワード部隊、出動！」

「はいー」「」

これが、フォワード達にとって初めての实战になるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0518v/>

これがオレの人生だ

2011年12月23日01時16分発行